三重県埋蔵文化財調査報告 270

天王山遺跡・天王山古墳群
発掘調査報告

～ 三重県松阪市豊原町所在 ～

2006（平成18）年３月

三重県埋蔵文化財センター

上空から見た天王山遺跡・古墳群

ＳＫ303出土土器

序

伊勢平野の南東部を流れる櫛田川は、櫛田地区をはじめとする下流部一帯に肥沃な土壌をもたらしています。この地域は古く、弥生時代から稲作生活が営まれ、生産活動が活発に行われてきました。こういった営みが次の古墳文化を創造し、社会構造を発展させてきました。

今回、報告致します天王山遺跡・天王山古墳群の調査は松阪環状線の緊急道路整備事業に先だって実施されてきました。天王山遺跡は古代の集落跡として著名で、かつて和鏡が出土しています。一方、全容が明らかでなかった天王山１号墳は今回の調査で、直径17mの円墳であることがわかり、主体部からは東海・近畿地方でも類例の少ない蛇行剣が出土しました。周溝からは円筒埴輪や鉢形土器も出土し、地域の古墳群と併せて築造時期の解明の一助となりました。

これら発掘調査で得られた貴重な文化財のひとつひとつを整理し、記録保存に努め、それらを含む調査の全容を、県内外の人々に公開することが我々の役目であると考えております。

末筆ですが、調査に協力いただいた地域の方々をはじめ関係諸機関の皆さまに厚くお礼を申し上げる次第です。

平成18年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉　水　康　夫

例　言

1　本書は、三重県松阪市豊原町字天王に所在する天王山（てんのうやま）遺跡・天王山古墳群の発掘調査報告書および松阪市伊賀町に所在する伊賀Ａ遺跡の範囲確認調査報告書である。

2　本書では天王山古墳群のうち、天王山１号墳と新たに発見した11号墳以降の古墳についての調査成果をまとめた。

3　発掘調査の体制は以下のとおりである。
＜平成15年度　天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査＞
調査主体　　三重県埋蔵文化財センター
調査担当　　調査研究Ⅱグループ　　主幹　新田　洋　　主事　中川　明
　　臨時技術補助員　淺生卓司
調査受託者　　㈱安西工業
保存処理委託　元興寺文化財研究所　保存科学センター　自然科学分析

＜平成15年度　伊賀Ａ遺跡範囲確認調査＞
調査主体　　三重県埋蔵文化財センター
調査担当　　企画調整グループ　　主査　森川幸雄　　技師　新名　強

4　本書の執筆、編集は中川明・新名強・淺生卓司が行い、遺物写真撮影は田中久生と中川・淺生が担当した。

5　本書が対象とした調査面積は以下のとおりである。
天王山遺跡・天王山古墳群；4,520㎡　　伊賀Ａ遺跡；180㎡

6　本書が対象とした現場調査期間は以下のとおりである。
天王山遺跡・天王山古墳群　平成15年５月16日～12月19日
伊賀Ａ遺跡　平成15年７月２・３日、8月25日・28日、9月１・４・５日

7　発掘調査にあたっては、松阪市在住の皆様、松阪市教育委員会、三重県県土整備部、松阪地方県民局松阪建設部から多大な協力をうけたことを明記する。

8　発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々にご指導・ご協力をいただいた。（敬称略）
鈴木一有（浜松市園芸博推進課）　　伊藤雅文（石川県埋蔵文化財センター）

9　本書が扱う発掘調査の原因事業は以下のとおりである。
天王山遺跡・天王山古墳群；（一）松阪環状線緊急地方道路整備事業
伊賀Ａ遺跡；経営体育成基盤事業（櫛田上地区）

10　発掘調査の経費は三重県県土整備部（天王山遺跡・天王山古墳群）、農林水産商工部（伊賀Ａ遺跡）が負担した。

11　本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、当三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

＜地図類＞

1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、松阪都市計画図（旧松阪市）、松阪環状線緊急地方道路整備工事図（三重県県土整備部）である。

2　これらの地図類は、国土地理院発行地形図を除き、国土調査法の日本測地系による座標第Ⅵ系（旧国土座標）で表現されているものであるため、平成14年４月から施工されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。

3　挿図の方位は、国土座標第Ⅵ系を基準とする座標北で示している。なお、磁北は６°30′西偏している。(平成14年、国土地理院)。

＜遺構類＞

4　土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。

5　土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（第９版1989年）を用いた。

6　本書での遺構番号は通番となっており、確認したものから順に付番している。また、本調査は、便宜的に２班に分けておこなったため、遺構番号は１および301からそれぞれ開始している。なお、天王山古墳群は周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている番号を踏襲し、新たに発見した古墳についてはそれに追加するかたちで付番している。

7　遺構図のうち、スクリーントーンで示した部分は、焼土の範囲である。

8　遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、立面図となっている。

9　本書で使用した遺構表示略号は以下のとおりである。

ＳＸ：墓・周溝　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＨ：竪穴住居　ＳＡ：柱列　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑　Ｐit：柱穴・小穴

10　遺構は、調査時に付加した遺構番号を基本的に踏襲しているが、今回の報告にあたって変更したものもある。その変更は遺構一覧表に示した。なお、出土遺物の注記についても、基本的に調査時の遺構名で実施している。

＜遺物類＞

11　本書での遺物実測図類は実物の１/４を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度指示している。

12　遺物実測図は、本書を通じて通番としている。

13　本書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。

14　遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号 …… 挿図掲載番号である。

実測番号 …… 実測段階の登録番号である。

様・質 …… 「弥生土器」「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。

器種など …… 遺物の器種を示す。

グリッド …… 調査時に設定したグリッド名を記した。

遺構・層名 …… 遺物の出土した遺構や層名を記した。遺構名の後にくる小文字のアルファベットは遺構内の地区割である。基本的に、遺構を４分割し北西をａ、北東をｂ、南西をｃ、南東をｄとしている。

法量（㎝）…… 遺物の法量を示す。（口）は口縁部径、（底）は底部径、（高台）は高台部径、（脚柱）は脚部上端径、（脚裾）は脚台裾部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での接地点ではない。

調整・技法の特徴 …… 特徴を外面（外；）・内面（内；）で示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。

胎土 …… 小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調 …… その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度 …… その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。

特記事項 …… 遺物の特徴となる事項を記した。

＜写真図版＞

15　写真図版は、遺構・遺物毎でまとめた。

16　挿図と写真図版の遺物番号は、それぞれの遺跡毎の実測図番号と対応している。

17　遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本文目次

Ⅰ　前言 …… 中川 …… （1）
　1　調査に至る経緯 …… （1）
　2　調査に至る経過 …… （1）
　3　調査の体制と委託にかかる経緯について …… （1）
　4　調査の方法 …… （1）
　5　資料の公開・普及・保存について …… （2）
　6　調査の方法・経過 …… （2）
　7　文化財保護法に関する諸通知 …… （3）

Ⅱ　位置と環境 …… （5）
　1　位置と地理的環境 …… 淺生 …… （5）
　2　歴史的環境 …… 淺生 …… （5）
　3　天王山古墳群の分布状況 …… 中川・淺生 …… （8）

Ⅲ　調査の成果－層位と遺構－ …… (13)
　1　調査区の地形と基本層位 …… 中川・淺生 …… (13)
　2　弥生時代の遺構 …… 淺生 …… (13)
　3　古墳 …… 淺生 …… (26)
　4　飛鳥・奈良時代の遺構 …… 淺生 …… (38)

Ⅳ　調査の成果－遺物－ …… 淺生 …… (60)
　1　弥生時代の遺構出土遺物 …… (60)
　2　古墳出土遺物 …… (67)
　3　飛鳥・奈良時代の遺構出土遺物 …… (76)
　4　包含層出土遺物 …… (88)

Ⅴ　調査のまとめ
　1　時期別にみた天王山遺跡 …… 淺生 …… (108)
　2　弥生時代の天王山遺跡 …… 中川 …… (110)
　3　天王山古墳群の特色 …… 淺生 …… (114)
　4　古代の天王山遺跡 …… 淺生 …… (117)

＜附偏１＞　伊賀Ａ遺跡の調査 …… 新名 …… (124)
＜附編２＞　保存処理について …… 大川・山岡 …… (126)

挿図一覧

第１図　事業地内調査区位置図 ……（３）
第２図　調査前地形測量図 ……（４）
第３図　遺跡位置図 ……（６）
第４図　天王山古墳群の分布状況および遺跡周辺地形図 ……（９）
第５図　調査区遺構平面図 ……（11～12）
第６図　調査区南壁土層断面図１ ……（14）
第７図　調査区南壁土層断面図２ ……（15）
第８図　ＳＸ302実測図 ……（16）
第９図　ＳＸ302周溝南側遺物出土状況図 ……（17）
第10図　ＳＸ302埋葬施設実測図 ……（18）
第11図　ＳＸ351実測図 ……（19）
第12図　ＳＨ20実測図 ……（19）
第13図　ＳＨ６実測図 ……（19）
第14図　ＳＨ17実測図 ……（21）
第15図　ＳＨ36・ＳＨ60実測図 ……（21）
第16図　ＳＨ41実測図 ……（21）
第17図　ＳＨ314実測図 ……（21）
第18図　ＳＨ368実測図 ……（21）
第19図　ＳＨ370実測図 ……（21）
第20図　ＳＨ337･ＳＨ338･ＳＨ340実測図 …（23）
第21図　ＳＨ337実測図 ……（24）
第22図　ＳＨ301実測図 ……（25）
第23図　ＳＨ47実測図 ……（25）
第24図　ＳＨ352実測図 ……（26）
第25図　天王山１号墳実測図 ……（27～28）
第26図　天王山１号墳土層断面図 ……（29）
第27図　天王山１号墳南側周溝遺物出土状況図 ……（30）
第28図　天王山１号墳埋葬施設実測図 ……（31）
第29図　天王山11号墳実測図 ……（33）
第30図　天王山13号墳・ＳＸ38実測図 ……（35）
第31図　天王山16号墳実測図 ……（35）
第32図　天王山14号墳実測図 ……（36）
第33図　SK51実測図 ……（36）
第34図　天王山12号墳実測図 ……（36）
第35図　天王山15号墳実測図 ……（37）
第36図　ＳＨ８実測図 ……（39）
第37図　ＳＨ18実測図 ……（40）
第38図　ＳＨ23実測図 ……（40）
第39図　ＳＨ25実測図 ……（40）
第40図　ＳＨ26・ＳＨ27実測図 ……（41）
第41図　ＳＨ27カマド実測図 ……（41）
第42図　ＳＨ323実測図 ……（42）
第43図　ＳＨ373実測図 ……（42）
第44図　ＳＨ321・ＳＨ324実測図 ……（42）
第45図　ＳＨ321カマド実測図 ……（43）
第46図　ＳＨ305・ＳＨ306実測図 ……（45）
第47図　ＳＨ342実測図 ……（45）
第48図　ＳＨ332・ＳＨ333実測図 ……（46）
第49図　ＳＨ343実測図 ……（46）
第50図　ＳＨ335実測図 ……（47）
第51図　ＳＢ１実測図 ……（49）
第52図　ＳＢ２実測図 ……（49）
第53図　ＳＢ３実測図 ……（49）
第54図　ＳＢ46実測図 ……（49）
第55図　ＳＢ49・ＳＢ50実測図 ……（50）
第56図　ＳＡ58実測図 ……（50）
第57図　ＳＢ52・ＳＢ55実測図 ……（52）
第58図　ＳＢ56実測図 ……（52）
第59図　ＳＢ57実測図 ……（53）
第60図　ＳＢ365・ＳＢ366実測図 ……（53）
第61図　ＳＡ59実測図 ……（53）
第62図　ＳＫ33・ＳＫ43実測図 ……（55）
第63図　ＳＫ303実測図 ……（55）
第64図　出土遺物実測図１ ……（61）
第65図　出土遺物実測図２ ……（62）
第66図　出土遺物実測図３ ……（63）
第67図　出土遺物実測図４ ……（64）
第68図　出土遺物実測図５ ……（65）
第69図　出土遺物実測図６ ……（66）
第70図　出土遺物実測図７ ……（67）
第71図　出土遺物実測図８ ……（68）
第72図　出土遺物実測図９ ……（69）
第73図　蛇行剣略図 ……（69）
第74図　出土遺物実測図10 ……（70）
第75図　出土遺物実測図11 ……（72）
第76図　出土遺物実測図12 ……（73）
第77図　出土遺物実測図13 ……（74）
第78図　出土遺物実測図14 ……（75）
第79図　出土遺物実測図15 ……（77）
第80図　出土遺物実測図16 ……（78）
第81図　出土遺物実測図17 ……（79）
第82図　出土遺物実測図18 ……（81）
第83図　出土遺物実測図19 ……（83）
第84図　出土遺物実測図20 ……（84）
第85図　出土遺物実測図21 ……（85）

第86図　出土遺物実測図22……(86)
第87図　出土遺物実測図23……(87)
第88図　出土遺物実測図24……(88)
第89図　出土遺物実測図25……(89)
第90図　出土遺物実測図26……(90)
第91図　出土遺物実測図27……(91)
第92図　遺構変遷略図 ……(109)
第93図　特殊壺と竪穴住居分布図 ……(111)
第94図　天王山古墳群関連資料 ……(115)
第95図　Ⅲ期の集落構成 ……(120)
第96図　調査坑配置図 ……(124)
第97図　遺物実測図 ……(125)
第98図　天王山１号墳鉄製品Ｘ線透過写真 ……(129)

表一覧

第１表　天王山古墳群一覧表 ……(８)
第２表　天王山遺跡・古墳群遺構一覧表(１) …(57)
第３表　天王山遺跡・古墳群遺構一覧表(２) …(58)
第４表　天王山遺跡・古墳群遺構一覧表(３) …(59)
第５表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(１) …(92)
第６表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(２) …(93)
第７表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(３) …(94)
第８表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(４) …(95)
第９表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(５) …(96)
第10表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(６) …(97)
第11表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(７) …(98)
第12表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(８) …(99)
第13表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(９) …(100)
第14表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(10) …(101)
第15表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(11) …(102)
第16表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(12) …(103)
第17表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(13) …(104)
第18表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(14) …(105)
第19表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表(15) …(106)
第20表　天王山１号墳出土鉄剣観察表 ……(107)
第21表　天王山１号墳出土鉄鏃観察表 ……(107)
第22表　各遺跡における竪穴住居辺長比較(１)…(112)
第23表　各遺跡における竪穴住居辺長比較(２)…(113)
第24表　遺物観察表 ……(125)
第25表　Ｘ線透過撮影条件 ……(127)

写真図版一覧

写真図版１　天王山遺跡・古墳群遺構(１)
写真図版２　天王山遺跡・古墳群遺構(２)
写真図版３　天王山遺跡・古墳群遺構(３)
写真図版４　天王山遺跡・古墳群遺構(４)
写真図版５　天王山遺跡・古墳群遺構(５)
写真図版６　天王山遺跡・古墳群遺構(６)
写真図版７　天王山遺跡・古墳群遺構(７)
写真図版８　天王山遺跡・古墳群遺構(８)
写真図版９　天王山遺跡・古墳群遺構(９)
写真図版10　天王山遺跡・古墳群遺構(10)
写真図版11　天王山遺跡・古墳群遺構(11)
写真図版12　天王山遺跡・古墳群遺構(12)
写真図版13　天王山遺跡・古墳群遺構(13)
写真図版14　天王山遺跡・古墳群遺構(14)
写真図版15　天王山遺跡・古墳群遺構(15)
写真図版16　天王山遺跡・古墳群遺構(16)
写真図版17　天王山遺跡・古墳群遺構(17)
写真図版18　天王山遺跡・古墳群遺構(18)
写真図版19　天王山遺跡・古墳群遺構(19)
写真図版20　天王山遺跡・古墳群遺構(20)
写真図版21　天王山遺跡・古墳群遺構(21)
写真図版22　天王山遺跡・古墳群遺構(22)
写真図版23　天王山遺跡・古墳群遺構(23)
写真図版24　天王山遺跡・古墳群遺構(24)
写真図版25　天王山遺跡・古墳群遺構(25)
写真図版26　天王山遺跡・古墳群遺構(26)
写真図版27　天王山遺跡・古墳群遺物(１)
写真図版28　天王山遺跡・古墳群遺物(２)
写真図版29　天王山遺跡・古墳群遺物(３)
写真図版30　天王山遺跡・古墳群遺物(４)
写真図版31　天王山遺跡・古墳群遺物(５)
写真図版32　天王山遺跡・古墳群遺物(６)
写真図版33　天王山遺跡・古墳群遺物(７)
写真図版34　天王山遺跡・古墳群遺物(８)
写真図版35　天王山遺跡・古墳群遺物(９)
写真図版36　天王山遺跡・古墳群遺物(10)
写真図版37　天王山遺跡・古墳群遺物(11)
写真図版38　天王山遺跡・古墳群遺物(12)
写真図版39　天王山遺跡・古墳群遺物(13)
写真図版40　天王山遺跡・古墳群遺物(14)
写真図版41　天王山遺跡・古墳群遺物(15)
写真図版42　天王山遺跡・古墳群遺物(16)
写真図版43　天王山遺跡・古墳群遺物(17)
写真図版44　天王山遺跡・古墳群遺物(18)
写真図版45　天王山遺跡・古墳群遺物(19)
写真図版46　蛇行剣169の茎付近

Ⅰ　前　言

1　調査に至る経緯

松阪環状線は国道23号と42号線の交通渋滞の緩和と企業体、主に流通産業の発展を促す目的で敷設された。しかし近年のモータリゼーションの発展に伴い、交通事情は年々深刻な問題となっている。特に市街地と近隣市町村を結ぶアクセス道路は、渋滞も著しく、市県民にとって是正は緊急の課題である。

今回の事業地は、松阪市豊原町に位置し、天王山遺跡・古墳群を東西に縦貫するものである。平成15年度に消滅する部分について遺跡保存の協議を当該部局の松阪県民局建設部、松阪市建設部、櫛田上地区自治会等と協議を行った。その際、事業によって消滅する部分が広範囲に及ぶことが判明し、これを受けて現状保存の協議を行った。しかし、交通網の整備は市民必至の問題であり、今回の事業は回避できないことが判明したので、発掘調査を実施し、両遺跡については記録保存を行うことになった。

この事業計画に関わる周辺の埋蔵文化財の事前調査は、継続的に実施している。近年では、計画路線が各遺跡を東へ縦貫するため、西から順に石川・丸野・中谷・琵琶垣内遺跡に対して、試掘調査を実施してきている。

そのうち今回の天王山遺跡・古墳群について、平成８年度に予備調査を行った。その結果、天王山丘陵の東斜面では古代の土師器や須恵器、さらに弥生時代の高杯や壺片が多数確認された。遺構では土坑やピットを検出した。また、丘陵北側の尾根先端では周知の天王山１号墳を確認した。以上、丘陵一帯に遺跡が分布することが判明した。

これを受けて協議をした結果、平成16年度に本調査を実施することとなった。なお、調査を安西工業に委託している。

2　調査に至る経過

天王山遺跡は平成10年の分布調査で確認した遺跡で豊原町字天王に所在する遺跡である。また同じ天王山古墳群は、周知の遺跡で字天王に所在する。昭和42年に分布調査を松阪市教育委員会が実施しており、山添町、山下町、安楽町内に分布する、10基の墳丘を確認している。近年に至っては当センターが、ほ場整備事業に先立つ平成８年度の試掘調査によって、山添・琵琶垣内（旧閑浄寺）遺跡において縄文時代から鎌倉時代までの遺構・遺物を確認している。これらの結果をもとに農林水産商工部基盤整備課と協議し、平成９年度から随時発掘調査を継続している。

3　調査の体制と委託にかかる経緯について

当該年度の発掘調査体制は以下のとおりである。なお、今回の本調査にかかる調査委託については記録部門と土工部門の両部門を含む委託内容であり、受託者は、登録名簿に挙げられた企業体のうち、指名競争入札により落札された業者と契約を結ぶことになっている。

委託業務の施工については両者の協議後、実施され、発掘調査に着手する。下記の担当者はすべて監督員として、調査現場の施工管理を行い、調査業務の進行について、指揮・監督した。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
調査研究Ⅱグループ
　　ＧＬ　新田　洋
　　主査　中川　明
　　臨時技術補助員　淺生卓司
調査委託　安西工業株式会社
　　代理人　谷本直人氏
　　調査員　小泉信吾氏・坂口尚人氏

4　調査の方法

調査区の設定は、近接する丸野・中谷遺跡で用いた既知点（道路センター）及び当調査区の東端のＧ１ポイントを結んだラインを基軸にし、４m四方のメッシュに区切り、それらの区画にグリッドを割り振った。東西方向に西から30から１までを、南北方向にアルファベットのＡからＩまでを当てはめた。これらの組み合わせで各地区を呼称し、掘削を開始した。掘削着手に際しては、墳丘が新たに発見されることや住居跡が密に検出されることで調査が難航すると予想されたので、13ラインから西側丘陵部をＡ地区、東斜面をＢ地区と便宜的に区切って調査を

同時進行することにした。座標については、基準ポイント、図面作成ポイントに対して旧座標および新座標系（日本測地系）の両方を用いて振り込みを行った。

5　資料の公開・普及・保存について

11月８日午後２時より松阪市豊原町の調査現地にて弥生土器、円面硯、土師器甕等展示し、竪穴住居、及び１号墳等主要遺構の説明を行った。当市・県内の他に県外では愛知・大阪・奈良方面からの参加者数合わせて130名。

出土遺物については埋蔵文化財センター内収蔵庫にて保管。保存処理の必要な鉄製品については元興寺文化財研究所保存科学センターにて委託処理後、当センターにて保管。なお、蛇行剣・鉄鏃については浜松市職員を平成16年３月22日招聘し、類例および観察指導を受けた。また、保存処理の経過観察とその過程について保存科学センター職員に本報告に対して執筆依頼を行った。

6　調査の方法・経過

掘削の手順は、残土置場が町外にあること私有地への影響を考慮して、東から掘削を実施した。表土から一部包含層までを重機で掘削し、それ以下の遺構面までを移植ゴテ等を使用し、人力で行った。

古墳およびその周辺については、事前事後の地形測量を平板を使用し実施した。以下略測図を１／100、土層断面図や遺物出土状況図を１／20、墳丘部・墓壙および遺物出土状況図は１／10で作成した。全体の遺構図は１／20で作成した。遺構写真撮影は、丘陵部であることからタワーを変更しラジコンヘリによる撮影を実施した。使用したフィルムはコダックＥ100Ｇおよび100ＴＭＸである。

＜調査日誌抄＞

5月15日　事前打合せ、土留め設営の件。
5月23日　プレハブ設営位置打合せ。
5月29日　施行計画内容の確認、事前地形測量の準備。
６月２日　地形平板測量開始。（安西工業４名）
６月16日　地形測量終了。
６月20日　現況地盤高段階確認。（中川・森山立会い）
６月23日　掘削前写真撮影、トレンチ位置確認。
６月25日　重機による包含層掘削開始。
６月27日　ＳＸ318の人力掘削開始。トレンチ設定。
６月30日　土師器壺・須恵器高杯などＳＸ318付近より出土。
７月１日　ベルコン設営、ＳＸ318でピット検出。
７月３日　東斜面の区画で人力掘削を開始。遺構カード作成開始。
７月７日　ＳＸ318は７世紀代の古墳である可能性あり。
７月９日　ＳＸ318掘削続行、Ｂ地区で掘立柱建物を検出。
８月１日　ＳＫ303半割掘下げ、ＳＫ304土層断面図作成。
８月５日　ＳＨ301精査、壁周溝掘削。
８月８日　台風10号接近、台風対策。
８月11日　Ａ地区１／20遺構実測図作成。ラジコンヘリ撮影計画協議。
８月18日　現場作業再開。13ライン以西一部清掃。
８月19日　ＳＸ302掘削。弥生土器集中出土。
８月20日　ＳＸ302主体部付近、墳丘部全体精査。周溝北側写真撮影完了。
８月25日　ＳＸ302周溝部土器出土状況図作成、主体部遺構カード作成。
８月28日　ＳＨ20及びＳＨ８写真撮影。
９月１日　15号墳の掘削、ＳＸ318周辺のピットを掘削。
９月２日　削平古墳14号墳内に埋葬施設のひとつの可能性のある土坑状の遺構（ＳＫ51）を確認し、掘削。
９月９日　ＳＨ321内カマド精査、検出。
９月16日　15号墳全景写真撮影。ＳＨ323、322の全体写真撮影。15号墳の測量図作成。
９月18日　15号墳の主体部確認作業、トレンチ掘削後断面にて検証。
９月22日　15号墳の溝状遺構確認。１／20図面に記入し、掘削。
９月26日　ＳＨ342の煙道及びカマド検出。ＳＨ343の規模確定、壁溝を検出。
９月30日　ＳＸ351から弥生土器壺出土。方形周溝墓の可能性を検討。
10月３日　１号墳のトレンチ設定、周溝内で鉢形

土器と円筒埴輪を確認。埴輪列が存在する可能性あり。

10月８日　円筒埴輪の出土状況図作成。

10月９日　15号墳内に埋葬施設らしき土坑状の遺構を検出。

10月16日　15号墳埋葬施設と考えられる土坑状の遺構を確認し掘削。またこの遺構の下から弥生土器を伴う遺構検出。竪穴住居の可能性を予察。

10月25日　23ライン中央部１／20平面図実測。

10月27日　住居跡群の個別遺構写真撮影。

10月31日　15号墳の盛土除去後、竪穴住居を検出。

11月６日　ラジコンヘリによる空中写真撮影実施。現地説明会準備。

11月８日　現地説明会実施、参加者130名。

11月12日　１号墳主体部掘削作業、土層断面確認。盛土と盗掘坑との切り合いを検討。

11月14日　ＳＨ368内壁周溝、貯蔵穴、主柱穴の掘削実施。

11月19日　ＳＨ368の１／20実測図作成、コサック実施。

11月20日　写真・図面整理、遺構台帳作成。

11月26日　掘り残しピットの掘削、実測。

12月２日　１号墳墓壙およびセクション断面写真撮影。実測図作成。

12月８日　１号墳の墳丘、周溝部全景写真撮影。

12月12日　１号墳下層確認作業を重機・人力併用で実施。図面作成のための精査を行う。

12月15日　東斜面の下層確認作業を４箇所で実施、結果、下層遺構・遺物ともになし。成果品確認。

12月19日　調査終了、事務所撤収。

7　文化財保護法に関する諸通知

法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項

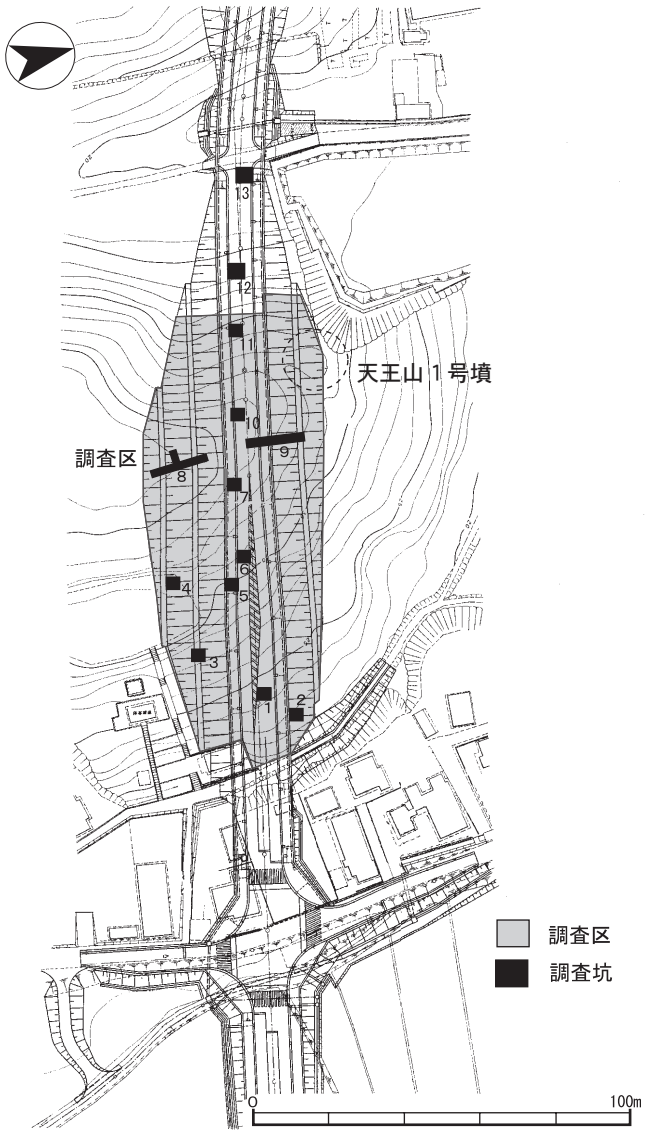
(県教育長宛)

平成15年５月20日付　教埋第47号

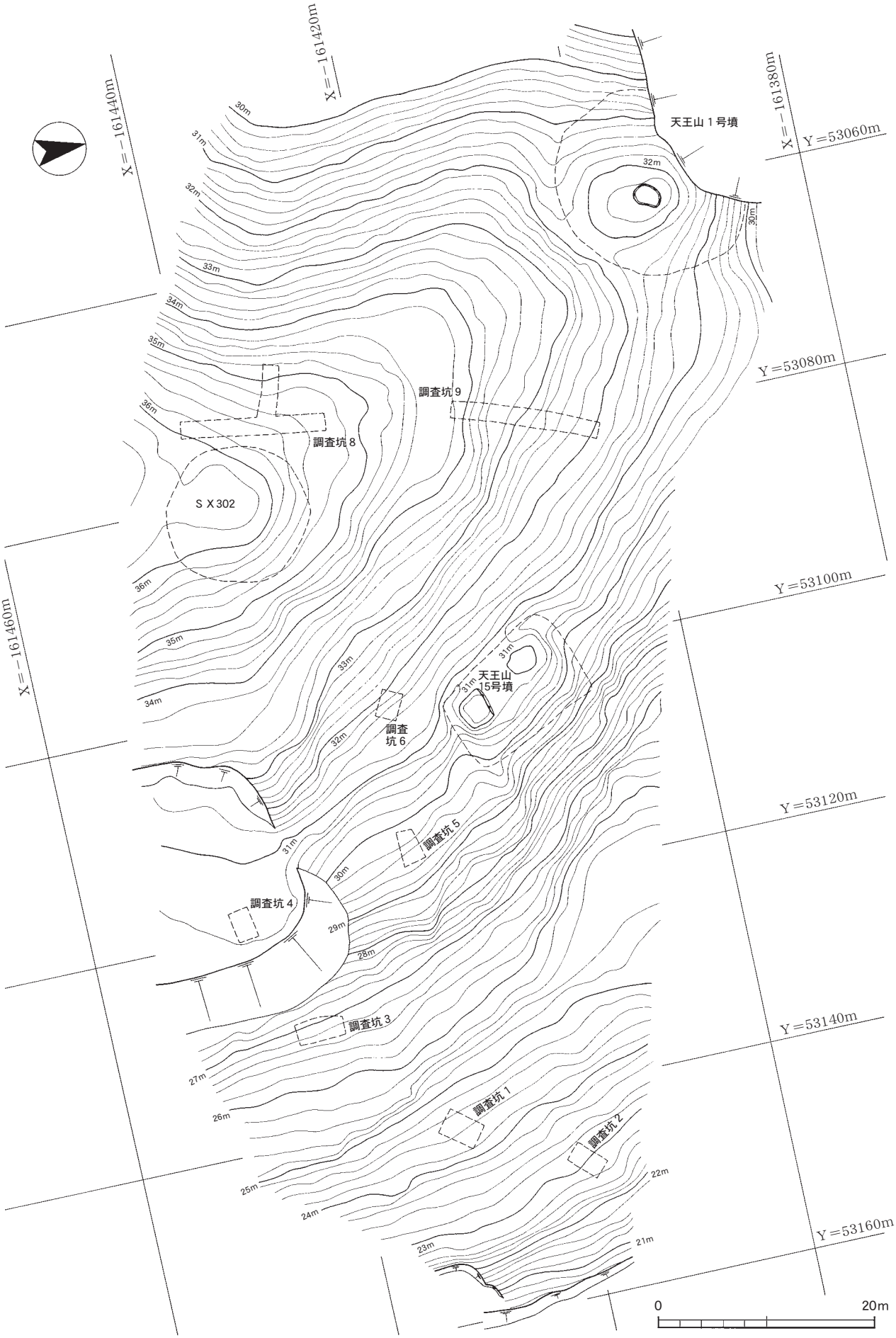
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知

(松阪警察署長宛)

平成16年２月12日付　教埋第７号－12



第１図　事業地内調査区位置図（１：2,000）



第２図　調査前地形測量図（１：500）

Ⅱ　位置と環境

1　位置と地理的環境

天王山遺跡は、櫛田川中流域左岸、この河川が形成した広大な沖積平野に突き出す標高40m程の低丘陵地（松阪丘陵最東部）に位置している。現在の行政区画では、松阪市豊原町字天王に所在する。

天王山遺跡周辺の地理的環境を見ていく上で、櫛田川は、この地域を理解する上で極めて重要な存在である。櫛田川は、台高山脈の高見山付近に源を発し、中央構造線に沿って、緩やかな蛇行を繰り返しながら東流する大河川である。この河川は、松阪市南部に広がる松阪丘陵の神山あたりから氾濫原へと入り、天王山遺跡周辺の中流域では２・３段にわたる河岸段丘を、下流域では広大な沖積平野を形成し伊勢湾へと注いでいる。下流域では、今も幾筋もの分流がみられ、かつての乱流の繰り返しが窺える。

ところで、神山あたりで櫛田川と分岐する祓川は平安時代以前の櫛田川の本流とされる。祓川は、古代において多気郡と飯野郡の郡界でもあり、斎宮に入る斎王が禊をした歴史的な意義をもつ河川である。

櫛田川は、氾濫の歴史という側面があるいっぽうで、下流域においては、古代に潟湖が存在していたことが知られている。このことは、『万葉集』および『伊勢風土記』逸文の記載などから窺え、地形や遺跡の分布状況を考慮すると、現在の海岸線から松阪市川島町および魚見町あたりまでが潟湖の範囲であったと推測されている[1]。

天王山遺跡が分布する丘陵からは、このような櫛田川が形成した広大な平野を望むことができ、かつては海岸付近に潟湖が広がっていたものと想像されるのである。また、この丘陵からは遠くは志摩地域の答志島を望むことができるのである。

2　歴史的環境

天王山遺跡は、弥生時代後期・古墳時代中期・飛鳥時代および奈良時代の遺構が中心である。そのため、弥生時代から奈良時代にかけての天王山遺跡周辺の様子を概観することにする。

弥生時代　天王山遺跡の東方、櫛田川を挟む対岸の段丘上および明野台地には、弥生時代を通じて、大規模な集落や方形周溝墓などが築かれている。金剛坂遺跡[2]・北野遺跡[3]・斎宮跡古里地区[4]・寺垣内遺跡[5]・コドノＢ遺跡[6]などの存在が知られている。なかでも、金剛坂遺跡は、弥生時代研究の学史においても有名な遺跡であり、弥生時代前期から後期にかけての竪穴住居や方形周溝墓などが数多く検出されている。

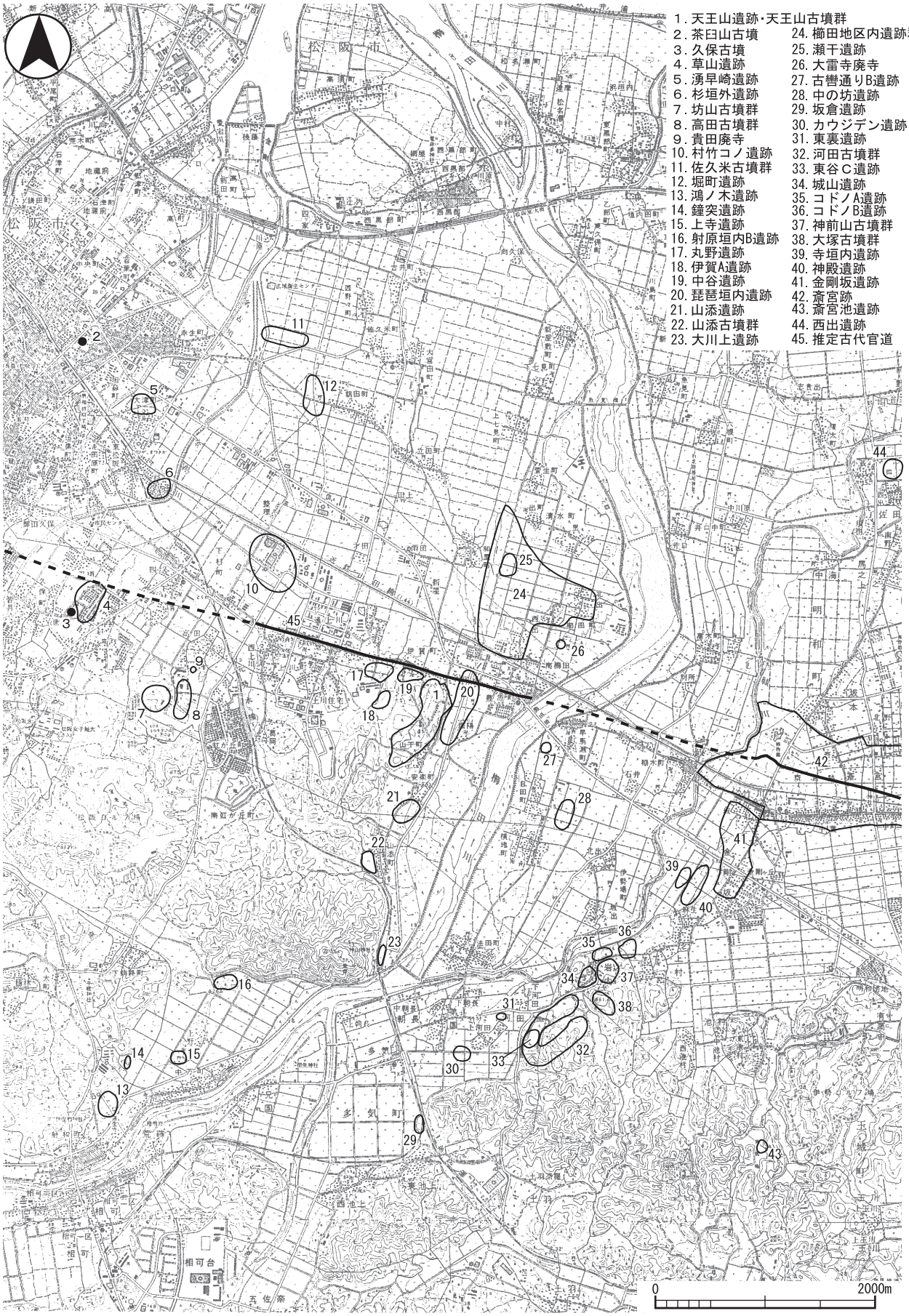
いっぽう、天王山遺跡の北および北西方向、櫛田川下流域左岸および金剛川流域へと目を移すと、弥生時代後期を中心とする大規模な集落が形成されている。草山遺跡[7]・堀町遺跡[8]・杉垣外遺跡[9]・村竹コノ遺跡などがある。このうち、草山遺跡は、弥生時代後期を中心とする大規模な集落であり、200棟以上の竪穴住居と環濠が検出されている。また、杉垣外遺跡・堀町遺跡・村竹コノ遺跡からも弥生時代後期の環濠をもつ集落の存在が発掘調査によって判明している。これらの遺跡は、地理的にも時期的にも天王山遺跡と極めて近く、関連性が注目される。

弥生時代後期になると、天王山遺跡の北および北西方向の広大な沖積地には、環濠をもつ大規模な集落が展開され、いっぽう、櫛田川を挟む東の対岸では弥生時代を通じて築き上げられてきた規模の大きな集落の存在が窺える。

古墳時代　当地において、古墳時代の始まりの様子は、まだ不明なことが多いが、櫛田川下流域の低地に立地する櫛田地区内遺跡群瀬干古墳群[10]では、「前方後方形墳丘墓」と称される古墳出現期の墳墓が確認されている。

この後、阪内川流域（金剛川流域も含む）と櫛田川中流域右岸の二地域を中心に古墳の造営が活発になっていくようである。

阪内川流域では、４世紀後半頃から久保古墳・高田２号墳・坊山１号墳・茶臼山古墳が築かれる[11]。なかでも、久保古墳と茶臼山古墳は直径50mを超える大型の円墳であり、三角縁神獣鏡や内行花文鏡が出土している。５世紀に入ると、伊勢湾西岸地域において最大規模を誇る宝塚１号墳、これに後続して



第３図　遺跡位置図（１：50,000）〔国土地理院「松阪」「国束山」１：25,000による〕

宝塚２号墳などの大型古墳が築かれる。また、５世紀後半頃、八重田古墳群などの中小規模の古墳が数多くつくられ、金剛川下流域右岸の沖積地でも佐久米古墳群の築造が開始される[12]。

いっぽう、櫛田川中流域右岸の玉城丘陵では、阪内川流域より遅れて、５世紀頃から大型古墳が出現する。現在のところ、権現山２号墳が最も古く５世紀前半頃とされる[13]。５世紀後半頃には、高塚１号墳・大塚１号墳[14]・神前山１号墳[15]など、６世紀前半頃には、ユブミ２号墳・斎宮池12号墳・中山６号墳などがある。このように玉城丘陵には５世紀頃から６世紀前半頃まで継続して首長墓とされる大型古墳が築かれるのである[16]。

このように５世紀後半頃、伊勢南部では八重田古墳群・佐久米古墳群・高塚１号墳・大塚１号墳・神前山１号墳など数多くの古墳が築かれており、このことは、天王山１号墳の性格などを考えるうえで重要である。

６世紀後半から７世紀代にかけて、天王山遺跡周辺では数多くの群集墳が形成される。なかでも玉城丘陵を中心とする櫛田川中流域右岸は、三重県内でも有数の古墳密集地となる。玉城丘陵では、前時期の古墳に続き、大規模な群集墳が形成され、その数は計400基を超える[17]。河田古墳群・上村池古墳群などの古墳がよく知られている。これらの古墳は木棺直葬墳を主体としており、概ね７世紀中葉頃に最盛期がある。

このような、大規模な群集墳の存在は、小規模な群集墳が点在する櫛田川中流域左岸の様相とは対照的である。

古墳時代の集落としては、弥生時代から続くものも含め琵琶垣内遺跡[18]・古轡通りＢ遺跡[19]・コドノＢ遺跡などがある。なかでも、古轡通りＢ遺跡では、古墳時代前期の四面庇をもつ大型の掘立柱建物が確認されており、その構造から祭祀のために使用されていたと考えられる。

古代　櫛田川の中・下流域は、ほとんどが旧多気郡と飯野郡に含まれている。『和名抄』によると、多気郡は麻続・三宅・有爾・多気・相可・流田・櫛田の７郷、飯野郡は乳熊・兄国・黒田・長田・漕代・神戸の６郷がみえる。天王山遺跡は、どの郷に属していたのか不明であるが、周辺には多気郡櫛田郷・飯野郡黒田郷などがある。ただし、多気郡櫛田郷に関しては、飯野郡の条里地割のなかに含まれている。

飯野郡と多気郡の郡界は、櫛田川の氾濫により、たびたび変更されたようであるが、天王山遺跡がある丘陵地は、櫛田川左岸のなかでも安定した土地である。このことに加え、飯野郡の条里地割内に天王山遺跡は含まれることから、当遺跡は飯野郡に属すると考えられる。

現在のところ、古代の飯野郡の様子は不明なことが多いが、それに接する多気郡には数々の著名な遺跡がある。まず、注目されるのが斎宮跡である。斎宮は、８世紀後葉頃に方格地割により整備されるものの、それよりさらに遡る７世紀後葉頃にはすでに存在していたと考えられている。斎宮が設立される７世紀後葉頃は、天王山遺跡において、弥生時代後期以降途絶えていた集落が新たに営まれる時期である。斎宮と天王山遺跡は郡が異なるものの、極めて近い位置関係にある。そして、天王山遺跡がある丘陵北裾を東西にはしる街道は、都と斎宮・伊勢神宮を結ぶ古代官道（伊勢道）[20]を概ね踏襲していると考えられる。

このようなことから、天王山遺跡は、斎宮設立後の伊勢南部の様相を知るうえで一つの重要な位置を占めると想定される。

また、７世紀後葉頃、土師器生産地で知られる多気郡有爾郷では北野遺跡が斎宮との関係において大規模な操業をおこなっていることも注目される[21]。ついで、この時期、玉城丘陵周辺では土師器生産の規模には及ばないが、外城田窯跡群において大規模な須恵器生産がおこなわれている[22]。

奈良時代から平安時代にかけて、斎宮では方格地割が整備され、その規模も拡大する。また、前記した古代官道周辺には、数多くの古代寺院がつくられる。天王山遺跡周辺にも貴田寺廃寺・大雷寺廃寺の存在が推測されている[23]。また、所在は不明であるが、『太神宮諸雑事記』によると、775年に逢鹿瀬廃寺から飯野郡へ伊勢神宮寺が移されたことが記載されている。

このほか、櫛田川中流域右岸には東裏遺跡やカウジデン遺跡がある[24]。カウジデン遺跡からは「中万」

と墨書された皿や椀が多数出土している。櫛田川を挟んだ対岸には現在の中万集落があり同遺跡との関連が注目される。また、多気町荒蒔の巣護遺跡[25]からは石帯や緑釉陶器といった特殊な遺物も出土している。これらの遺跡がある櫛田川と祓川との分岐点あたりは平安時代に京都の東寺領の荘園（川合・大国荘）であったことが知られており、東寺領川合・大国荘の施設などと関連する可能性がある。また、大川上遺跡[26]出土の９世紀後半頃の土師器杯には、「神宮寺」と墨書されたものが数多くあり当時の伊勢神宮寺の所在地を考える上で重要である。（淺生）

３　天王山古墳群の分布状況

本調査に着手する前に、天王山古墳群の分布状況を知るため踏査をおこなった。踏査は、『松阪市史』の記述を基に、伐開直後の本調査区内およびその周辺地域にわたりおこなった。第４図は天王山古墳群の分布状況を示している。また、各古墳の詳細は第１表に記した。

(1)　１～10号墳

１号墳～10号墳は、『松阪市史』第二巻史料篇考古（1978年）に記述のある古墳である。

１号墳は、本調査区内で確認し、後の章で詳細を述べることにする。２・３号墳は市史の記述から調査区内にあたると考えられる。２号墳の位置は特定することができなかったが、３号墳は、尾根上の高所に僅かに認められた高まりと考えられる。これは、発掘調査によって方形周溝墓ＳＸ302（弥生時代後期）であることが判明している。

ＳＸ302の南方約15mの地点に認められる僅かに残る墳丘は４号墳と推測される。５～７号墳は、市史編纂の段階から消滅しており、その位置は特定できないが、７号墳は三角点のある天王山最高所にあったとされる。現在は浄化施設がある。また、５・６号墳は４・７号墳間の丘陵尾根筋に存在したと推測される。８号墳～10号墳は市史の記述どおりの位置にあり、僅かな墳丘が認められた。

(2)　11～16号墳

11～16号墳は、今回の調査により発見された。15号墳は、方形の墳丘と周溝が残っていたため、調査前からその存在が確認できた。その他は踏査時の地表面の観察からはいずれも確認できなかった。また、調査によって発見されたＳＸ30・ＳＸ38・ＳＸ318なども古墳の可能性がある。

(3)　17～19号墳

17～19号墳は今回の踏査により発見された。17・

古墳名	所在	墳形	規模	時期	備考
天王山１号墳	松阪市豊原町天王	円墳	径約約16.8m	Ⅱ－ａ期	調査区。木棺直葬
天王山２号墳	松阪市豊原町天王	円墳	径約11.4m		古墳？
天王山３号墳	松阪市豊原町天王		一辺10m	Ⅰ期	方形周溝墓（SX302）
天王山４号墳	松阪市豊原町天王	円墳	径約12m		土取りにより大部分破壊。裾付近が残る
天王山５号墳	松阪市山下町上山	円墳	径約14m		消滅
天王山６号墳	松阪市山下町上山	円墳	径約12m		消滅
天王山７号墳	松阪市山下町上山				消滅
天王山８号墳	松阪市山下町上山	円墳	径約15.4m		高さ1.5m程の墳丘良好に残る
天王山９号墳	松阪市山下町大塚	円墳	径約12m		高さ約0.5m程の墳丘残る
天王山10号墳	松阪市山下町大塚	円墳	径約20m		高さ約0.5m程の墳丘残る
天王山11号墳	松阪市豊原町天王	円墳	径約9.5m	Ⅱ－ｂ期	調査区内。木棺直葬か
天王山12号墳	松阪市豊原町天王	方墳	南北約７m	Ⅱ－ｃ期	調査区内。木棺直葬か
天王山13号墳	松阪市豊原町天王	方墳	南北約11m	Ⅱ－ｃ期	調査区内。木棺直葬か
天王山14号墳	松阪市豊原町天王	方墳	南北約11.2m	Ⅱ－ｃ期	調査区内。木棺直葬か
天王山15号墳	松阪市豊原町天王	方墳	南北約12.6m 東西約8.6m	Ⅱ－ｃ期	調査区内。木棺直葬
天王山16号墳	松阪市豊原町天王	方墳	南北約6.5m	Ⅱ－ｃ期	調査区内。木棺直葬か
天王山17号墳	松阪市山下町上山	円墳	径約11.4m		周溝、高さ0.5m程の墳丘残る
天王山18号墳	松阪市山下町上山	円墳	径約14.1m		周溝、高さ0.5m程の墳丘残る
天王山19号墳	松阪市山下町将元山	円墳	径約10m		高さ約１m程の墳丘残る

※Ⅰ期は弥生後期、Ⅱ－ａ期は５世紀中～後葉、Ⅱ－ｂ期は５世紀末～６世紀前葉、Ⅱ－ｃ期は７世紀中～後葉

第１表　天王山古墳群一覧表

第４図　天王山古墳群の分布状況および遺跡周辺地形図（１：5,000）〔松阪市都市計画図、昭和50年〕

18号墳は、先述した８号墳より若干南東に下った丘陵斜面にあり、僅かな墳丘が横に２基並んで認められた。また、これらには斜面に切りこむ周溝が確認できた。19号墳は、さらに南方にあり、山下町の集落の谷（字内谷）を挟んだ丘陵北側斜面にあたる。

(4) まとめ

今回の踏査によって､遺物採集には至らなかったが、新たに数多くの古墳を発見することができた。従来から天王山古墳群は10基の古墳で構成されていることが知られていたが、今回の踏査および本調査によって新たに９基の古墳が追加されることになった。

（中川・淺生）

〔註〕

（１）穂積裕昌「伊勢湾西岸域における古墳時代港津の成立」（『考古学に学ぶ（Ⅱ）』、同志社大学考古学シリーズ刊行会、2003年）

（２）山澤義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』（明和町教育委員会、1971年）。田村陽一・浅尾悟・宮田勝功「金剛坂遺跡発掘調査報告」（『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、三重県教育委員会、1985年）。萩原義彦・川崎志乃『金剛坂遺跡〔第4次〕・辰ノ口古墳群〔第２次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）

（３）竹田憲治『北野遺跡（第５次）発掘調査概報』（三重県埋蔵文化財調査報告133-5、三重県埋蔵文化財センター、1996年）。田村陽一「北野遺跡」（『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第２分冊、三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1991年）

（４）谷本鋭次『古里遺跡発掘調査報告－D地区－』（三重県教育委員会、1975年）。山沢義貴ほか『古里遺跡発掘調査報告－C地区－』（三重県教育委員会、1973年）

（５）中野敦夫「寺垣内遺跡発掘調査概要」（『第６回三重県埋蔵文化財発掘調査報告会』資料、1985年）

（６）西出孝『コドノＢ遺跡（第２次・第３次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）

（７）松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報』（松阪市教育委員会、1982～1985年）

（８）小濵学ほか『堀町遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）

（９）松阪市史編さん委員会『松阪市史』第二巻資料篇考古（1978年）

(10) 宇河雅之「瀬干遺跡」（『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・柳辻遺跡・大蓮寺遺跡・北ノ垣内遺跡』、三重県埋蔵文化財センター、1996年）。原田恵理子『瀬干遺跡〔第２次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）

(11) 前掲註（９）文献。

(12) 前掲註（９）文献。

(13) 下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」（『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』、多気町教育委員会、1986年）

(14) 前掲註（13）文献。

(15) 下村登良男『神前山１号墳発掘調査報告』（明和町教育委員会、1973年）

(16) 西村美幸「玉城丘陵と周辺の群集墳」（『Mie history』vol.10、三重歴史文化研究会、1999年）

(17) 前掲註（16）文献。

(18) 奥野実『琵琶垣内遺跡〔第２次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）。野原宏司「閑浄寺遺跡発掘調査現地説明会資料」（三重県教育委員会、1987年）

(19) 奥野実・田上稔ほか『古轡通りＢ遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）

(20) 足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」（『探訪古代の道』第１巻、1988年）

(21) 上村安生・竹田憲治ほか『研究紀要』第7号、（三重県埋蔵文化財センター、1998年）

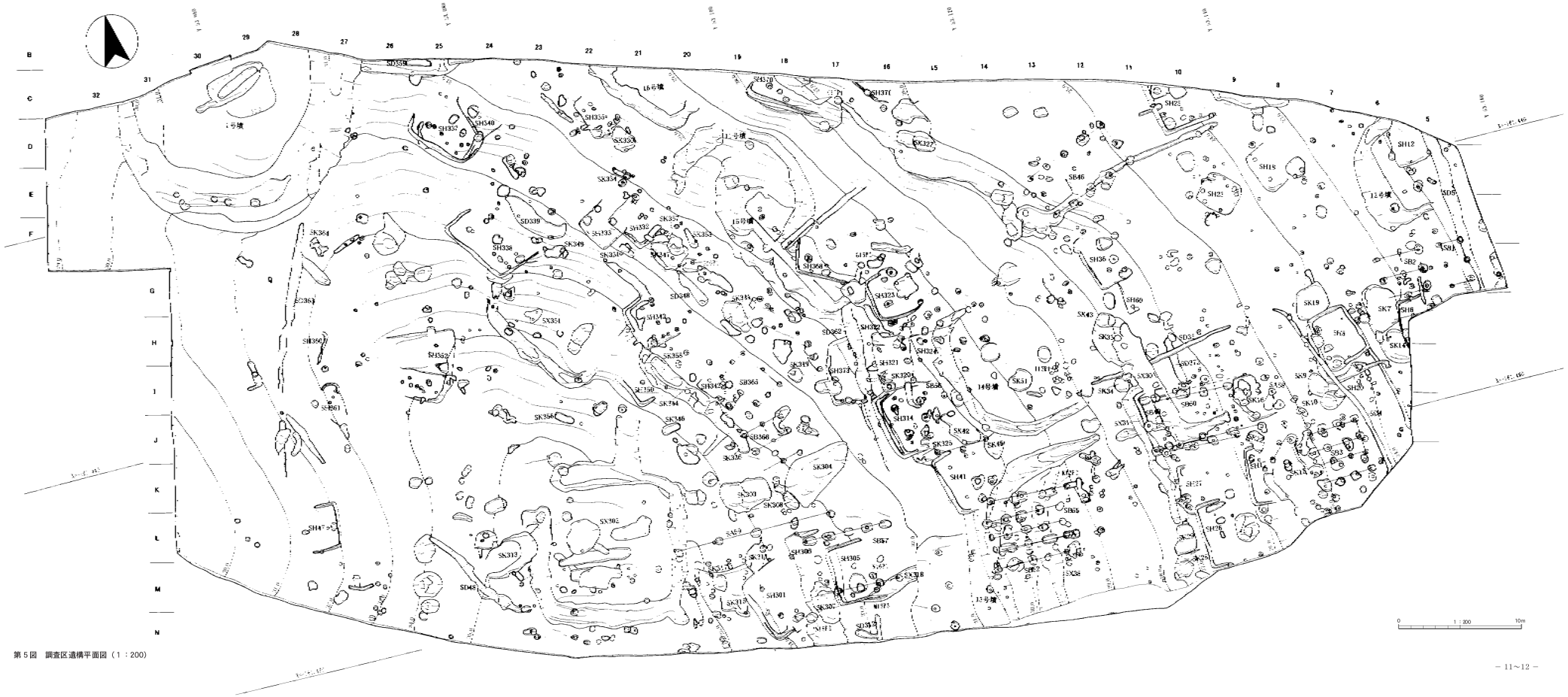
(22) 淺生卓司「伊勢南部の須恵器生産」（『Mie history』vol.16、三重歴史文化研究会、2005年）

(23) 前掲註（９）文献。

(24) 三ッ木貞夫・谷本鋭次「多気郡多気町カウジデン遺跡」（『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』、三重県教育委員会、1980）

(25) 田村陽一「巣護遺跡」（『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅰ　明気窯跡群・大日山古墳群・甘糟遺跡・巣護遺跡』、三重県埋蔵文化財センター、1995年）

(26) 柴山圭子『大川上遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）



第５図　調査区遺構平面図（１：200）

Ⅲ　調査の成果 － 層位と遺構 －

1　調査区の地形と基本層位

(1) 調査区の基本層位

天王山遺跡は、須賀神社の麓を通る県道豊原御麻生薗線の西側に沿って、南北に細長くのびる丘陵にある。調査区は、丘陵を横断するように、東西に長く設定されている。丘陵の東側斜面は、調査区の約２/３を占め、段丘状の地形を形成し、緩やかに傾斜している。これに対し、西側斜面は、傾斜が急で、遺構の密度は、東側と比べ薄い。また、丘陵尾根の稜線は、北西方向に緩やかに傾斜しながら延びており、調査前の標高は、南側の最高所で約36.2m、天王山１号墳が立地する尾根先端付近で約32.2mである。調査前の土地利用状況は、概ね山林であるが、須賀神社の拝殿の裏は小さな広場になっていた。今回の調査によって、丘陵西側斜面にも弥生後期の竪穴住居の広がりが認められ、周知の遺跡範囲は拡大している。

調査区全体を通して、明黄褐色および橙色粘質土層が地山となる。明黄褐色粘質土層は丘陵尾根上付近から西側斜面にかけて、橙色粘質土層は丘陵東側斜面を中心に確認できる。また、岩盤は花崗岩帯であり、丘陵尾根上の地山内には拳大の花崗岩質の礫が部分的に認められる。

明黄褐色および橙色粘質土層の上には、暗褐色・黒褐色・黒色粘質土層などが認められるが、暗褐色・黒色粘質土層は部分的であり、黒褐色粘質土層が調査区内に広く堆積している。

遺構の多くは、地山である明黄褐色および橙色粘質土層、その上に堆積している黒褐色粘質土層のそれぞれ上面から切り込んでいる。また、黒褐色粘質土層の上に部分的に黒色粘質土層が堆積しており、この層の上面からの切り込みも確認できる。このため、調査区南側に設定された土層断面からは、少なくとも３面の遺構面が確認できる。概ね明黄褐色および橙色粘質土層は弥生後期、黒褐色粘質土層は古代、黒色粘質土層は古代以降の形成層と考えられる。ただし、遺構は、黒褐色粘質土層上面での検出が極めて難しかったため、明黄褐色および橙色粘質土層上面でおこなった。出土遺物で「遺物包含層」としている多くは、黒褐色粘質土層出土遺物であり、本来は遺構に伴っていたとも考えられる。

(2) 丘陵東側斜面の層位の特色

橙色粘質土層の上に黒褐色粘質土が堆積している。この二つの層の間に部分的にみられる褐色・黄褐色粘質土層は、地山である橙色粘質土層と基本的には同じと考えられるが、若干、黒褐色土が含まれていた。南壁の11～13グリッドで、現代の攪乱を受けた箇所がある。この部分は須賀神社の裏の広場にあたり、表土直下には多量の礫が敷き詰められていた。この攪乱の下にある暗褐色粘質土層も不安定であり、攪乱に伴うものと考えられる。

また、東側斜面における黒色粘質土層は、僅かな色の違いにより黒褐色粘質土層と区別したものの、大きな差はほとんど認められない。

(3) 尾根上付近～西側斜面の層位の特色

基本的に明黄褐色粘質土層の上に黒褐色粘質土層が堆積している。特に丘陵西側斜面の傾斜角度は、東側斜面に比べ急である。そのため、裾に向かうほど堆積する土量は多く、明黄褐色粘質土層上には、黒褐色粘質土層・黒色粘質土層が順に厚く堆積している。丘陵尾根上から西側斜面にかけては、先述した地形の特色からか遺構の密度は薄く、西側斜面では、明黄褐色粘質土層を切り込む弥生時代後期の竪穴住居を３棟程確認したにとどまる。

調査区内からは、弥生時代後期、古墳時代中期、古墳時代後期、飛鳥・奈良時代の遺構が検出されている。以下、主だった遺構について述べる。なお、個々の遺構については、後掲の遺構一覧表（第２～４表）を参照されたい。

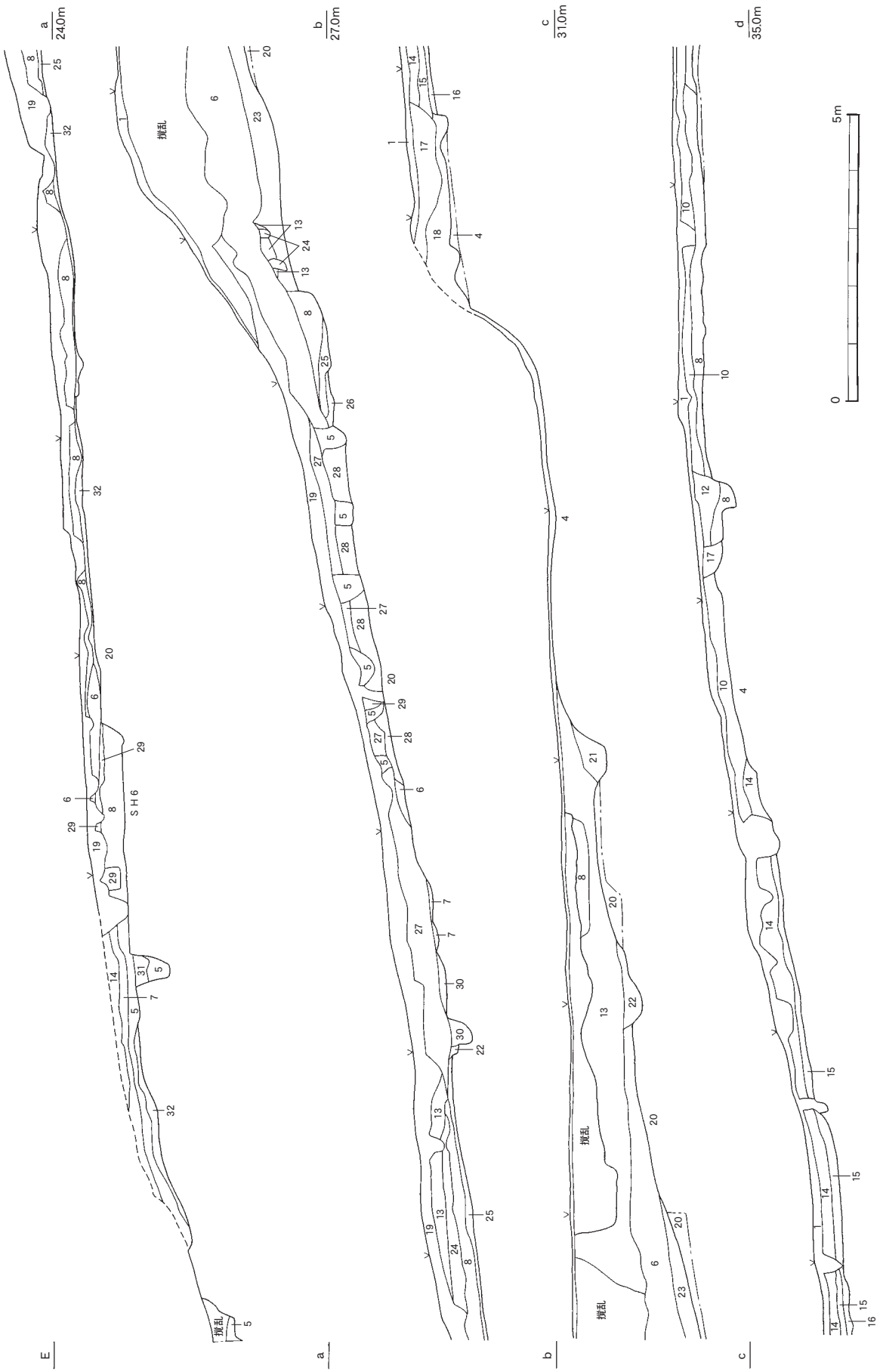
（中川・淺生）

2　弥生時代の遺構

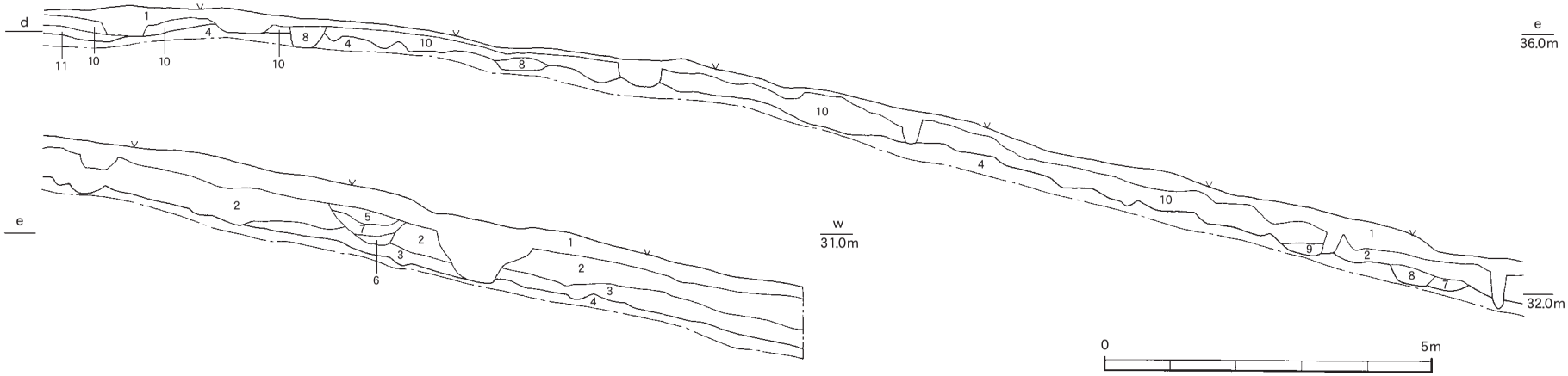
この節では弥生時代後期の遺構について述べることにする。この時期の遺構には、方形周溝墓２基、竪穴住居18棟、土坑４基、溝１条などがある。

(1) 方形周溝墓

方形周溝墓ＳＸ302（第８図）　調査区中央南部



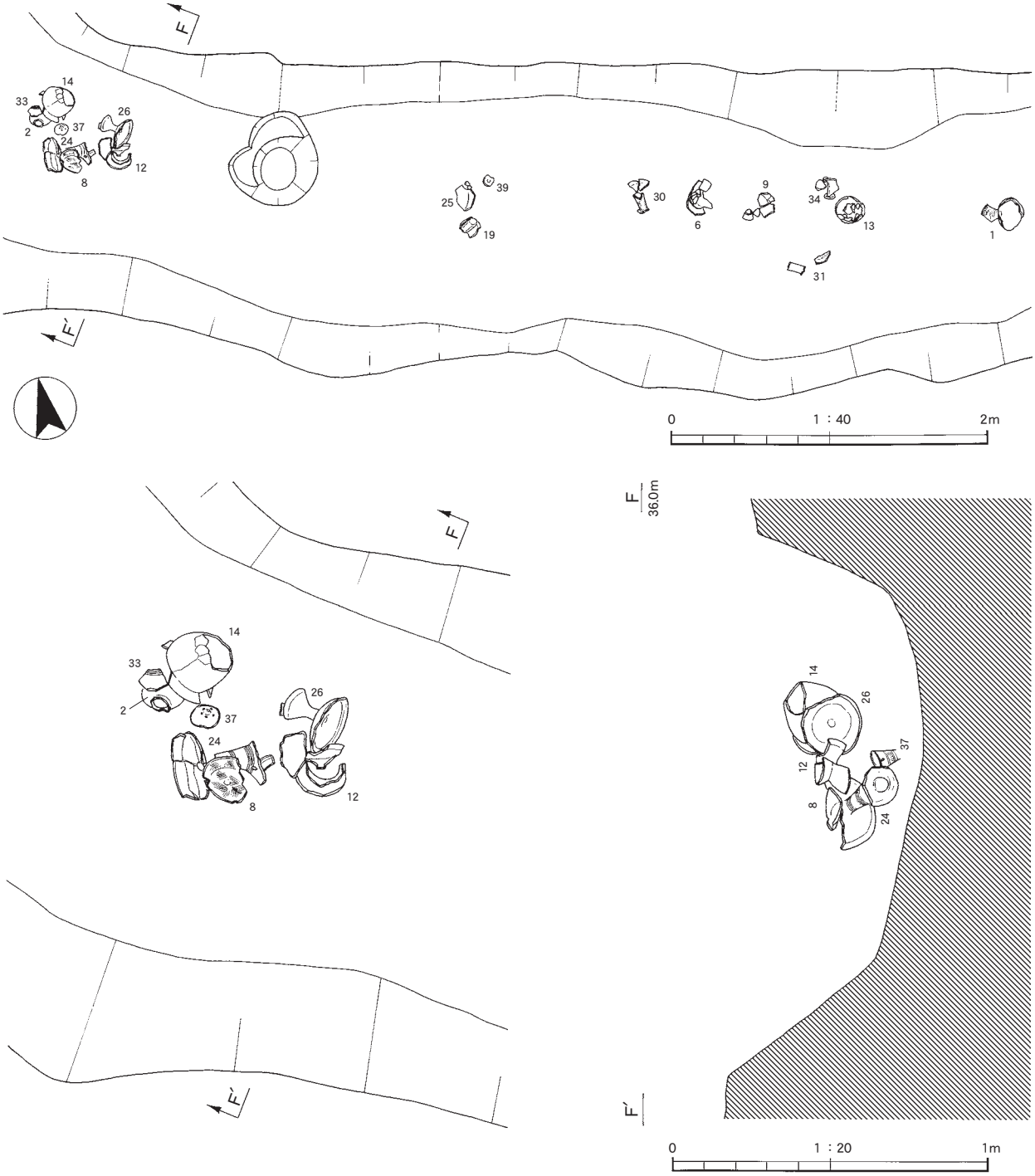
第６図　調査区南壁土層断面図１（１：100）



第７図　調査区南壁土層断面図２（１：100）

1	暗褐色粘質土（～１cm大の小礫混じる）	10YR３/４(表土)
2	黒色粘質土（～１cm大の小礫混じる）	10YR２/１
3	黒褐色粘質土（～１cm大の小礫多く混じる）	10YR２/２
4	明黄褐色粘質土（～１cm大の小礫多く混じる）	10YR６/６(地山)
5	黒色粘質土	10YR２/１
6	黒色粘質土	10YR1.7/１
7	黒褐色粘質土	10YR２/３
8	黒褐色粘質土	10YR２/２
9	黒褐色粘質土	10YR３/２
10	黒褐色粘質土（～１cm大の小礫少し混じる）	10YR２/３
11	黒褐色粘質土（粗砂混じり）	10YR２/２
12	黒色粘質土	10YR２/１
13	暗褐色粘質土	10YR３/３
14	黒色粘質土（～１cm大の小礫混じる）	10YR1.7/１
15	黒褐色粘質土（～１cm大の小礫混じる）	10YR３/２
16	暗褐色粘質土	10YR３/４
17	にぶい黄褐色粘質土（木の根の影響受ける）	10YR４/３
18	黒褐色粘質土	7.5YR２/２
19	褐色粘質土	10YR４/７(表土)
20	橙色粘質土（～１cm大の小礫多く混じる）	7.5YR６/６(地山)
21	黒色粗砂混じり粘質土	10YR２/１
22	黒褐色粗砂混じり粘質土	10YR２/３
23	黄褐色粘質土	10YR５/６
24	黒色・暗褐色混じる粘質土	10YR1.7/１・10YR３/３
25	明褐色粘質土（～１cm大の小礫混じる）	7.5YR５/６
26	黒色粘質土（炭化物多く含む）	10YR２/１
27	黒褐色粗砂混じり粘質土	10YR２/２
28	黄褐色粘質土（～１cm大の小礫混じる）	10YR５/８
29	褐色粘質土	10YR４/４
30	黒褐色粘質土（～１cm大の小礫・炭化物混じる）	10YR３/２
31	褐色粘質土（～１cm大の小礫多く混じる）	10YR４/４
32	褐色粘質土（～１cm大の小礫多く混じる）	10YR４/６

第８図　ＳＸ302実測図（１：100）

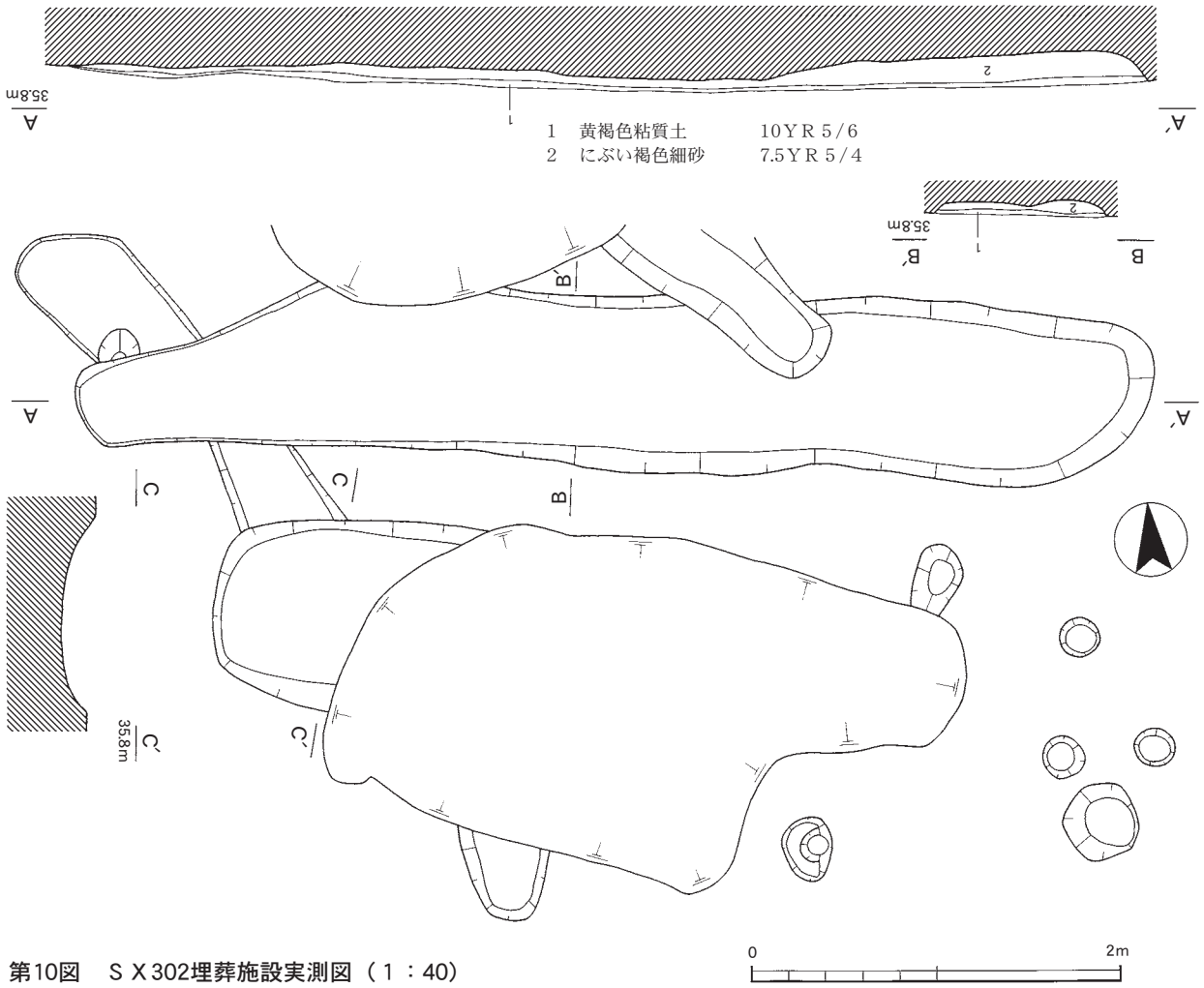


第９図　ＳＸ302周溝南側遺物出土状況図（１：40／１：20）

（M22付近）、調査区内における最も高所（標高約35.0m）に位置している。調査前に僅かな高まりが認められたが、墳形は明確に確認できなかった。

調査の結果、南北約10.0m、東西約10.2mの規模（周溝を除く）の方形周溝墓であることが判った。盛土が認められるものの、それは薄く、大部分はすでに流失したものと推測される。周溝は南側中央付近で幅2.0m、深さ0.4m程である。周溝の外縁はどの一辺もやや丸みをもっている。北西隅には陸橋部が認められる。これを挟む周溝は陸橋部にむけて底からしっかりと立ち上がるため、陸橋部は意図的に残されたことが判る。

埋葬施設の調査にあたっては、風倒木が三箇所にわたって認められ、その影響で遺構確定は困難であった。中央からやや南寄りの位置に、東西に長軸をもつ埋葬施設を１つ確認した。埋葬施設の規模は長



第10図　ＳＸ302埋葬施設実測図（１：40）

軸約5.9m、短軸約0.9mである。底の部分が浅く残る程度である。断面は若干丸みをもつことから割竹形木棺が安置されていたと推測される。

また、この南側に並ぶように埋葬施設らしき遺構があるが、風倒木に大部分を壊されており全体の形状等ははっきりしない。

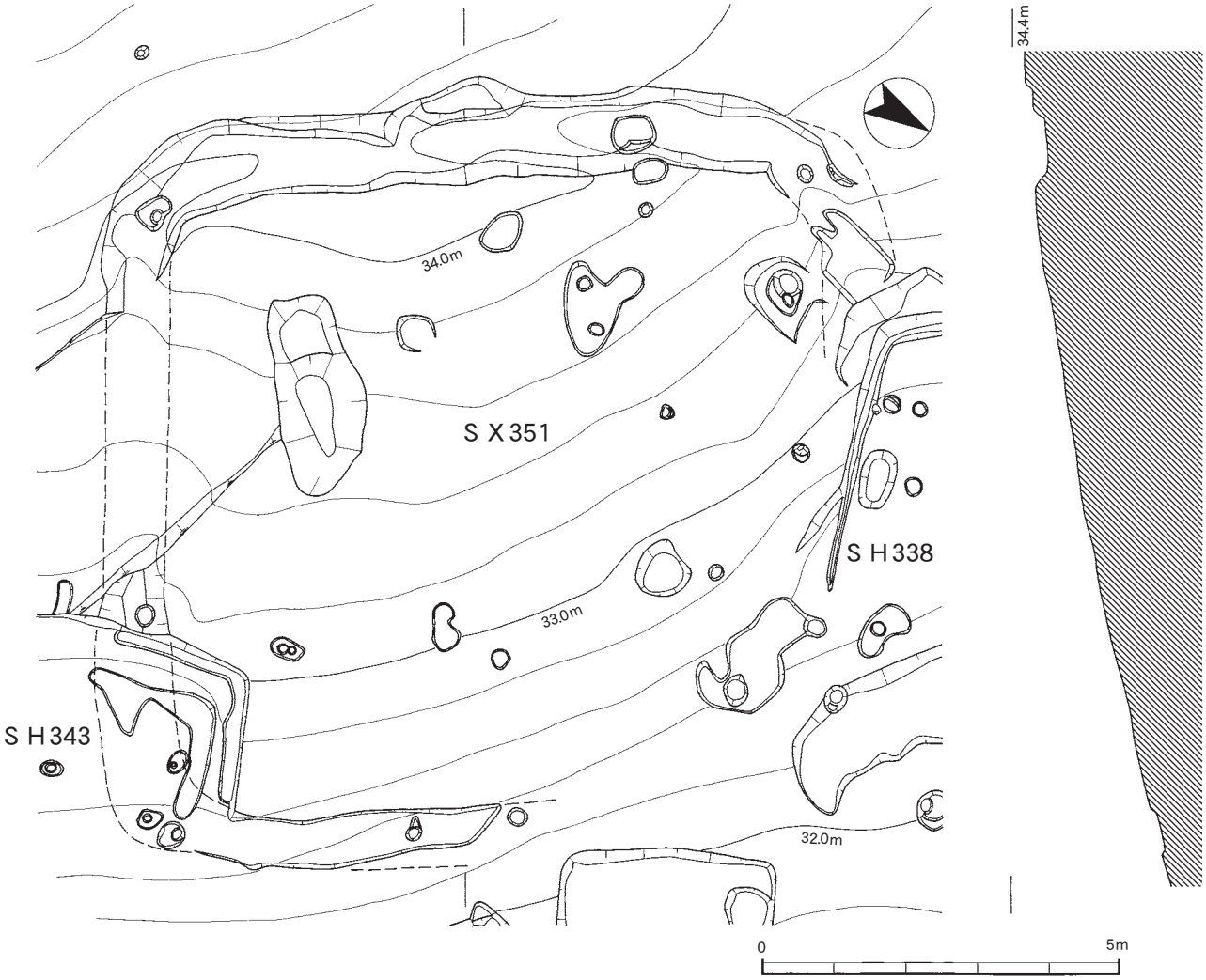
周溝からは、壺・甕・高杯・ミニチュア土器など数多くの遺物が出土した。なかには、赤色顔料が塗布されたものもある。南側周溝からの出土量が最も多く、なかでもその西側からはまとまって出土している。なお、埋葬施設からの出土遺物は確認されなかった。時期は弥生時代後期（山中式併行期）と考えられる。

方形周溝墓ＳＸ351（第11図）　調査区中央西寄り（H23付近）に位置する。北へ続く丘陵尾根稜線から若干東にはずれる標高32.2～34.4m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる周溝南側と、それにつながる周溝北東部を部分的ではあるが確認できた。盛土、主体部などは既に流失し不明である。ＳＨ343・ＳＨ338と重複し、ＳＨ343に切られていることが確認できた。部分的に残る周溝をつなぎ復元すると、方形を呈していることが判る。南北約9.2m、東西約9.1mの規模（周溝を除く）をもつ方形周溝墓である。周溝は、南側中央付近で幅約1.5m、深さ約0.3mである。

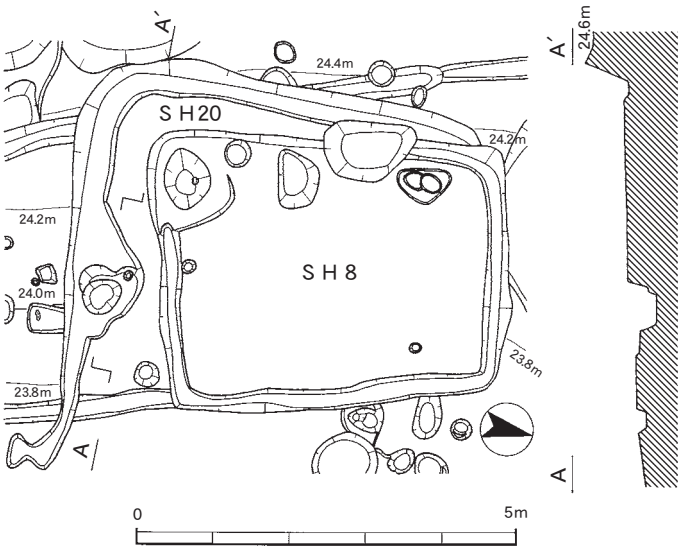
出土遺物には、壺がある。周溝南東隅付近より出土し、壺体部には部分的に赤色顔料が塗布されている。時期は、ＳＸ302と同じ後期と考えられる。

(2) 竪穴住居

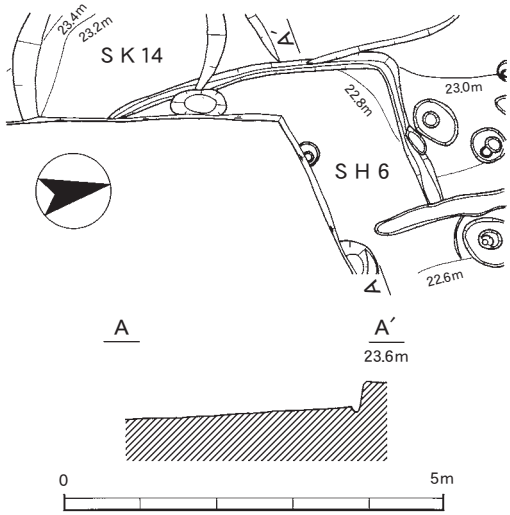
竪穴住居は、地形などから大きく４箇所に渡り、群をもちながら形成されている傾向にある。ここでは、丘陵東側斜面下部、丘陵東側斜面中部、丘陵東側斜面上部、丘陵西側斜面といったように大きく地形を４つに分類し、そのまとまりごとに竪穴住居の様相を記述していくことにする。



第11図　S X 351実測図（1：100）



第12図　S H 20実測図（1：100）



第13図　S H 6 実測図（1：100）

①丘陵東側斜面下部の竪穴住居

丘陵東側斜面において、標高27.0m付近から丘陵裾に向かい緩やかな傾斜に変わる。この緩やかな斜面では、ＳＨ６・ＳＨ17・ＳＨ36・ＳＨ60など４棟の竪穴住居が存在する。

竪穴住居ＳＨ６（第13図）　調査区東部（Ｈ５付近）、標高23.0m付近で検出した。ＳＫ７・ＳＫ14・ＳＢ２など数多くの遺構と重複している。斜面を深く切り込んだ住居西側は検出できたものの、東側は流失し不明である。また、南側は調査区外である。平面形態は方形であり、規模は南北約3.9m以上である。住居内の床の壁際には、幅10～20㎝、深さ６㎝程の壁周溝がめぐる。西辺中央付近には貯蔵穴が認められる。長円形を呈し南北70㎝、深さ35㎝程である。主柱穴などは確認できなかった。

出土遺物には、小片のため図示できなかったが、高杯などがある。時期は後期と考えられる。

竪穴住居ＳＨ17（第14図）　調査区南東部（Ｋ９付近）、標高26.0m付近で検出した。斜面を切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。南北約4.9mの規模をもつ方形の平面形態と考えられる。住居内の床の壁際には、幅約18㎝、深さ約６㎝の壁周溝がめぐる。主柱穴は２箇所確認できたが、貯蔵穴などは確認できなかった。

出土遺物には、壺・高杯などがある。時期は後期（山中式併行期）と考えられる。

竪穴住居ＳＨ20（第12図）　調査区東部（Ｉ７付近）、標高24.0m付近で検出した。ＳＨ８と重複しており、大部分がこれに切られる。また、東側は流失し不明である。平面形態は方形であり、規模は南北約5.5mである。住居内の床の壁際には、幅30㎝前後、深さ10㎝程の壁周溝がめぐる。この溝の南東部分は南に反れる傾向にある。そのため、この部分は屋外の排水施設の可能性がある。南辺中央には、径50～60㎝、深さ40㎝程の円形の貯蔵穴が認められる。南東隅付近のピットは主柱穴の一つの可能性がある。

出土遺物には、小片であるが、壺などがある。時期は後期と考えられる。

竪穴住居ＳＨ36（第15図）　調査区東部（Ｇ12付近）、標高26.4m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。平面形態は方形であり、規模は南北約4.7mである。住居内の床の西壁際には、幅約14㎝、深さ約６㎝の壁周溝が残る。主柱穴は２箇所確認できた。南辺中央と推測される位置には、東西約1.0m、深さ約0.3mの貯蔵穴がある。また、西辺中央よりやや南の位置には炭の層が認められる。

出土遺物には、壺・高杯がある。壺は、炭の層から倒立した状態で、高杯は貯蔵穴から出土した。時期は後期（山中式併行期）と考えられる。

竪穴住居ＳＨ60（第15図）　調査区東部（Ｇ11付近）に位置する。前記のＳＨ36と重複している。方形に近い平面形態をもつことから竪穴住居とした。規模は、南北2.9m以上である。

出土遺物は確認されなかった。時期は、ＳＨ36より古いが、概ねこれと同じ後期と考えられる。

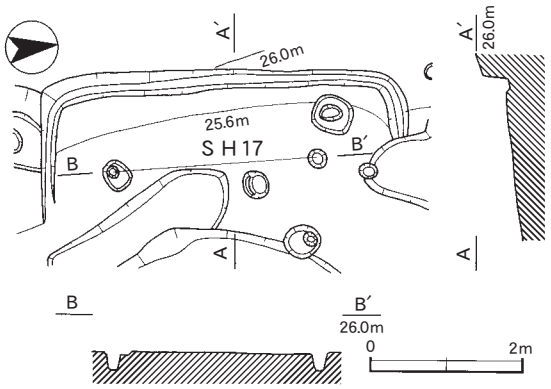
②丘陵東側斜面中部の竪穴住居

丘陵東側斜面のなかでも、標高30.0～31.0m付近はやや緩やかな傾斜である。この標高間には、ＳＨ41・ＳＨ314・ＳＨ368などが並ぶ。また、ＳＨ370はやや斜面を下る位置にあるが、概ねこのグループに属するものと考えられる。

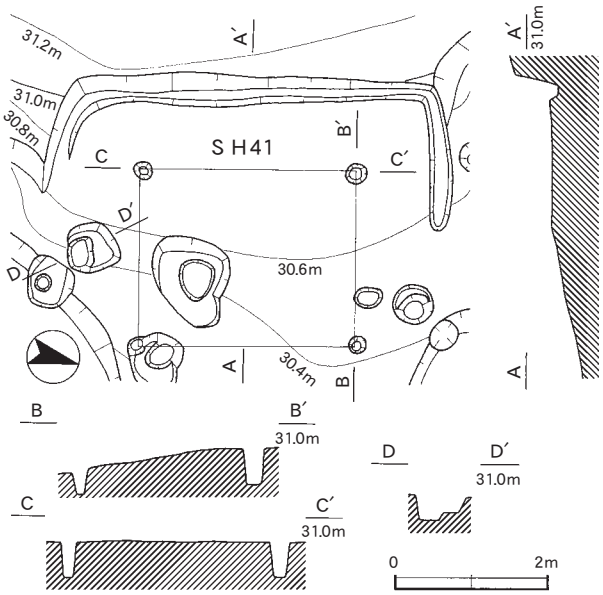
竪穴住居ＳＨ41（第16図）　調査区中央部（Ｋ15付近）、標高30.0～31.0mで検出した。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。平面形態は方形であり、規模は南北約5.4mである。住居内の床の壁際には、幅約20～25㎝、深さ約10㎝の壁周溝がめぐる。主柱穴は４箇所確認した。どれも直径は25㎝程であり、深さは西側のもので約48㎝と深い。柱間は南北約2.8m、東西約2.3mである。南辺の中央付近と推測される位置には、南北約70㎝、深さ約30㎝の貯蔵穴がある。

遺物はいずれも小片であり、時期のわかるものは確認できなかった。住居の形態から当該時期（後期）のものと考えた。

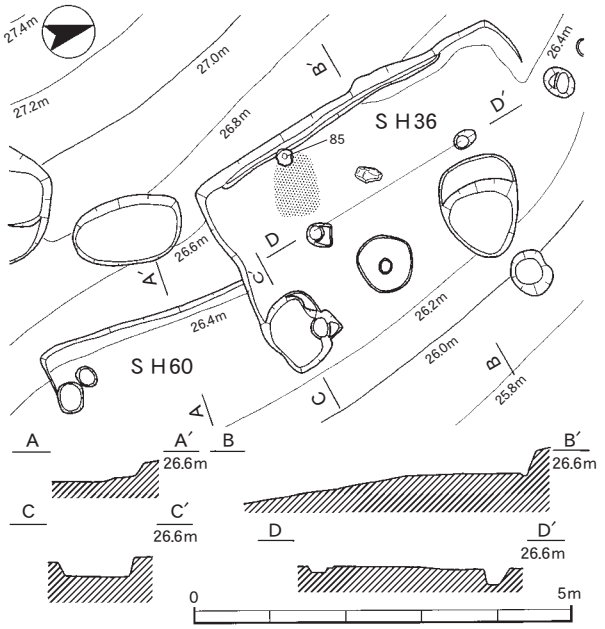
竪穴住居ＳＨ314（第17図）　調査区中央部（Ｊ16付近）、ＳＨ41の北隣に位置する。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。また、北東部はＳＨ321に切られる。平面形態は方形であり、規模は南北約5.6mである。住居内の床の壁際には、幅約18㎝と約30㎝の壁周溝が２重にめぐる。これには、重複が認められ、後述



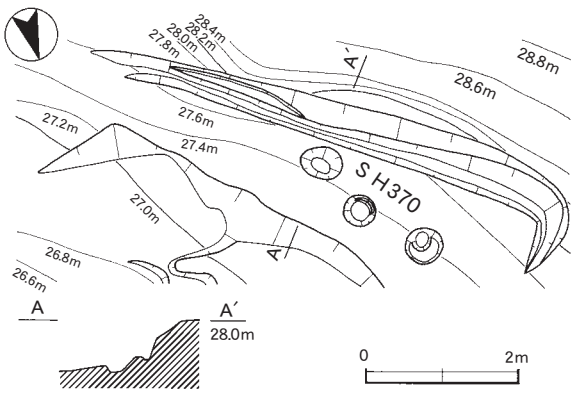
第14図　ＳＨ17実測図（１：100）



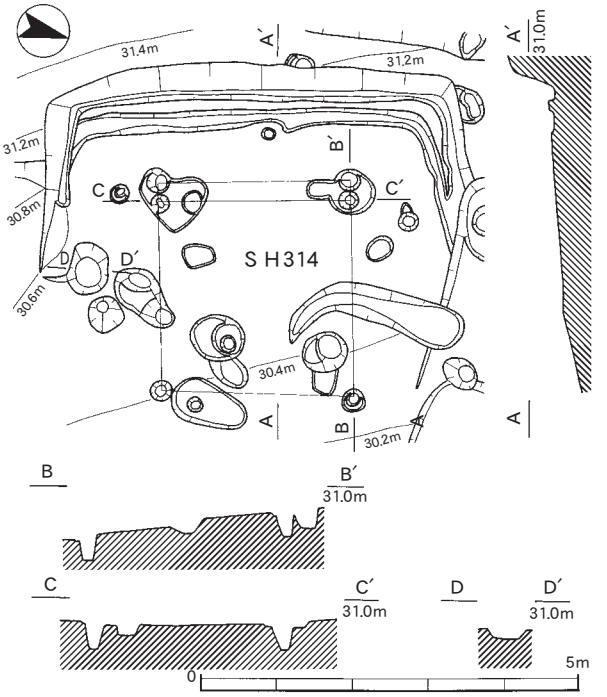
第16図　ＳＨ41実測図（１：100）



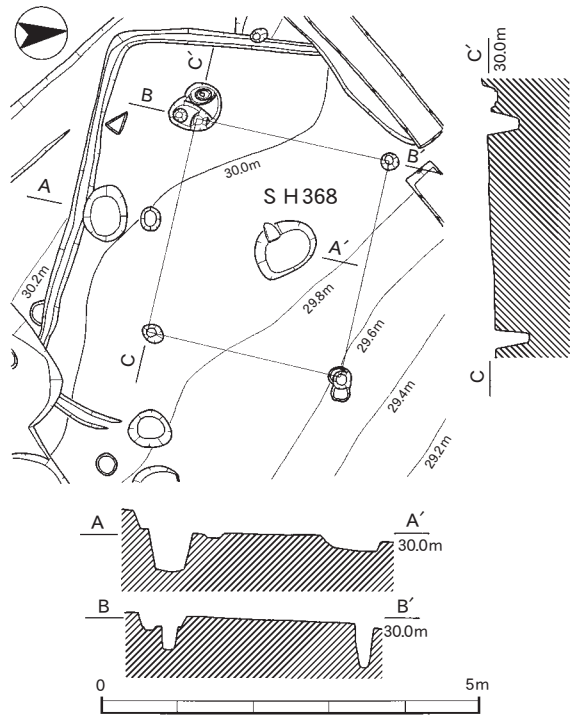
第15図　ＳＨ36・ＳＨ60実測図（１：100）



第19図　ＳＨ370実測図（１：100）



第17図　ＳＨ314実測図（１：100）



第18図　ＳＨ368実測図（１：100）

する主柱穴の数からも住居を拡張したことが窺える。内側の壁周溝が拡張前のものである。主柱穴は拡張前と後のものを合わせ６箇所確認した。最も西にあたる２箇所は拡張後のものである。また、東側の２箇所は拡張前と後も同じ位置と考えられる。いずれも径約20～30㎝、深さ約30～35㎝である。南辺中央には、南北約50㎝、深さ約12㎝の円形を呈する貯蔵穴がある。

出土遺物には壺・甕などがある。時期は後期と考えられる。

竪穴住居ＳＨ368（第18図）　調査区中央部（Ｇ17付近）、標高30.0m付近で検出した。ＳＨ368は天王山15号墳の下層にあたり、北東部を11号墳に切られる。斜面を深く切り込んでいる住居南側は検出できたが、北側は流失し不明である。平面形態は方形であり、規模は東西約5.4mである。住居内の床の壁際には、幅約18㎝、深さ約６㎝の壁周溝がめぐる。主柱穴は４箇所確認できた。いずれも径24㎝程であり、深さは約42～56㎝と深い。柱間は、南北約2.6m、東西約2.9mである。南辺の中央には、東西約74㎝の円形の貯蔵穴が認められ、深さは約50㎝と深い。

出土遺物には壺・高杯などがある。時期は、後期（山中式併行期）と考えられる。

竪穴住居ＳＨ370（第19図）　調査区中央北部（Ｃ18付近）、標高27.4m付近で検出した。この地点は極めて傾斜がきつい。斜面を切り込んでいる住居南側は検出できたが、北側をはじめとする大部分は流失し不明である。東西6.6m以上の規模であり、方形の平面形態と考えられる。住居内の床の南壁際には、幅約20㎝、深さ約６㎝の壁周溝がめぐる。南辺中央には、径40～56㎝の円形の貯蔵穴が認められ、深さは約20㎝と浅い。なお、住居南西隅にあたるピットは主柱穴の一つの可能性がある。

出土遺物には甕がある。時期は後期（山中式併行期）と考えられる。

③丘陵東側斜面上部の竪穴住居

丘陵頂およびそこから北に延びる尾根から東へとやや斜面を下った丘陵東側斜面上部は比較的緩やかな傾斜である。ＳＨ301・ＳＨ337・ＳＨ338・ＳＨ340などがある。これらの竪穴住居はＳＨ301を除いて密集している。

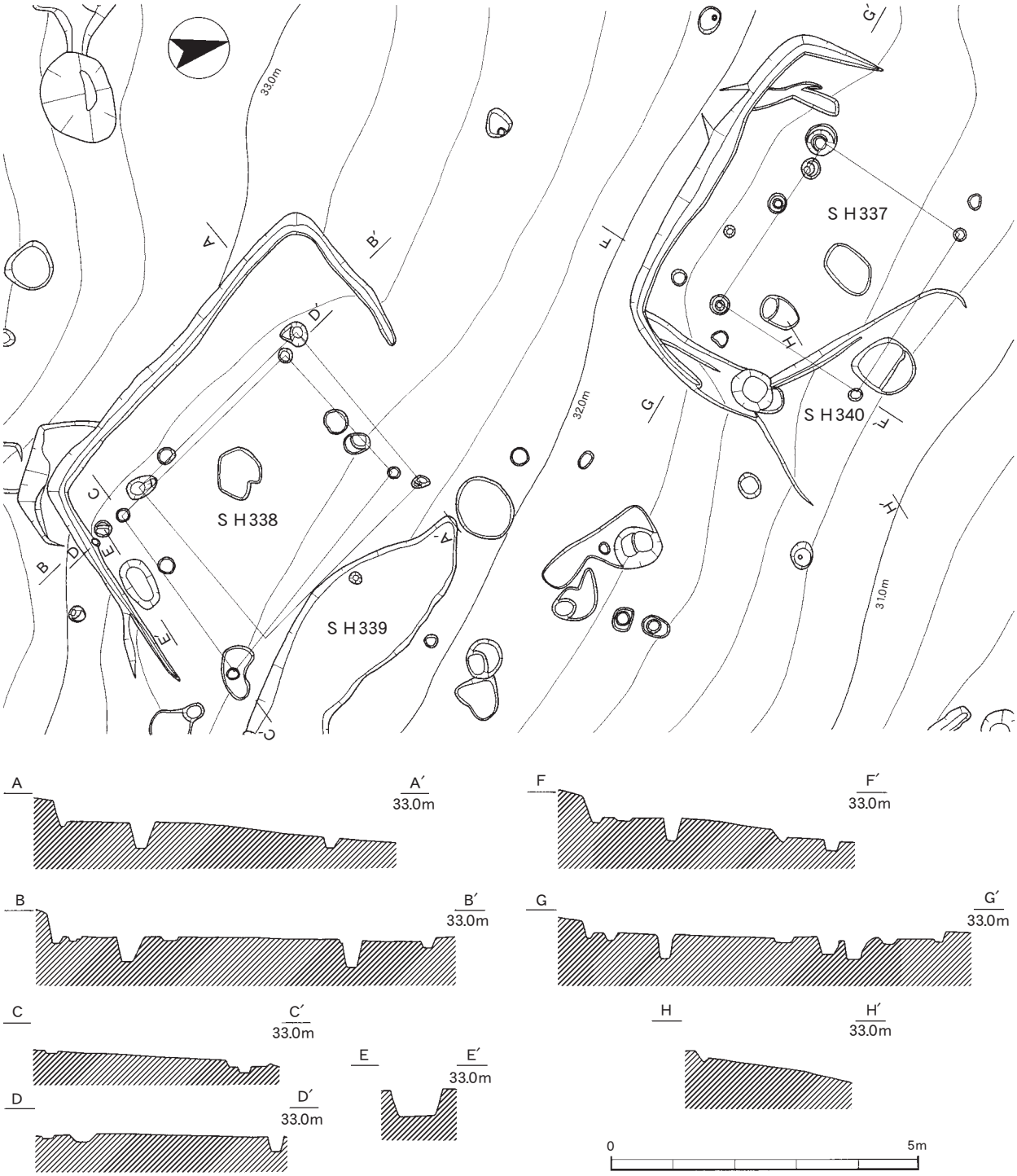
竪穴住居ＳＨ301（第22図）　調査区中央南部（Ｍ18付近）、丘陵上から東へとやや斜面を下った標高34.0m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。平面形態は方形であり、規模は南北約5.8mである。住居内の床の壁際には、幅約20～25㎝、深さ10㎝程の壁周溝がめぐる。主柱穴は２箇所確認した。径は約30㎝、深さは南側のもので約25㎝、柱間は南北約2.7mである。南辺の中央付近と推測される位置には貯蔵穴がある。東西約1.0mの長円形を呈し、深さは約0.3mである。

出土遺物には、壺・甕・高杯などがあり、この時期の住居跡のなかで最も出土量が多い。住居内南側を中心にまとまって出土した。時期は後期（山中式併行期）と考えられる。

竪穴住居ＳＨ337（第20・21図）　調査区北西部（Ｄ25付近）、丘陵尾根からやや東に下った標高31.6m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。また、東部はＳＨ340と重複しており、これを切っている。平面形態は方形であり、規模は南北約6.0mの大型の住居である。隅はやや丸みをもつ。住居内の床の壁際には、幅20㎝前後の壁周溝が２重にめぐっている。これは、重複しており、住居を拡張したことが窺える。内側の壁周溝が拡張前のものである。主柱穴は４箇所確認した。深さ20～40㎝程である。この他の主柱穴は確認できなかったことから推測すると、拡張後も主柱穴の位置は同じと考えられる。南辺中央と推測される位置には円形を呈する貯蔵穴が認められる。径は約65㎝であり、深さは約65㎝と深い。貯蔵穴内には人頭大の石が２石置かれていた。石の下からは特殊脚付壺（122）が出土している。本来、貯蔵穴として掘られたものが後に祭祀の性格をもった可能性が高い。

出土遺物には壺・甕・高杯などがあり、住居北側を中心に出土した。また貯蔵穴からは高杯・特殊脚付壺が出土した。時期は後期（山中式併行期）と考えられる。

竪穴住居ＳＨ338（第20図）　調査区北西部（Ｆ24付近）、丘陵尾根からやや東に下った標高32.6m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる住居西側

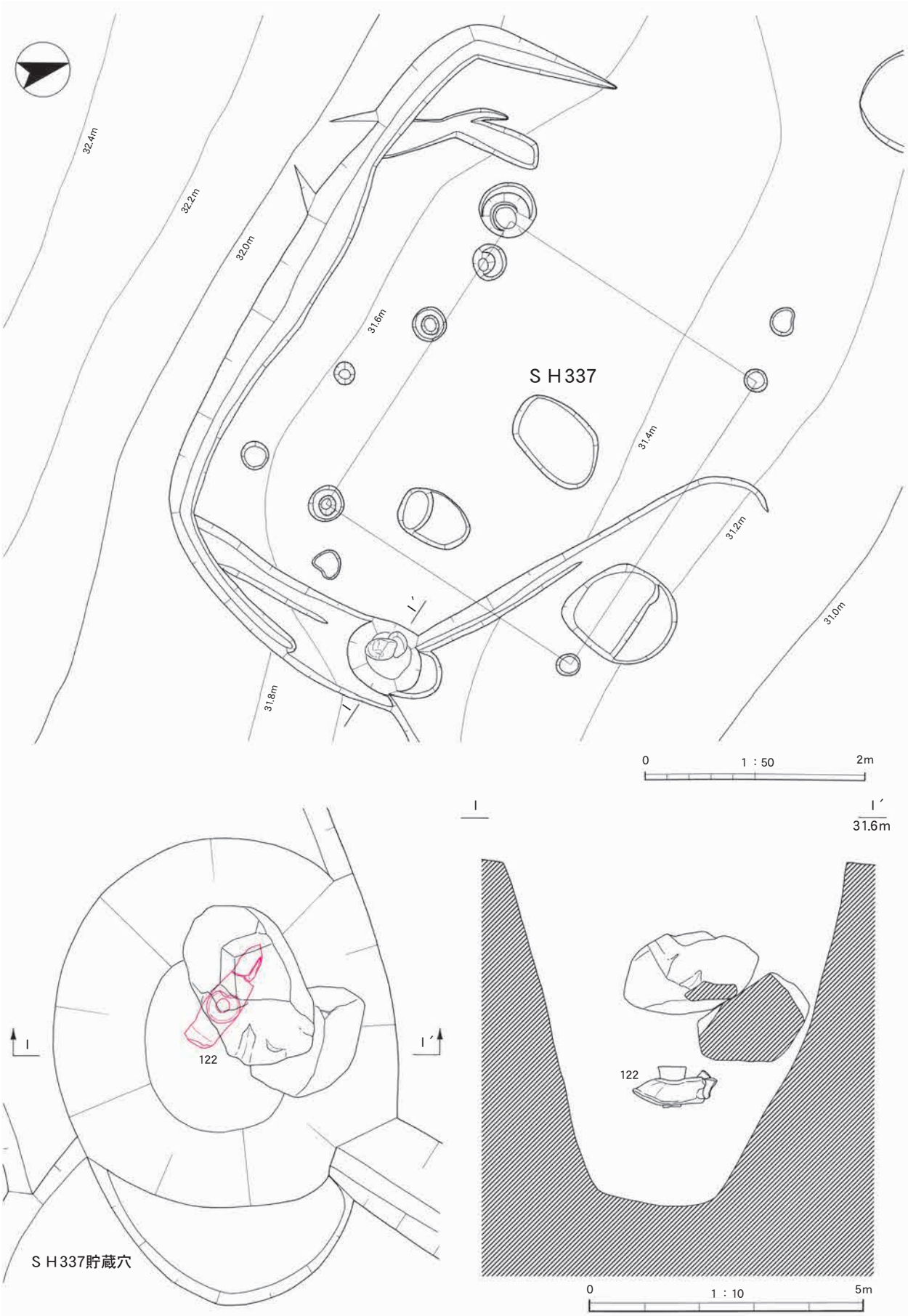


第20図　ＳＨ337・ＳＨ338・ＳＨ340実測図（１：100）

は検出できたが、東側は流失し不明である。平面形態は方形であり、規模は南北約6.5mの大型の住居である。住居内の床の壁際には、幅20cm程の壁周溝がめぐる。主柱穴はセットになって並ぶものを２組確認した。建替えがおこなわれたことが窺える。ただし、若干南寄りに並ぶものは浅く疑わしい。南辺中央付近には、長径80cmの長円形を呈する貯蔵穴が認められ、深さは45cm程である。

出土遺物には甕・高杯などがあり、住居北側を中心に出土した。また、貯蔵穴から高杯片が出土した。時期は後期（山中式併行期）と考えられる。

竪穴住居ＳＨ340（第20図）　調査区北西部（Ｄ24付近）に位置する。ＳＨ337と重複し、これに切られる。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。平面形態は方形であり、規模は南北約3.9mである。住居内の床の壁



第21図　S H337実測図（1：50／1：10）

際に壁周溝が残る。主柱穴、貯蔵穴は確認できなかった。

出土遺物は確認されなかった。ＳＨ337より古いが、これに近い時期と考えられる。

④丘陵西側斜面の竪穴住居

丘陵西側斜面は、東側に比べ、傾斜が急である。この西側斜面には、ＳＨ47・ＳＨ360・ＳＨ361などがある。また、ＳＨ352は尾根上に位置するが、これらの竪穴住居に近いため、同じグループに属するものとして扱う。

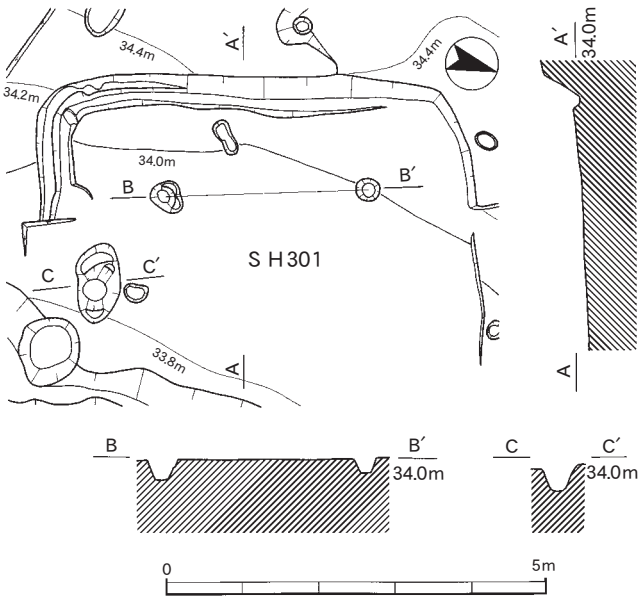
竪穴住居ＳＨ47（第23図）　調査区南西部（Ｌ27付近）、丘陵西側斜面の中腹の32.0m付近から検出した。この地点は西側斜面のなかでも特に傾斜が急である。斜面を深く切り込んでいる住居東側は検出できたが、西側は流失し不明である。平面形態は方形であり、規模は南北約3.9mの小型の住居である。住居内の床の壁際には壁周溝がめぐる。幅10～20㎝、深さ14㎝程である。東辺の中央には、東西約50㎝の円形の貯蔵穴が認められ、深さ約40㎝と深い。また、西辺の中央付近と推測される位置にも貯蔵穴らしきものがある。

出土遺物には壺・甕などがある。このうち、壺は東側の貯蔵穴から出土した。時期は、後期（山中式併行期）と考えられる。

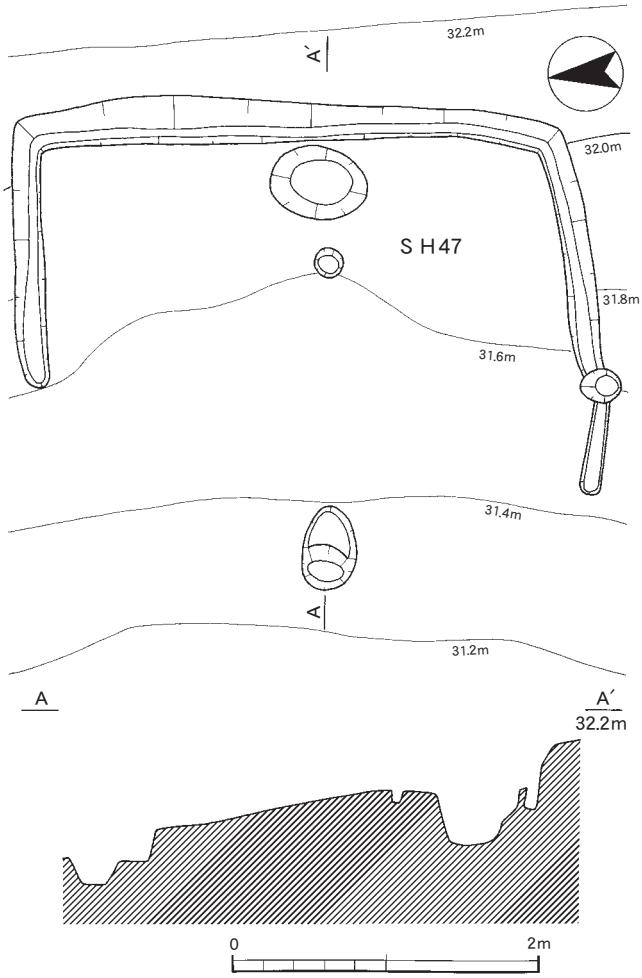
竪穴住居ＳＨ352（第24図）　調査区西部（Ｉ25付近）の丘陵尾根上、標高34.0m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる住居南東側は検出できたが、北側は撹乱を受け、西側は流失しており全体の規模など不明である。だが、撹乱は浅く、その底から貯蔵穴や主柱穴が確認できた。平面形態は方形であり、規模は南北2.3m以上である。住居内の床の壁際には、壁周溝がめぐる。東辺の中央には貯蔵穴がある。円形で径は約80㎝、深さは約50㎝と深い。また、住居内東側の南北に並ぶ二つのピットは主柱穴と考えられる。

出土遺物には高杯・甕などがある。このうち甕は貯蔵穴から倒立して出土した。時期は後期（山中式併行期）である。

竪穴住居ＳＨ360　調査区西部（H28付近）、丘陵尾根上よりやや西に下った標高33.2m付近で検出した。残存状況は極めて悪いが、Ｌ字状に壁周溝が認めら



第22図　ＳＨ301実測図（１：100）



第23図　ＳＨ47実測図（１：50）

れることから竪穴住居とした。斜面を深く切り込んでいる住居東側のみ確認できた。方形の平面形態と考えられ、規模は南北約2.6m以上である。

出土遺物は確認できなかったが、時期は、立地なども考慮して、近隣のＳＨ352・ＳＨ47と同じ時期（後期）と考えた。

竪穴住居ＳＨ361　調査区西部（H27付近）、ＳＨ360の南で検出した。残りは極めて悪いが、Ｌ字状に壁周溝が認められるため竪穴住居とした。方形の平面形態と考えられ、規模は南北約3.0m以上ある。

出土遺物は、いずれも小片であるため図示できなかったが、弥生土器と考えられるものがある。時期はＳＨ352・ＳＨ47と同じ後期と考えられる。

(3) 土坑

土坑ＳＫ304　調査区中央部（Ｋ18付近）で検出した土坑である。南北約6.0m、東西約3.2m、深さ約0.7mであり、規模が大きい。

出土遺物は極めて少なく、図示できたものは壺片１点のみである。時期は後期と考えられる。

土坑ＳＫ308　調査区中央部（Ｋ18付近）で検出した土坑である。南北に長い円形を呈する。南北約1.7m、東西0.9m、深さ0.4mである。

出土遺物は、少量であるが、壺・甕・高杯が出土している。時期は後期と考えられる。

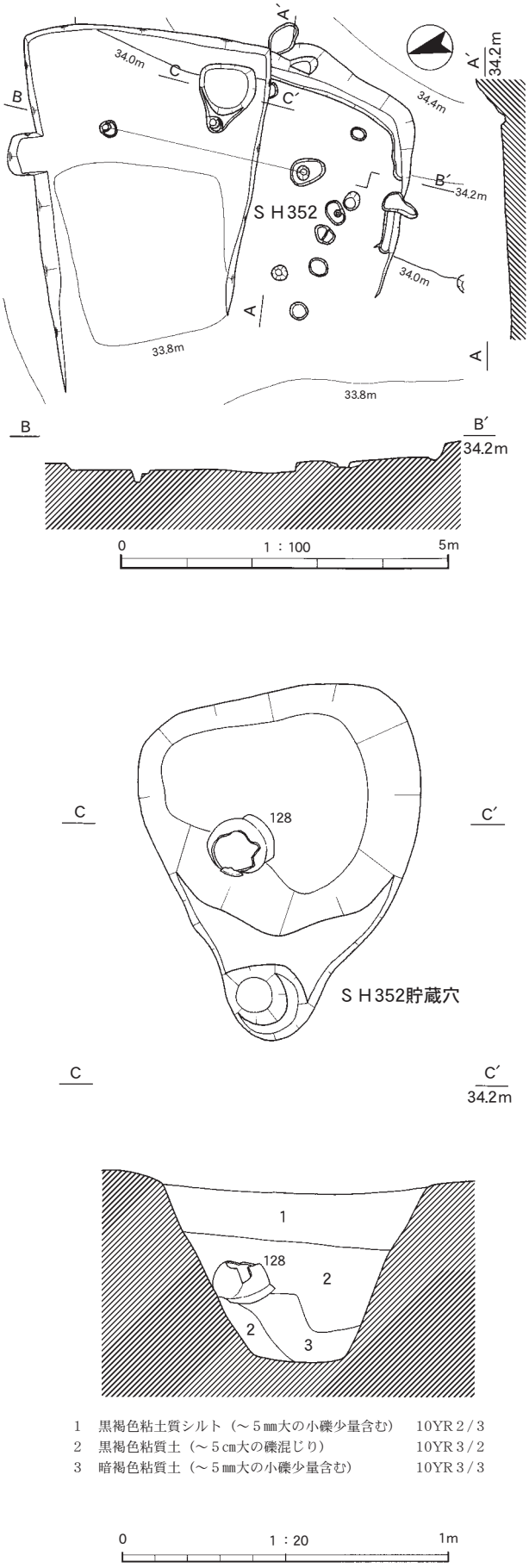
土坑ＳＫ330　調査区中央北部（Ｄ21付近）で検出した土坑である。南北約2.0m、東西約1.9mの不整形な円形を呈するが、深さは0.1mと浅い。

出土遺物は、少量であるが、壺・甕・高杯がある。時期は後期と考えられる。

3　古墳

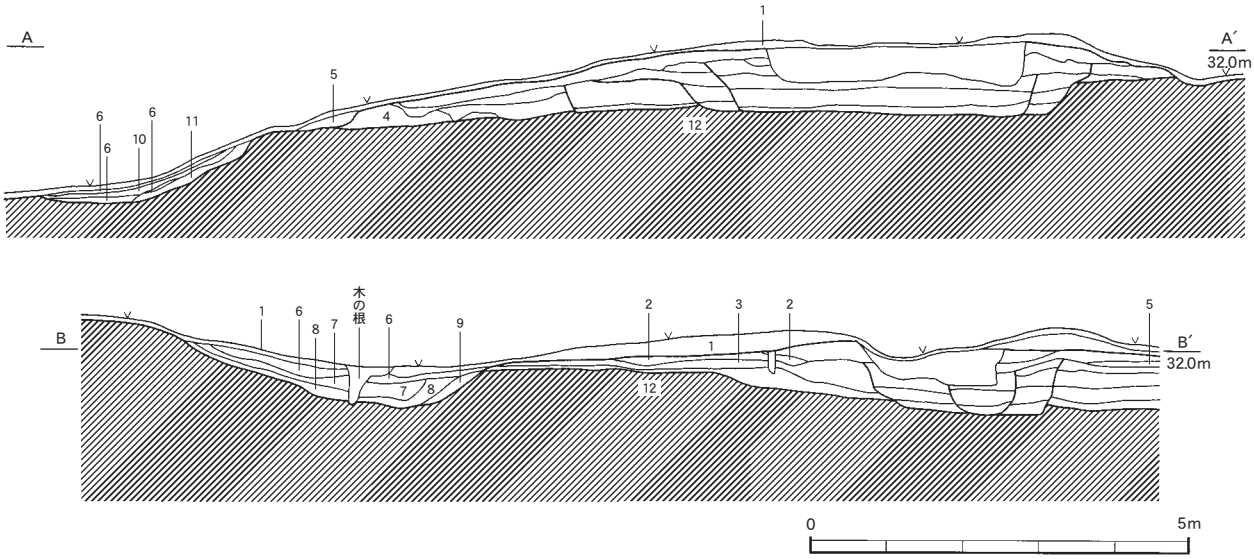
今回の調査で、古墳は、計７基確認された。５世紀後半の１号墳、５世紀末～６世紀前葉の11号墳（ＳＸ328）、７世紀代の12号墳（ＳＸ11）・13号墳（ＳＸ37）・14号墳（ＳＸ39）・15号墳（ＳＸ316）・16号墳（ＳＸ329）がある。また、ＳＸ30・ＳＸ31・ＳＸ38 ・ＳＸ318も７世紀代の古墳に関連する遺構の可能性がある。以下、順に記述する。

天王山１号墳（第25図）　天王山１号墳は、『松阪市史』第二巻資料編考古（1978年）に紹介されている周知の古墳である。この古墳は、調査区北西部



第24図　ＳＨ352実測図（１：100／１：20）

第25図　天王山１号墳実測図（１：100）



1	暗褐色粘質土（～２㎝大の小礫含む）	10ＹＲ３/３（表土）	7	暗褐色粘質土（～５㎝大の礫含む）	10ＹＲ３/３（周溝埋土）
2	褐色粘質土（～２㎝大の小礫含む）	7.5ＹＲ４/３（盛土）	8	黒褐色砂混じり粘質土	10ＹＲ２/３（周溝埋土）
3	黄褐色粘質土	10ＹＲ５/６（盛土）	9	黒褐色粘質土	10ＹＲ３/２（周溝埋土）
4	黒褐色粘質土	10ＹＲ２/２（盛土）	10	暗褐色粘質土	10ＹＲ３/４（周溝埋土）
5	暗褐色粘質土	10ＹＲ３/３（盛土）	11	黒褐色粘質土	10ＹＲ２/３（周溝埋土）
6	褐色粘質土（～２㎝大の小礫含む）	10ＹＲ４/４（周溝埋土）	12	明褐色粘質土	7.5ＹＲ５/６（地山）

第26図　天王山１号墳土層断面図（１：100）

（Ｄ29付近）、丘陵尾根の最北端に位置している。調査前から、周溝と僅かな墳丘の高まりが認められた。その規模は径約19m、高さ約１mの円墳と推定されていた。墳頂部には径2.0～2.5m、深さ0.3m程の楕円形の盗掘坑があけられていた。また、墳丘の北側は既に削り取られて崖状になっていた。

調査の結果、径約17.0mの墳丘規模をもつ円墳であることが判明した。また、丘陵尾根を切断するように周溝が深く掘られており、墳丘の大部分はこれによって形成されている。地山の上には厚さ0.8m程の盛土が認められる。

周溝は、前記したように南側の丘陵尾根を深く掘り込んでおり、最大で幅約4.6m、深さ約1.5mである。尾根先端斜面にあたる墳丘北側まで、周溝は巡っていないと考えられる。

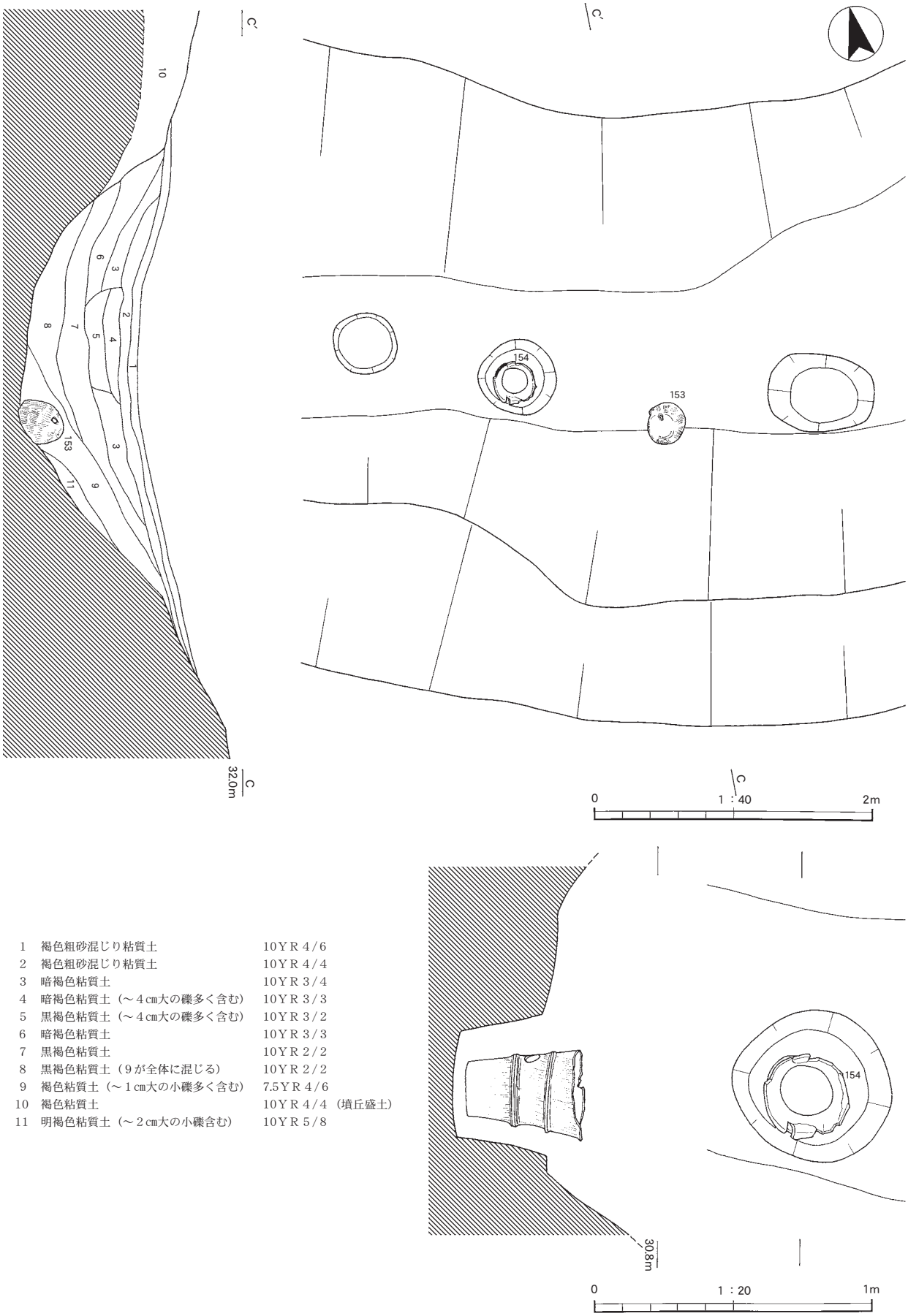
埋葬施設は墳丘中央から１基確認できた。ただし、検出にあたっては、遺構のラインが極めて見辛く困難を重ねた。そのため、土層断面の観察では盛土の第２層目から切り込んでいることが確認できたが、平面では墳丘上から約0.6～0.7m掘り下げるまで確認できなかった。

埋葬施設は、北東・南西方向に主軸をもつ木棺直葬である。検出した墓壙は、長軸約5.0m、短軸約2.2mの規模である。歪な形であるが、やや角張る四隅をもつため、本来は長方形を意識して掘られたと考えられる。墓壙の南西隅には、溝状の遺構が付いていたが、その機能は不明である。墓壙の中央には、木棺を安置した痕跡が認められる。長軸約3.8m、短軸約0.8mであり、断面が丸みをもつことから割竹形木棺が安置されていたと考えられる。なお、墓壙は、盛土の第２層目から切り込んでいるため、古墳の被葬者を埋葬した後、さらに墳丘に盛土したものと考えられる。

墳丘および周溝出土遺物には埴輪・土師器片口鉢・須恵器甕などがある。

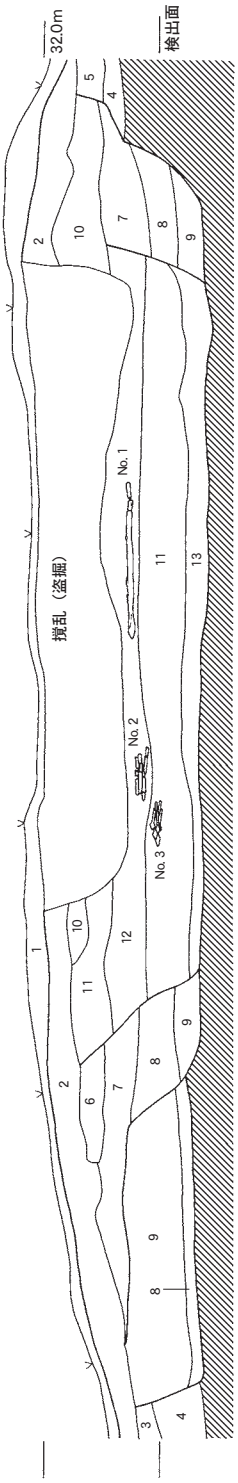
南側の深い周溝内には、ピット状の遺構があり、そこから円筒埴輪（154）が出土した。また、その東隣の周溝底からは片口鉢（153）が出土した。その他の埴輪は、南側周溝や墳丘南側斜面を中心に出土している。墳丘斜面から出土していることから察すると、墳丘に埴輪が配置されていた可能性もある。また、須恵器は東側周溝から散在して出土しており、なかでも甕の体部片が多い。しかし、須恵器は、この古墳の時期に比べ新しい時期のものが含まれており、すべてが１号墳に伴うとするには難しい。

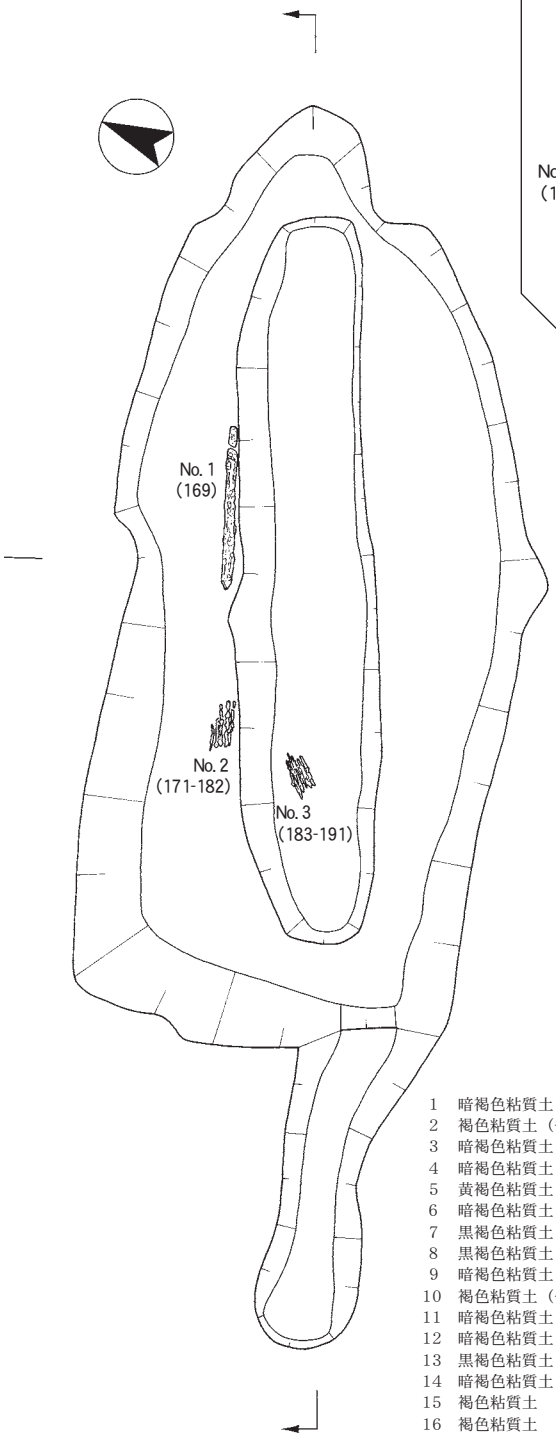
埋葬施設出土遺物には、蛇行剣（第28図のNo.１）・鉄鏃（No.２とNo.３の２束）があり、いずれも棺外遺物である。このうち、蛇行剣と鉄鏃のNo.２の束

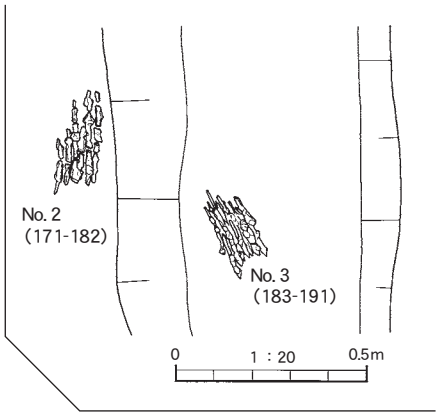


1	褐色粗砂混じり粘質土	10ＹＲ４/６
2	褐色粗砂混じり粘質土	10ＹＲ４/４
3	暗褐色粘質土	10ＹＲ３/４
4	暗褐色粘質土（～４㎝大の礫多く含む）	10ＹＲ３/３
5	黒褐色粘質土（～４㎝大の礫多く含む）	10ＹＲ３/２
6	暗褐色粘質土	10ＹＲ３/３
7	黒褐色粘質土	10ＹＲ２/２
8	黒褐色粘質土（９が全体に混じる）	10ＹＲ２/２
9	褐色粘質土（～１㎝大の小礫多く含む）	7.5ＹＲ４/６
10	褐色粘質土	10ＹＲ４/４（墳丘盛土）
11	明褐色粘質土（～２㎝大の小礫含む）	10ＹＲ５/８

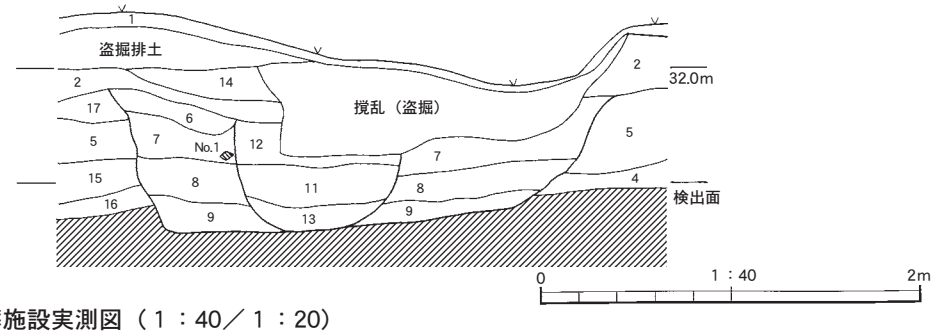
第27図　天王山１号墳南側周溝遺物出土状況図（１：40／１：20）







1	暗褐色粘質土（～２cm大の小礫含む）	10ＹＲ３/３（表土）
2	褐色粘質土（～１cm大の小礫多く含む）	7.5ＹＲ４/４（盛土）
3	暗褐色粘質土	10ＹＲ３/３（盛土）
4	暗褐色粘質土	10ＹＲ３/４（盛土）
5	黄褐色粘質土	10ＹＲ５/６（盛土）
6	暗褐色粘質土（～１cm大の小礫含む）	7.5ＹＲ３/４（墓壙）
7	黒褐色粘質土	10ＹＲ２/２（墓壙）
8	黒褐色粘質土	10ＹＲ２/３（墓壙）
9	暗褐色粘質土	7.5ＹＲ３/４（墓壙）
10	褐色粘質土（～２cm大の小礫含む）	7.5ＹＲ４/３（盛土）
11	暗褐色粘質土（～１cm大の小礫多く含む）	10ＹＲ３/４（棺内埋土）
12	暗褐色粘質土	10ＹＲ３/３（棺内埋土）
13	黒褐色粘質土	10ＹＲ２/２（棺内埋土）
14	暗褐色粘質土（～５cm大の礫含む）	10ＹＲ３/３（盛土）
15	褐色粘質土	7.5ＹＲ４/４（盛土）
16	褐色粘質土	7.5ＹＲ４/３（盛土）
17	暗褐色粘質土	7.5ＹＲ３/４（盛土）



第28図　天王山１号墳埋葬施設実測図（１：40／１：20）

は、棺北面に沿うかたちで棺外に置かれていた。蛇行剣は、中央東寄りに置かれ、剣先を南西方向に向けている。鉄鏃は、12本が束になっており、中央からやや西に離れた位置に置かれ、刃先を交互に違えていた。

鉄鏃のNo.３の束は、平面上、棺内西側に位置しているが、これは、棺底から約20㎝浮いているため、棺上に置かれていたと考えられる。９本が束になっており、その刃先は、いずれも南西方向を向いている。また、盗掘坑の排土からは、鉄剣片(170)が出土している。盗掘坑は、埋葬施設東部、中央から南側を中心に深く及んでおり、その反対側の蛇行剣が出土した位置にはほとんど及んでいない。このことから、この鉄剣は、蛇行剣とは反対側の棺南面に沿う棺外もしくは棺上に置かれていたと推測される。なお、玉類などは確認されなかった。

被葬者の埋葬状況を遺構から判断するのは困難であるが、このような蛇行剣や鉄鏃の位置、また蛇行剣の剣先の方向から、被葬者は北東を枕にして安置されていたと考えられる。そして、棺外北面にそって上半部付近には蛇行剣、下半部付近にはNo.２の鉄鏃の束が置かれ、足元の棺上にはNo.３の鉄鏃の束が置かれていたと考えられる。また、上半部の棺上もしくは棺外南には鉄剣が置かれていたと推測される。

時期は、埋葬施設出土の鉄鏃や、周溝出土の円筒埴輪から５世紀中葉～後葉頃と考えられる。

天王山11号墳（第29図）　調査区中央部北寄り（Ｅ19付近）、丘陵東側斜面の標高29.0m～31.0m付近で検出した。11号墳は、後述する15号墳の下層にあたる。盛土・埋葬施設などは既に削平され、確認できなかった。しかし、円形にめぐる周溝が部分的に斜面を切り込んでいた。当古墳群で確認されている古墳の周溝は、通常、背後にあたる斜面を深く掘っている。しかし、11号墳はこれとは異なる反対側の前面に周溝が残る。部分的に残る周溝をつなぐと、径約9.5mの規模に復元できる。周溝は、残りの良い東側で幅約1.6m、深さ約0.5mである。

出土遺物は、図示できるものや時期のわかるものは確認できなかった。時期は、弥生後期のＳＨ368を切り、７世紀後葉頃の15号墳の下層にあたるため弥生後期以降・７世紀後葉以前の枠内に収まる。そして、11号墳の上層にあたる15号墳からは、この古墳の時期とは大きく異なる５世紀末～６世紀前葉にかけての須恵器杯（266～271）がまとまって出土している。この出土地点は、15号墳墳丘上の北西隅にあたり、平面上、11号墳の中央にあたる。15号墳は11号墳を壊して造っていることから、前記の須恵器は、本報告では15号墳出土遺物として扱っているが、本来、11号墳に伴っていた可能性が極めて高いと考えられる。

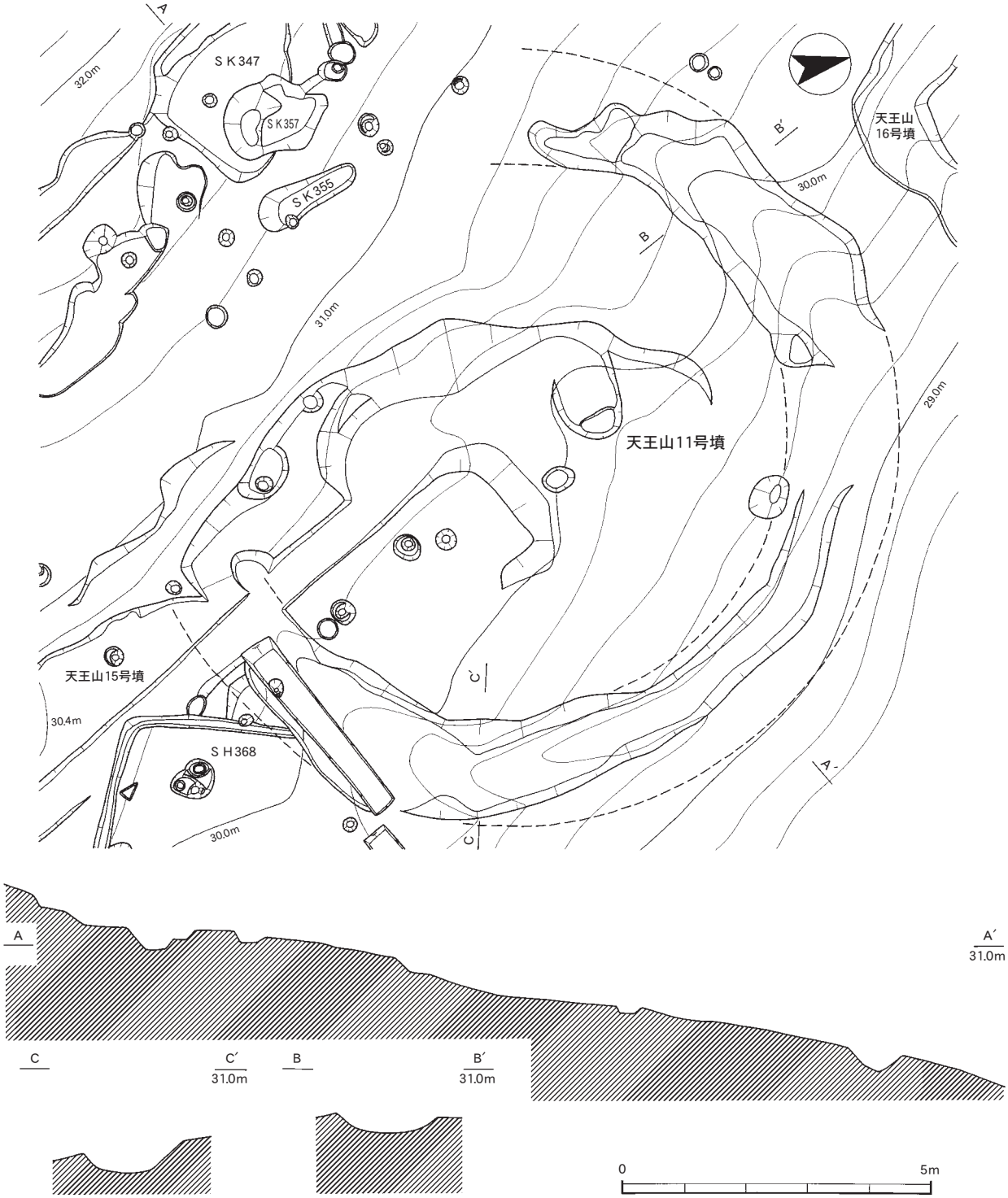
天王山12号墳（第34図）　調査区東部（Ｅ６付近）、丘陵東側斜面が裾に向かい緩やかに傾斜している標高22.2m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる西側の周溝は確認できたが、東側へと続く周溝および盛土・埋葬施設などは既に流失し不明である。また、東側はＳＨ12・ＳＤ５と重複している。墳形は、方墳と考えられ、南北約7.0mの規模である。周溝は、西側中央付近で幅約2.6m、深さ約0.7mである。また、周溝の外縁はやや丸みをもつように掘られている。

出土遺物は、弥生時代後期のものと７世紀後葉～８世紀前葉頃ものとの大きく２時期にわたるものがある。いずれも周溝内より散在して出土している。

丘陵東側斜面には７世紀代の古墳が数多く築造されていることから、後者の遺物の時期に近いものと考えられる。

天王山13号墳（第30図）　調査区中央南部（Ｌ14付近）、丘陵東側斜面の標高28.0～31.0m付近で検出した。ＳＨ41・ＳＢ52・ＳＢ55・ＳＸ38と重複し、ＳＢ52・ＳＢ55に切られる。斜面を深く切り込んでいる西側および北側の周溝は確認できたが、東側へ続く周溝および盛土・埋葬施設などは既に流失し不明である。また、南側は調査区外である。墳形は、周溝外縁など若干丸みをもつものの、周溝内縁は直線的な辺をもつため方墳と推測される。南北11.0m以上の規模であり、周溝は、西側中央付近で幅1.8m、深さ約0.9mである。

出土遺物には、須恵器杯、土師器杯・甕、弥生土器などがあり、周溝内より散在して出土している。弥生土器はＳＨ41からの混入と考えられる。その他の遺物も多くの遺構が重複しており、さらに甕や竈など日常的な遺物が多く含まれるため、そのすべて



第29図　天王山11号墳実測図（１：100）

の遺物が13号墳に伴うとは言い難い。ただ、須恵器杯Hは、当該遺跡において、古墳からしか出土していないため13号墳に伴う可能性が高いと考えられる。時期は７世紀中葉頃と考えられる。

天王山14号墳（第32図）　調査区中央東寄り（Ｉ14付近）、丘陵東側斜面の中腹にあたる標高28.0～30.0m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる西側と南側の周溝が確認できた。周溝西側はＳＢ56と重複し、それに切られる。墳形は、やや丸みをもつが、部分的に残る周溝をつなぎ復元すると、直線的にのびる辺をもつ方墳となる。南北約11.2mの規模（周溝を除く）である。周溝は、西側中央付近で幅1.3m、深さ約0.5mである。

出土遺物には、須恵器杯、土師器杯・甕・甑など

があり、これらはいずれも周溝内より散在して出土した。日常的な遺物を含むため、これらの遺物がすべて14号墳に伴うとは言い難い。だが、須恵器杯Hは、当該遺跡において古墳からしか出土していないため、この古墳に伴う可能性が高い。時期は、７世紀中葉～後葉頃と考えられる。

天王山14号墳土坑（第33図）　14号墳内にある土坑である。その位置が14号墳の中央付近に位置するため14号墳に伴う可能性が高い。埋葬施設のひとつであったものと推測される。南北約1.7mであり、円形に近い平面形態である。

出土遺物には、須恵器杯・土師器甕などがあり、時期は７世紀中葉～後葉頃と考えられる。

天王山15号墳（第35図）　調査区中央部北寄り（Ｆ17付近）、丘陵東側斜面の標高29.0m～31.0m付近に位置する。調査前から周溝と長方形を呈する高まりが認められた。

調査の結果、南北12.6m、東西8.6m、高さ約1.0mの規模をもち、南北にやや長い方墳であることが判った。南東部はＳＨ322・ＳＨ323に切られている。墳丘の背後にあたる西側の斜面をカットするように周溝を掘り、その東側に墳丘がつくられている。墳丘下には特に整地した痕跡は認められなかった。

埋葬施設の調査は、盛土の大部分が暗褐色および黒褐色の土色であり、遺構確定には困難を重ねた。土層断面では盛土の第１層目の下から切り込んでいることが確認できたものの、平面では墳丘上から約40～50㎝掘り下げるまで確認できなかった。

墳丘西側より墓壙と考えられる遺構、中央付近より溝状の遺構をそれぞれ確認した。墓壙は、やや丸みをもつものの長方形に近い平面形態である。南東・北西を長軸とし、長軸2.5m以上、短軸約1.5mの規模である。また、墓壙中央には、長軸約2.0m、短軸約0.9mの落ち込みが認められ、ここに棺が安置されていたと考えられる。この落ち込み北側からは、床から約20㎝浮いた状態で須恵器杯蓋（杯Ｇ）がセットで出土した。なお、溝状の遺構は長さ約８mであり、幅ともに埋葬施設とは言い難い。

墳丘および周溝出土遺物には、６世紀前葉頃と７世紀代の遺物がある。このうち、６世紀前葉頃のものは、前記したように11号墳に伴う可能性が高い。この他の遺物は、周溝上層や墳丘表土およびその直下から出土している。いずれの出土状況も散在してまとまりがない。また、なかには盛土内から出土したものもあるが、小片が多い。このため、大部分の遺物は15号墳に伴うとするには疑わしい。古墳築造時に混入したものや、後に続く竪穴住居の形成時のものが多く含まれると考えられる。

埋葬施設出土遺物には、先述した須恵器杯Ｇのセットがある。時期は７世紀後葉頃と考えられる。

天王山16号墳（第31図）　調査区中央北部（Ｃ21付近）、丘陵東側斜面の標高29.0～30.0m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる周溝西側のみ確認できた。また、北側は調査区外である。方墳と考えられ、周溝を除いて南北約6.5mの規模である。周溝は、西側中央付近で幅1.2～1.7m、深さ約0.3mである。時期は、遺物が確認できなかったため決め難い。古墳の墳形や立地から７世紀代と考えた。

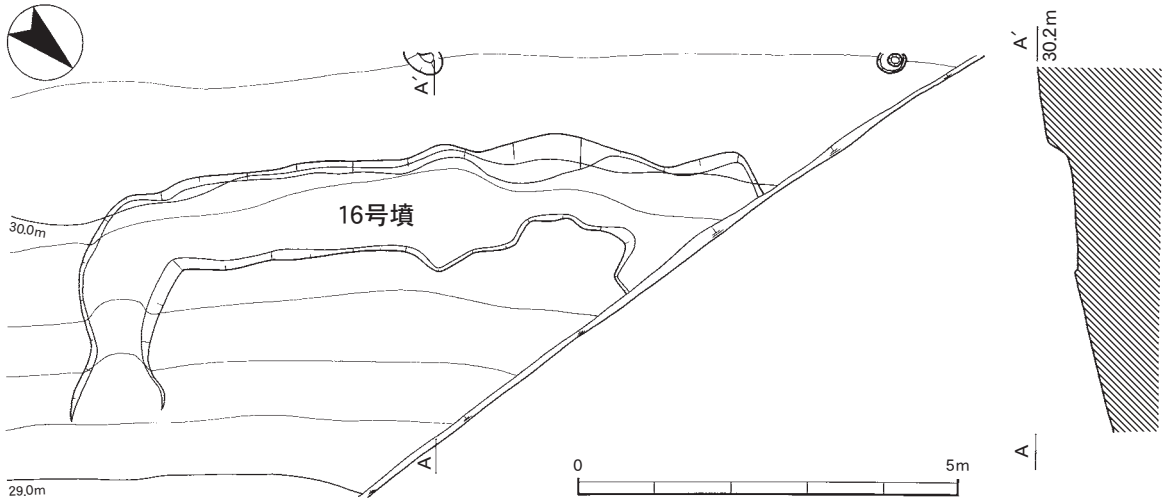
ＳＸ30　調査区東部（Ｊ10付近）、丘陵東側斜面が裾に向かい緩やかな傾斜に変わる標高26.6m付近に位置する。ＳＢ49・ＳＢ50・ＳＫ33と重複している。斜面を深く切り込んだ溝がＬ字状にめぐっている。南北約8.5mの規模をもち、溝は西側中央付近で幅1.8m、深さ0.2m程である。また、不明確であるが、北側の先端部分が若干東に折れているようにみえ、これが確かだとすると、ＳＸ30は方形に溝がめぐる古墳であった可能性がある。

出土遺物には７世紀後葉頃の須恵器杯がある。ただし、ＳＸ30は多くの遺構が重複しており、これがＳＸ30に伴うとは言い難い。ＳＢ49・ＳＢ50に切られていることから、これより新しくなることはあるまい。古墳の墳形や立地から７世紀代と考えられる。

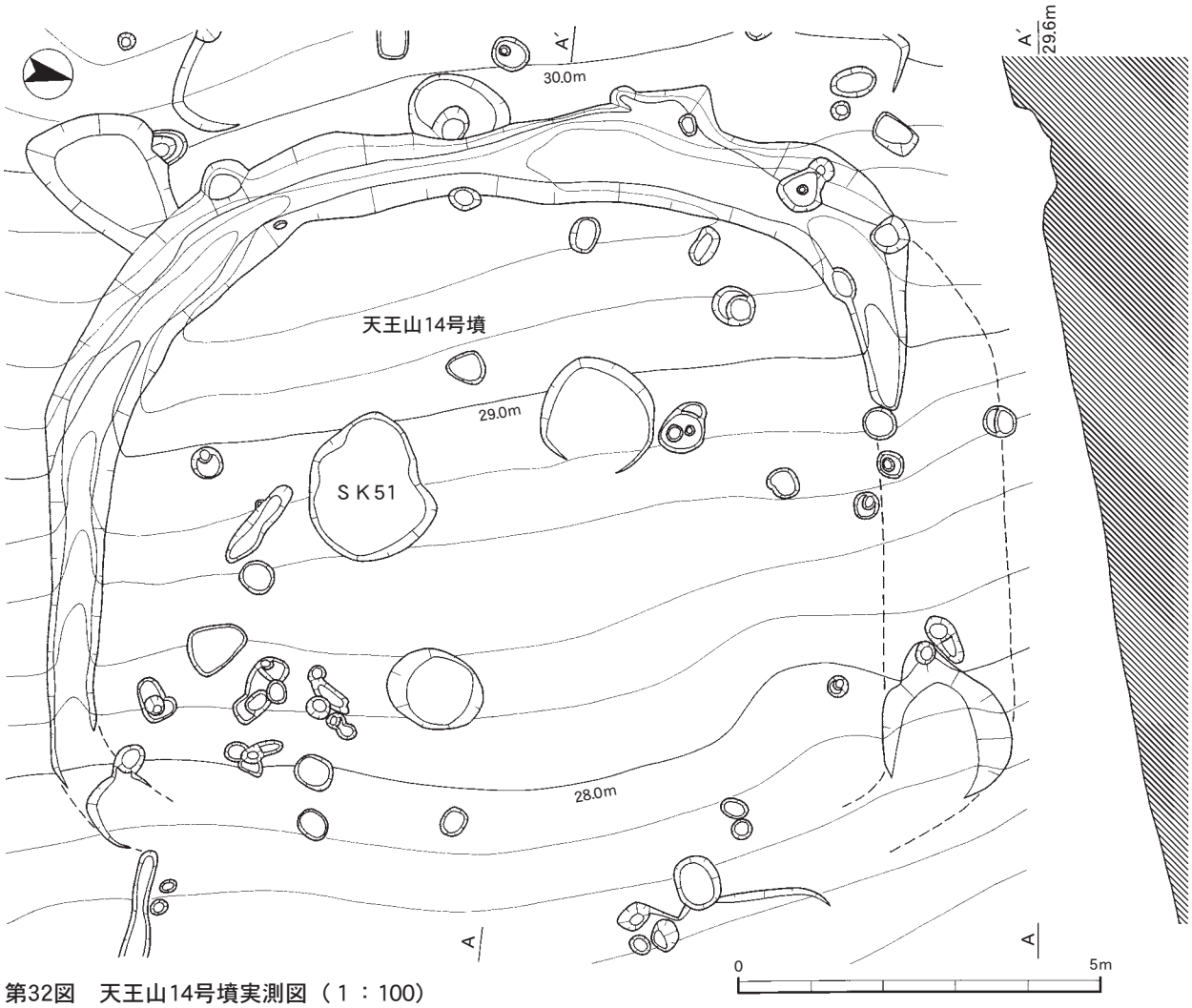
ＳＸ31　調査区東部（Ｊ11付近）、前記のＳＸ30の西上方に位置する。斜面を深く切り込んだＬ字状の溝が確認できた。規模は南北6.3m以上であり、中央付近で、幅約1.0m、深さ0.6mである。

ＳＸ30と同様にＬ字状の溝であることから古墳の可能性があるものとしてこの節で取り扱ったが、残りが極めて悪い上に、溝の幅は狭く古墳とするには難しい。ＳＨ26・ＳＨ27・ＳＢ49・ＳＢ50の西側を取り囲むようにめぐっていることから、７世紀後葉頃のこれらの竪穴住居などを囲む溝である可能性

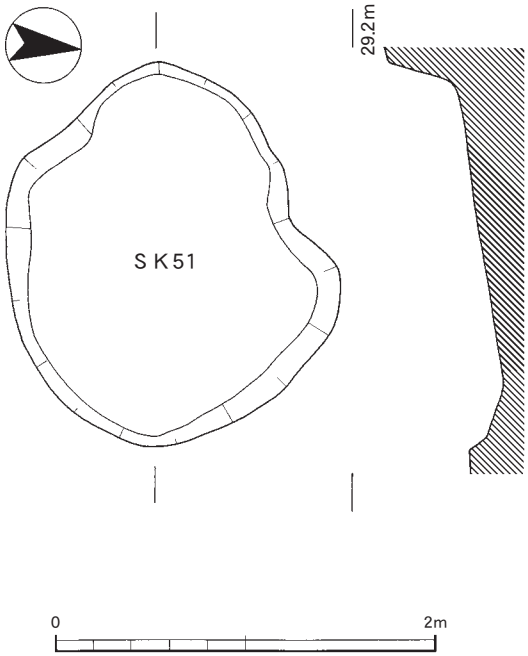
第30図　天王山13号墳・ＳＸ38実測図（１：100）



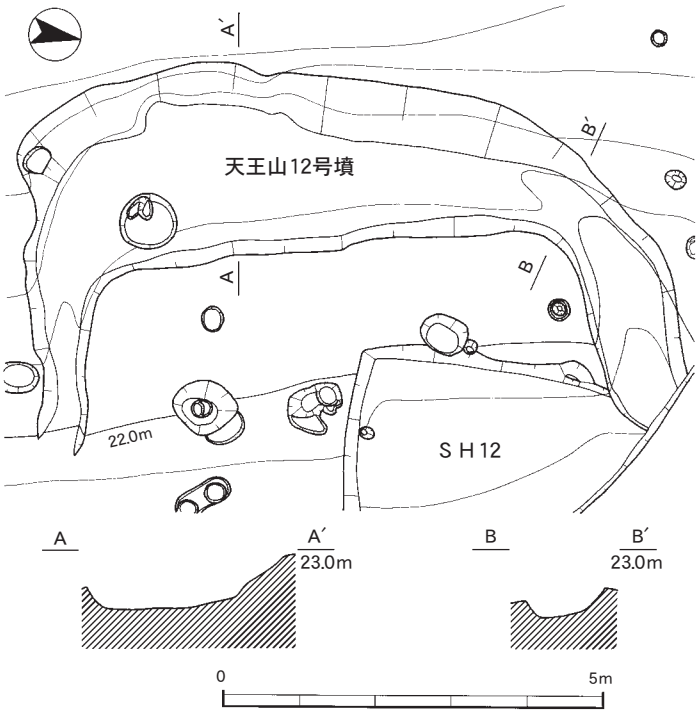
第31図　天王山16号墳実測図（１：100）



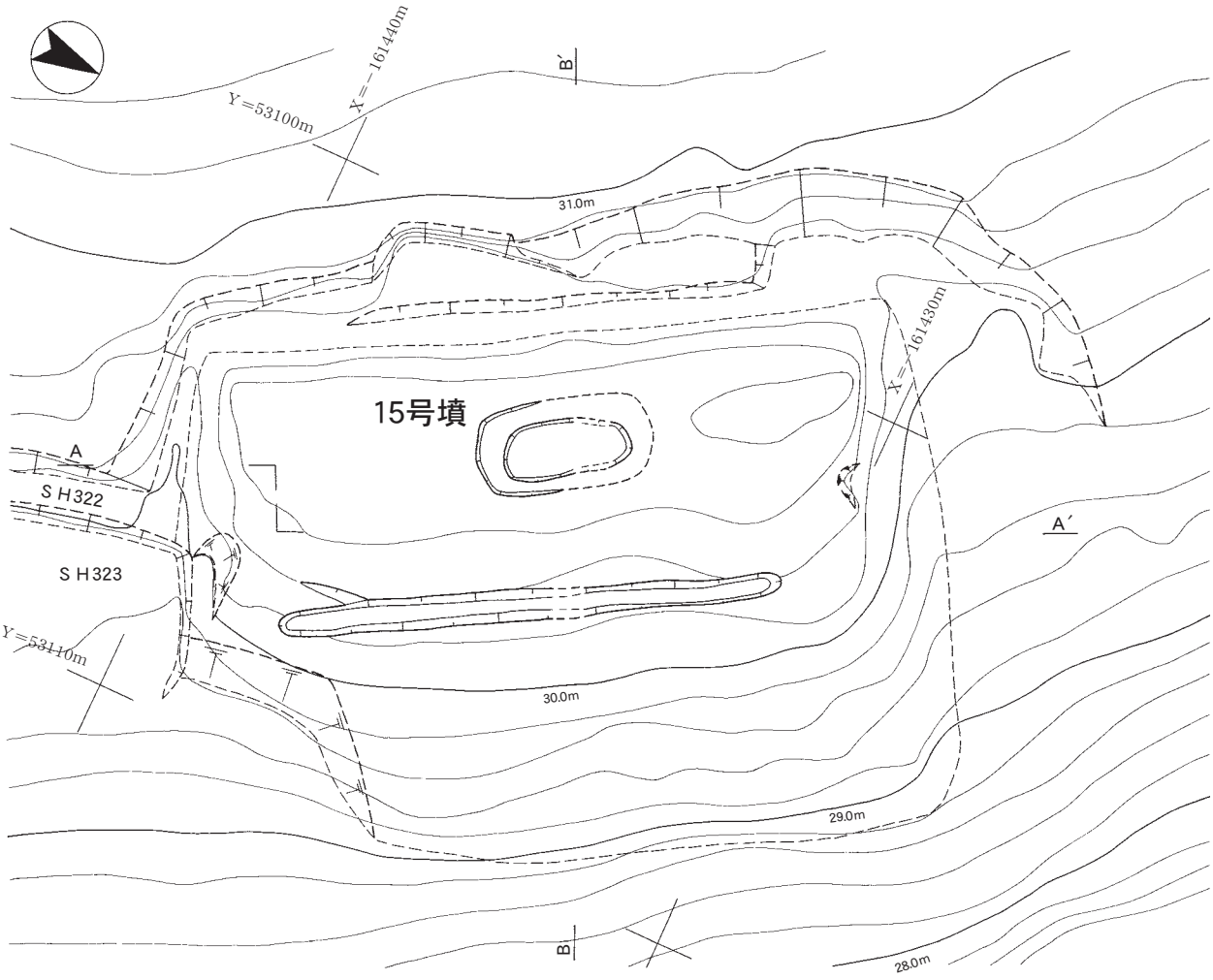
第32図　天王山14号墳実測図（１：100）

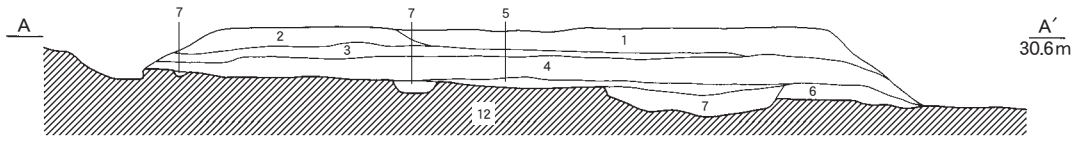


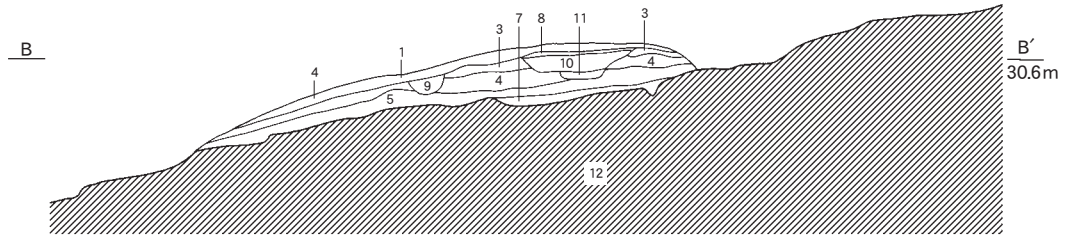
第33図　ＳＫ51実測図（１：40）

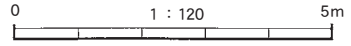


第34図　天王山12号墳実測図（１：100）

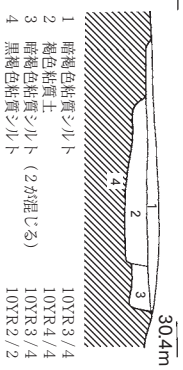


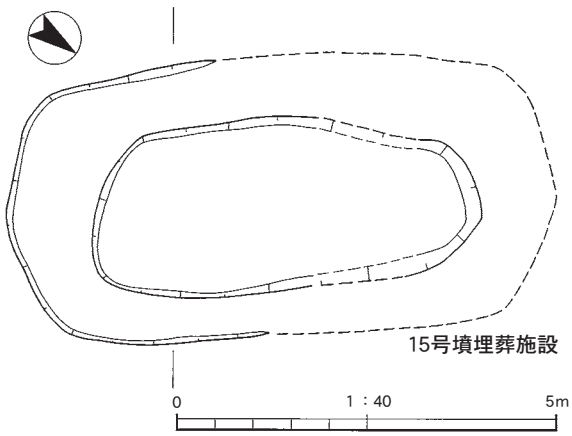






1	黒色粗砂混じり粘質土	10YR2/1（盛土）
2	黄褐色粗砂混じり粘質土	10YR5/8（盛土）
3	暗褐色粗砂混じり粘質土	10YR3/4（盛土）
4	黒褐色粘質土（～1㎝大の小礫含む）	10YR2/3（盛土）
5	黒褐色粘質土	10YR2/2（盛土）
6	にぶい黄褐色・黒褐色混じる粘質土	10YR4/3・10YR2/2
7	黒褐色粘質土	10YR2/3（SH368・11号墳埋土）
8	暗褐色粘質土	10YR3/4（墓壙）
9	黄褐色粘質土（～1㎝大の小礫含む）	10YR5/6（溝状遺構）
10	褐色粗砂混じり粘質土（3㎝大の礫多く含む）	10YR4/4（墓壙）
11	黒色と褐色混じる粘質土	10YR2/1・10YR4/4（墓壙）
12	明褐色粘質土	7.5YR5/6（地山）





第35図　天王山15号墳実測図（1：120／1：40）

も残す。溝内から多くの遺物が出土した。７世紀後葉から８世紀前葉にかけてのものである。土師器甑や甕など日常的な遺物が多く含まれている。

ＳＸ38（第30図）　調査区中央南部（Ｌ13付近）に位置している。南北11.0m以上の溝がやや弧を描きながらめぐっている。溝は、中央付近で幅1.4m、深さ約0.5mである。13号墳・ＳＢ52・ＳＢ55と重複している。やや弧状にめぐる溝の形状から古墳の周溝の可能性がある。大部分が13号墳と重複しており、これより古いことから察すると、13号墳と同一古墳であり、つくりかえによりＳＸ38から13号墳へと推移した可能性がある。

出土遺物には、７・８世紀代の土師器甕がある。しかし、ＳＢ52・ＳＢ55など多くの遺構が重複しているため、これらの遺物のすべてがＳＸ38に伴うとは言い難い。

ＳＸ318　調査区南部(Ｍ16付近)、丘陵尾根上からやや東に下った標高32.0m付近の緩やかな斜面で検出した。調査前から僅かな高まりが認められ、黒褐色粘質土層が厚く堆積していた。古墳の可能性があったため、十字のアゼを残し、掘り下げたが、古墳の盛土のラインと判断できるものはなく、後述するように多くの土器類が含まれていた。そのため、古墳の可能性は低いと考え、さらに掘削を開始した。すると、ＳＨ305・ＳＢ57に切られるやや弧状を呈する溝が検出された。この溝は残りが極めて悪いが、その形状から察すると、古墳の周溝の可能性がある。

これを古墳とすると、先述した黒褐色粘質土層は、本来古墳の盛土であったけど、ＳＨ305・ＳＢ57の築造により原形を失っていると推測される。

黒褐色粘質土層からは、須恵器・土師器・弥生土器など多くの遺物が出土している。７世紀後葉から８世紀前葉頃にかけてのものが多く、その大部分は、本来、ＳＨ305・ＳＢ57に伴っていたと考えられる。時期は、ＳＨ305･ＳＢ57より古い７世紀代であろう。

４　飛鳥・奈良時代の遺構

今回の調査で、飛鳥・奈良時代の遺構と判明したものは、竪穴住居19棟、掘立柱建物12棟、柱列２棟、土坑29基がある。土坑１基（ＳＫ313）を除いて、いずれも丘陵東側斜面に位置している。

(1) 竪穴住居

飛鳥・奈良時代の竪穴住居の立地は、大きく３箇所にわたるまとまりがある。ここでは、丘陵東側斜面下部、丘陵東側斜面中部、丘陵東側斜面上部といったように大きく地形を３箇所に分類し、そのまとまりごとに竪穴住居の様相を記述していく。

①丘陵東側斜面下部の竪穴住居

丘陵東側斜面において、標高27.0m付近から丘陵裾に向かい緩やかな傾斜に変わる。この緩やかな斜面には、ＳＨ８・ＳＨ12・ＳＨ18・ＳＨ23・ＳＨ25・ＳＨ26・ＳＨ27など7棟の竪穴住居がある。

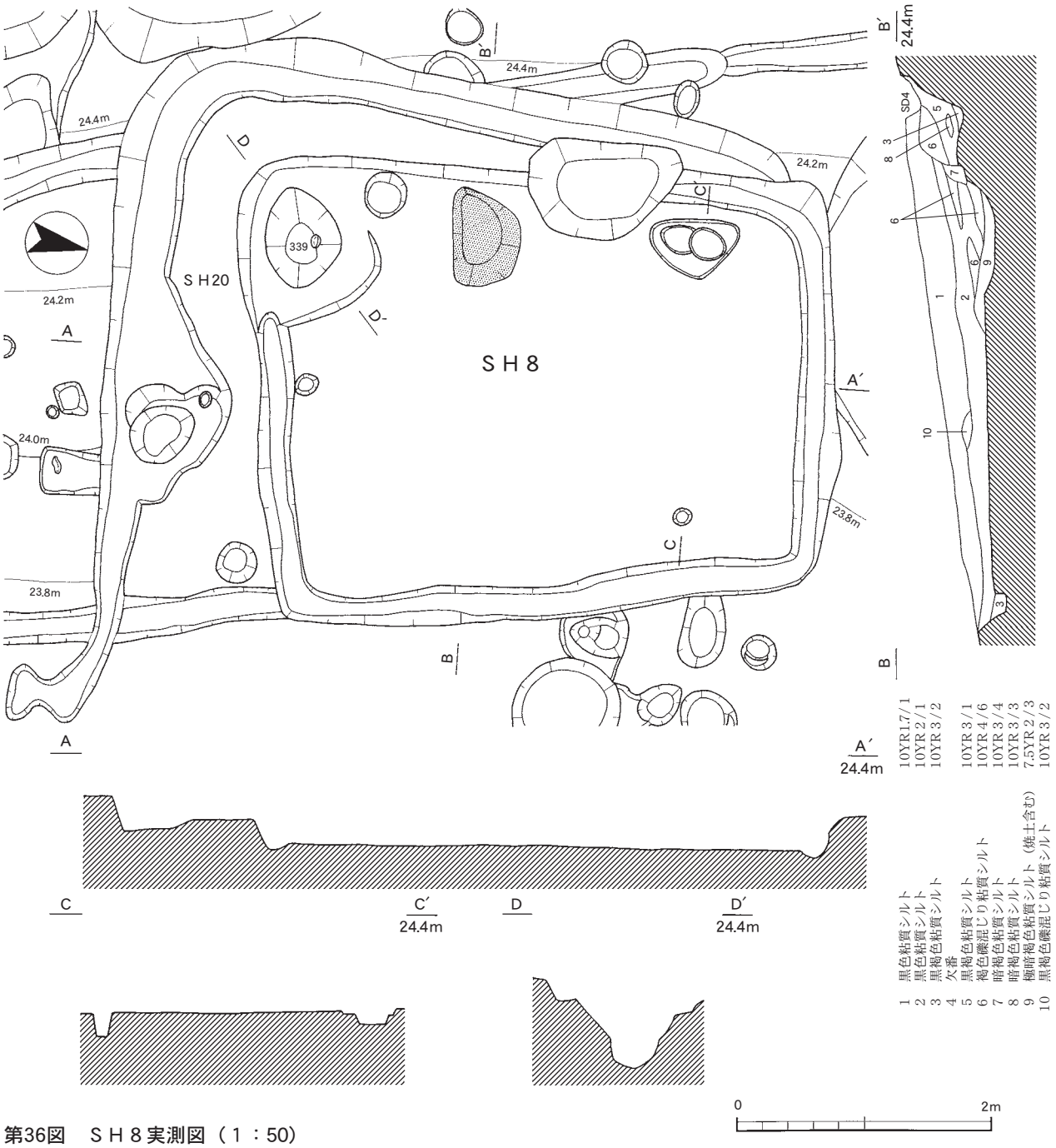
竪穴住居ＳＨ８（第36図）　調査区東部（Ｈ７付近）、標高24.0m付近で検出した。竪穴住居のなかでは最も残りが良い。斜面を深く切り込んでつくられており、ＳＨ20の大部分を切っている。南北に長い長方形の平面形態で、規模は南北約4.7m、東西約3.7mである。住居内の床の壁際には、南西部を除いて幅約18～28㎝、深さ約６㎝の壁周溝がめぐる。主柱穴は２箇所確認した。住居内北側、東西に並ぶのがそれであり、残りの良い東側のものは径約15㎝、深さ約20㎝である。南西隅には径約1.0m、深さ0.5mの貯蔵穴が認められる。また、住居内西辺の中央には焼土がある。これは、その位置からカマドの痕跡と推測される。

出土遺物には、須恵器杯、土師器杯・甕・甑などがあり、土師器が多い。また、貯蔵穴から土師器杯が出土した。時期は７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

竪穴住居ＳＨ12　調査区東部（Ｄ5付近）、標高22.0m付近で検出した。北西部は12号墳、東部はＳＤ5と重複している。壁周溝・主柱穴などは確認できなかったが、方形の平面形態であるため竪穴住居とした。南北3.2m以上の規模である。

出土遺物は須恵器杯、土師器杯・甕などがある。このうち、須恵器杯や暗文が施された土師器杯などは住居内中央付近で出土した。時期は７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

竪穴住居ＳＨ18（第37図）　調査区東部（Ｅ８付近）、標高23.8m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。平面形態は方形であり、規模は南北約3.8mで



第36図　ＳＨ８実測図（１：50）

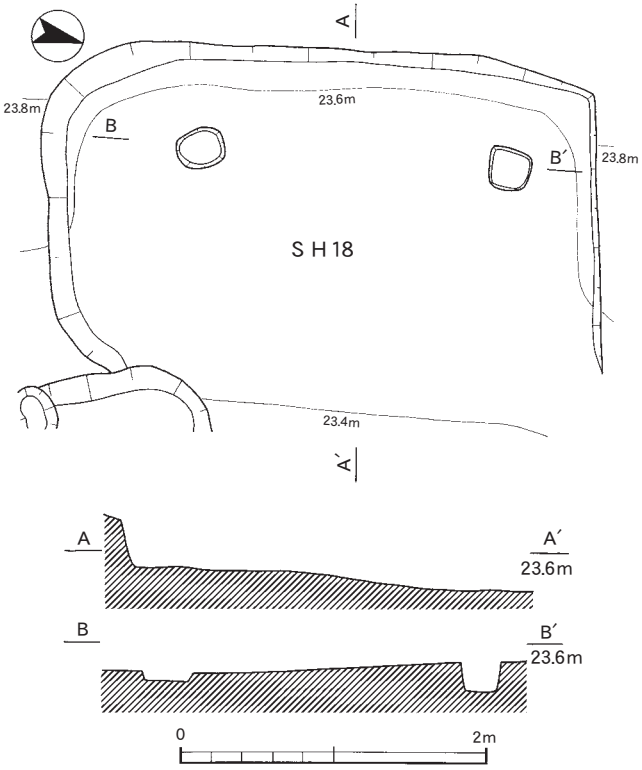
ある。主柱穴は住居内西側に２箇所確認した。径は25～30㎝、深さは北側もので20㎝である。壁周溝、貯蔵穴などは確認できなかった。

出土遺物は、須恵器高杯、土師器杯・甕などがあり、土師器が多い。時期は７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

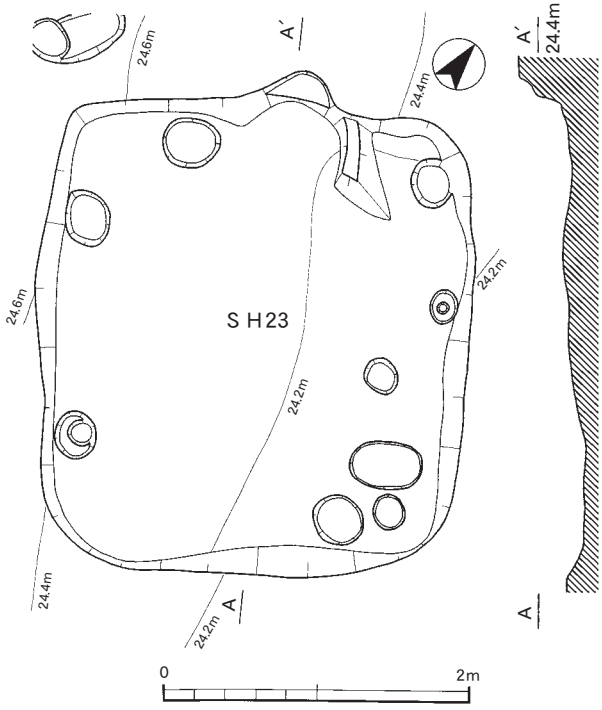
竪穴住居ＳＨ23（第38図）　調査区東部（Ｅ９付近）、標高24.2m付近で検出した。ＳＨ18・ＳＨ25が隣接する。斜面を深く切り込んでつくられており、比較的残りが良い。平面形態は正方形に近く、四隅はやや丸みをもつ。南北約3.2m、東西約2.9mの規模をもつ小型の住居である。主柱穴は、住居内四隅にそれらしいものがいくつか存在するが、いずれも並びが不規則でありはっきりしない。北壁中央付近にはカマドの一部が残る。壁周溝、貯蔵穴などは確認できなかった。

出土遺物には土師器甕がある。時期は７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

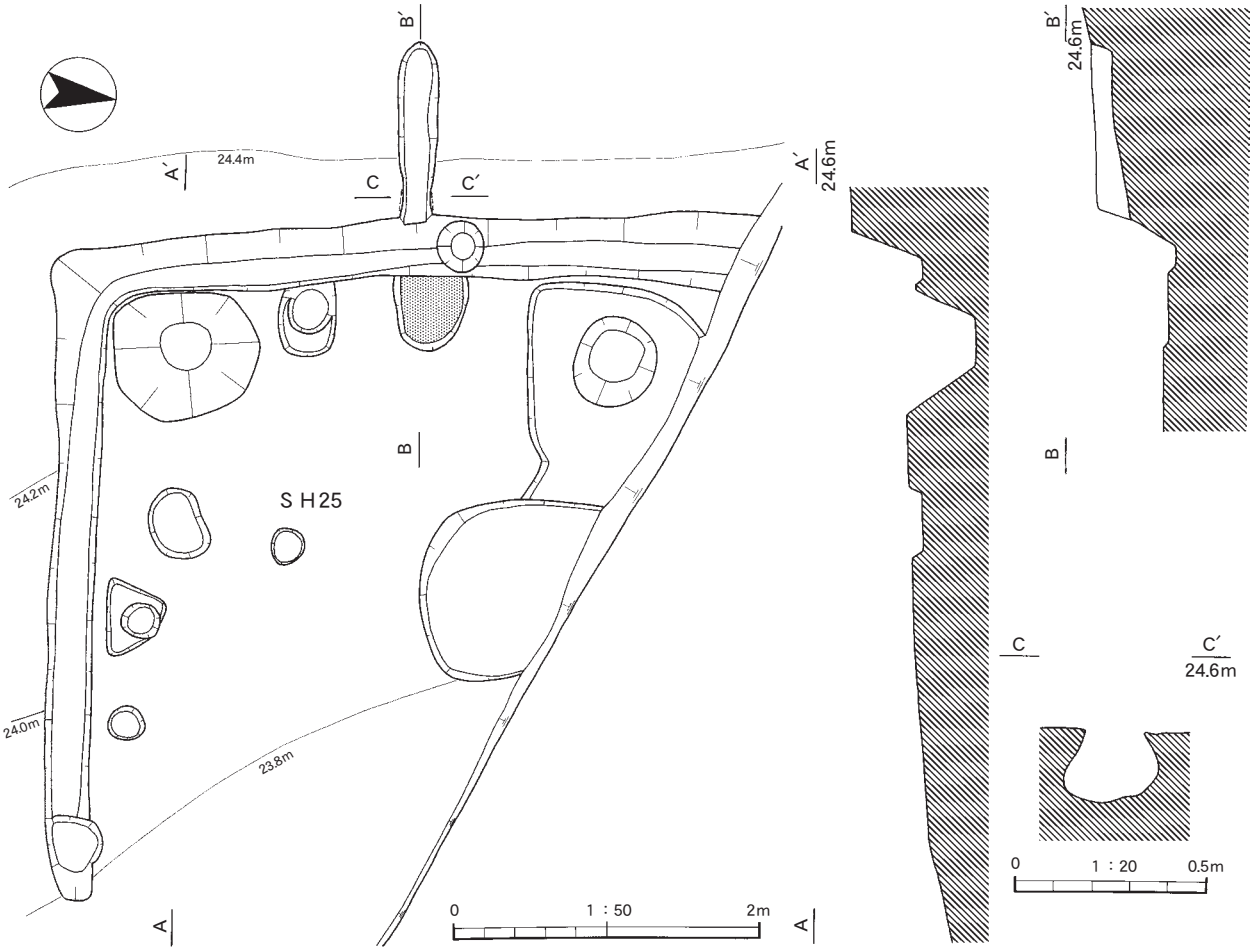
竪穴住居ＳＨ25（第39図）　調査区東北部（Ｄ10付近）、標高24.2m付近で検出した。斜面を深く切



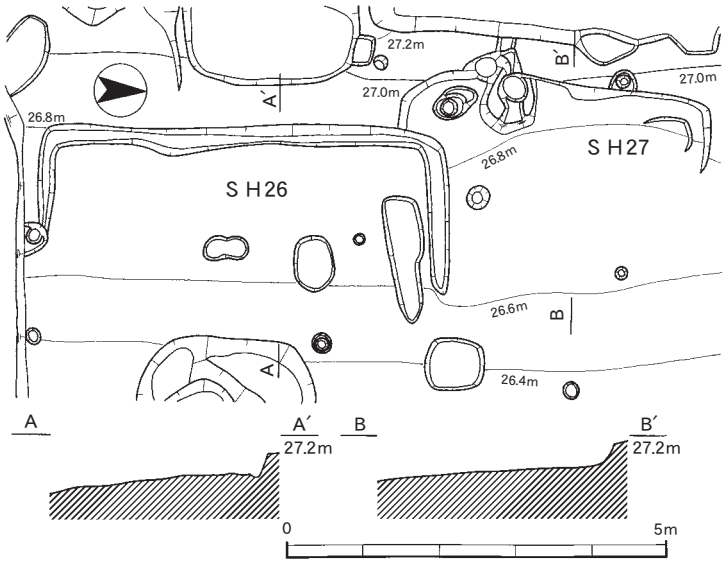
第37図　ＳＨ８実測図（１：50）



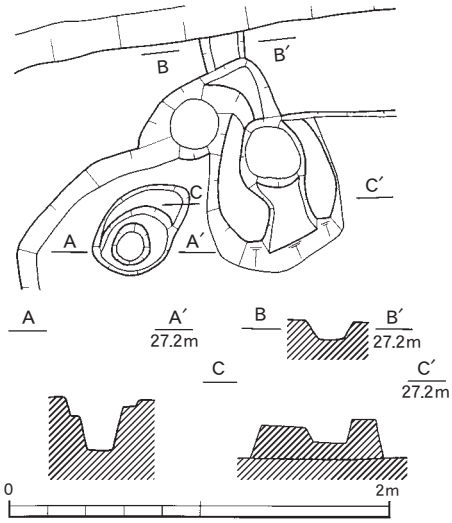
第38図　ＳＨ23実測図（１：50）



第39図　ＳＨ25実測図（１：50／１：20）



第40図　ＳＨ26・ＳＨ27実測図（１：100）



第41図　ＳＨ27カマド実測図（１：40）

り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。また北側は調査区外である。平面形態は方形であり、規模は南北4.5m以上である。西壁の中央付近から屋外へとのびる煙道が付く。この煙道には被熱した痕跡が認められ、煙道直下の床にもカマドの存在を推測する焼土が認められる。床の壁際には、幅約20㎝、深さ約10㎝の壁周溝がめぐる。また、南西隅には、南北約１ｍの貯蔵穴が認められる。主柱穴は確認できなかった。

出土遺物は、極めて少ないが、図示した須恵器高杯のほかに土師器甕などがある。時期は７世紀後葉頃と考えられる。

竪穴住居ＳＨ26（第40図）　調査区南東部（Ｌ10付近）、標高26.8m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。平面形態は方形であり、規模は南北約5.4mである。床の壁際には、幅20㎝前後、深さ約６㎝の壁周溝がめぐる。主柱穴、貯蔵穴などは確認できなかった。

出土遺物には、須恵器杯、土師器杯・甕などがある。時期は７世紀後葉頃と考えられる。

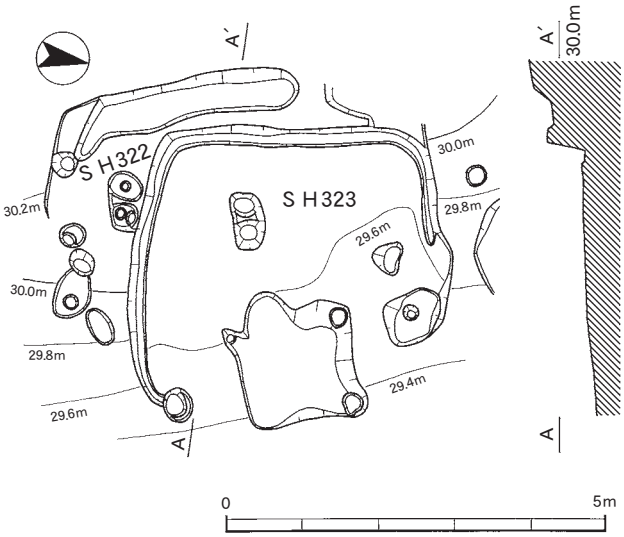
竪穴住居ＳＨ27（第40図）　調査区南東部（Ｋ10付近）、前記したＳＨ26と重複して検出された。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し、また南東部はＳＨ26に切られ不明である。方形の平面形態と考えられ、規模は南北約4.1mである。西壁中央からやや南の位置にはカマドが認められ、これに取り付く煙道が屋外へのびる。また、カマドのとなりにあたる南西隅には、径40㎝、深さ30㎝程の貯蔵穴がある。壁周溝や主柱穴などは確認できなかった。

出土遺物は、いずれも小片であり、図示できるものは確認できなかった。時期はＳＨ26に切られていることから、それより新しくなることはなかろう。しかし、住居の規模や形態などから、ＳＨ26と概ね同じ時期と考えられる。

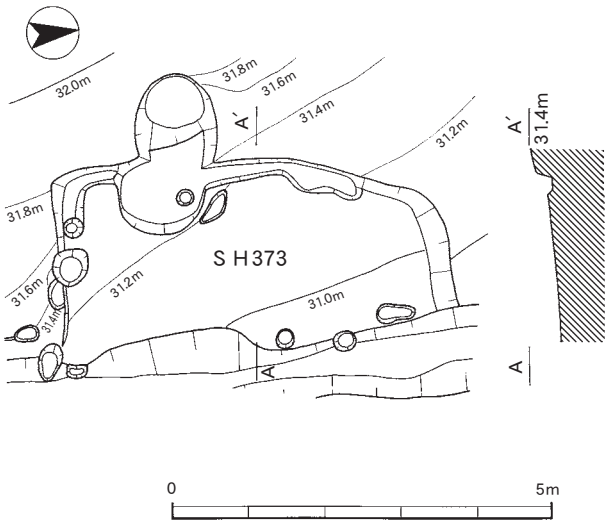
②丘陵東側斜面中部の竪穴住居

丘陵東側斜面のなかでも、標高30.0～31.0m付近はやや緩やかな傾斜である。調査区中央のこの標高間には、ＳＨ321・ＳＨ322・ＳＨ323・ＳＨ324などが密集する。

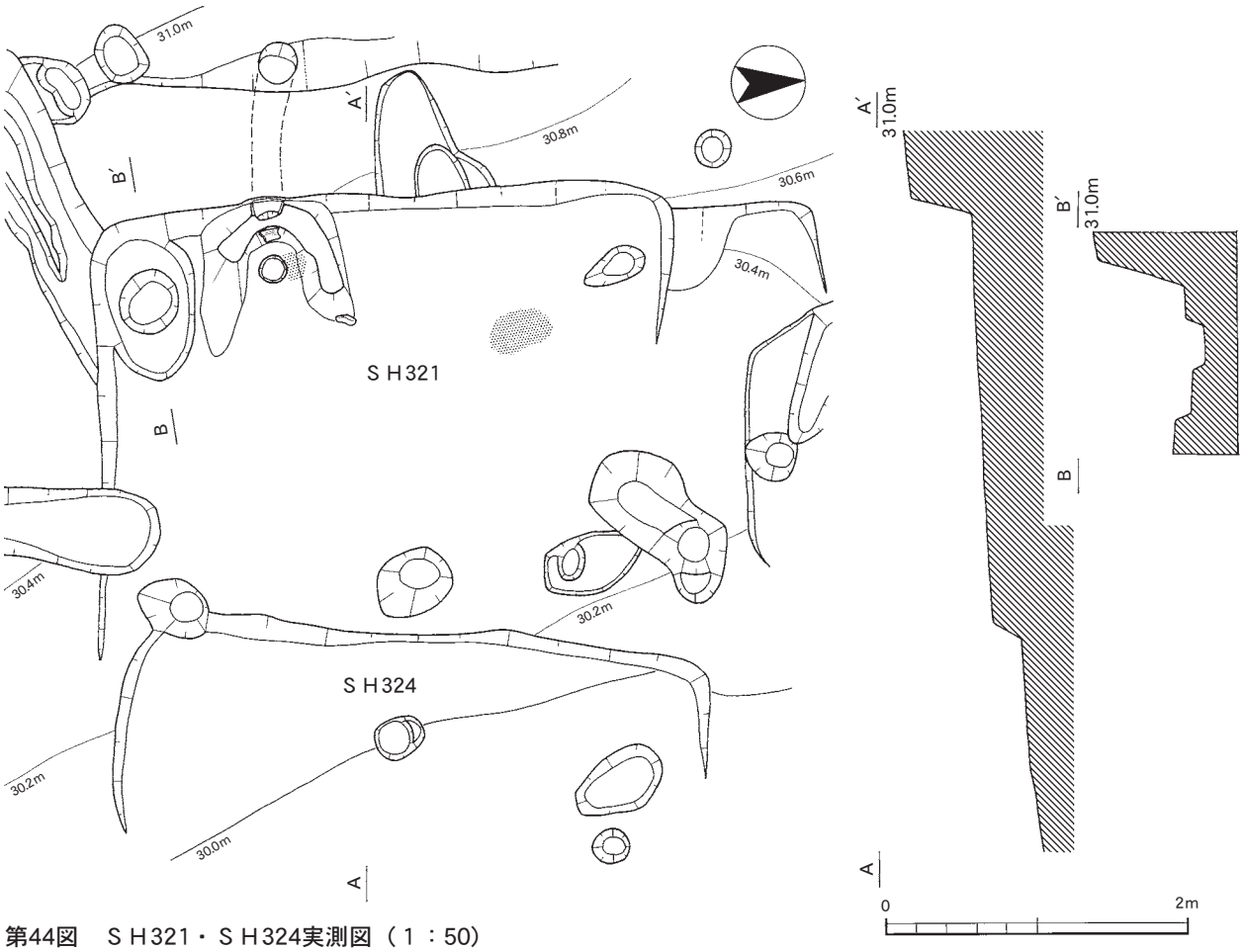
竪穴住居ＳＨ321（第44図）　調査区中央部（Ｉ16付近）、標高30.0～31.0m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。平面形態はやや隅丸方形と考えられ、規模は南北約4.0mである。住居内西壁の中央からやや南に寄った位置にカマドがある。このカマドは比較的残りが良く、部分的に被熱した痕跡が認められる。カマド中央の床には支柱石を抜き取った痕跡がある。また、カマドには、煙道につながる開口部が認められる。その開口部の上からは土師器甕の破片が出土している。煙道は、地山を掘り抜き



第42図　ＳＨ323実測図（１：100）



第43図　ＳＨ373実測図（１：100）

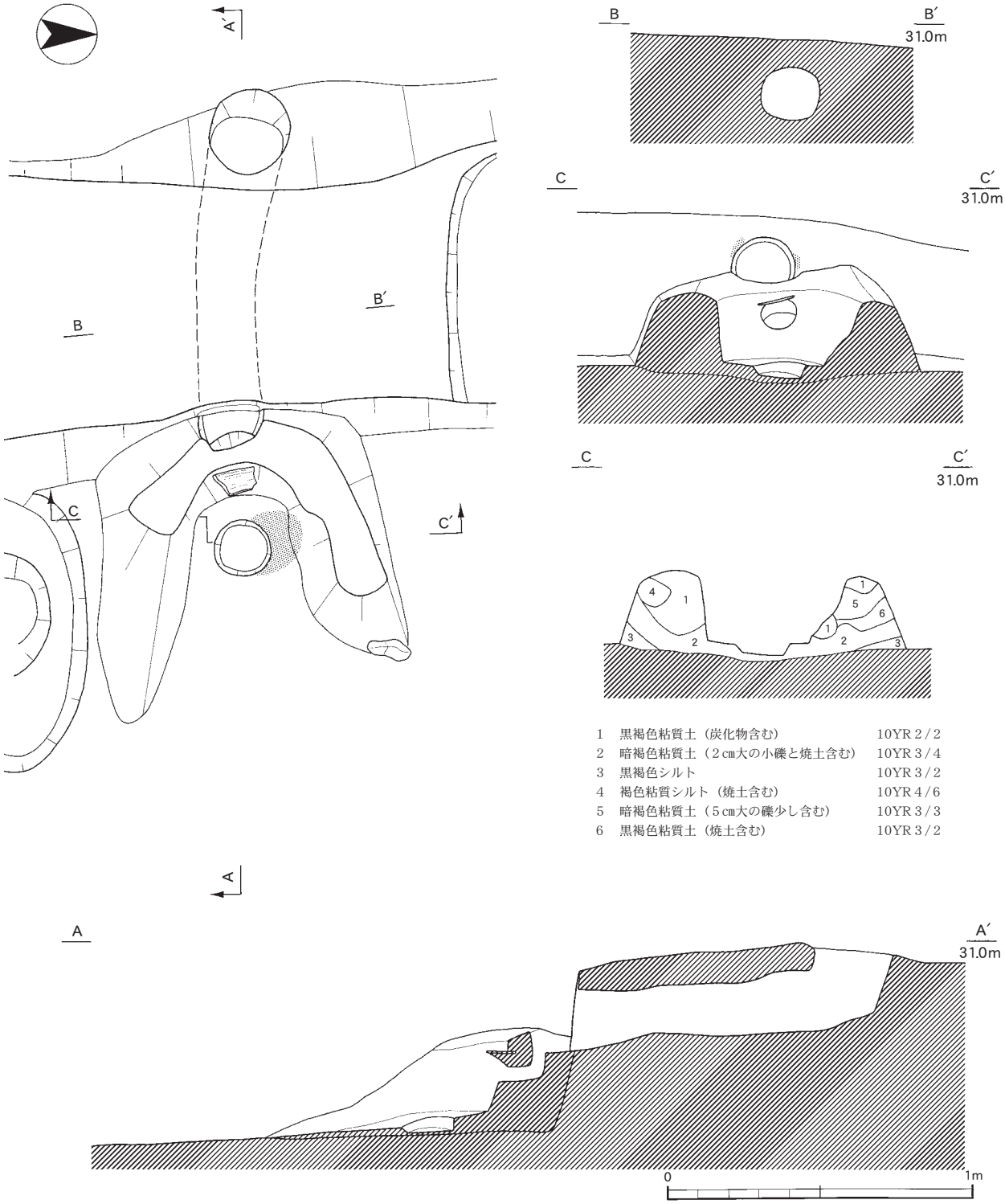


第44図　ＳＨ321・ＳＨ324実測図（１：50）

つくられている。また、この住居の北西部付近には、カマドとは別の焼土がある。この焼土からは土師器杯・高杯が出土している。この他、カマドのとなりにあたる南西隅には貯蔵穴がある。なお、壁周溝・主柱穴などは確認できなかった。

出土遺物は、少ないが、土師器杯・高杯などがある。このうち、土師器杯は焼土、土師器高杯は貯蔵穴から出土した。時期は７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

竪穴住居ＳＨ322　調査区中央部（G16付近）、前記



第45図　ＳＨ321カマド実測図（１：20）

したＳＨ321の北隣に位置する。大部分をＳＨ323に切られ、残りがきわめて悪い。平面形態は方形であり、規模は南北約3.2m以上である。住居内の床の壁際には壁周溝がめぐる。住居内南西隅付近にあたるピットは主柱穴のひとつの可能性がある。

出土遺物には、土師器杯・甕などがある。時期は、７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

竪穴住居ＳＨ323（第42図）　調査区中央部（Ｇ16付近）、前記したＳＨ321から北東方面に下った位置で検出した。斜面を深く切り込んでいる住居西側と南側は検出できたが、東側は流失し不明である。また、北西部は15号墳の裾を切っている。やや隅の丸

い正方形に近い平面形態であり、南北4.3m、東西3.7m程の小型の住居である。床の壁際には、幅10～20㎝、深さ約6㎝の壁周溝がめぐる。主柱穴・貯蔵穴などは確認できなかった。

出土遺物には、土師器杯・甕などがあり、なかには暗文が施された杯もある。時期は７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

竪穴住居ＳＨ324（第44図）　調査区中央部（Ｉ15付近）、ＳＨ321の東下方に位置する。その位置からＳＨ321と重複していると考えられる。遺構の残りは良好でないが、方形の平面形態と考えられることから竪穴住居とした。規模は南北約4.0mである。壁周溝・貯蔵穴・主柱穴は確認できなかった。

出土遺物は確認されなかった。しかし、住居の規模や形態から周辺の住居跡と同じ７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えた。

竪穴住居ＳＨ373（第43図）　調査区中央部（Ｉ17付近）、前記したＳＨ321の北上方に位置する。斜面を深く切り込んでいる住居西側は確認できたが、東側は流失し不明である。平面形態はやや隅の丸い方形であり、規模は南北約5.2mである。住居内の床の壁際には部分的に壁周溝が認められる。また、北西隅付近の大きい土坑は、貯蔵穴もしくはカマドの痕跡と考えられる。

遺物は確認されなかった。時期は、極めて決め難いが、住居の規模・形態などから周辺の住居跡同じ７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えた。

③丘陵東側斜面上部の竪穴住居

丘陵尾根から東へとやや斜面を下った位置は比較的緩やかな傾斜である。この緩やかな斜面にはＳＨ305・ＳＨ306・ＳＨ332・ＳＨ333・ＳＨ335・ＳＨ342・ＳＨ343などがある。

竪穴住居ＳＨ305（第46図）　調査区中央南部（Ｍ17付近）、標高33.0m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。ＳＢ57と重複している。平面形態は方形であり、規模は南北約5.0mである。住居内の床の壁際には壁周溝がめぐる。主柱穴・貯蔵穴・カマドなどは確認できなかった。

出土遺物には、須恵器杯、土師器皿・高杯・甕などがある。時期は、７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

竪穴住居ＳＨ306（第46図）　調査区中央南部（Ｌ18付近）、前記したＳＨ305の西上方で検出した。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。ＳＨ306・ＳＢ57と重複している。平面形態は方形と考えられ、南北約2.9mの小型の住居である。住居内北側の壁際には、部分的に壁周溝が認められる。主柱穴・貯蔵穴・カマドなどは確認できなかった。出土遺物は、比較的多く、須恵器杯、土師器杯・皿・高杯・甕などがある。時期は、７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

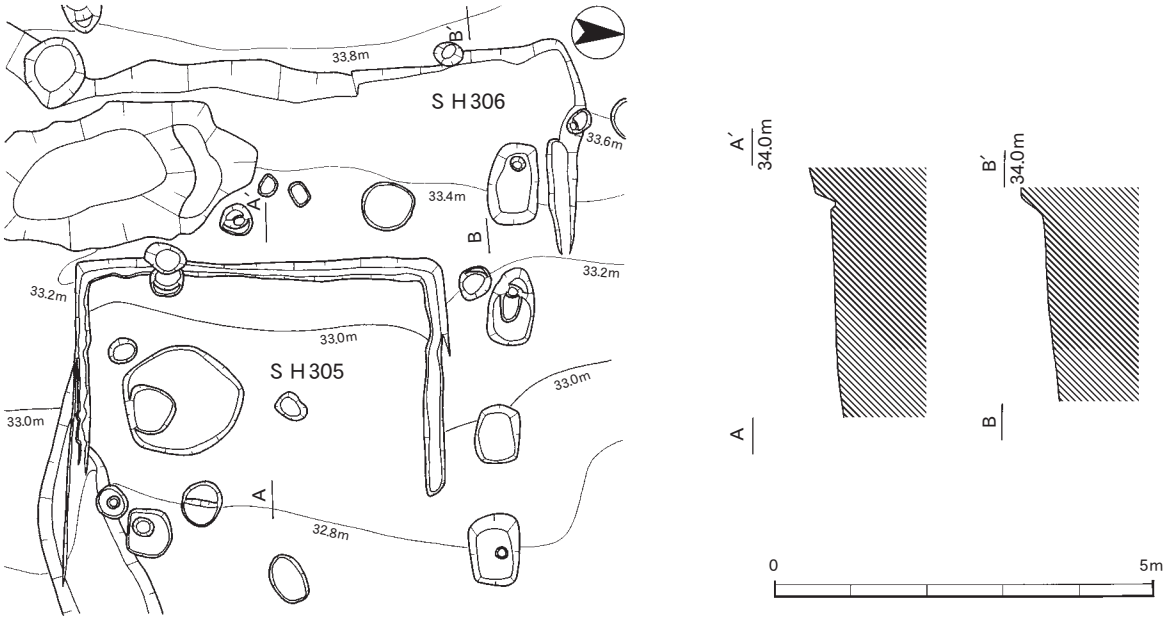
竪穴住居ＳＨ332（第48図）　調査区中央部（Ｆ21付近）、標高31.0m～32.0m付近で検出した。近隣には、ＳＨ333・ＳＨ335・ＳＨ343などがある。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。北西部はＳＨ333に切られている。平面形態は方形であり、南北約3.8mの小型の住居である。住居内の床の壁際には、部分的に壁周溝が認められる。北西隅の土坑は、深さ50㎝程であり、貯蔵穴の可能性がある。ただし、当遺跡の竪穴住居は壁奥に向かって、左隅にあることが多い。主柱穴・カマドなどは確認できなかった。

出土遺物は、少ないが、土師器杯などがある。時期は、７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

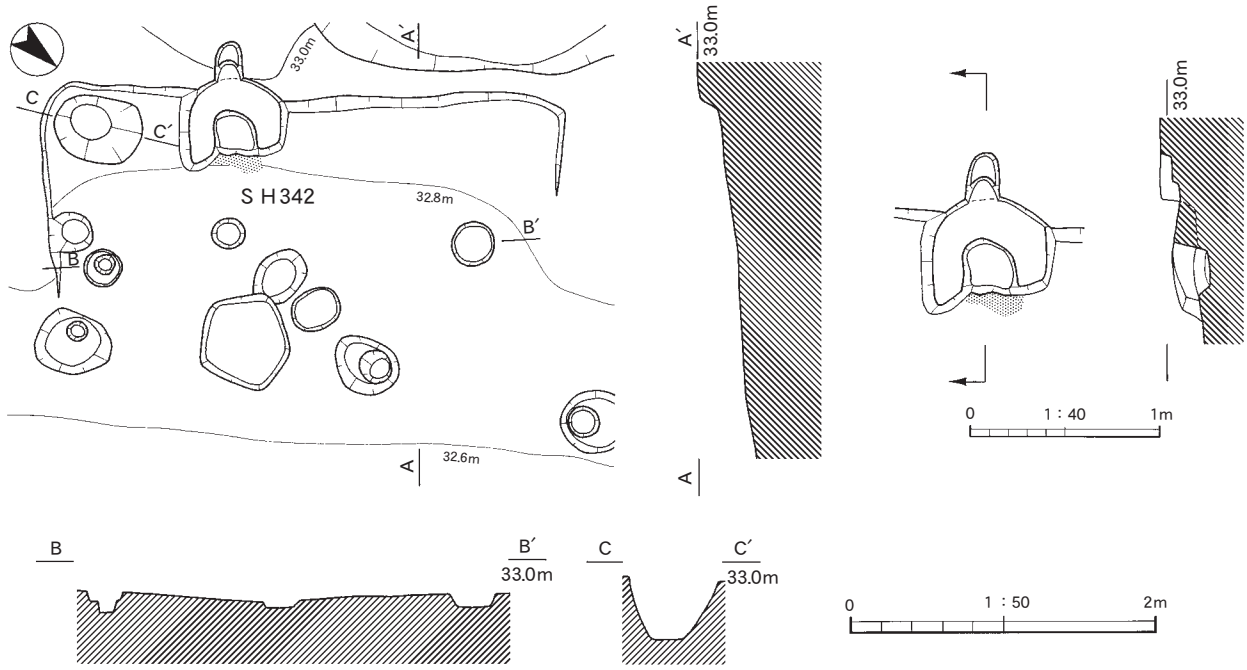
竪穴住居ＳＨ333（第48図）　調査区中央（Ｆ22付近）、ＳＨ332の西上方に位置する。南西部がＳＨ332と重複している。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失している。正方形に近い平面形態であり、南北約3.1m、東西約2.9mの小型の住居である。北西隅にある土坑は、貯蔵穴の可能性がある。ただし、これが貯蔵穴とすると、先述したように、天王山遺跡においては少ない事例である。壁周溝・主柱穴などは確認できなかった。

出土遺物は、少量であるが、土師器甕などがある。時期は、７世紀後葉～８世紀前葉頃と考えられる。

竪穴住居ＳＨ335（第50図）　調査区中央北部（Ｄ22付近）、丘陵東側斜面のやや傾斜の緩い標高30.0～31.0m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失している。平面形態は方形であり、規模は南北約3.7mである。西壁の中央からやや南寄りの位置に被熱したカマド



第46図　ＳＨ305・ＳＨ306実測図（１：100）

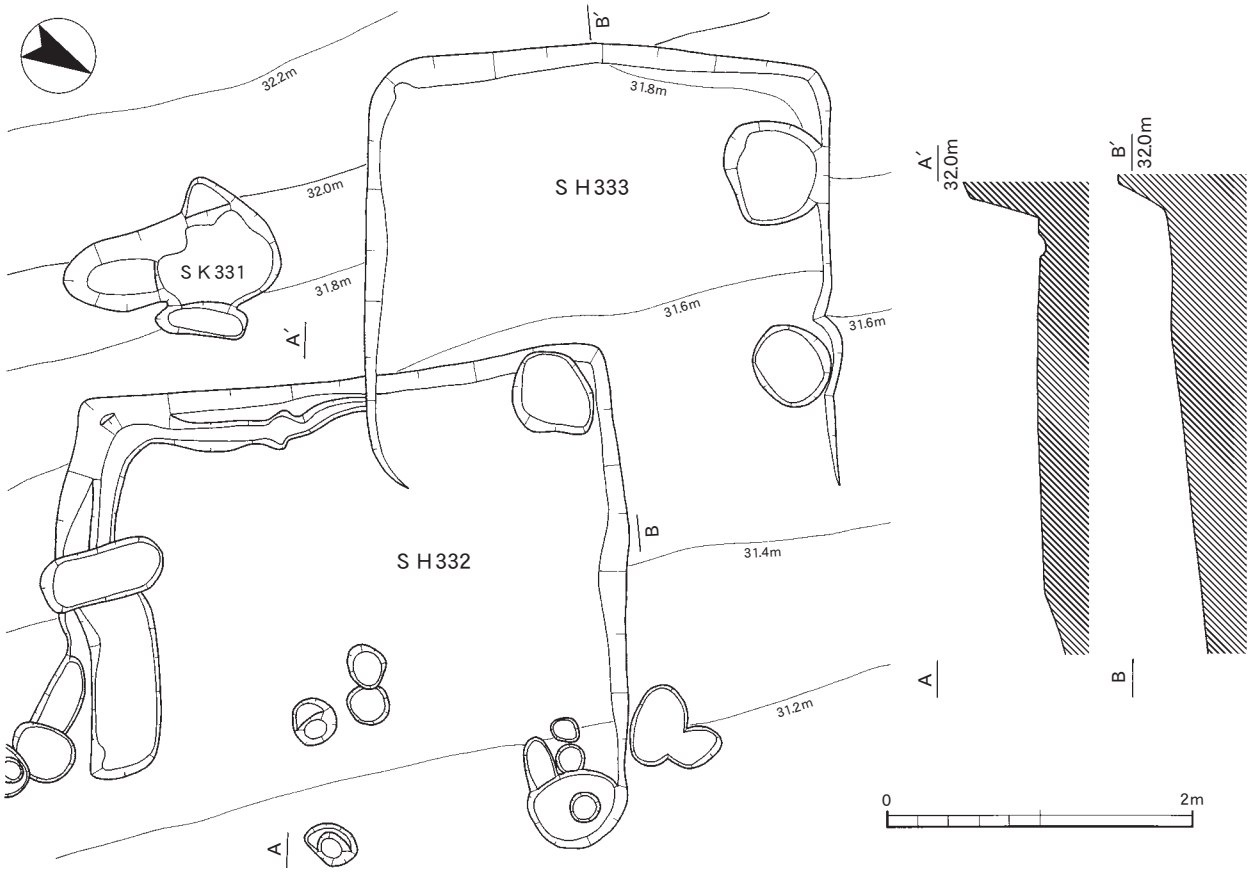


第47図　ＳＨ342実測図（１：50／１：40）

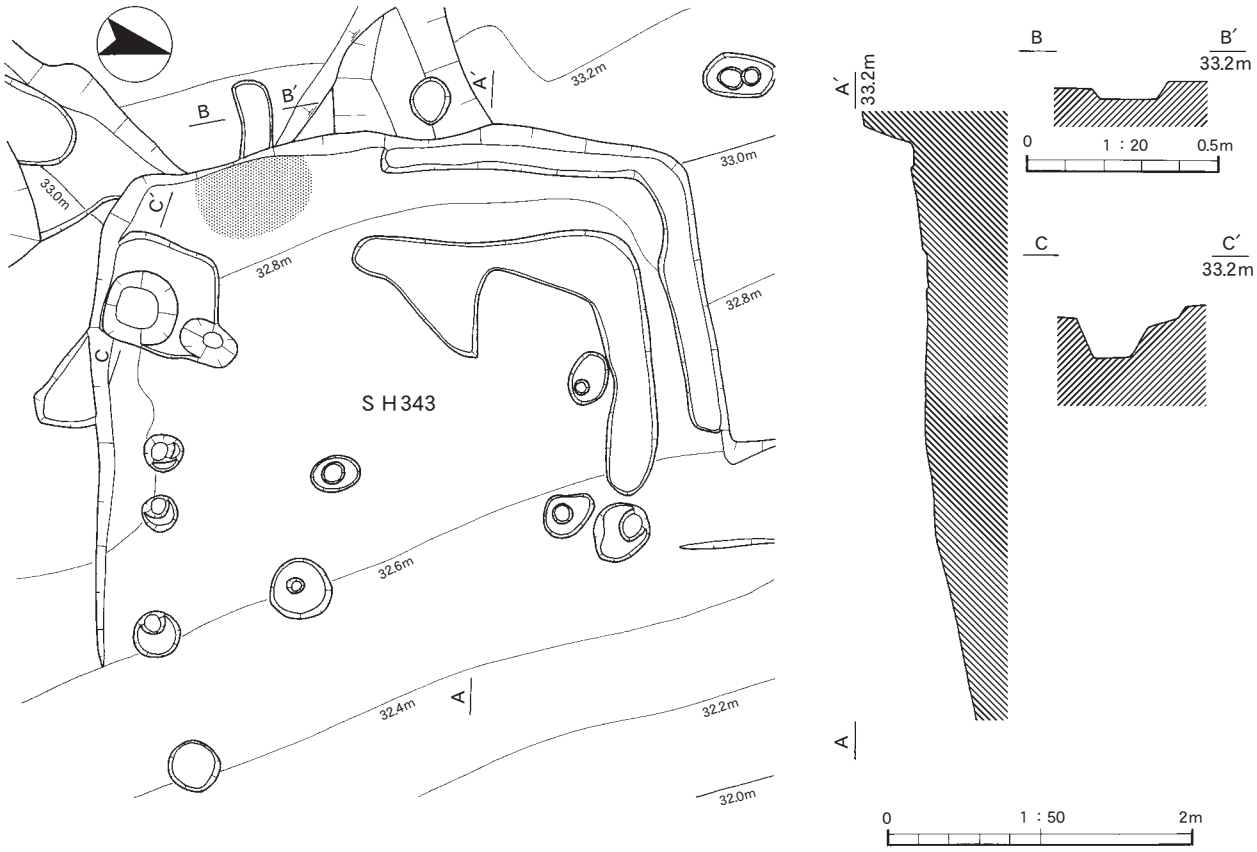
が部分的に残る。カマドには煙道が付き、これは、地山を掘りぬきつくられている。煙出しには土師器甕の破片がそれを覆うように重なり合っていた。カマドの隣の南西隅には南北約75㎝の円形の貯蔵穴が認められ、北東部分でカマドと重なっている。壁周溝や主柱穴は確認できなかった。

出土遺物は、土師器杯・甕・甑などがあり、煮沸具が中心である。把手付甕（409）は煙道煙出しから出土し、そのほかは、床から若干浮いた状態でカマド周辺から出土した。このうち、甑（410）はカマド内中央から直立した状態で出土している。時期は、７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

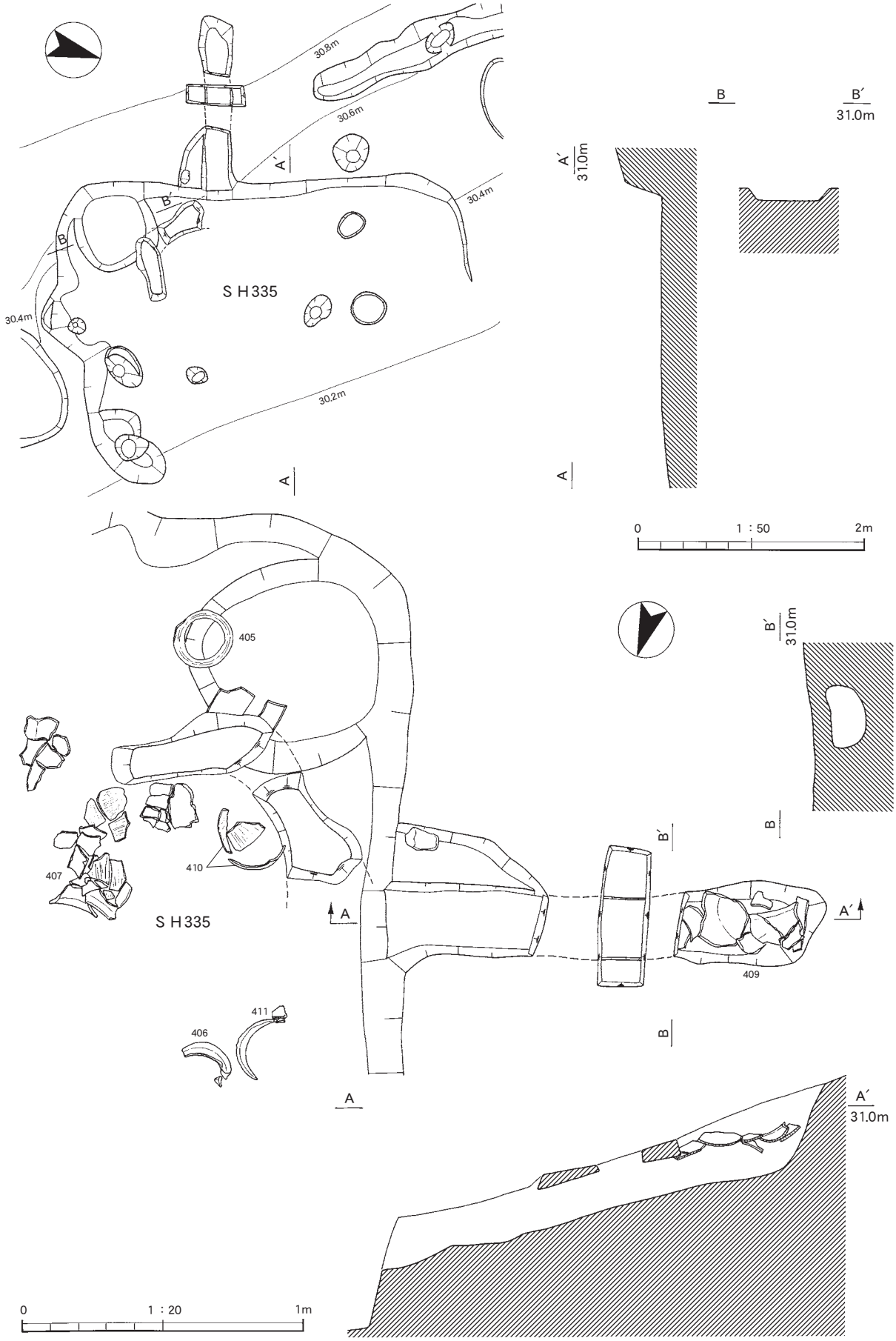
竪穴住居ＳＨ342（第47図）　調査区中央部（Ｉ20付近）、標高32.8m付近で検出した。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。ＳＢ365と重複している。平面形態は方形であり、規模は南北約3.5mである。住居内の西壁の中央からやや南寄りの位置にカマドが認められる。焚口付近には焼土が認められる。また、カマドには屋外へとのびる煙道が付く。カマドの隣の南西隅には南北約60㎝の円形の貯蔵穴が認められる。主柱穴は２箇所確認した。



第48図　ＳＨ332・ＳＨ333実測図（１：50）



第49図　ＳＨ343実測図（１：50／１：20）



第50図　ＳＨ335実測図（１：50／１：20）

出土遺物は確認できなかった。住居の規模、カマド・貯蔵穴の位置などから、当遺跡における７世紀後葉～８世紀初頭頃の竪穴住居と同じ時期と考えた。

竪穴住居ＳＨ343（第49図）　調査区中央（H21付近）、先述のＳH342の北西方向に位置する。斜面を深く切り込んでいる住居西側は検出できたが、東側は流失し不明である。平面形態は方形であり、規模は南北約4.2mである。住居内の南西隅付近にはカマドの痕跡と考えられる焼土が認められ、それに接する西壁には屋外へとのびる煙道がある。北西の壁際には壁周溝が認められる。また、焼土の隣にあたる南西隅には貯蔵穴が認められる。住居内西側の南北に並ぶ二つのピットは主柱穴の可能性がある。

出土遺物には、土師器杯・甕などがある。時期は７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

(2) 掘立柱建物・柱列

掘立柱建物ＳＢ１（第51図）　調査区東部（Ｇ５付近）、丘陵東側斜面が裾に向かい緩やかに傾斜している標高22.0m付近で検出した。南北２間（約3.6m）、東西１間（約1.65m）の側柱建物である。柱間は南北で1.8m、東西で1.65mである。南北棟であり、主軸はN1.5°Wである。柱穴掘形は円形のものが多く、最大のもので径約50cmと大きい。また、等高線に直交している柱の並びを断面でみると、斜面の上と下にあるものでは、柱穴底のレベルに大きな差がある。なお、図示できるものや時期の判る遺物は確認できなかった。

時期は、周辺の竪穴住居・掘立柱建物と同じ頃と考えられるが、ＳH12より新しいＳＤ５を切っていることから７世紀後葉～８世紀前葉頃の幅で捉えておきたい。

掘立柱建物ＳＢ２（第52図）　調査区東部（Ｇ６付近）に位置し、前記のＳＢ１の西側にあたる。ＳＫ７・ＳＨ６と重複している。南北３間（約5.1m）、東西２間（約3.3m）の総柱建物である。柱間は、南北1.65～1.8m、東西は1.65mである。南北棟と考えられ、主軸はほぼ座標北である。柱穴掘形は円形のものが多く、最大のもので径約90cmと大きい。また、等高線に直交している柱の並びを断面でみると、斜面の上と下にあるものでは、柱穴底のレベルに大きな差がある。なお、図示できるものや時期の判る遺物は確認できなかった。時期は周辺の掘立柱建物と同じ７世紀後葉～８世紀前葉頃であろう。

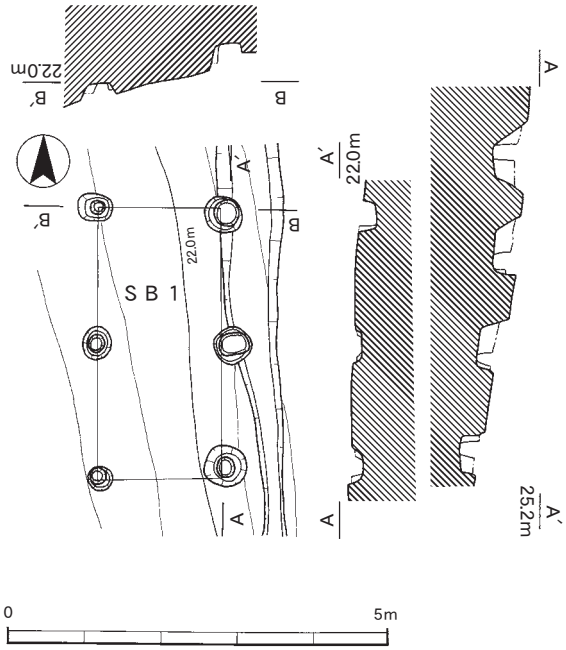
掘立柱建物ＳＢ３（第53図）　調査区南東部（Ｋ７付近）、丘陵東側斜面が裾に向かい緩やかに傾斜している標高25.0m付近で検出した。南北３間（約4.2m）、東西３間（約3.9m）の総柱建物である。柱間は約1.2～1.5mで不均等である。南北の主軸はN６°Wである。柱穴掘形は方形と円形のものがあり、径約70cm前後のものが多い。また、柱痕跡も径20cm前後のものが中心である。なお、等高線に直交している柱の並びを断面でみると、斜面の上と下にあるものでは、柱穴底のレベルに大きな差がある。

出土遺物には須恵器杯や土師器甕などがある。時期は７世紀後葉～８世紀前葉頃である。

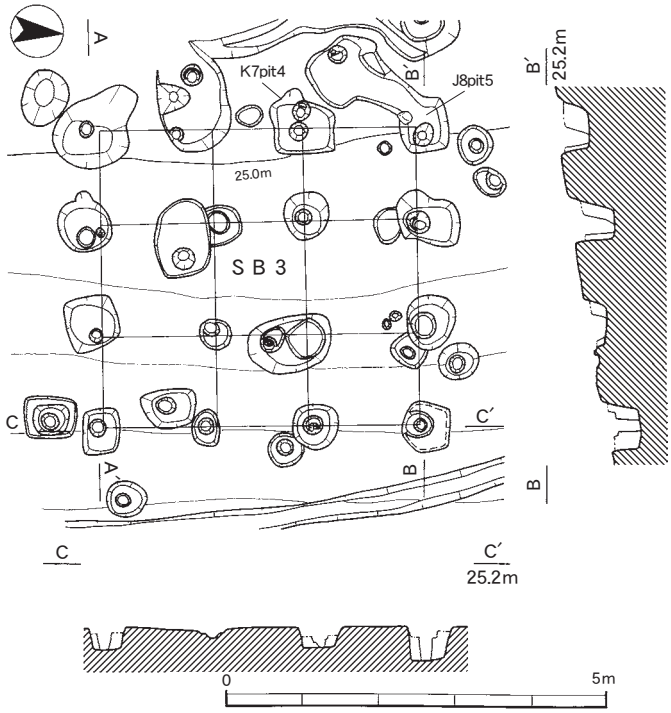
掘立柱建物ＳＢ46（第54図）　調査区東部（D12付近）、丘陵東側斜面が裾に向かい緩やかに傾斜している標高25.0～26.0m付近で検出した。南北２間（約3.75m）、東西４間（約7.35m）の側柱建物である。柱間は1.65～1.95mで不均等である。東西棟であり、等高線に直交している。南北の主軸はN20°Wである。柱穴掘形は円形であり、径60cm前後のものが多い。柱痕跡も径20cm前後のものが中心である。なお、等高線に直交している柱の並びを断面でみると、斜面の上と下にあるものでは、柱穴底のレベルに大きな差がある。

出土遺物は確認できなかった。時期は、周辺の掘立柱建物や竪穴住居と同じ７世紀後葉～８世紀初頭頃であろう。

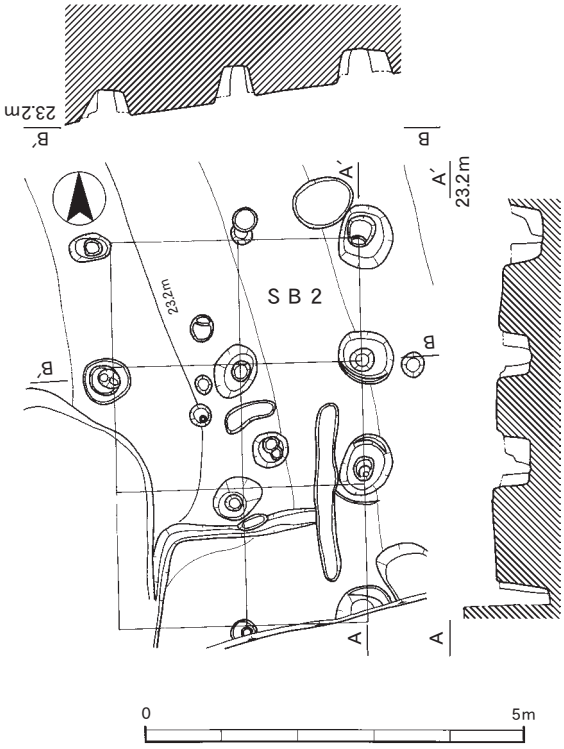
掘立柱建物ＳＢ49（第55図）　調査区東部（Ｊ10付近）、丘陵東側斜面が裾に向かい緩やかな傾斜に変わる標高26.0～27.0m付近で検出した。ＳＫ31・ＳＢ50と重複しており、このうちＳＢ50に切られている。北側の柱の並びは、南側と対応するものが確認できず不明であるが、南北２間（約4.2m）、東西４間（約9.0m）の側柱建物であると考えられる。柱間は南北2.1m、東西で2.1～2.4mである。東西棟であり、等高線に直交している。南北の主軸はN1.5°Wである。柱穴掘形は方形と円形があり、径80cm前後のものが多い。また、柱痕跡も径20cm程のものが中心である。なお、等高線に直交している柱の並びを断面でみると、斜面の上と下にあるものでは、柱



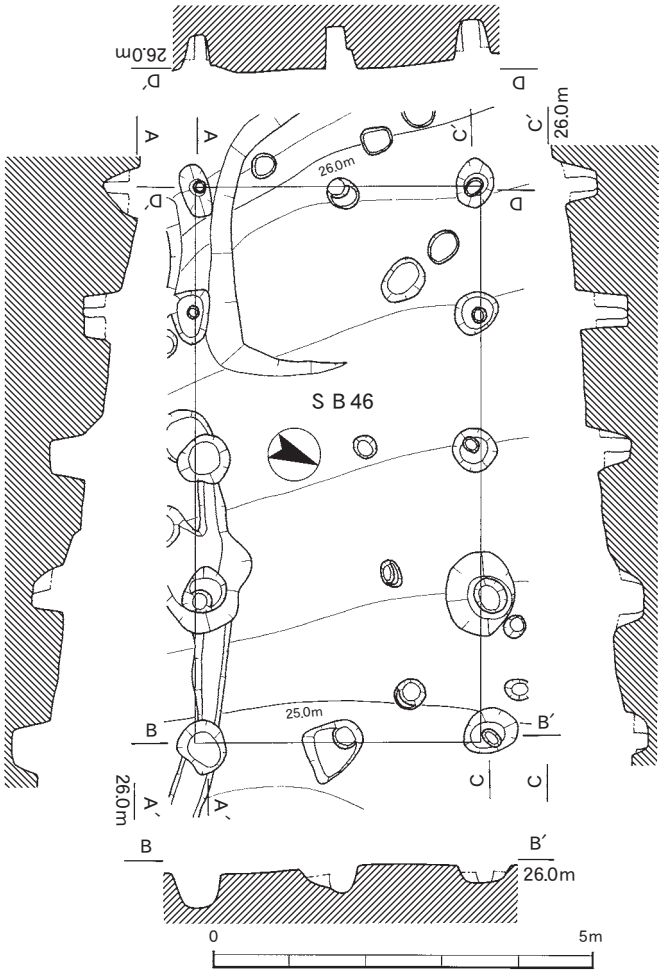
第51図　ＳＢ１実測図（１：100）



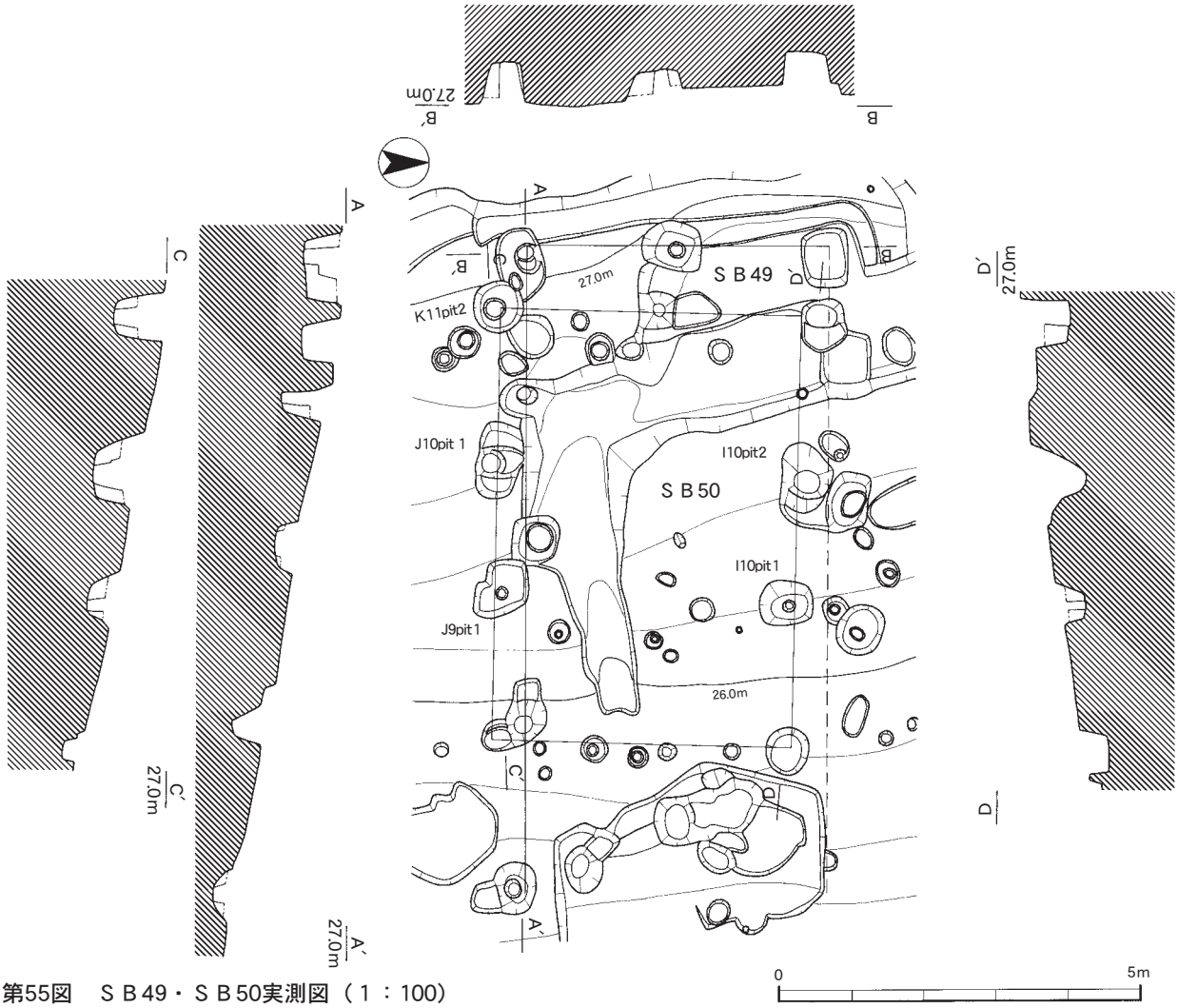
第53図　ＳＢ３実測図（１：100）



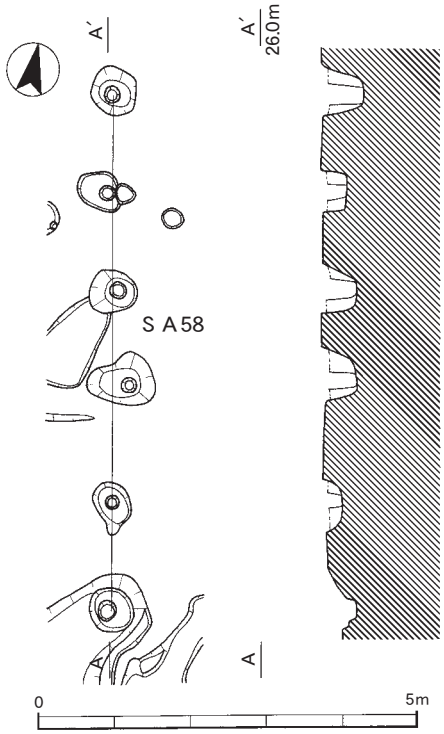
第52図　ＳＢ２実測図（１：100）



第54図　ＳＢ46実測図（１：100）



第55図　ＳＢ49・ＳＢ50実測図（１：100）



第56図　ＳＡ58実測図（１：100）

穴底のレベルに大きな差がある。

出土遺物は、土師器杯がある。時期はＳＢ50より古いが、概ね同じ７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

掘立柱建物ＳＢ50（第55図）　調査区東部（Ｊ10付近）に位置し、前記のＳＢ49と重複する。南北２間（約4.2m）、東西３間（約6.0m）の側柱建物である。柱間は南北で2.1m、東西で1.8～2.1mである。東西棟であり、等高線に直交している。南北の主軸はＮ0.5°Ｗである。柱穴掘形は方形と円形があり、径70cm前後のものが多い。また、柱痕跡も径20cm程のものが中心である。なお、等高線に直交している柱の並びを断面でみると、斜面の上と下にあるものでは、柱穴底のレベルに大きな差がある。

出土遺物は、須恵器杯・土師器皿・甕・土錘などがあり、なかには暗文を施した土師器皿もある。これらは７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

掘立柱建物ＳＢ52（第57図）　調査区中央南部（Ｌ13付近）、丘陵東側斜面の標高29.0～31.0m付近で検出した。13号墳・ＳＸ38・ＳＢ55と重複している。南北３間（約3.9m）、東西４間（約6.0m）の総柱建物である。柱間は1.2～1.8mと不均等である。南北の主軸はN0.5°Wである。柱穴掘形は方形と円形があり、径70cm前後のものが多い。また、柱痕跡も径20cm程のものが中心である。

出土遺物は、須恵器杯・土師器甕などがある。これらは７世紀後葉～８世紀初頭頃ものである。

掘立柱建物ＳＢ55（第57図）調査区東部（Ｌ13付近）に位置し、前記のＳＢ52と重複する。南北２間（約3.9m）、東西３間（約6.3m）の側柱建物である。柱間は、南北で1.95m、東西で2.1mである。東西棟であり、等高線に直交している。南北の主軸はN1.5°Ｅである。柱穴掘形は方形と円形があり、径60cm前後のものが多い。なお、等高線に直交している柱の並びを断面でみると、斜面の上と下にあるものでは柱穴底のレベルに大きな差がある。

出土遺物は確認できなかった。時期は、ＳＢ52に近い時期と考えられる。

掘立柱建物ＳＢ56（第58図）調査区中央東寄り（Ｉ15付近）、丘陵東側斜面の中腹にあたる標高30.0m付近で検出した。14号墳・ＳＨ321・ＳＨ324などと重複している。南北６間（約9.9m）、東西３間（約4.2m）の側柱建物である。柱間は、南北1.2～1.8mと幅があり、東西2.1mである。南北棟であり主軸はN1.5°Wである。柱穴掘形は円形であり、径50cm前後のものが多い。なお、等高線に直交している柱の並びを断面でみると、斜面の上と下にあるものでは、柱穴底のレベルに大きな差がある。

出土遺物は、土師器杯・甕などがある。７世紀後葉～８世紀前葉頃のものであろう。

掘立柱建物ＳＢ57（第59図）　調査区中央南部（Ｍ17付近）、丘陵頂から東へとやや斜面を下った標高33.0m付近で検出した。ＳＸ318・ＳＨ305・ＳＨ306などと重複している。東西４間（約6.6m）の側柱建物である。南北は約4.65mであるが、その間数は不明である。東西の柱間は、1.5～1.8mと不均等である。東西棟であり、その主軸は等高線と直交する。南北の主軸はＮ１°Ｅである。柱穴掘形は方形のものが多く、一辺0.5～1.0mである。柱痕は径20cm程のものが中心である。なお、等高線に直交している柱の並びを断面でみると、斜面の上と下にあるものでは、柱穴底のレベルに大きな差がある。

出土遺物は、図示できるものは確認できなかったが、土師器甕などの小片が出土した。ＳＸ318出土遺物のなかにはＳＢ57に伴うものが存在する可能性を考慮すると、時期は７世紀後葉～８世紀前葉頃の幅で捉えておきたい。

掘立柱建物ＳＢ365（第60図）　調査区中央部（Ｉ19付近）、丘陵上から東へとやや斜面を下った標高32.4m付近で検出した。ＳＨ342と重複している。南北２間（約3.9m）、東西２間（約2.55m）の側柱建物である。柱間は、南北で1.8～2.1m、東西で1.2～1.35mである。南北棟であり、その主軸はN37.5°Wである。柱穴掘形は円形が多く、径40～50cmである。

出土遺物は確認できなかった。時期は、周辺の竪穴住居や掘立柱建物と同じ７世紀後葉～８世紀前葉頃の幅で捉えておきたい。

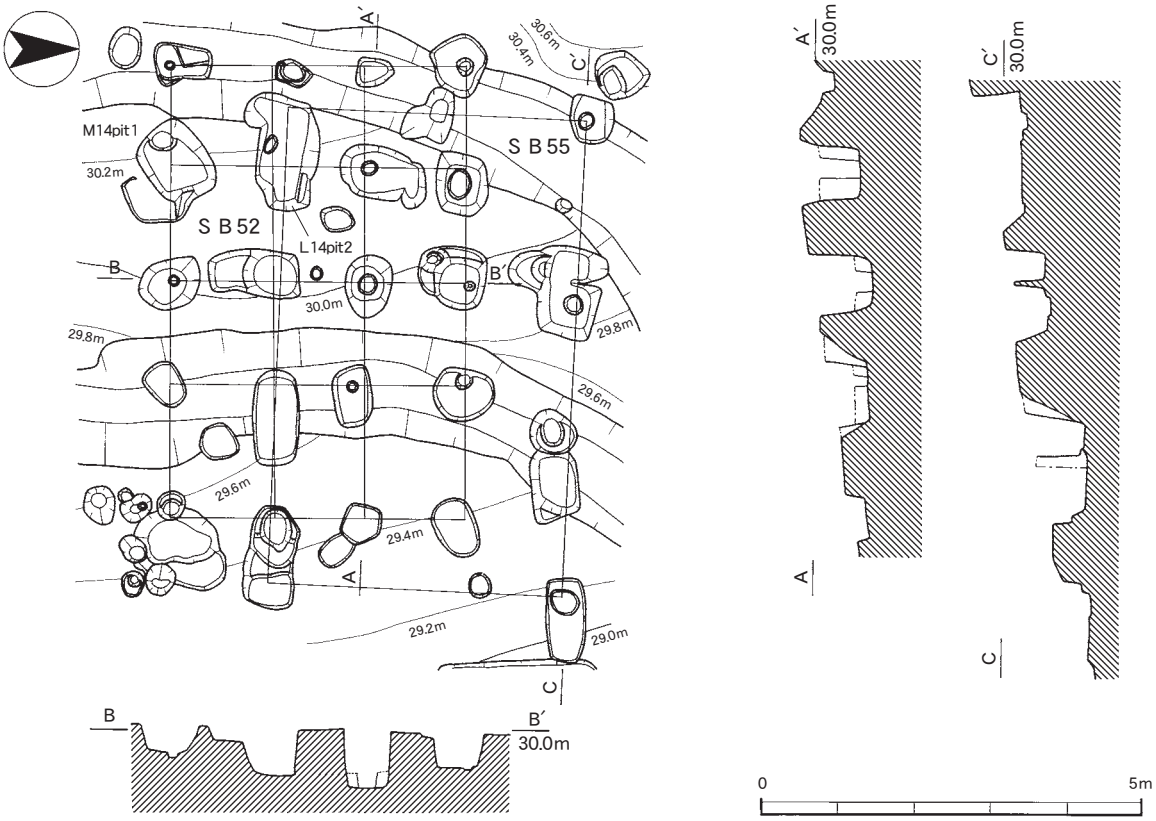
掘立柱建物ＳＢ366（第60図）　調査区中央部（Ｊ19付近）に位置する。前記のＳＢ365の南側から検出した。南北２間（約3.45m）、東西２間（約3.15m）の総柱建物である。柱間は、南北1.65～1.8m、東西1.5～1.65mと不均等である。南北の主軸はN14°Wである。柱穴掘形は円形であり、最大で径約60cmである。

出土遺物は確認できなかった。時期は、形態などから周辺の竪穴住居や掘立柱建物と同じ７世紀後葉～８世紀前葉頃の幅で捉えておきたい。

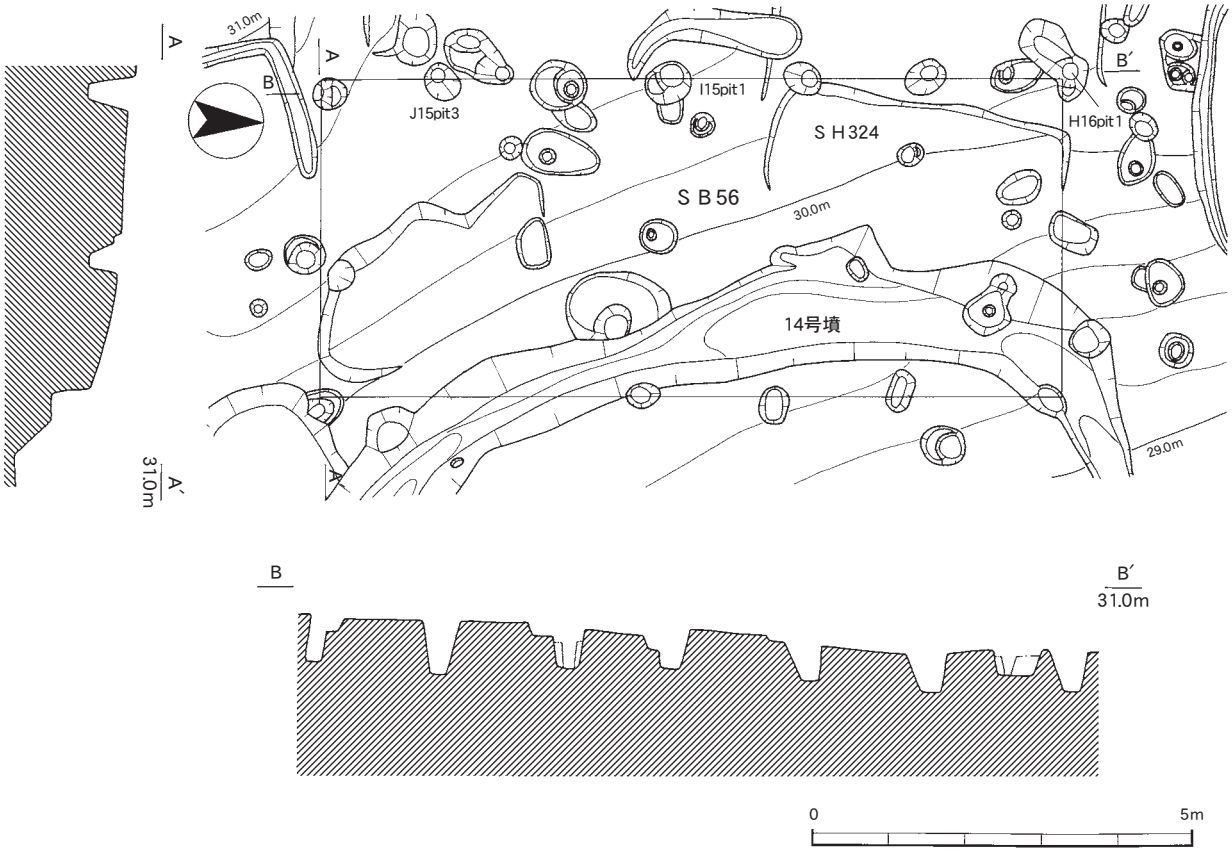
柱列ＳＡ58（第56図）　調査区東部（Ｉ８付近）に位置する。近隣にＳＢ３・ＳＢ49・ＳＢ50などがある。南北に５間（約6.9m）のび、柱間は1.2～1.5m程である。主軸はN13°Wである。柱掘形は円形であり、径70cm程のものが中心である。

出土遺物は確認されなかった。時期は周辺の竪穴住居などと同じ７世紀後葉～８世紀初頭頃であろう。

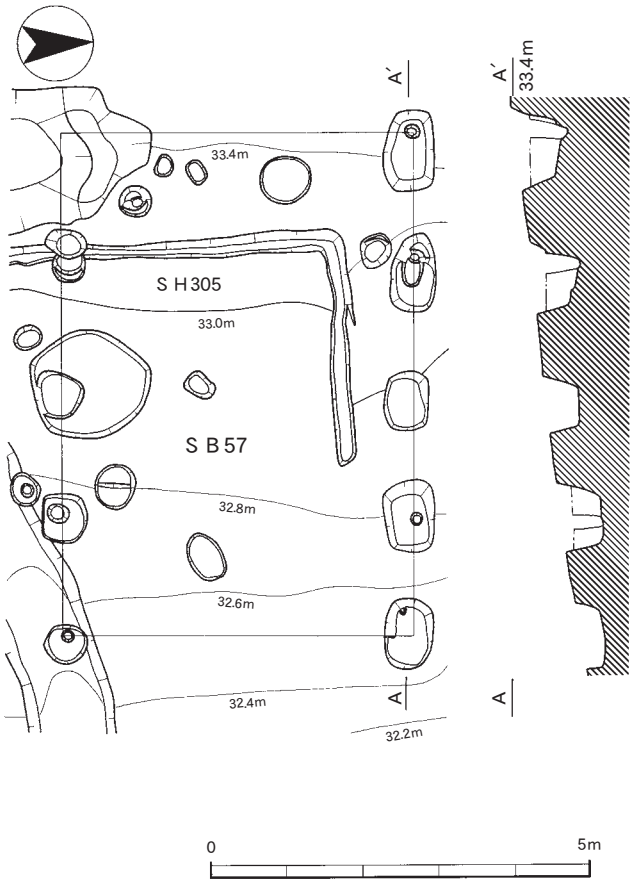
柱列ＳＡ59（第61図）　調査区中央南部（Ｌ19付近）、丘陵頂から東へとやや斜面を下った標高33.0～35.0m付近で検出した。南北２間以上（6.0m以上）、東西４間（約12.9m）のＬ字形の柱列である。柱間は、南北3.0m、東西3.0～3.6mである。南北の主軸



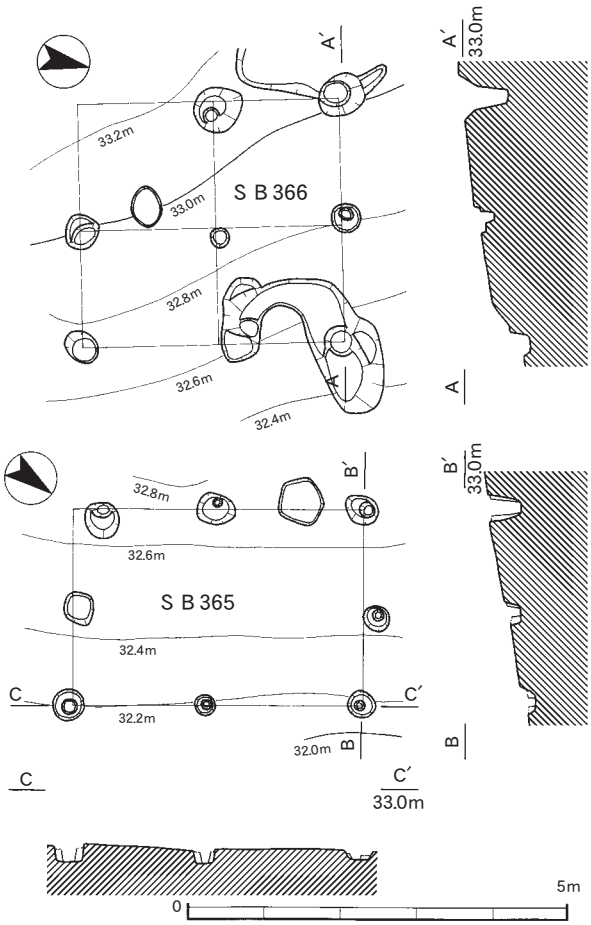
第57図　ＳＢ52・ＳＢ55実測図（１：100）



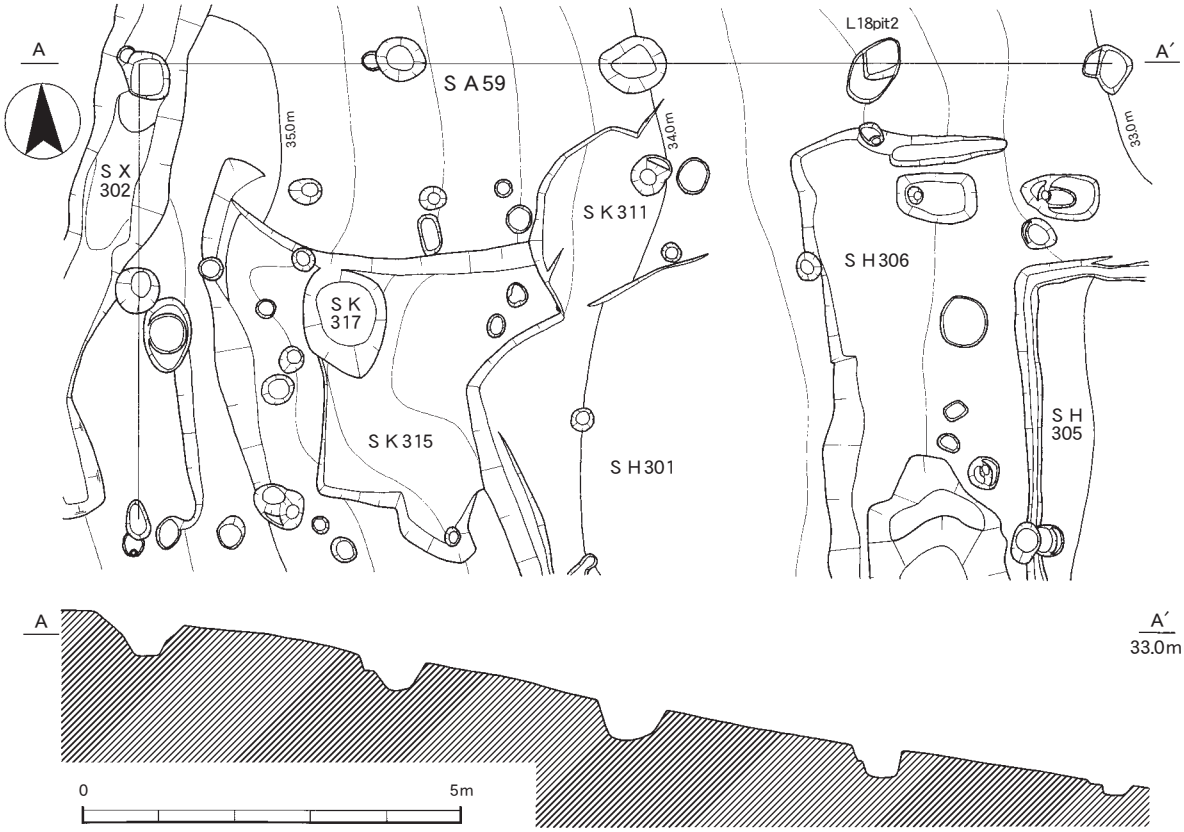
第58図　ＳＢ56実測図（１：100）



第59図　ＳＢ57実測図（１：100）



第60図　ＳＢ365・ＳＢ366実測図（１：100）



第61図　ＳＡ59実測図（１：100）

はほぼ座標北である。柱穴掘形は円形のものが多く、径60～90㎝である。

出土遺物には、土師器皿・土師器甕などがある。７世紀後葉～８世紀初頭頃である。

(3) 土坑・溝

土坑ＳＫ７　調査区東部（Ｈ６付近）から検出した土坑である。長楕円形で長軸3.8m、短軸3.1m、深さ0.4mの規模の大きい土坑である。時期は７世紀後葉～８世紀前葉頃であろう。

土坑ＳＫ９　調査区東部（Ｉ７付近）から検出した土坑である。南部をＳＫ10に切られる。南北約2.0mの不整形な円形を呈する。土師器甕が出土している。時期は７世紀後葉～８世紀前葉頃であろう。

土坑ＳＫ16　調査区東部（Ｉ19付近）から検出した土坑である。南北約3.8mであり、歪な形をしているが、全体としては方形に近い平面形態をもつ。ＳＫ16内には小さな土坑がいくつかあり、底は安定していない。

出土遺物は、土師器杯・皿・甕など比較的多くある。時期は７世紀後葉～８世紀前葉頃である。

土坑ＳＫ19　調査区東部（Ｈ８付近）に位置し、ＳＨ８に切られる。東西約2.5mで、方形に近い。

須恵器甕が出土している。時期は、７世紀後葉～８世紀初頭頃であろう。

土坑ＳＫ22　調査区東部（Ｉ19付近）から検出された土坑である。出土遺物は図示できるもので土師器甕１点のみであった。時期は７世紀後葉～８世紀前葉頃であろう。

土坑ＳＫ28　調査区南東部（M10付近）から検出した土坑である。須恵器杯・土師器杯・甕など比較的多く出土した。時期は７世紀後葉～８世紀初頭頃である。

土坑ＳＫ29　調査区南東部（Ｌ10付近）に位置し、先述のＳＫ28に切られる土坑である。出土遺物は図示できるもので土師器甕１点のみであった。時期はＳＫ28に近いと考えられる。

土坑ＳＫ33（第62図）　調査区東部（H12付近）、ＳＢ50・ＳＢ49からやや北に離れた地点で検出した土坑である。不整形な円形を呈し、南東部はＳＸ30と重複する。また、ＳＫ33内にはＳＫ43がある。時期も近く同一の遺構と考えられる。

出土遺物は、中央南寄りを中心に須恵器杯・土師器杯・甕など比較的まとまって出土した。時期は、７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

土坑ＳＫ34　調査区東部（Ｉ11付近）、先述のＳＫ33の南に位置する。南北約1.2mの円形を呈する。土師器杯・高杯が出土しており、時期は７世紀後葉～８世紀前葉頃であろう。

土坑ＳＫ42　調査区中央部（Ｊ15付近）から検出した土坑である。深さ20㎝程の浅いものであるが、須恵器杯・土師器皿などが出土した。時期は、７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

土坑ＳＫ43（第62図）　調査区東部（H12付近）、ＳＫ33内から検出した土坑である。南北約1.2mの円形を呈し、深さは約1.6mと深い。この土坑は深さなどから一見井戸にみえるが、当遺跡が丘陵にあり、地下水を得るには浅いため土坑とした。

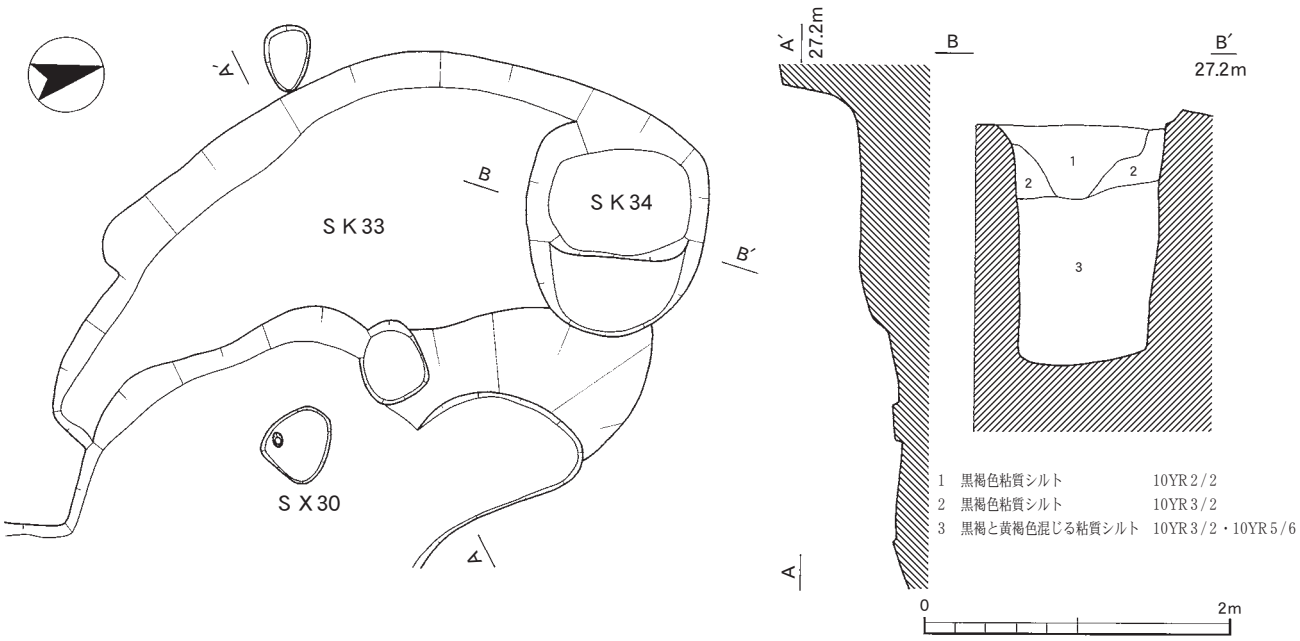
出土遺物は、深さ1.0m程のところから土師器杯・皿・高杯などが出土した。時期は７世紀後葉～８世紀前葉頃と考えられる。

土坑ＳＫ45　調査区中央（Ｊ14付近）、ＳＫ42の南に位置する。不整形な円形を呈し、深さは約1.0mと深い。ＳＸ39と重複している。時期は、須恵器杯などが少数量出土しており、７世紀後葉頃と考えられる。

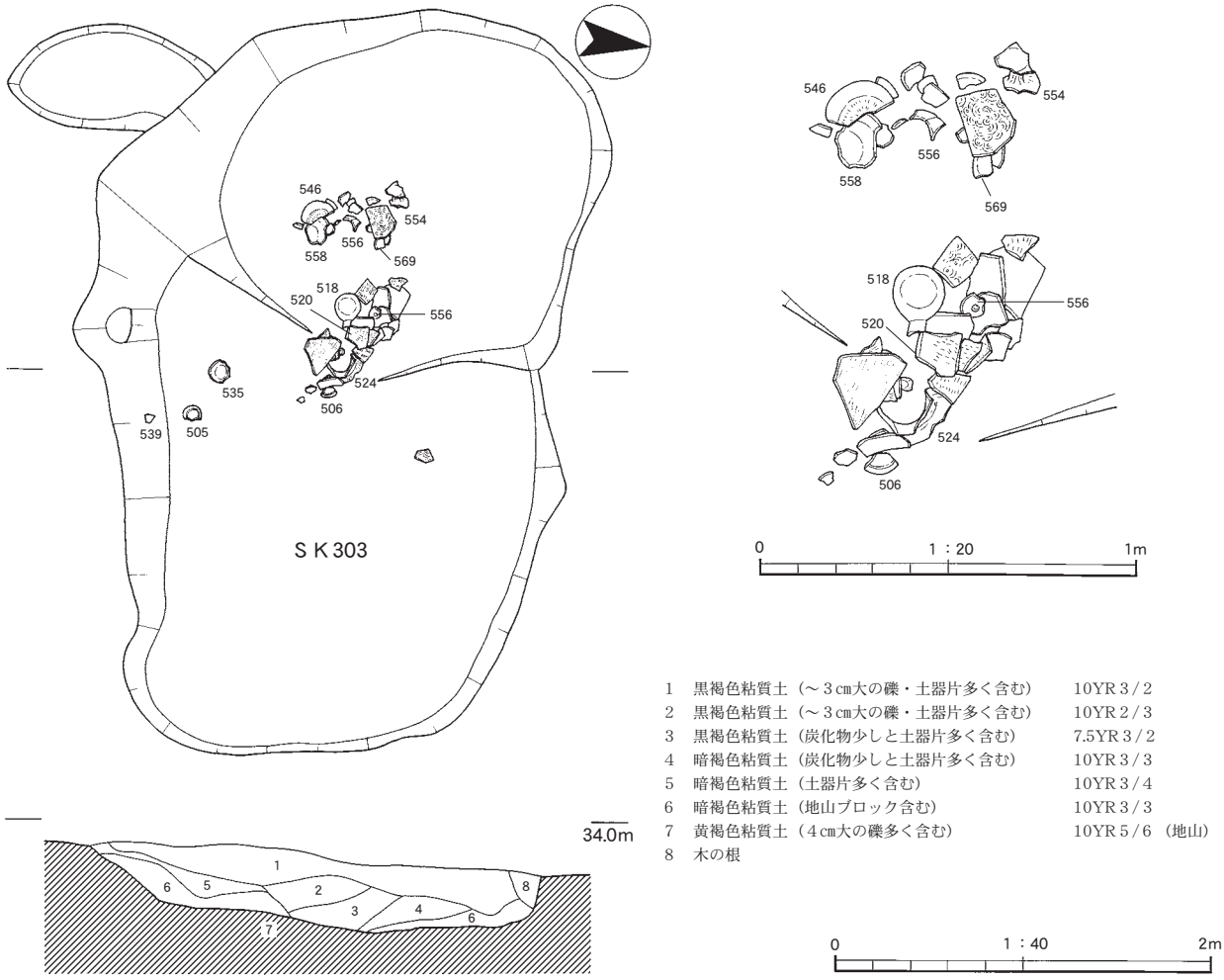
土坑ＳＫ303（第63図）　調査区中央（K19付近）、丘陵頂近くのＳＨ306・ＳＨ305・ＳＢ366などに近接する。南北約2.8m、東西約4.0mと規模が大きく、東西に長い不整形な円形を呈する。

ＳＫ303からの出土遺物は、極めて多く、その他の遺構を大きく凌いでいる。須恵器杯・高杯・提瓶・円面硯、土師器杯・高杯・皿・甕などがあり、なかでも須恵器円面硯が出土したことは注目される。これらの遺物の多くは土坑中央からまとまって出土している。さらに、これらの遺物はまとまりをもちつつも、無造作に散らばっていた。これらのことから、ＳＫ303は「土器捨て場」としてつかわれた可能性が高いと考えられる。時期は７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

土坑ＳＫ307　調査区中央南部（M17付近）で検出した土坑である。ＳＨ305・ＳＨ306が隣接する。南北3.7m、東西1.9mの南北に長い円形を呈し、深さは約0.8mと深い。比較的多くの遺物が出土し、時



第62図　ＳＫ33・ＳＫ43実測図（１：50）



第63図　ＳＫ303実測図（１：40／１：20）

期は７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

土坑ＳＫ317　調査区中央南部（M20付近）で検出した。南北1.3m・東西1.1mの楕円形を呈し、深さは0.5mと浅い。土師器甕が２固体出土している。時期は７世紀後葉～８世紀前半頃と考えられる。

土坑ＳＫ327　調査区中央北部（D15付近）で検出した土坑である。周辺に遺構はほとんどなく単独のものである。南北1.6m、東西3.2mの東西に長い長円形を呈し、深さは0.45mと浅い。土師器杯・皿・甕、須恵器甕などが出土している。時期は、７世紀後葉～８世紀初頭頃である。

溝ＳＤ５　調査区東部（Ｆ４付近）で検出した溝である。ＳＢ１・ＳＨ12と重複している。南北方向に約13.0mのび、幅約1.0mである。深さは0.1～0.2mと浅い。土師器甕片などが出土した。時期は、ＳＨ12より新しく、ＳＢ１より古いことから、７世紀後葉頃であろう。

溝ＳＤ362　調査区中央部（Ｉ17付近）で検出した溝である。ＳＨ373などと重複している。南北方向に約14.0mのび、幅約1.2mである。深さは0.2～0.5mである。ＳＨ321・ＳＨ323などの竪穴住居が集中している場所の背後にあることから、これらの竪穴住居群に伴う区画溝などの機能を有していたと推測される。土師器甕片が出土している。時期は７世紀後葉頃であろう。

（淺生）

《参考文献》

・　赤塚次郎「山中式土器について」（『山中遺跡』、愛知県埋蔵文化財センター、1992年）

・　第11回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会編『伊勢湾岸における弥生時代後期を巡る諸問題　山中式の成立と解体』（2004年）

竪穴住居

遺構番号	性格	時期	地区	特徴・形状・計測数値など
SH６	竪穴住居	Ⅰ期	H5、H6	南北3.9m以上、東西2.2m以上。貯蔵穴。54と統合
SH８	竪穴住居	Ⅲ期	H7、I7、H8	南北4.7m、東西3.7m。貯蔵穴。SH20より新。21と統合
SH12	竪穴住居	Ⅲ期	D5、E5、D6	南北3.2m以上、東西2.8m以上。12号墳より新。13と統合
SH17	竪穴住居	Ⅰ期	J8、K8、L8、K9	南北約4.9m、東西1.9m以上
SH18	竪穴住居	Ⅲ期	D8、E8、E9	南北3.8m、東西2.3m以上。
SH20	竪穴住居	Ⅰ期	I6、H7、I7	南北5.5m、東西5.5m以上。カマド。貯蔵穴。24と統合
SH23	竪穴住居	Ⅲ期	E9、F9、E10、F10	南北3.2m、東西2.9m
SH25	竪穴住居	Ⅲ期	D9、CD10、CD11	南北4.8m以上、東西4.5m以上。煙道。貯蔵穴
SH26	竪穴住居	Ⅲ期	L9、M9、L10、M10	南北5.4m、東西2.2m以上。SH27より新
SH27	竪穴住居	Ⅲ期	K10、L10	南北約4.1m、東西1.0m以上。カマド。SH26より古
SH36	竪穴住居	Ⅰ期	F11、G11、F12、G12	南北4.7m、東西3.0m以上。貯蔵穴
SH41	竪穴住居	Ⅰ期	K14、L14、K15、L15	南北約5.4m、東西2.0m以上。貯蔵穴
SH47	竪穴住居	Ⅰ期	K27、L27、K28、L28	南北3.9m、東西2.6m以上。貯蔵穴。
SH60	竪穴住居	Ⅰ期	H11、G11	南北2.9m以上。SH36より古
SH301	竪穴住居	Ⅰ期	M18、N18、M19、N19	南北5.8m、東西4.0m以上。貯蔵穴
SH305	竪穴住居	Ⅲ期	L16、M16、L17、M17	南北約5.0m、東西約4.3m以上
SH306	竪穴住居	Ⅲ期	L18、M18	南北2.9m、東西2.8m以上
SH314	竪穴住居	Ⅰ期	J15、I16、J16	南北5.6m、東西2.3m以上。貯蔵穴
SH321	竪穴住居	Ⅲ期	H16、I16	南北4.0m、東西3.0m。カマド・煙道。貯蔵穴
SH322	竪穴住居	Ⅲ期	H16	南北3.2m以上、東西1.5m以上。SH323より古
SH323	竪穴住居	Ⅲ期	G16、H16	南北4.3m、東西3.6m以上。15号墳より新
SH324	竪穴住居	Ⅲ期	H15、I15、H16、I16	南北約4.0m、東西1.6m以上
SH332	竪穴住居	Ⅲ期	E21、F21	南北約3.8m、東西約3.3m以上。SH333より古
SH333	竪穴住居	Ⅲ期	E22、F22	南北約3.1m、東西2.9m。SH332より新
SH335	竪穴住居	Ⅲ期	C22、D22	南北3.7m、東西2.7m以上
SH337	竪穴住居	Ⅰ期	D24、D25、D26	南北6.0m、東西3.0m以上。貯蔵穴
SH338	竪穴住居	Ⅰ期	F23、F24、G24、F25	南北6.5m、東西4.0m以上。貯蔵穴
SH340	竪穴住居	Ⅰ期	C24、D24	南北3.9m、東西2.2m以上。SH337より古
SH342	竪穴住居	Ⅲ期	I19、I20	南北約3.5m、東西約1.5m以上、カマド、貯蔵穴
SH343	竪穴住居	Ⅲ期	H20、G21、H21	南北約4.2m、東西3.4m。カマド
SH350	竪穴住居	不明	I21	南北3.2m以上、東西1.5m以上
SH352	竪穴住居	Ⅰ期	H25、I25、H26、I26	南北2.3m以上、東西3.1m以上。貯蔵穴。354と統合
SH360	竪穴住居	Ⅰ期？	H27、H28	南北2.6m以上、東西0.5m以上
SH361	竪穴住居	Ⅰ期	I27	南北3.0m以上、東西1.4m以上
SH368	竪穴住居	Ⅰ期	F17、G17、F18、G18	南北2.7m以上、東西約5.4m。貯蔵穴
SH370	竪穴住居	Ⅰ期	C18、C19	南北1.2m以上、東西6.6m以上。貯蔵穴
SH371	竪穴住居	Ⅰ期？	C16、C17	東西1.0m以上
SH373	竪穴住居	Ⅲ期？	I17、H17	南北5.2m以上。SD362より古

方形周溝墓

遺構番号	性格	時期	地区	旧遺構名・特徴・形状・計測数値など
SX302	方形周溝墓	Ⅰ期	K～N20・23、J～N21・22	改称前４号墳。南北10.0m・東西10.2m。埋葬施設長軸5.9m、短軸0.9m。
SX351	方形周溝墓	Ⅰ期	GH21・24、GHI22・23	南北9.2m、東西9.1m

第２表　天王山遺跡・古墳群遺構一覧表（1）

古墳および関連遺構

遺構番号	性格	時期	地区	旧遺構名・特徴・形状・計測数値など
１号墳	古墳	Ⅱ－ａ期	B～E27、B～F28・29・30 CDE31	円墳。径17.0m。 埋葬施設長軸5.0m、短軸2.2m。
11号墳	古墳	Ⅱ－ｂ期	D18、EF18、D19、DE20	改称前SX328。円墳。径9.5m。15号墳より古。
12号墳	古墳	Ⅱ－ｃ期	F5、D6、E6、F6	改称前SX11。方墳。南北7.0m、東西2.2m以上。 53と統合。
13号墳	古墳	Ⅱ－ｃ期	JK12、JK13、K～N14	改称前SX37（40と統合）。方墳？ 南北約11.0m、東西11.0m以上。
14号墳	古墳	Ⅱ－ｃ期	J13、IJ14、HI15	改称前SX39。方墳。南北11.2m、東西10.0m以上。
15号墳	古墳	Ⅱ－ｃ期	EFG16、D～G17・18・19	改称前SX316。南北約12.6m、東西約8.6m。 埋葬施設長軸2.5m以上、短軸1.5m。
16号墳	古墳	Ⅱ－ｃ期	CD20、CD21、C22	改称前SX329。方墳。南北6.5m、東西3m以上。
SX30	古墳？	Ⅱ－ｃ期	J9、J10、I11、J11	方墳？南北約8.5m、東西4.8m以上。
SX31	古墳？	Ⅱ－ｃ期？ Ⅲ期？	J11、K11	南北5.5m以上、東西1.0m以上。 Ⅲ期の区画溝の可能性あり。
SX38	古墳？	Ⅱ－ｃ期	K～N13	南北11.0m以上。13号墳より古。
SX318	古墳？	Ⅱ－ｃ期	Ｌ15、LM16、LM17	改称前３号墳。方墳？
SK51	土坑	Ⅱ－ｃ期	I13、I14	SX39に伴う。楕円形。約南北1.7m、東西約2.0m。

掘立柱建物

遺構番号	性格	時期	地区	特徴・形状・計測数値など
SB１	掘立柱建物	Ⅲ期	F4、G4、G5	南北２間、東西１間。側柱建物。
SB２	掘立柱建物	Ⅲ期	G5、H5、G6	南北３間以上、東西２間。総柱建物。
SB３	掘立柱建物	Ⅲ期	K6、JKL7、JK8	南北３間、東西３間。総柱建物。
SB46	掘立柱建物	Ⅲ期	DE11、DE12、EF13	南北２間、東西4間。側柱建物。
SB49	掘立柱建物	Ⅲ期	J9、IJ10、IJK11	南北２間、東西４間。側柱建物。SB50より古。 SX30より新。
SB50	掘立柱建物	Ⅲ期	I9、J9、IJK10・11	南北２間、東西３間。側柱建物。32と統合。 SB49より新。SX30より新。
SB52	掘立柱建物	Ⅲ期	L13、M13、L14、M14	南北３間、東西4間。総柱建物。
SB55	掘立柱建物	Ⅲ期	L13、K13、L14、K14	南北２間、東西３間。側柱建物。
SB56	掘立柱建物	Ⅲ期	JI14、JIH15、HI16	南北６間、東西３間。側柱建物。SH324より新。
SB57	掘立柱建物	Ⅲ期	L16、M16、L17、M17	東西４間、南北２間？側柱建物。 SH305・SH306より新。309と統合。
SB365	掘立柱建物	Ⅲ期	I18、H19、I19	南北２間、東西２間。側柱建物。SH365より新。
SB366	掘立柱建物	Ⅲ期	J18、k18、J19、K19	南北２間、東西２間。総柱建物。

柱列

遺構番号	性格	時期	地区	特徴・形状・計測数値など
SA58	柱列	Ⅲ期	J8、I8、I9	南北に５間
SA59	柱列	Ⅲ期	L17・18・19・20、MN20	南北２間以上、東西４間以上。

土坑

遺構番号	性格	時期	地区	特徴・形状・計測数値など
SK７	土坑	Ⅲ期	G6、H6	長円形。長軸3.8m、短軸3.1m。深さ0.4m
SK９	土坑	Ⅲ期	I7	長円形。長軸2.0m、短軸0.5m以上。深さ0.4m
SK10	土坑	Ⅲ期	I7、J7	円形。径1.2～1.4m。SK９より新
SK14	土坑	不明	H6、I6	円形。長軸2.4m、短軸2.3m。深さ0.4m
SK15	土坑	Ⅰ期	J8、K8、L8	不整形。長軸4.3m、短軸4.0m以上。深さ0.4m
SK16	土坑	Ⅲ期	I9、J9	不整形。長軸3.8m

第３表　天王山遺跡・古墳群遺構一覧表（2）

SK19	土坑	Ⅲ期	G7、k8、H8	楕円形。径2.5m
SK22	土坑	Ⅲ期	J9	長楕円形。長軸1.4m、短軸1.1m。深さ0.1m
SK28	土坑	Ⅲ期	M10	長楕円形。長軸3.0m、短軸2.6m。深さ0.3m
SK29	土坑	Ⅲ期	L10	不整形。長軸3.0m、短軸1.7m。深さ0.4m
SK33	土坑	Ⅲ期	H11、I11、H12、I12	不整形。長軸2.0m、短軸1.5m。深さ0.3m
SK34	土坑	Ⅲ期	I11	円形。径1.2m
SK42	土坑	Ⅲ期	J14、J15	不整形。長軸2.5m、短軸1.8m。深さ0.2m
SK43	土坑	Ⅲ期	H11、H12	円形。直径1.2m。深さ1.6m
SK45	土坑	Ⅲ期	J14、K14	不整形。長軸1.9m。深さ1.0m。14号墳と重複
SK303	土坑	Ⅲ期	K19、L19	不整形。長軸4.0m、短軸2.8m。深さ1.0m
SK304	土坑	Ⅰ期	J17、K17、K18	長円形。長軸6.0m、短軸3.2m
SK307	土坑	Ⅲ期	M17、N17、M18、N18	長円形。長軸3.7m、短軸1.9m
SK308	土坑	Ⅰ期	K18	長円形。長軸1.7m、短軸径0.9m
SK311	土坑	Ⅲ期	L19、M19	不整形。長軸2.6m、短軸2.5m。深さ0.3m
SK313	土坑	Ⅲ期	L23、M23、L24、M24	長円形。長軸4.8m、短軸2.9m。SX302より新
SK315	土坑	Ⅲ期	M19、N19	不整形。長軸2.6m、短軸2.3m。深さ0.3m
SK317	土坑	Ⅲ期	M19、M20	楕円形。径1.1～1.3m。
SK319	土坑	不明	I18	楕円形。径1.2m
SK320	土坑	不明	I16	不整形。長軸2.2m、短軸0.5m。SH321より新
SK325	土坑	Ⅲ期	J15、K15	不整形。長軸1.8m。深さ0.3m
SK326	土坑	Ⅲ期	J19	不整形。長軸5.4m、短軸2.1m。深さ0.3m
SK327	土坑	Ⅲ期	D15、D16	長楕円。長軸3.2m、短軸1.6m。深さ0.45m
SK330	土坑	Ⅰ期	D21、D22	不整形。長軸2.0m、短軸1.9m
SK331	土坑	不明	F21	不整形。長軸1.1m、短軸1.1m。深さ0.2m
SK334	土坑	不明	E21、E22	不整形。長軸1.7m、短軸0.5m。深さ0.3m
SK341	土坑	Ⅲ期	G19、H19	長楕円。長軸3.1m、短軸1.6m。深さ0.3m
SK344	土坑	Ⅲ期	I20、H21、I21	不整形。長軸2.8m、短軸1.9m。深さ0.3m。345と統合
SK346	土坑	Ⅲ期	J20、J21	長楕円形。長軸1.2m、短軸0.6m。深さ0.2m
SK347	土坑	Ⅲ期	F20、G20、F21、G21	不整形。長軸3.3m、短軸3.0m。深さ0.2m
SK349	土坑	不明	F23	不整形。長軸1.8m、短軸0.9m。深さ0.2m
SK355	土坑	不明	F20	長形。長軸1.8m、短軸0.6m。深さ0.2m
SK356	土坑	不明	J22、J23	長楕円形。長軸1.8m、短軸0.6m。深さ0.2m
SK357	土坑	不明	F20	楕円形。長軸1.9m、短軸1.1m。深さ0.2m
SK358	土坑	不明	H21、I21	長楕円形。長軸2.9m、短軸0.9m。深さ0.5m
SK364	土坑	不明	F27、F28	不整形。長軸1.5m、短軸1.1m。深さ0.2m

溝

遺構番号	性格	時期	地区	特徴・形状・計測数値など
SD4	溝	不明	J6、K6、I7、J7、H8	幅0.4m。SH8より新
SD5	溝	Ⅲ期	EFG4、DE5	幅1.1m。SH12より新、SB1より古
SD35	溝	不明	H9、HI10、I11、I12	幅0.3m。SD392より新
SD48	溝	不明	M24、L25、M25	幅0.8m
SD312	溝	不明	N16	幅0.4m
SD339	溝	Ⅰ期	E23、F23、E24	幅1.7m
SD348	溝	不明	G20	幅0.8m
SD359	溝	不明	C25、C26、C27	方形周溝墓もしくは古墳の可能性あり
SD362	溝	Ⅲ期	I16、J16、H17、I17	幅1.2m、区画溝？暗渠排水？。310と統合
SD363	溝	不明	F～I28	幅0.8m。山道。1号墳周溝を切る
SD372	溝	不明	H10、I10	幅0.9m。SD392より古

第４表　天王山遺跡・古墳群遺構一覧表（3）

Ⅳ　調査の成果 － 遺物 －

天王山遺跡・古墳群から出土した遺物の総量は、コンテナバットで192箱である。時期的には弥生時代後期～江戸時代まで及ぶ。弥生時代後期、古墳時代中期、飛鳥・奈良時代の土器類が中心である。なかでも、飛鳥・奈良時代の土師器・須恵器が大部分を占めており、ＳＫ303は硯を含むなど器種および量ともに出土遺物が豊富である。また、天王山古墳群のうち、１号墳の埋葬施設からは、蛇行剣・鉄鏃などの鉄製品が一括して出土している。

以下、弥生時代の遺構、古墳、飛鳥・奈良時代の遺構というように節を立て、出土遺物を遺構単位に記述する。なお、飛鳥・奈良時代の須恵器・土師器の器種の名称については、旧奈良国立文化財研究所の分類を参考にしている[(1)]。また、個々の土器の詳細については遺物観察表（第５～21表）を参照されたい。

１　弥生時代の遺構出土遺物

方形周溝墓ＳＸ302南側周溝出土遺物（１～39）　当周溝出土遺物は比較的まとまりの良い状態で出土した。この周溝からは壺・甕・高杯・ミニチュア土器などが出土している。

１～11は壺である。１は頸部から胴部上半部にかけての外面に刺突文・櫛描直線文・扇状文が施されており、口縁部はやや内湾している。４・５は広口壺である。４は口縁端部の内外に刺突文が施され、５は口縁部外面に円形浮文が付き、内面に波状文が施されている。また、10には櫛描直線文と刺突文が交互に施され、11には波状文が施されている。

12～23は甕である。12は受口状の口縁部をもち、体部外面にはタタキが施されている。13～18は「く」の字状の口縁をもつ。19は短頸の甕である。頸部には２箇所にわたり孔が穿たれている。21～23は台付甕の脚台である。

24～37は高杯である。24・25は口縁部が強く外反し、脚部は細く長い。26は口縁部が外反し、脚部はやや短い。24などと比べると全体的にシャープさに欠ける。27・28はワイングラスの形を呈する高杯である。29の口縁端部は内側に肥厚している。30～34は口縁部が強く外反する高杯の脚であろう。35～37は、短脚の形態から察すると、ワイングラス形の高杯の脚であろう。38・39はミニチュア土器。

方形周溝墓ＳＸ302東側周溝出土遺物（40～49）　壺・甕・高杯・器台などがある。40・41は壺である。このうち、40は短頸の壺である。42・43は台付甕。44～48は高杯である。44・45の口縁部は強く外反する。46・47は長脚、48はやや短脚である。49は器台。

方形周溝墓ＳＸ302北側周溝出土遺物（50～58）　壺・甕・高杯などがある。50～53は壺である。このうち、50・51は広口壺である。なかでも50の広口壺は残りが良く、胴部外面や口縁部内面に刺突文・櫛描直線文などが認められる。54～57は甕である。このうち、54・57は台付甕であることが判る。58は高杯である。円形の三方透かしをもち、杯底にあたる部分には中空の脚部の穴を埋めるための円盤充填が認められる。

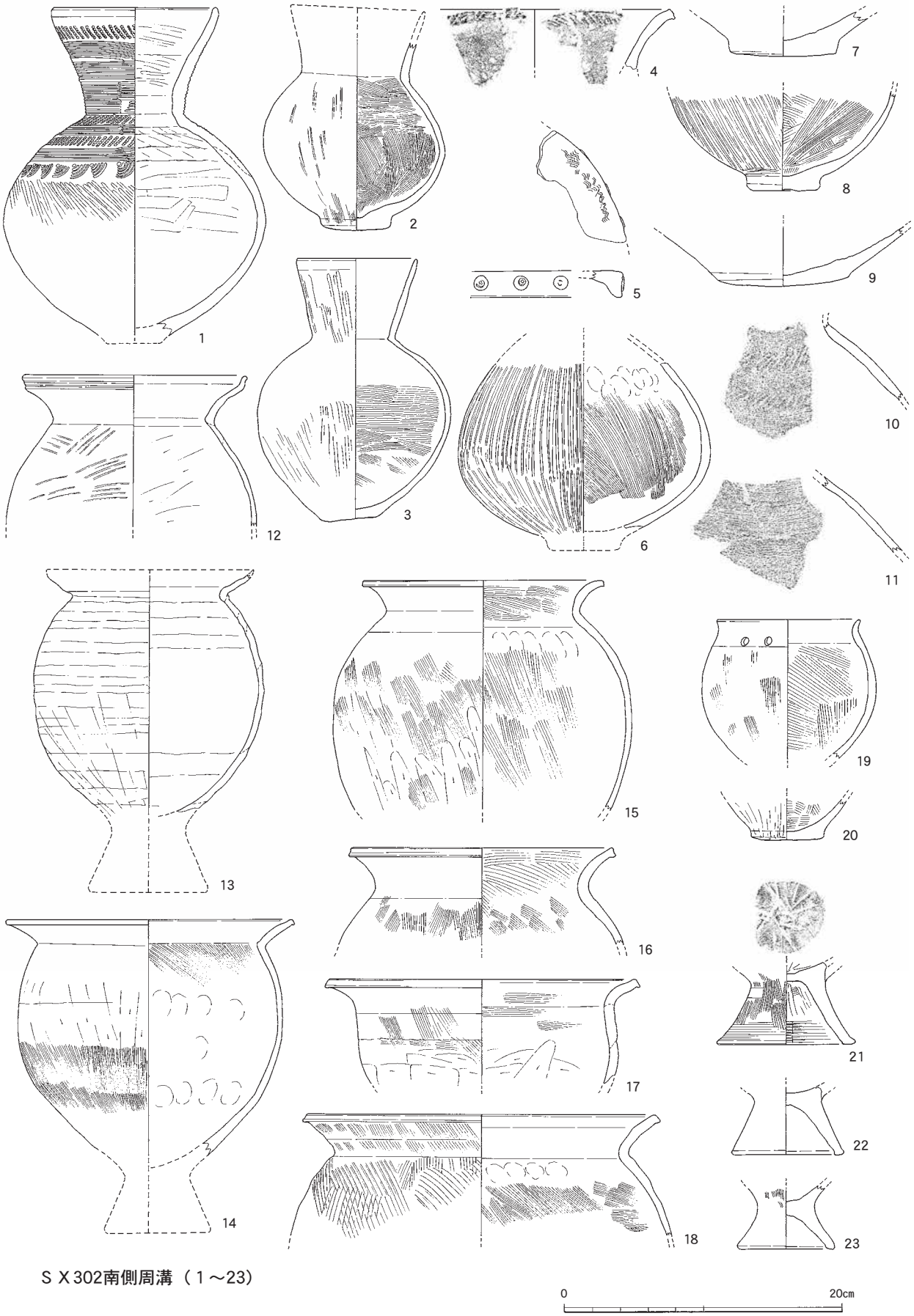
方形周溝墓ＳＸ302西側周溝出土遺物（59～73）　壺・甕・高杯がある。59～62は壺である。59・60は広口壺であり外面にヘラミガキが施されている。63～70は甕である。63・65の口縁部外面にはキザミが施されている。また、68～70は台付甕の脚台である。71～73は高杯である。71には赤色顔料が塗布されている。

方形周溝墓ＳＸ351出土遺物（74）　ＳＸ351出土遺物は極めて少なく、図示できたものは壺１点である。壺（74）は、広口壺であり、外面上半部の一部に赤色顔料が認められる。

竪穴住居ＳＨ17出土遺物（75～80）　壺・高杯などがある。75～77は壺であり、76は口縁部の内外に刺突文が施されている。78は蓋か。79・80は高杯である。79の口縁部は外方に大きく反れ、その外面には波状文や直線文が施されている。

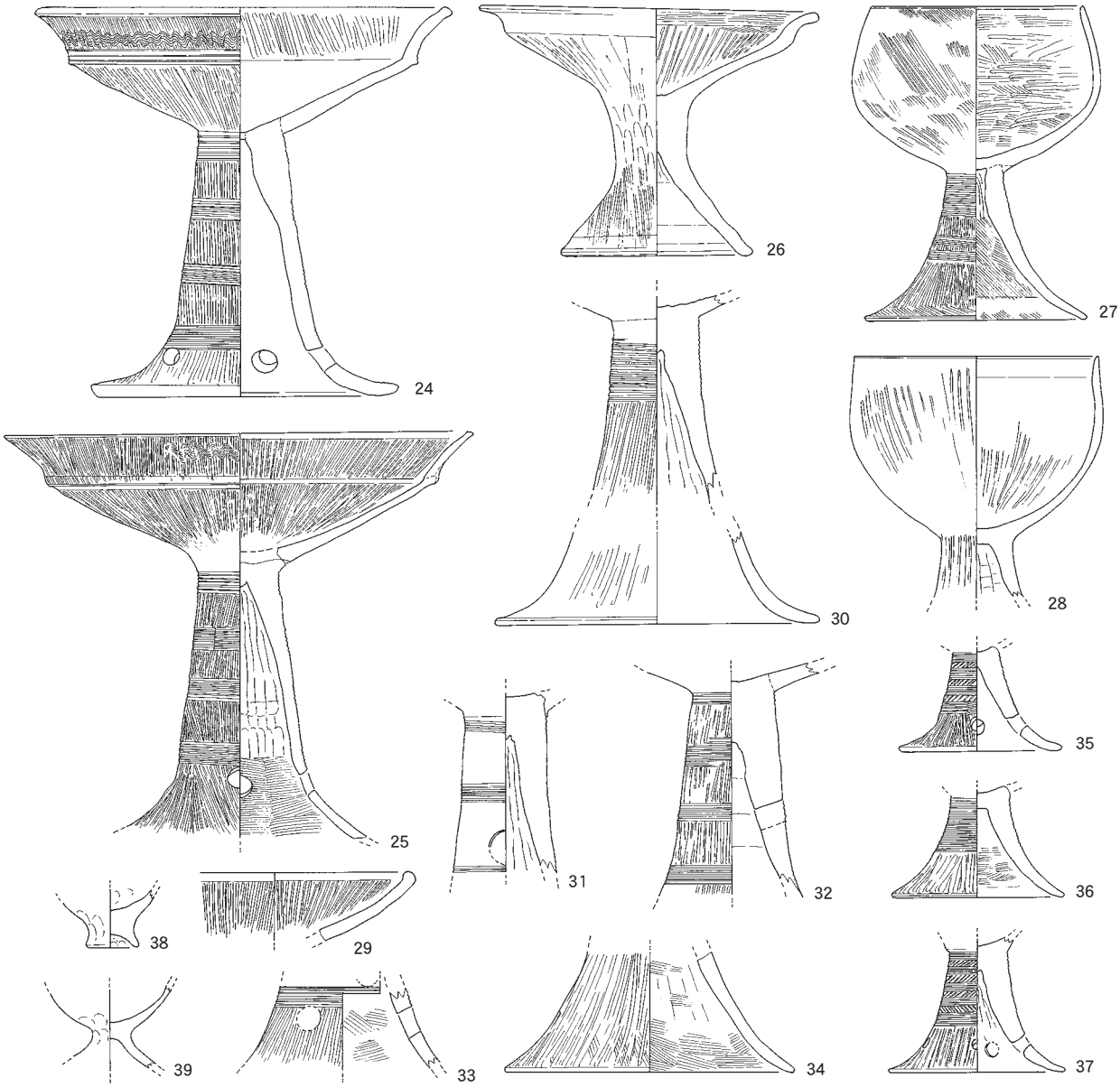
竪穴住居ＳＨ20出土遺物（91・92）　壺２点（91・92）がある。92は外面に刺突文・櫛描直線文が施されている。

竪穴住居ＳＨ36出土遺物（85・86）　壺・高杯が

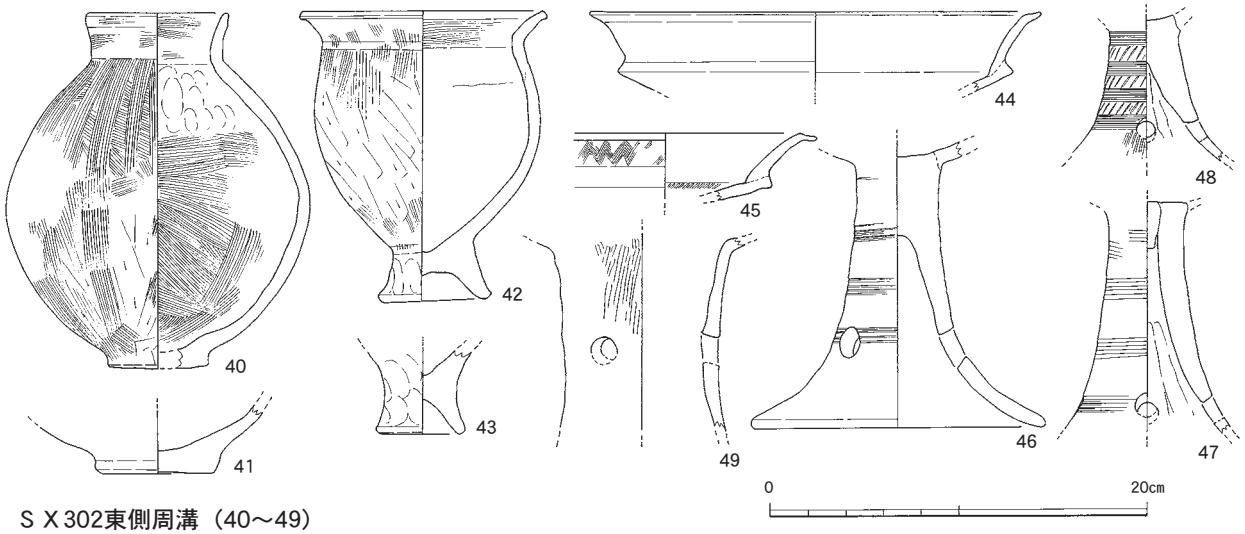


ＳＸ302南側周溝（１～23）

第64図　出土遺物実測図１（１：４）

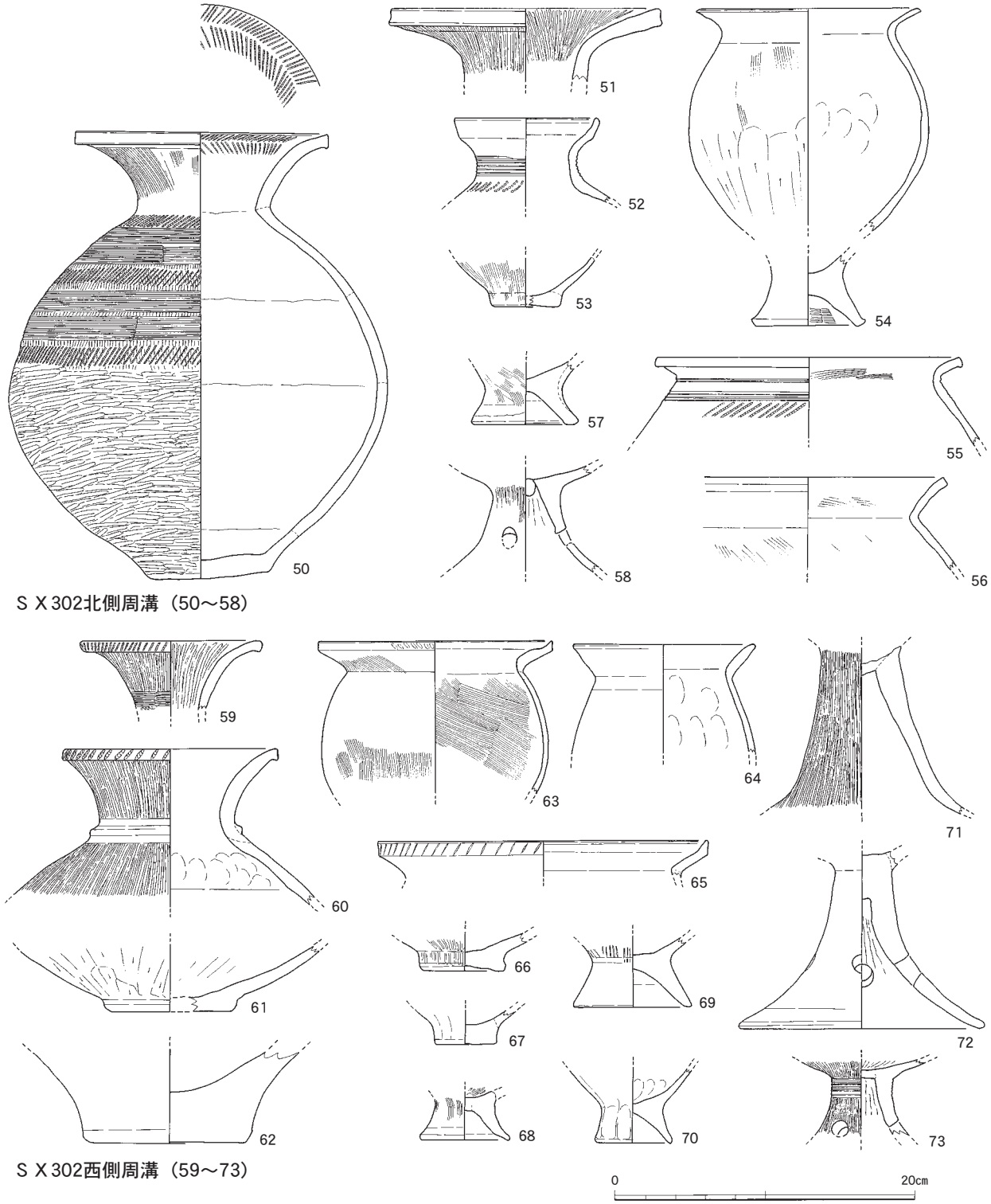


ＳＸ302南側周溝（24～39）



ＳＸ302東側周溝（40～49）

第65図　出土遺物実測図２（１：４）



第66図　出土遺物実測図３（１：４）

ある。85は広口壺であり、外面にはハケメとミガキが施されている。86は高杯の脚部片であり、貯蔵穴から出土した。円形の透かし孔をもつ。

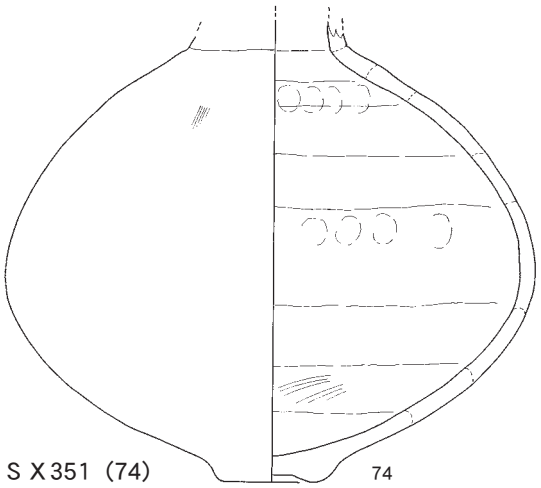
竪穴住居ＳＨ47出土遺物（81～84）　壺・甕などがある。81は壺の体部片であり、貯蔵穴から出土している。82は受口状の口縁を呈する甕である。83・84は台付甕の脚台である。

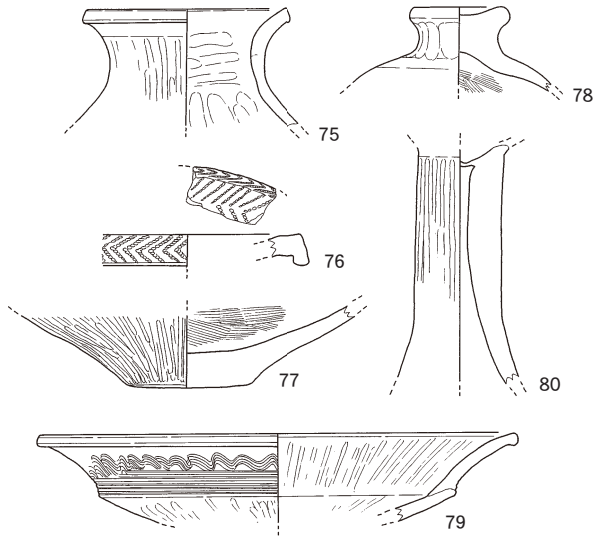
竪穴住居ＳＨ301出土遺物（93～113）　壺・甕・高杯・すり石などがある。93～97は壺である。93・94は広口壺であり、93は外面に櫛描直線文・刺突文・円形浮文、94は櫛描直線文・波状文が施されている。98～103は甕である。98は口縁端部にキザミ

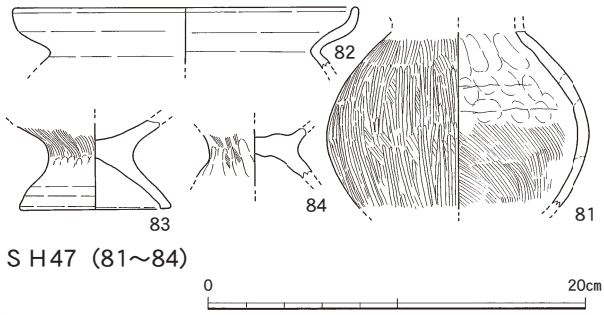
が施されている。101の外面にはハケメの後ミガキが施されている。102・103は台付甕の脚台であり、102は貯蔵穴から出土している。104～112は高杯である。104・105は口縁部が外方に強く反れるものである。106はワイングラスの形態に似る。また、107～109の長脚の製品は口縁部が強く外反している高杯で、110～112の短脚の製品はワイングラス形を呈する高杯と考えられる。113は石皿である。

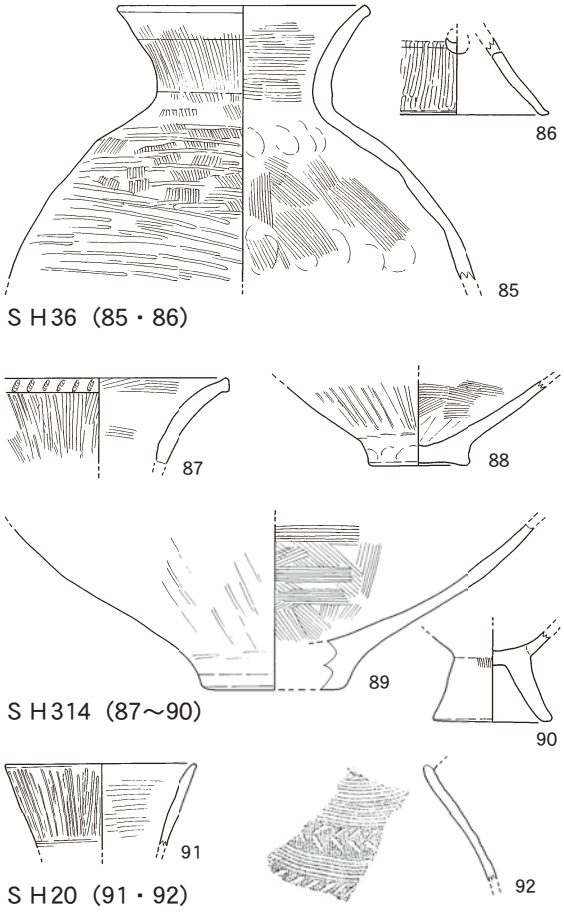
竪穴住居ＳＨ314出土遺物（87～90）　壺・甕がある。87は広口壺であり、口縁端部には刺突文が施されている。88・89は壺底部である。90は台付甕である。

竪穴住居ＳＨ337出土遺物（114～123）　壺・甕・高杯・特殊脚付壺がある。114は壺底部である。115～117は甕である。118～120は高杯である。118・119は外面に波状文と櫛描直線文が施され、口縁部は外方に強く反れている。122は特殊脚付壺である。この特殊脚付壺は貯蔵穴内から出土した。一見、魚に似る形の土器であるが、何をかたどっているのかは不明。体部外面全体にヘラミガキが施されている。体部上部にはラッパ状に開く口縁部と鰭状につまみ上げられた部位が付く。横に長い体部の片側の端は袋状に閉じられており、その反対側の端はやや上向きに開口している。内面上部にはこの土器の長軸に沿って粘土のつなぎ目が認められる。体部底部には脚が付き、内外面ともにヘラミガキが施されている。貯蔵穴から出土したものはこの他、118などがある。

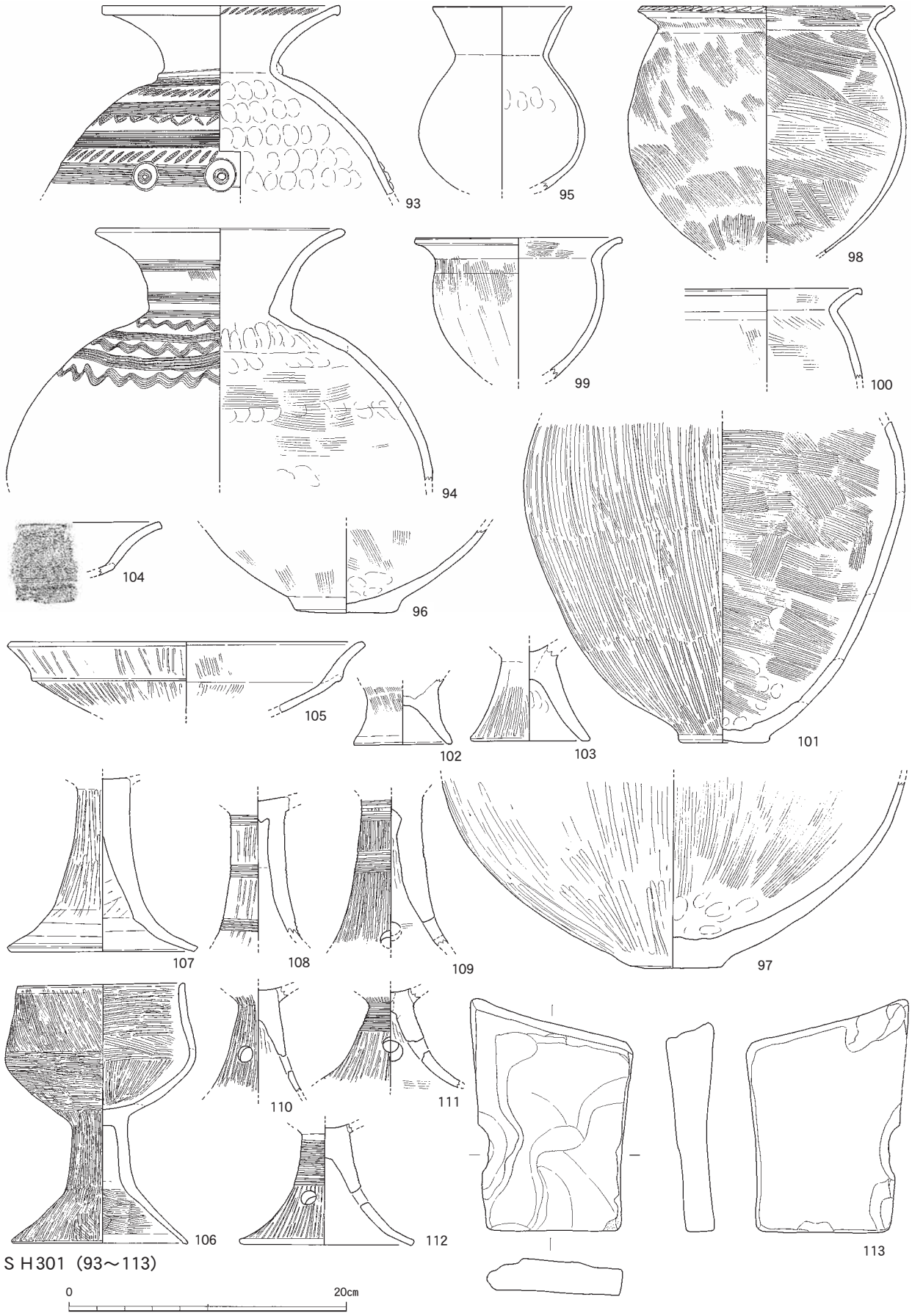




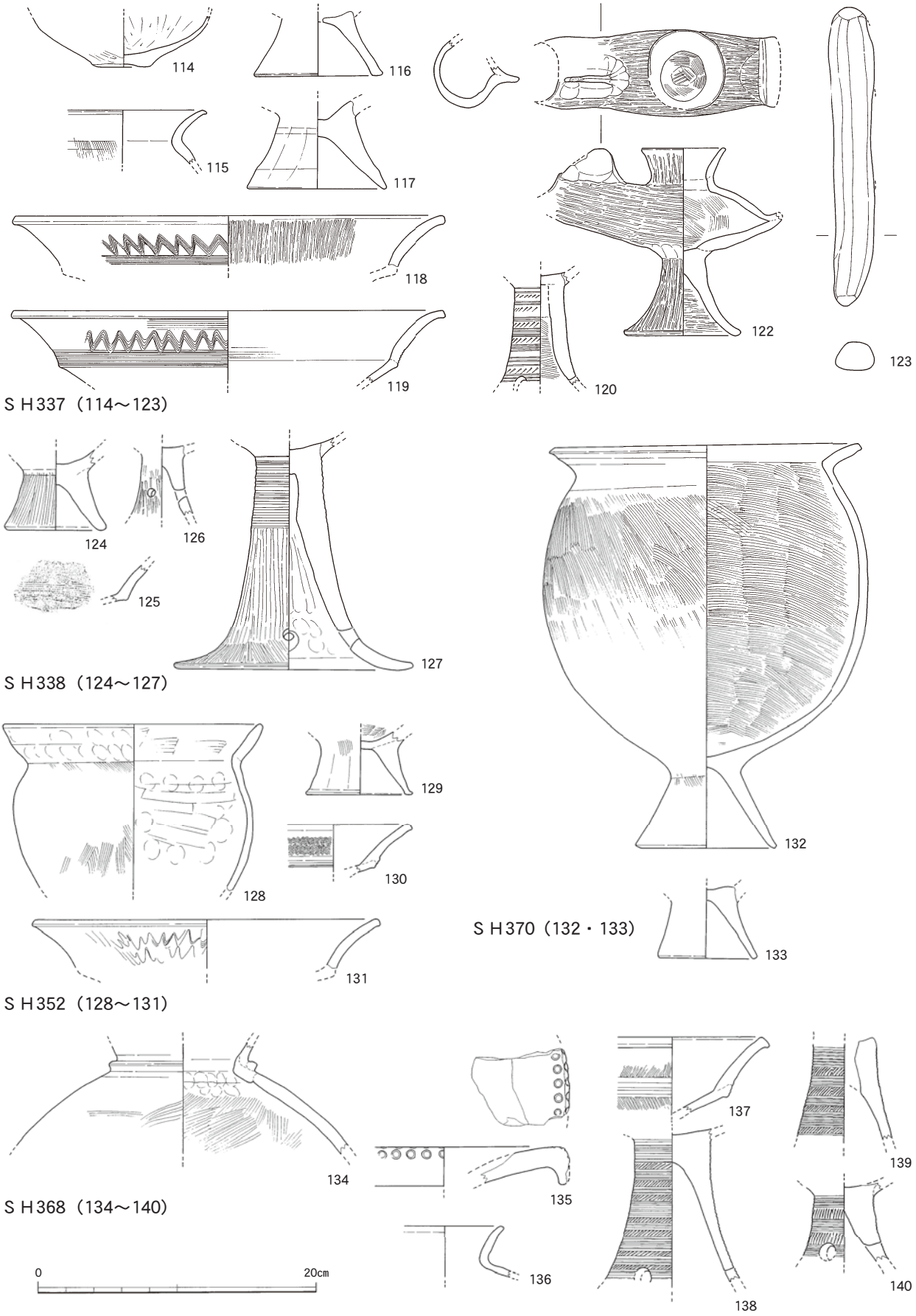




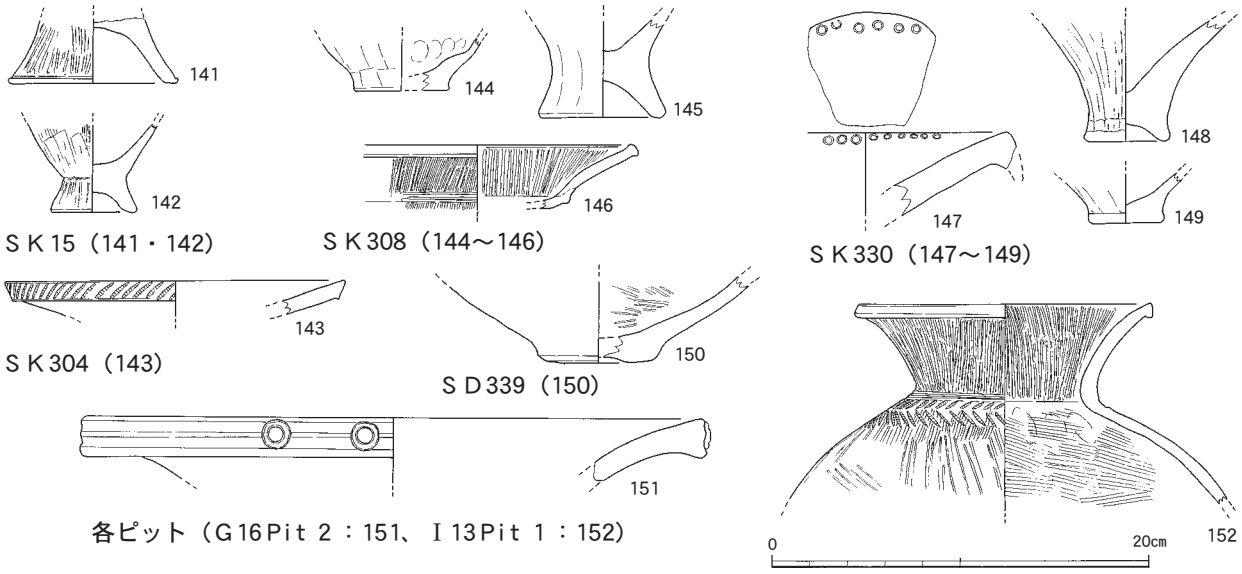
第67図　出土遺物実測図４（１：４）



第68図　出土遺物実測図５（１：４）



第69図　出土遺物実測図６（１：４）



第70図　出土遺物実測図７（１：４）

123は砂岩質で棒状の形をしている。長軸の先端に使用痕らしきものがあるが、自然石と区別がつかない。すり石などと同じように使われていたものと察する。

竪穴住居ＳＨ338出土遺物（124～127）　甕・高杯などがある。124は台付甕である。外面にハケメが施されている。125～127は高杯である。125は貯蔵穴から出土し、波状文と櫛描直線文が施されている。126は三方向の透かしがあり、127は脚部裾付近に四方向の透かしがある。

竪穴住居ＳＨ352出土遺物（128～131）　甕・高杯などがある。128・129は甕である。いずれも貯蔵穴から出土し、128は口縁部が内弯する傾向にある。130・131は高杯の杯部である。口縁部は、外方に強く反れ、波状文が施されている。

竪穴住居ＳＨ368出土遺物（134～140）　壺・甕・高杯などがある。134・135は広口壺である。135の口縁部の内外面には竹管文が認められる。136は甕である。137～140は高杯である。138～140の高杯脚部には直線文と刺突文が交互に施されている。また、138・140は三方透かしをもつ。

竪穴住居ＳＨ370出土遺物（132・133）　甕２点がある。132・133は台付甕である。このうち、132は、残りが良く、内外面にはハケメが施されている。

土坑ＳＫ15出土遺物（141・142）　甕（141・142）２点がある。いずれも台付甕である。

土坑ＳＫ304出土遺物（143）　壺（143）１点がある。口縁部外面には刺突文が施されている。

土坑ＳＫ308出土遺物（144～146）　壺・甕・高杯がある。144は壺の底部。145は台付甕である。146は高杯であり、内外面ともに縦方向のヘラミガキが施されている。

土坑ＳＫ330出土遺物（147～149）　壺・甕などがある。147は広口壺である。口縁部内面に竹管文が施されている。148・149は甕の底部である。

溝ＳＤ339出土遺物（150）　壺（150）１点がある。内面にハケメが施されている。

各ピット出土遺物

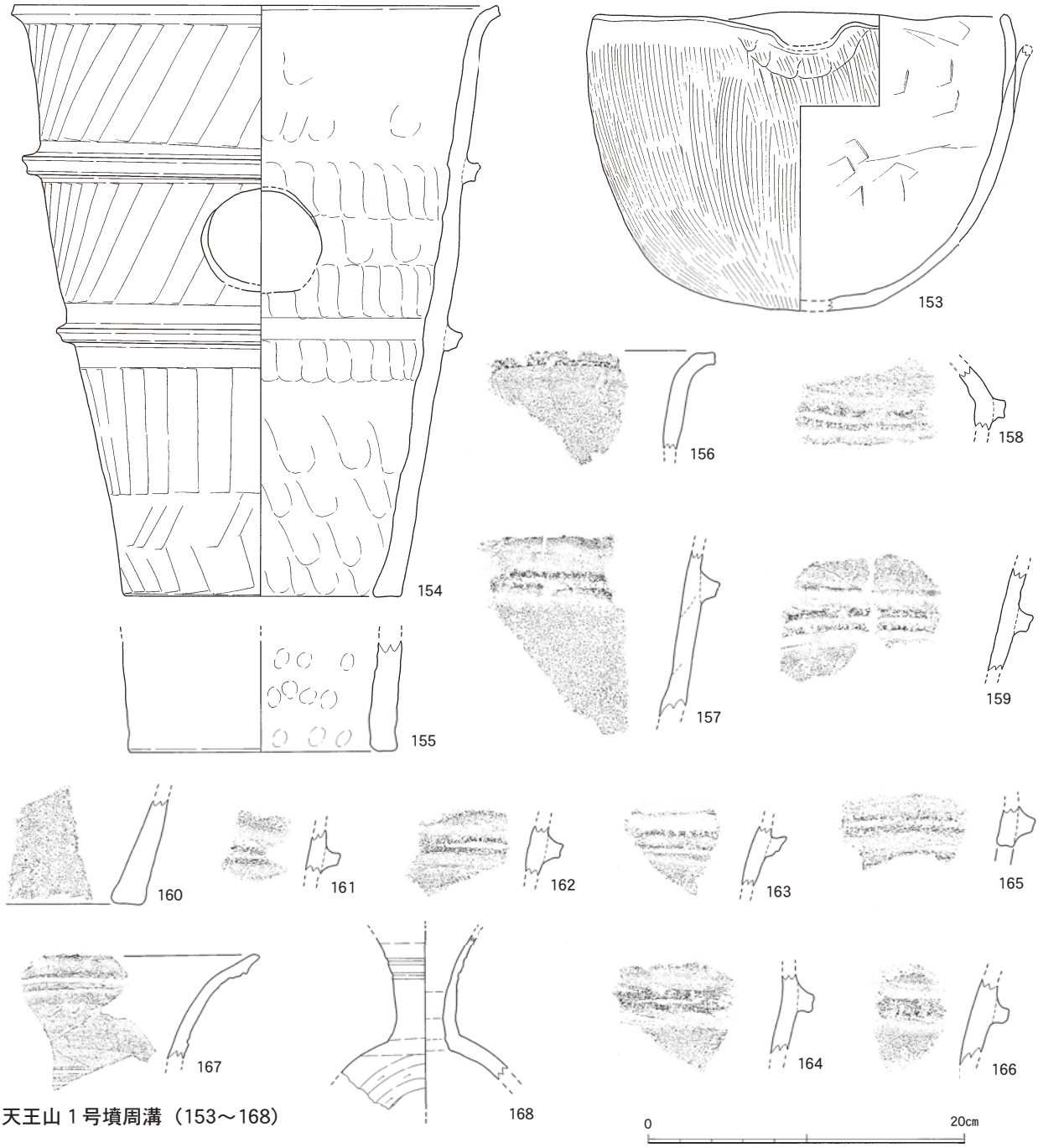
Ｇ16Pit２出土遺物（151）　151は広口壺である。口縁部外面には円形浮文がある。

Ｉ13Pit１出土遺物（152）　152は広口壺である。外面にヘラミガキが施され、さらに胴部上部には羽状の刺突文が施されている。

２　古墳出土遺物

天王山１号墳周溝出土遺物（153～168）　天王山１号墳出土遺物の大部分は南側周溝内より出土している。また墳丘斜面からも出土しているがそれは極めて少ない。墳丘上からは須恵器などの古墳祭祀に伴う遺物は確認できなかった。出土遺物には埴輪、土師器片口鉢、須恵器などがある。

153は土師器片口鉢である。口縁部は磨耗が著しく、水平でないことから察すると、擬口縁である可能性もある。外面には粗いハケメが、内面には工具



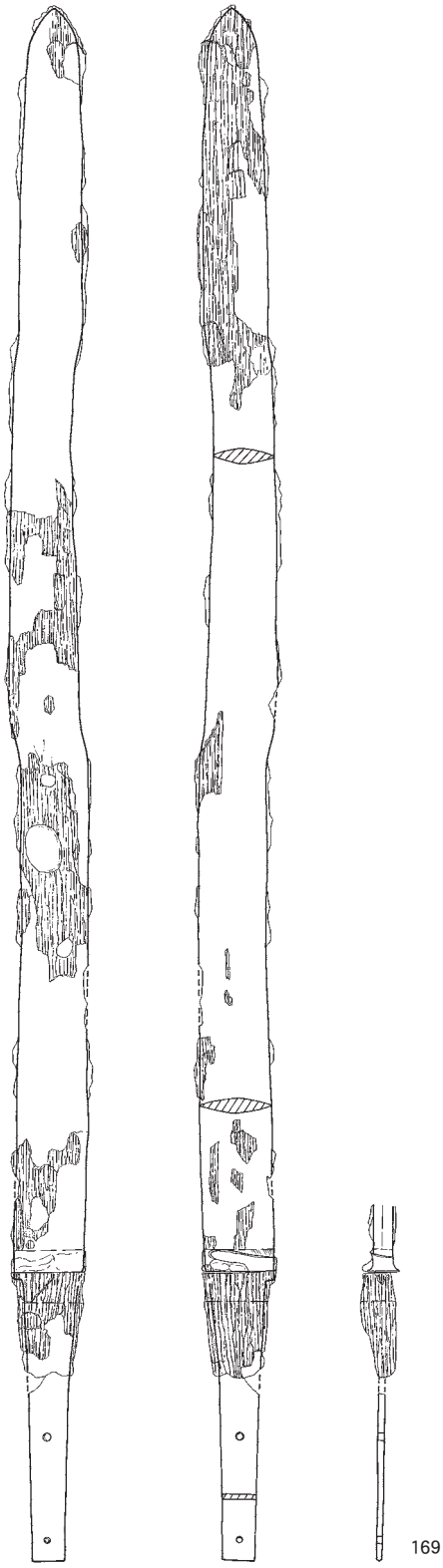
天王山１号墳周溝（153～168）

第71図　出土遺物実測図８（１：４）

ナデが施されている。また注口部および内面下半部全体には赤色顔料が認められ、底ほど沈殿しており濃く残っている。

154は円筒埴輪であり、ほぼ完形に近い。土師質であるが、黒斑は認められない。２つの突帯により３段に区切られており、２段目には二方向の円形の透かし孔がある。口縁部は緩やかに外反し、突帯も比較的高く突出する。また、Ｂ種ヨコハケと考えられる工具の静止痕が認められる。ただし、ハケメは認められない。上位２段には、区間内全体に斜行する静止痕が連続して認められ、その間隔は狭い。最下段には２段にわたる静止痕が認められ、その上位は垂直である。また底部には面取りナデが縦方向に施されている。内面にはナデおよび連続的な指オサエの痕跡がみられる。

155～166は埴輪片で、158は朝顔形埴輪である。156は南側の墳丘斜面より出土し、その他は南側周溝を中心に散在して出土した。



天王山１号墳埋葬施設出土蛇行剣（169）

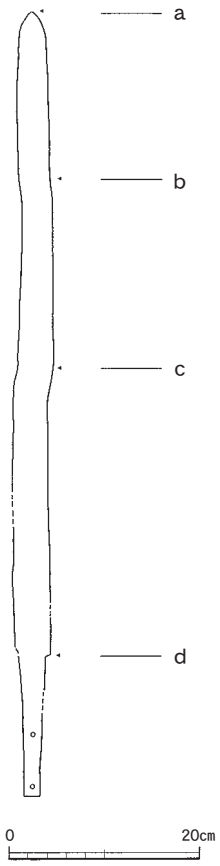
0　20cm

第72図　出土遺物実測図９（１：４）

167は須恵器甕である。口縁部の形状から５世紀後半～末頃のものであろう。168はフラスコ形瓶である。これらの須恵器は東側の周溝から散在的に出土した。168は、１号墳の年代に比べ明らかに新しいものである。周溝が埋まる段階に混入したと考えられる。この他、周溝からは須恵器甕の体部片が多数と器台片が１点出土しているが、なかには新しく感じるものもあり、すべてが１号墳に伴うとするには難しい。

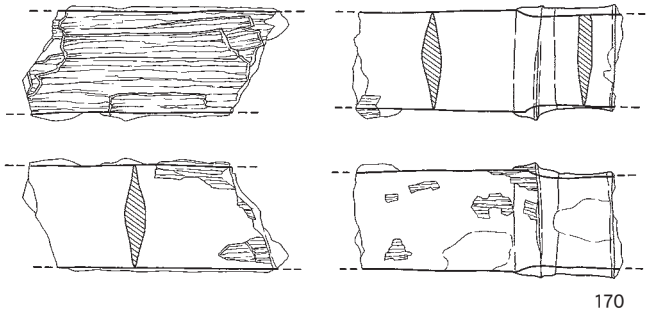
天王山１号墳埋葬施設出土遺物（169～191）　埋葬施設からは、鉄剣２本、鉄鏃21本が出土した。いずれも棺外遺物である。169は蛇行剣である。全長は82.8㎝である。剣身には第73図ｂ・ｃ地点において、２箇所の明瞭な屈曲が認められる[(2)]。ａ－ｂ、ｃ－ｄ間が本体の剣身軸線と考えられる。ただし、ｃ－ｄ間は剣身幅を細めながらｃ屈曲点へ向かい、剣身軸はａ－ｂ、ｃ－ｄ間で微妙に異なる。

茎（部）は、剣身に近いほど太く、茎尻ほど細くなり、茎尻は一文字である。茎部の目釘穴は２箇所確認できる。関は、Ｘ線透過写真の観察から左右段違いになっている可能性があり、片側はやや斜めの角関になっている。もう片側もやや斜めの角関にみえるが、明瞭にみえるものではない。鞘および把の木質が多く認められる。関の辺りは、木質など有機質の残存状態から鞘と把が合わせ口であったことが窺える。また、鋒状の形態をなす木材の痕跡があり、それは把縁から約1.2㎝鞘を受けるために出ている。なお、ここには漆と思われる黒い塗膜状の物質が認められ、これは把縁端部まで及んでいる。

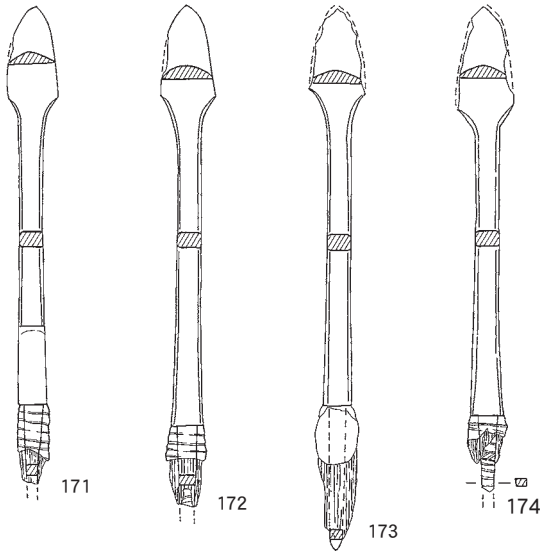


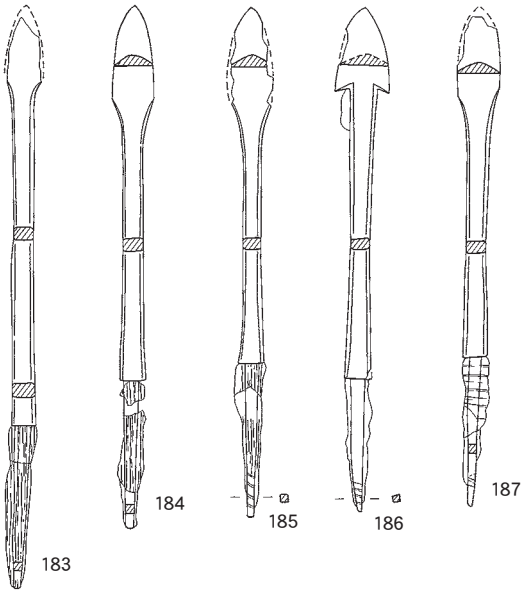
第73図　蛇行剣略図（１：８）

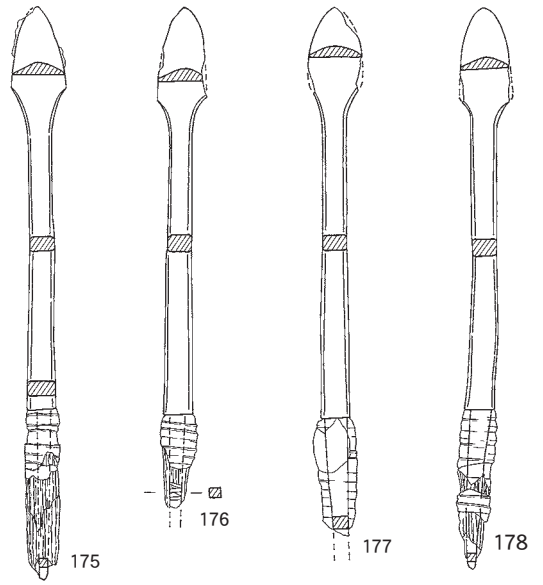
把の両面の木質は方向が異なっている。剣身軸線に対し両面とも斜行しているが、片面は微妙な

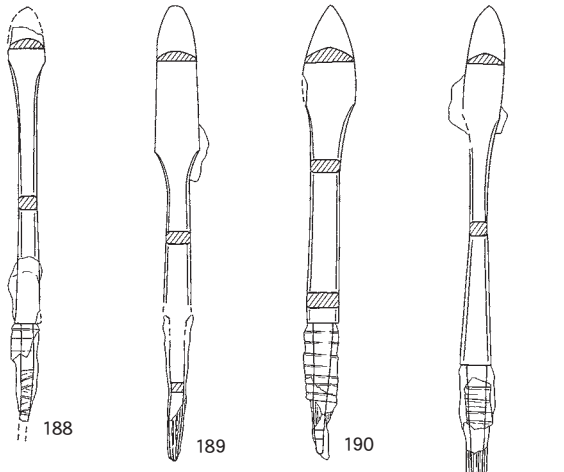


天王山１号墳盗掘排土出土鉄剣（170）

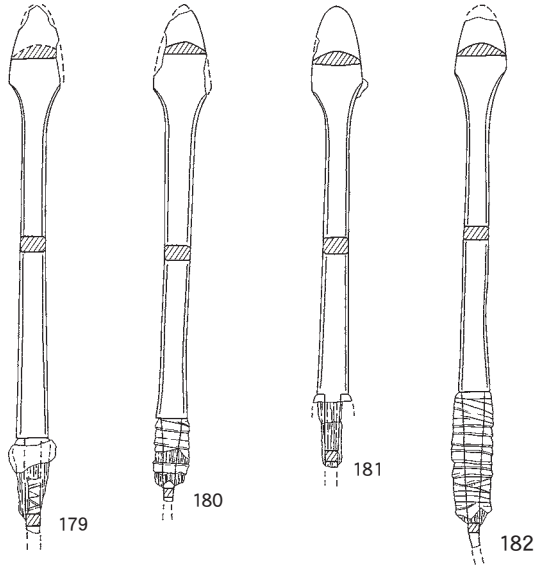








天王山１号墳埋葬施設出土鉄鏃〔No.３〕（183～191）



天王山１号墳埋葬施設出土鉄鏃〔No.２〕（171～182）

0　10cm

第74図　出土遺物実測図10（１：２）

傾きであり垂直に近い。このことから把の構造が２枚合わせの可能性があるが、側面にその合わせ目は確認できない[3]。また把縁には、把縁装具の遺存はないが、把縁端部から約1.6㎝の幅で装具圧痕が認められる。

170は鉄剣で、盗掘排土から出土した。２片あるが、出土地点が同じであることから同一個体と考えられる。鐔は認められない。関は撫関で左右段違いとＸ線透過写真で確認できる。170には木質など有機質が残存しており、鞘端部が立体的に残る。この下には、鞘端部から鞘側に約８㎜、把側に約５㎜の幅で隆起状の物質が認められ、鋒の可能性がある。また、ここから把側へ約1.5㎝の幅で皮革と考えられる物質が認められ、ここには部分的に漆と思われる黒い塗膜状の物質が残る。

171～191は鉄鏃である。計21本出土した。これらの鉄鏃は二つの束になっており、171～182は棺外北から出土した。183～191は棺上に置かれていたと考えられる。171～182の一群は、12本の鉄鏃が束になっていた。いずれも、長頸鏃である。鏃身部の形状はいずれも長三角形であり、関部は撫関である[4]。また、鏃身断面は片丸造に近いものが多い。頸部関は角関ないし台形関である。183～191の一群は、９本の鉄鏃が束になっていた。長頸鏃が主体である。ただし、189・190は頸部が短く、短頸から伸長化していく姿がみられる[5]。鏃身部の形状は189の柳葉形を除き、いずれも長三角形である。鏃身関は撫関が主体であるが、186は逆刺をもつ。鏃身断面は片丸造に近いものが多く、鉄鏃頸部が伸長化する頃まで、一部で鐔が残る柳葉鏃[6]も、当古墳出土例（189）では認められない。頸部関は確認できるもので角関ないしは台形関である。

12号墳出土遺物（192～195）　土師器杯・甕などがあり、周溝から出土している。また、出土遺物のなかには弥生土器壺片なども含まれている。192は土師器杯Ｇである。浅黄橙色に発色し粗雑な製品である。193は土師器甕。内外面にハケメが施され、口縁端部は上方につまみ上げられている。194・195は弥生土器壺片であり、混入と考えられる。

13号墳出土遺物（240～265）　須恵器杯・甕、土師器杯・皿・甕・竈などがあり、周溝から出土している。

240～250は須恵器である。240は杯Ｈ身で、７世紀中葉頃のものであろう。241・242は杯Ｇ身である。いずれも底部ヘラ切り不調整品である。243～246は杯Ｂ身である。このうち、243・244の高台は内端で接地している。247は杯Ｂ蓋である。つまみ天井部は平らである。248は椀であろう。249・250は甕である。このうち250の頸部には沈線と波状文が認められる。

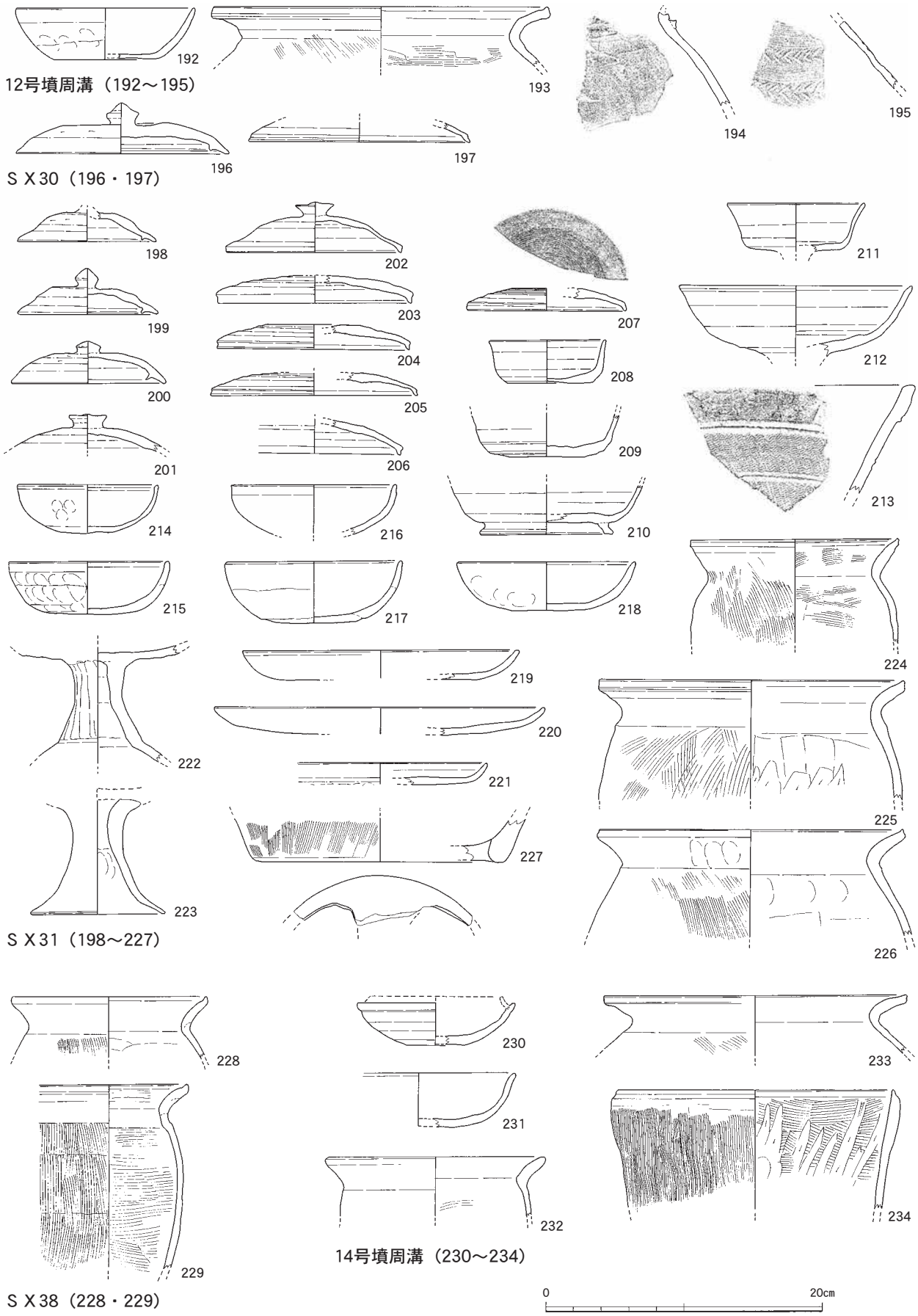
251～262は土師器である。251は杯Ａ。平らな底部であり、口縁部は外方に開く。胎土は橙色に発色し精良であるが、磨耗が著しく調整は不明である。252は皿である。内面に放射状の暗文が認められる。253～260は甕である。外面には縦および斜め方向のハケメ、内面には横方向のハケメが施されているものが多い。いずれも口縁端部は上方につまみあげられている。261は片口鉢とした。ただし、片口部が大きいなど片口鉢とするには疑問が残る。262は竈である。263～265は弥生土器。263・264は高杯、265は甕である。これらは周溝の上層から出土している。

14号墳出土遺物（230～234）　須恵器杯、土師器杯・甕・甑などがあり、周溝から出土している。230は須恵器杯Ｈ身である。受け部径約11㎝の小型の製品である。231は土師器杯Ｇ。椀形に近い形態である。232・233は土師器甕である。口縁部が肥厚し、233の端部は上方につまみあげられている。234は土師器甑である。

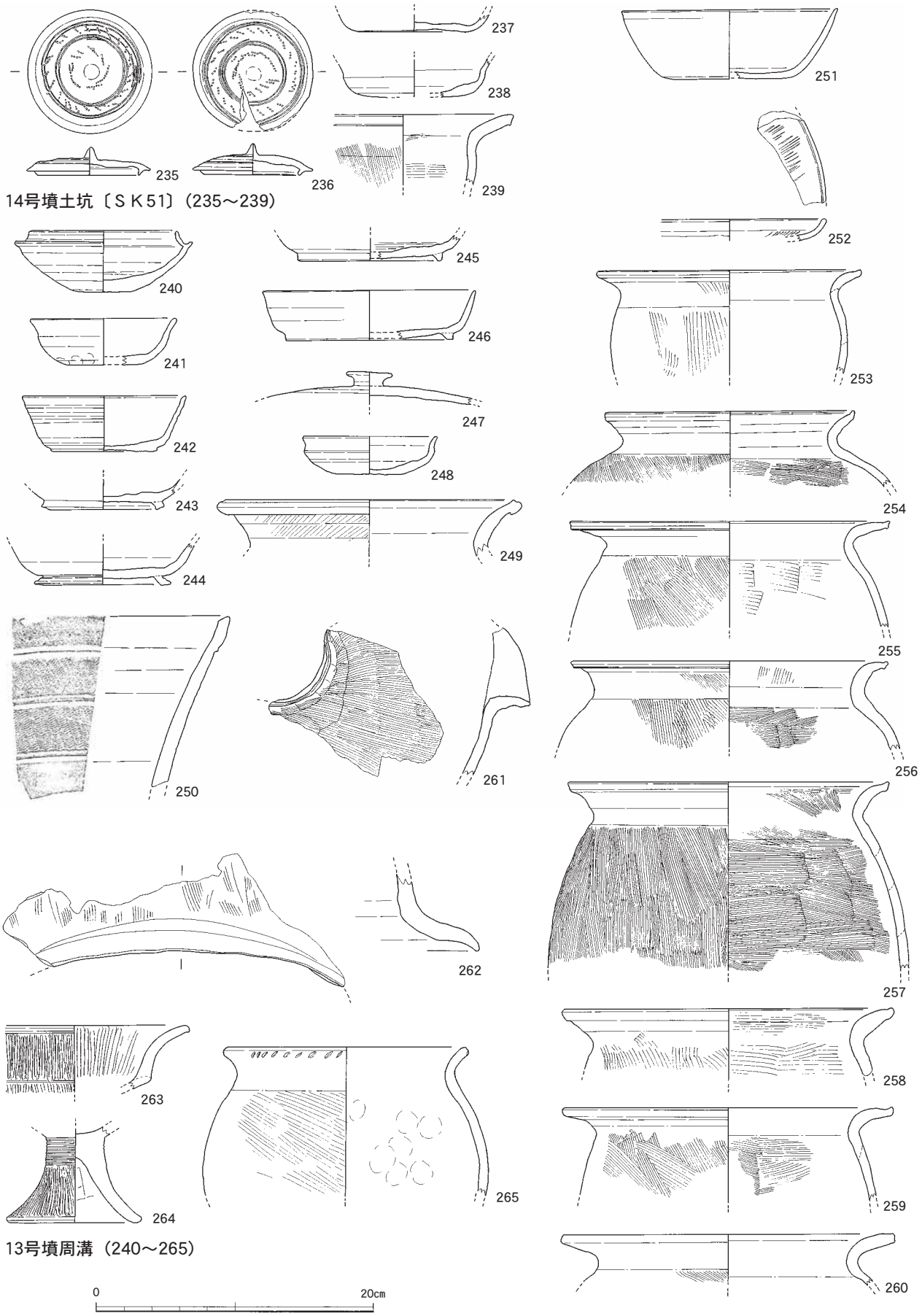
14号墳土坑（ＳＫ51）出土遺物（235～239）　須恵器杯・土師器甕がある。235・236は須恵器杯蓋としたが、壺蓋の可能性もある。天井部には２段にわたる刺突文が施され、つまみは乳頭状を呈する。また内面のかえりは口縁部より下方に突出する。237・238は須恵器杯Ｇ身であろう。239は土師器甕である。内外面にハケメが施され、口縁部は肥厚している。

15号墳出土遺物（266～293）　須恵器杯・椀、土師器杯・高杯・甕・甑などがあり、その大多数は墳丘の表土から出土している。

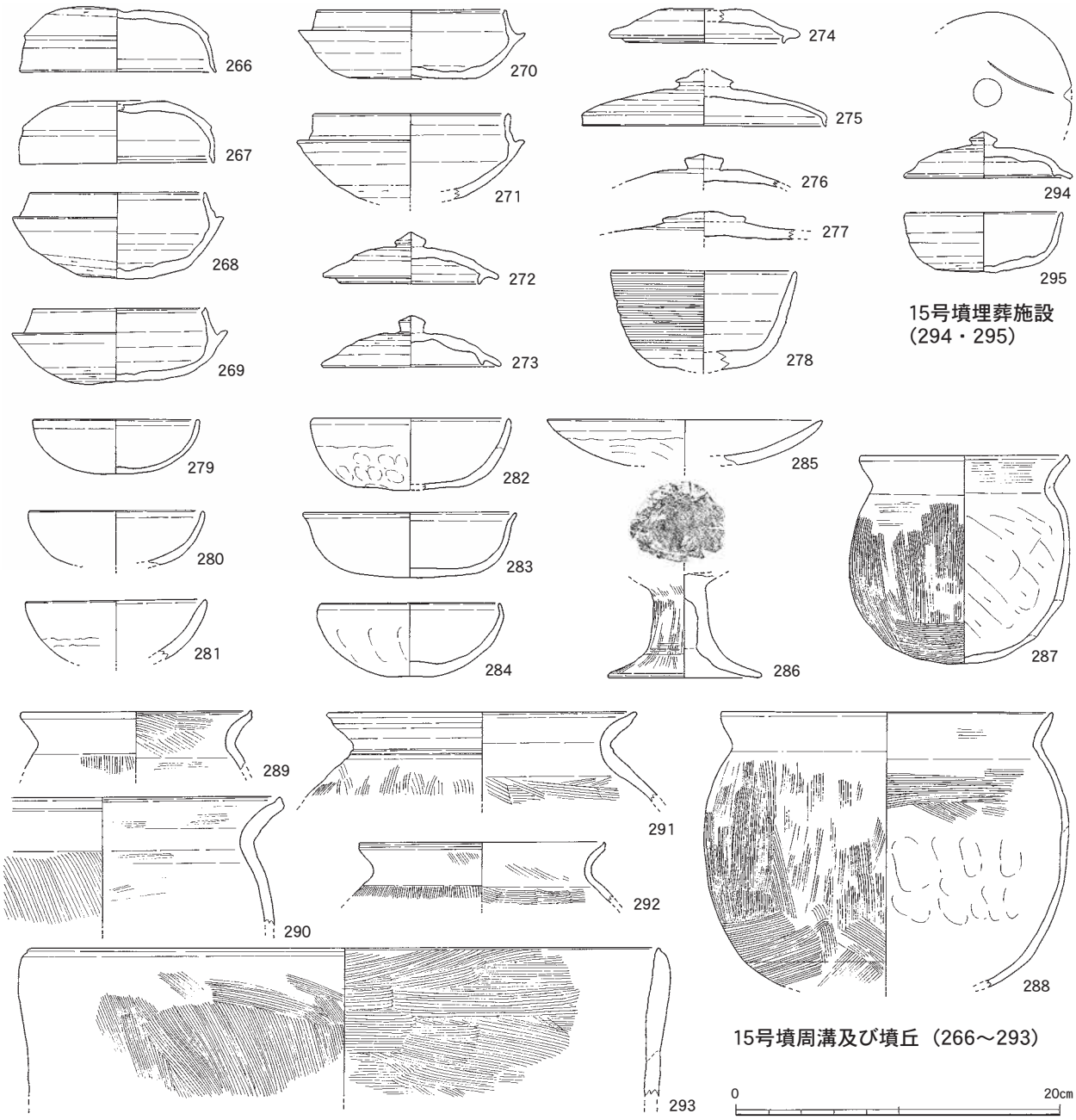
266～278は須恵器である。266～271は杯Ｈで、5世紀末から６世紀前半にかけてのものである。前章で述べたように、本来は11号墳に伴っていたと考えられる。272～277は杯蓋である。272～274は杯



第75図　出土遺物実測図11（１：４）



第76図　出土遺物実測図12（１：４）



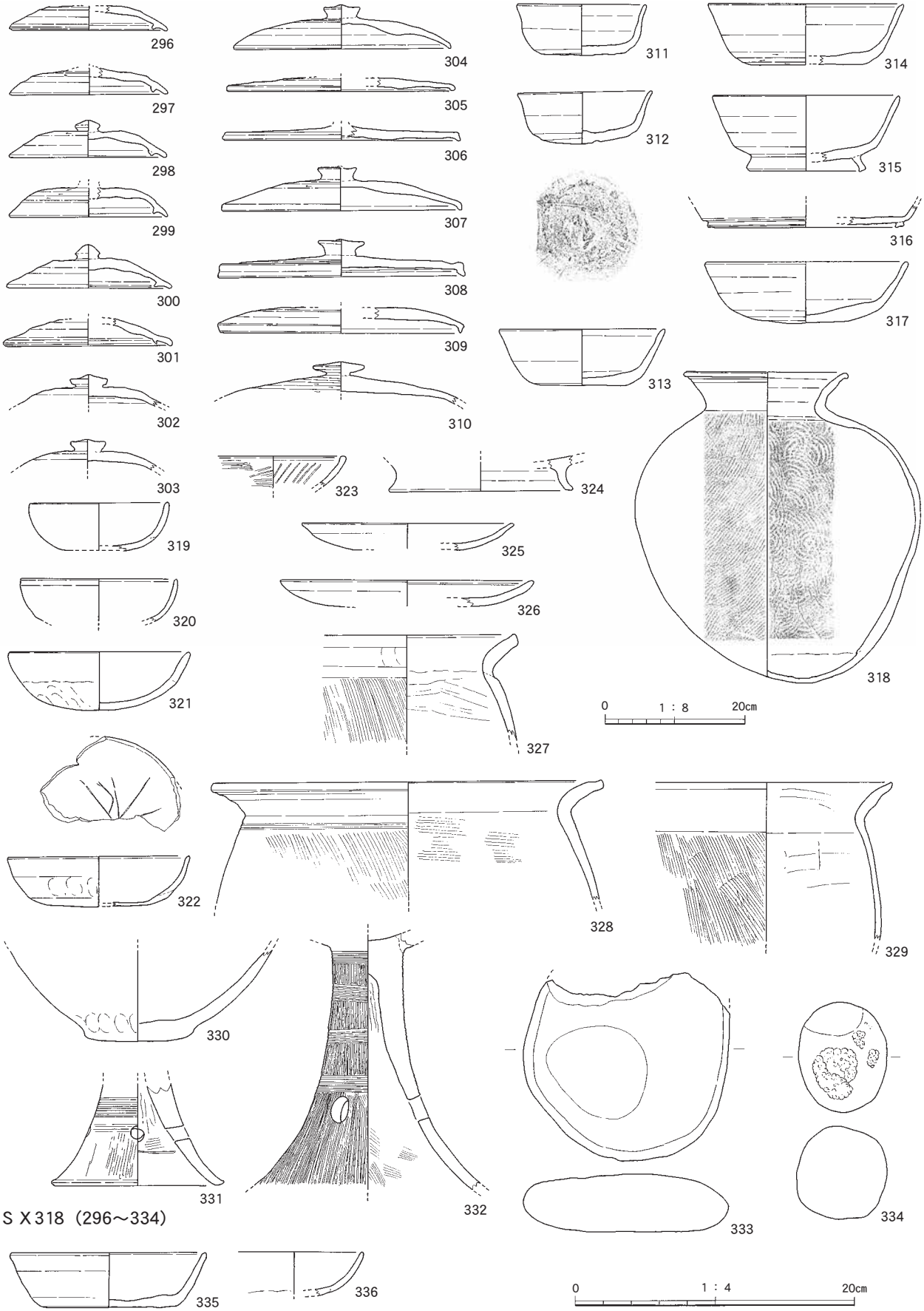
第77図　出土遺物実測図13（１：４）

Ｇ蓋。275は杯Ｂ蓋で、その形態は尾張地域の製品に近似する。278は椀である。外面にはカキメが施されている。

279～293は土師器である。279～284は杯Ｇ。底部付近に粘土紐のつなぎ目がみられたり、砂粒が含まれるなど粗雑な製品が多い。このうち、284は口縁部が内弯し古い様相が認められる。なお、279・284は周溝から出土している。285・286は高杯である。286は中空の脚であり、外面には縦方向のハケメが施されている。また、脚部上面には杯部との接合痕が認められる。287～292は甕である。このうち、287・288は比較的残りが良く、球形に近い胴部をもつ。293は甑である。内外面ともにハケメが施され、口縁部は垂直方向にのび、端部も上方につまみあげられている。

15号墳埋葬施設出土遺物（294・295）　須恵器杯蓋のセット（294・295）である。294は杯Ｇ蓋であり、天井部にヘラ記号が認められる。295は杯Ｇ身である。底部ヘラ切り不調製品である。

ＳＸ30出土遺物（196・197）　ともに須恵器杯Ｂ蓋（196・197）である。196は内面に短いかえりがあり、197はかえりがない。



ＳＸ318（296～334）

ＳＸ318周溝（335・336）

第78図　出土遺物実測図14（１：４、318は１：８）

ＳＸ31出土遺物（198～227）　須恵器杯・高杯・甕、土師器杯・皿・高杯・甕・甑などがある。

198～213は須恵器である。198～207は杯蓋。198～200は内面にかえりがある杯Ｇ蓋。202～207は内面にかえりをもたない杯Ｂ蓋である。207は天井部にカキメが施されている。208～210は杯身である。208・209は杯Ｇ。210は杯Ｂであり、底部には外下方にふんばる高台が付く。211・212は無蓋高杯である。213は甕で、頸部に波状文が施されている。

214～227は土師器である。214～218は杯Ｇ。219～221は皿である。222・223は高杯。222の脚部はナデにより面取りされている。224～226は甕である。外面にハケメが施され、口縁端部は上方につまみあげられている。227は甑である。

ＳＸ38出土遺物（228・229）　土師器甕（228・229）がある。外面にハケメが施され、口縁端部は上方につまみあげられている。

ＳＸ318出土遺物（296～336）　遺物の大部分は分厚く堆積した黒褐色粘質土層から出土した。いずれの土器も特に規則性をもたず散在していた。須恵器杯・甕、土師器杯・皿・甕、弥生土器などがある。

296～318は須恵器である。296～310は杯蓋。296～303は杯Ｇ蓋であり、内面にかえりがある。304～310は杯Ｂ蓋。天井部には擬宝珠形および扁平なつまみをもつものがみられ、また、口縁部の折り返しが鈍いものがある。311～316は杯身である。311～313は杯Ｇ。314は杯Ａか。315・316は杯Ｂである。なお、312の底部には「－」字状のヘラ記号がある。317は椀であろう。318は甕である。

319～329は土師器である。319～324は杯。319～322は杯Ｇであり、322の内底面には線刻がみられる。323は外面にヘラミガキ、内面に放射状暗文が施され、胎土も橙色に発色し精良である。324は杯Ｂもしくは皿Ｂである。325・326は皿である。胎土は橙色に発色し精良である。327～329は甕である。外面には縦および斜め方向のハケメ、内面には横方向のハケメあるいは板ナデが施されている。

330～332は弥生土器。330は壺、331・332は高杯である。333は石皿である。表面に使用痕が認められる。334はすり石である。

335・336は周溝内から出土したものである。335は、須恵器杯身で、ヘラ切り不調製品である。336は、土師器杯Ｇである。

3　飛鳥・奈良時代の遺構出土遺物

竪穴住居ＳＨ８出土遺物（337～345）　須恵器杯、土師器杯・甕・甑などがある。337は須恵器杯Ｇ身。底部はヘラ切り不調製である。338～341は土師器杯Ｇであり、339は貯蔵穴から出土した。342・343は土師器甕である。342の口縁端部は上方につまみあげられている。344・345は土師器甑である。

竪穴住居ＳＨ12出土遺物（346～350）　須恵器杯、土師器杯・皿・甕などがある。346は須恵器杯Ｇ身である。底部はヘラ切り不調製である。347は須恵器杯Ｂ身。高台は低く、内端で接地している。348は土師器杯Ｂである。胎土は橙色に発色し、外面にはミガキが施されている。349は皿であり、橙色に発色している。350は甕である。口縁部は肥厚し、口縁端部は若干上方につまみあげられている。

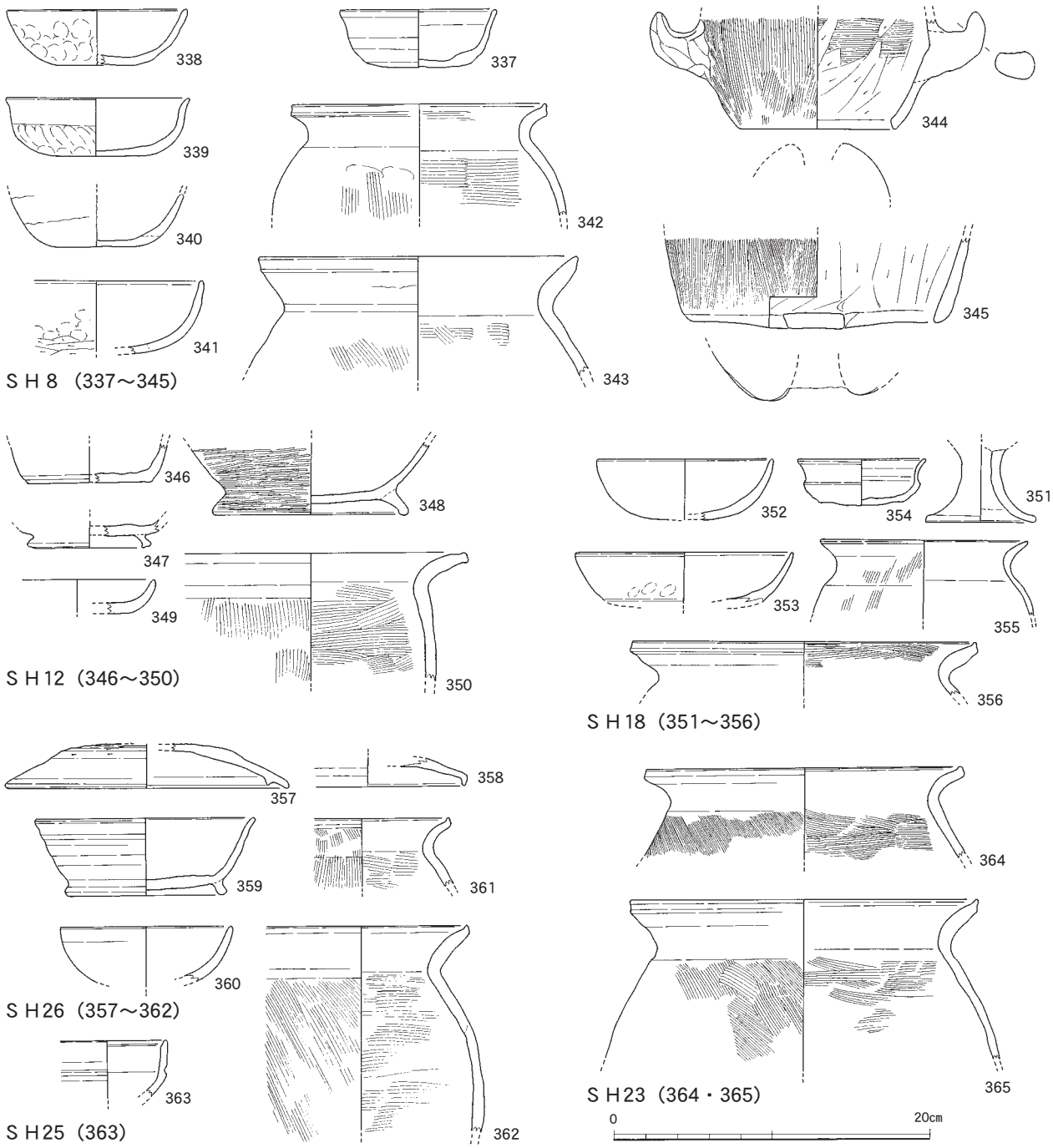
竪穴住居ＳＨ18出土遺物（351～356）　須恵器高杯、土師器杯・甕がある。351は須恵器高杯。352・353は土師器杯Ｇ。354は土師器椀であり、胎土は浅黄橙色をなし、口縁部が強く外反する。355・356は土師器甕である。356の口縁部は肥厚し、口縁端部は上方につまみあげられている。

竪穴住居ＳＨ23出土遺物（364・365）　土師器甕（364・365）がある。いずれも外面に縦及び斜め方向、内面に横方向のハケメが施されている。また、口縁端部は上方につまみあげられている。

竪穴住居ＳＨ25出土遺物（363）　図示できるものは１点のみであった。363は須恵器高杯の杯部片である。

竪穴住居ＳＨ26出土遺物（357～362）　須恵器杯、土師器杯・甕などがある。357・358は須恵器杯Ｂ蓋である。357は内面にかえりをもち、358はかえりをもたない。359は須恵器杯Ｂ身である。底部には外下方にふんばる高台が付く。360は土師器杯Ｇ。椀形に近い形態である。361・362は土師器甕である。いずれも外面に縦及び斜め方向、内面に横方向のハケメが施されている。口縁端部は上方につまみあげられている。

竪穴住居ＳＨ305出土遺物（366～369）　須恵器杯、土師器杯・高杯・甕などがある。366は須恵器杯Ｇ

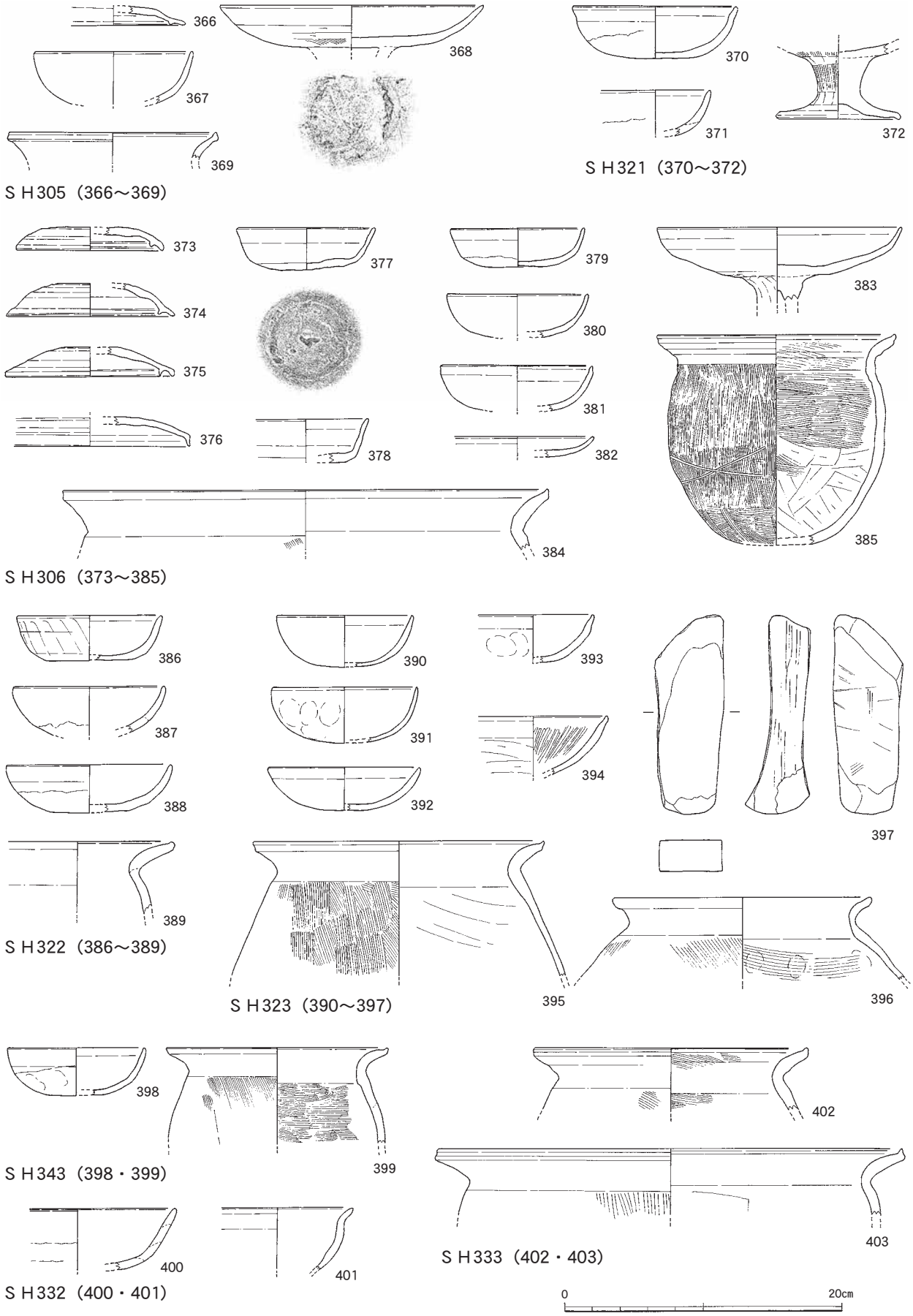


第79図　出土遺物実測図15（１：４）

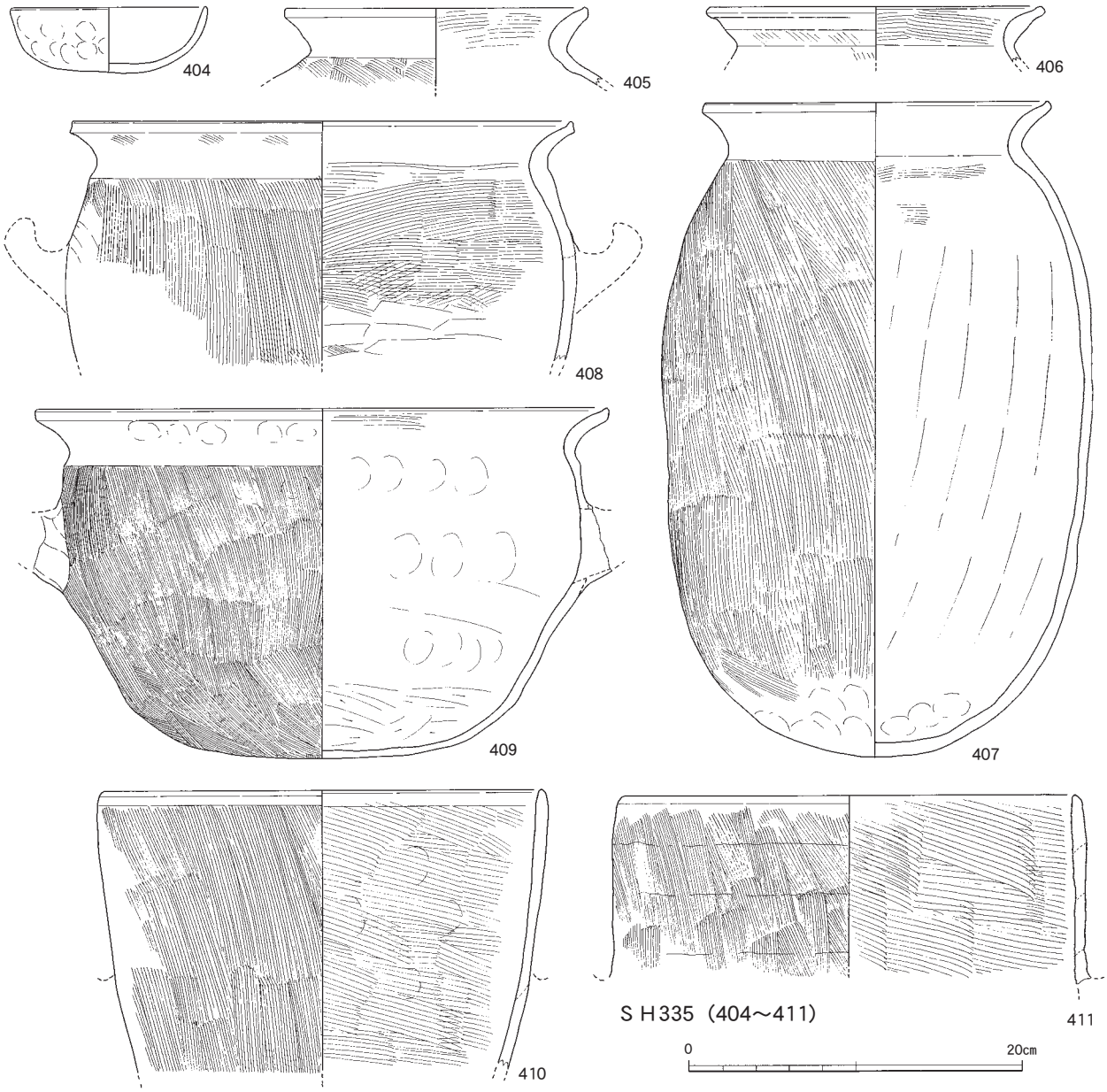
蓋。367は土師器杯Ｇ。368は土師器高杯である。杯底部に脚部を取り付けるための接合痕が認められる。369は土師器甕である。

竪穴住居ＳＨ306出土遺物（373～385）　須恵器杯、土師器杯・高杯・甕などがある。373～376は須恵器杯蓋である。このうち、376は内面にかえりをもたない杯Ｂ蓋である。377・378は須恵器杯Ｇ身である。377の底部には「Ｖ」字状のヘラ記号が認められる。379～381は土師器杯Ｇであり、381は貯蔵穴から出土した。382は土師器皿とした。383は土師器高杯である。脚部は欠損しているものの、その欠損部分は平らであり、意図的に切り離された可能性がある。384・385は土師器甕である。口縁部は肥厚しており、口縁端部は上方につまみあげられる。また、384は口縁部径が大きいため、鍋の形態に近い把手付甕の可能性がある。

竪穴住居ＳＨ321出土遺物（370～372）　土師器杯・高杯などがある。370・371は土師器杯Ｇであ



第80図　出土遺物実測図16（１：４）



第81図　出土遺物実測図17（１：４）

る。372は土師器高杯で、その脚は中実であり外面には縦方向のハケメが施されている。

竪穴住居ＳＨ322出土遺物（386～389）　土師器杯・甕などがある。386～388は土師器杯Ｇである。389は土師器甕である。口縁部は肥厚しており、口縁端部は上方につまみあげられている。

竪穴住居ＳＨ323出土遺物（390～397）　土師器杯・甕、砥石などがある。390～393は土師器杯Ｇである。394は杯Ｃで、胎土は橙色に発色し、内面には放射状の暗文が認められる。395・396は土師器甕である。口縁部は肥厚しており、口縁端部は上方につまみあげられている。397は砥石である。長面の裏表に使用痕が認められる。

竪穴住居ＳＨ332出土遺物（400・401）　土師器杯・椀がある。400は土師器杯Ｇ。401は椀であろう。

竪穴住居ＳＨ333出土遺物（402・403）土師器甕（402・403）がある。いずれも口縁部は肥厚しており、口縁端部は上方につまみあげられている。なお、403は口縁部が大きいため鍋の形態に近い把手付甕であろう。

竪穴住居ＳＨ335出土遺物（404～411）　土師器杯・甕・鍋・甑などがある。これらの遺物の大半は竪穴住居の床付近から比較的まとまった状態で出土した。404は土師器杯Ｇである。405～409は土師器甕である。このうち、407は、長胴甕であり、残りが良い。408・409は鍋の形態に近い把手付甕で

ある。410・411は土師器甑である。

竪穴住居ＳＨ343出土遺物（398・399）　土師器杯・甕などがある。398は土師器杯Ｇである。399は土師器甕である。口縁部は肥厚しており、口縁端部は上方につまみあげられている。

掘立柱建物ＳＢ３出土遺物（412～414）　須恵器杯・土師器甕などがある。412は須恵器杯Ｂ蓋である。天井部にヘラ削が施され、内面にはかえりが付かない。413・414は土師器甕である。口縁部は肥厚しており、口縁端部は上方につまみあげられている。

掘立柱建物ＳＢ49出土遺物（415）　土師器杯Ｇ（415）が出土している。

掘立柱建物ＳＢ50出土遺物（418～423）　須恵器杯、土師器皿・高杯・甕、土錘などがある。418は須恵器杯Ｇ蓋である。内面に短いかえりがある。419は須恵器杯身である。ヘラ切り不調製品である。420は土師器皿である。胎土は橙色に発色し、内面には放射状の暗文が認められる。421は高杯である。胎土は橙色に発色し、杯部外面にはヘラ削りが施されている。422は土師器甕である。肥厚した口縁部は大きく外方に反れ、口縁端部は上方につまみあげられている。423は土錘である。

掘立柱建物ＳＢ52出土遺物（416・417）　須恵器杯・土師器甕がある。416は須恵器杯Ｇ蓋である。天井部にはヘラ削りが施され、内面には低いかえりがある。417は土師器甕である。

掘立柱建物ＳＢ56出土遺物（426～428）　土師器杯・甕などがある。426は土師器杯Ａである。胎土は橙色に発色し、口縁部は上外方に直線的にのびている。調整は摩耗が激しく不明である。427・428は土師器甕である。このうち、428は口縁部径が大きいため鍋の形態に近い把手付甕の可能性がある。

柱列ＳＡ59出土遺物（424・425）　土師器杯・甕などがある。424は土師器杯Ｃである。胎土は橙色に発色し、内面には放射状にのびる暗文が認められる。425はやや丸みをもつ体部のようすから土師器把手付甕であろう。

Ｎ18Pit２出土遺物（429～432）　須恵器杯、土師器杯・高杯がある。429は須恵器杯Ｇ蓋である。内面にはかえりがあり、それは口縁部より下方に出る。430・431は土師器杯Ｇである。432は土師器皿である。胎土は橙色に発色している。

Ｎ16Pit１出土遺物（433）　須恵器杯Ｇ蓋（433）がある。この杯蓋は内面にかえりがあり、それは口縁部より下方に出る。

Ｃ17Pit１出土遺物（434）　須恵器杯身（434）がある。ヘラ切り不調製品であり、底部から口縁部にかけては直線的でやや外方に開く。

Ｍ16Pit３出土遺物（435）　土師器杯Ｇ（435）がある。

Ｇ20Pit１出土遺物（436）　土師器杯Ｇ（436）がある。

Ｋ12Pit２出土遺物（437）　土師器皿（437）がある。この皿は、外底面にヘラ削り、内面に一段の放射状の暗文が認められる。そして、口縁端部は若干肥厚している。

土坑ＳＫ７出土遺物（439・440）　土師器甕などがある。439の口縁部は大きく外方に反れ、口縁端部は上方につまみあげられている。440は把手付甕もしくは甑であろう。

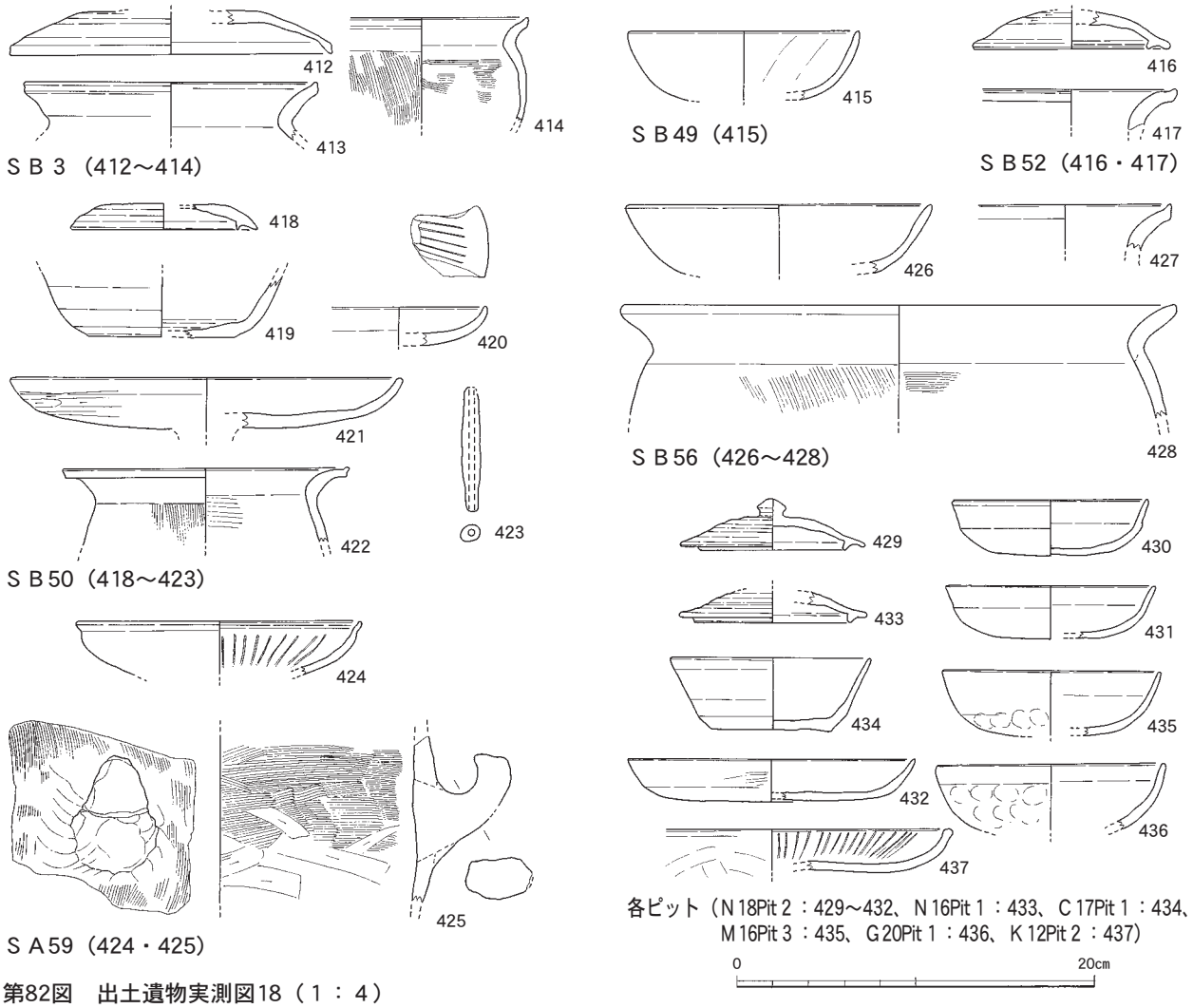
土坑ＳＫ９出土遺物（441）　土師器甕（441）がある。頸部から口縁部への反りは弱く、口縁端部は上方につまみあげられている。

土坑ＳＫ16出土遺物（442～453）　土師器杯・甕、土錘などがある。442は土師器杯Ｇである。口縁部は強くなでられ、粘土の接合痕が体部下半にみられる。443は土師器皿である。胎土は橙色に発色し、精良である。残りが少ないため、口径は不確かである。444～451は土師器甕である。口縁部が肥厚するものが多く、いずれも口縁端部は上方につまみあげられている。外面にはハケメが施されている。内面にはハケメを施すもの・板ナデを施すもの・ナデ調整のみのものなどがある。452は把手付甕である。外面にはハケメが施され、内面にはハケメが施されたのち、その下半部にヘラ削りが施されている。453は土錘である。

土坑ＳＫ19出土遺物（454）　須恵器甕（454）がある。口縁端部は若干外下方に引き出されている。

土坑ＳＫ22出土遺物（455）　土師器甕（455）がある。口縁部径が大きいため、鍋の形態に近い把手付甕の可能性がある。

土坑ＳＫ28出土遺物（456～462）　須恵器杯、土



第82図　出土遺物実測図18（１：４）

師器杯・鉢・甕などがある。456は須恵器杯Ｇ蓋である。内面にかえりをもつものの、それは極めて貧弱である。457～459は土師器杯Ｇである。460は土師器鉢である。体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がり、口縁端部の内面には凹状の面をもつ。461・462は土師器甕である。

土坑ＳＫ29出土遺物（438）　土師器甕（438）がある。口縁部は肥厚し、その端部は上方につまみあげられている。

土坑ＳＫ33出土遺物（465～471）　須恵器杯、土師器杯・甕などがある。465・466は須恵器杯Ｇである。いずれも、天井部にヘラ削りが施され、内面にはかえりがある。467・468は須恵器杯Ｇ身である。いずれも、ヘラ切り不調製品である。469は須恵器杯Ｂ身である。外下方にふんばる高台は内端で接地している。470は土師器杯Ｇである。471は土師器甕である。

土坑ＳＫ34出土遺物（463・464）　土師器杯などがある。463は土師器杯Ｇ。464も土師器杯であるが、外下方に大きくひらく脚部が付く。杯部外面には横方向のヘラミガキが施されている。

土坑ＳＫ42出土遺物（472～476）　ＳＫ42出土遺物には須恵器杯、土師器皿・甕などがある。472は須恵器杯Ｇ蓋である。天井部にはヘラ削りが施され、内面には口縁部より下方に出るかえりが付く。胎土は灰白色に発色し、極めて緻密である。473は須恵器杯Ｇ身である。底部にはロクロによる強い回転ヘラ削りが施され、それにより底部と体部との境は明瞭である。胎土は472と同じく極めて緻密である。なお、底部にヘラ記号が認められる。474・475は土師器皿もしくは高杯である。476は土師器甕である。

土坑ＳＫ43出土遺物（477～480）　土師器杯・皿・甕などがある。477は土師器杯Ａである。底部は比較的平らであり、口縁部は外方に開く。胎土は

橙色に発色し精良である。全体に磨耗が激しく調整は不明瞭である。478・479は土師器皿である。平らな底部から丸みをもちながら立ち上がる口縁部をもつ。480は土師器甕である。口縁部は肥厚し、その端部は上方につまみあげられている。

土坑ＳＫ45出土遺物（492）　須恵器杯Ｇ蓋（492）がある。蓋の内面にはかえりが付き、それは口縁部より下方に突出する。

土坑ＳＫ303出土遺物（504～588）　須恵器杯・高杯・円面硯・提瓶・平瓶・横瓶・壺・甕、土師器杯・皿・高杯・甕・甑・土錘、砥石、などの数多くの遺物がまとまって出土した。

504～525は須恵器である。504～506は須恵器杯Ｇ。内面のかえりは口縁部より下方に出るものと出ないものがある。507・508は杯Ｂ蓋。509～514は杯Ｇ身である。このうち、509は底部にヘラ削りが施されており、その他はヘラ切り不調製品である。また、514の底部には「－」字状のヘラ記号が認められる。515は杯Ｂ身である。516は高杯である。517は円面硯である。脚部には長方形の透かしがあり、それは11方向穿たれていたと推定される。また、天井部のすり面には研磨された痕跡が認められない。518は提瓶である。やや体部に丸みをもっている。519は平瓶である。底部はヘラ切り不調製である。520・521は横瓶の体部片である。522は壺。523～525は甕である。このうち、523の頸部には波状文が施され、口縁端部の断面は長方形に近い形状を呈する。526は砥石である。長面片側に使用痕が認められる。

527～588は土師器である。527～537は杯Ｇ。538は杯Ａで、内面に螺旋状の暗文が認められる。胎土は橙色に発色し、精良である。ただし、磨耗が著しく内面の暗文は極めて見難い。539・540も杯Ａであろう。内面に放射状の暗文が認められる。541は杯Ｂもしくは皿である。胎土は橙色に発色し精良である。542・543は杯Ｃである。胎土は橙色に発色し精良であり、内面には放射状暗文が認められる。544～546は皿である。いずれの胎土も橙色に発色し精良である。また、545の内面には放射状暗文が認められ、546の底部には板状工具によるナデが認められる。547～556は高杯である。552・556を除き、いずれの胎土も橙色に発色し精良である。なかでも、551は内面に放射状暗文と螺旋状暗文が認められる。また高杯の脚部外面には、面取り風のナデと縦方向のハケメを施すもの（551・552・553・554・555）、面取り風のナデのみのもの（556）がある。557は土錘である。558～586は土師器甕。外面の縦方向のハケメを基調とし、肥厚した口縁部の端部を上方につまみあげるものが多い。このうち、558・559は、胴部径に対し、比較的口縁部径が大きく、胴の形態は球形に近い。559の底部には「×」字状のヘラ記号が認められる。また、560～563は把手付甕である。561は口縁部が大きく、鍋の形態に近い。578・579も口縁部が大きく、鍋の形態に近い製品である可能性が高い。なお、577の胎土は橙色に発色し精良である。587・588は甑である。

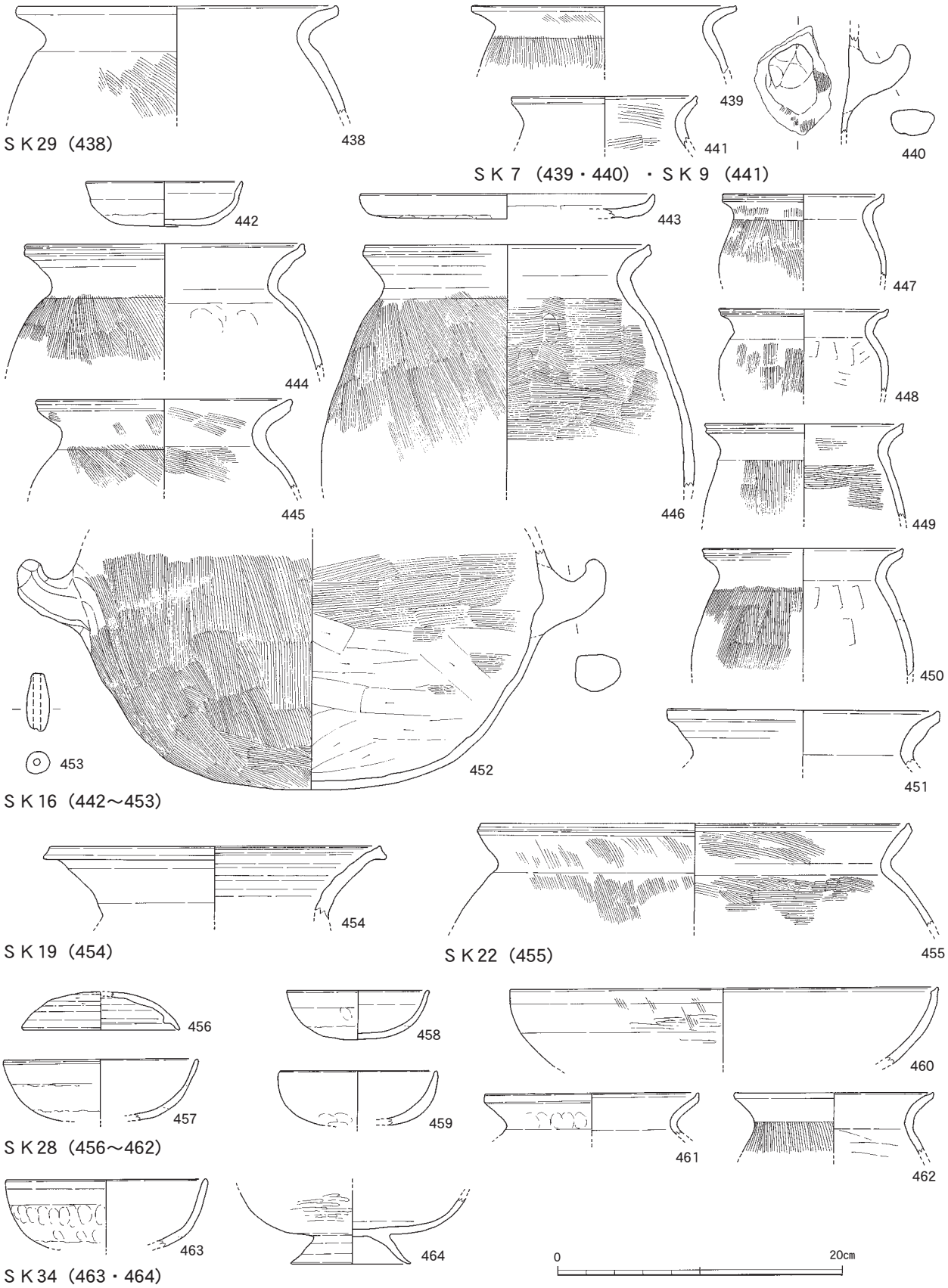
土坑ＳＫ307出土遺物（481～487）　須恵器杯・壺、土師器杯・甕などがある。481～483は須恵器杯蓋である。481は杯Ｇ蓋で、内面に口縁部より下方にでるかえりがある。483は杯Ｂ蓋で、口縁端部は下方に肥厚することで形成されている。484は須恵器壺であり、低い高台が付く。485は土師器杯Ｇ。486は土師器杯Ｂか。487は土師器甕である。

土坑ＳＫ311出土遺物（498･499）　土師器甕（498・499）がある。いずれの甕も外面に縦方向のハケメを施す。内面は工具ナデを施すものと、横方向のハケメを施したのちに胴部下半をヘラ削りするものがある。また、口端部は上方につまみあげられている。

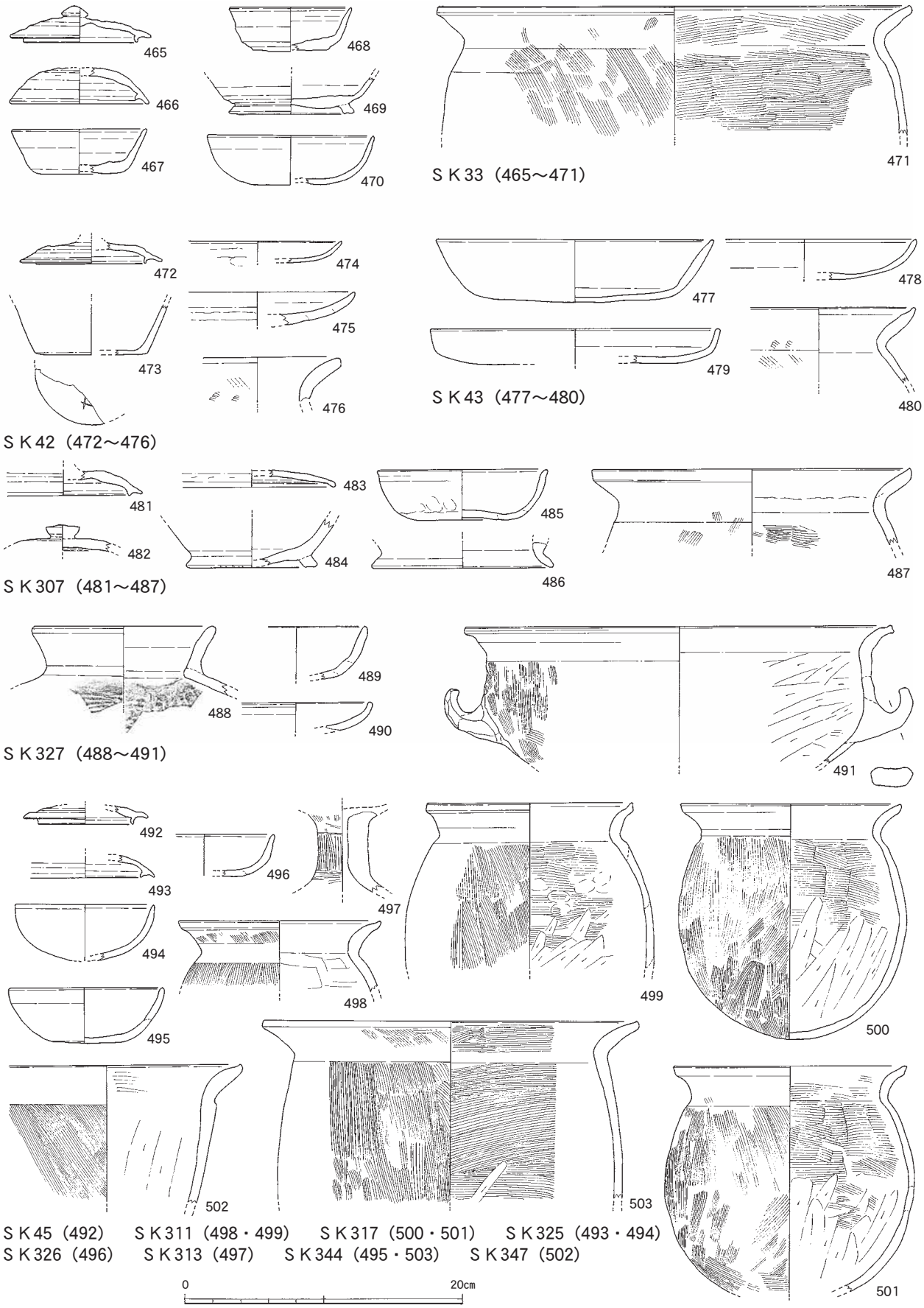
土坑ＳＫ313出土遺物（497）　土師器高杯（497）がある。この高杯の脚は、中空であり、外面には縦方向のハケメが認められる。

土坑ＳＫ317出土遺物（500・501）　土師器甕（500・501）がある。いずれも球形の胴部をもつ。外面には縦および斜め方向のハケメが施されている。内面には横方向のハケメが施され、その後下半部にヘラ削りが施されている。口縁部は肥厚し、その端部は上方につまみあげられている。

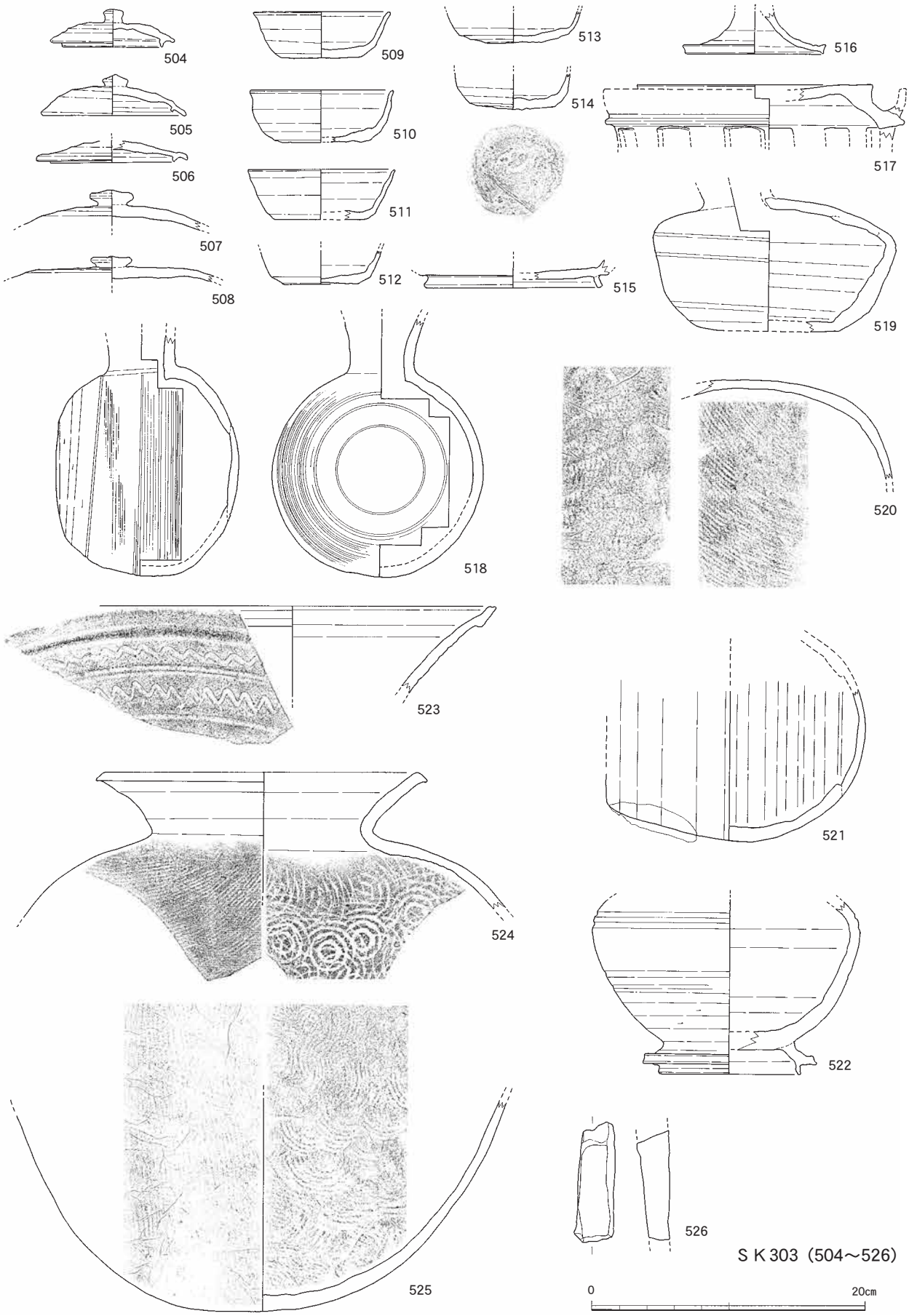
土坑ＳＫ325出土遺物（493・494）　須恵器杯・土師器杯がある。493は須恵器杯Ｇ蓋である。内面にかえりをもち、それは口縁部より若干下方に出る。494は土師器杯Ｇ。



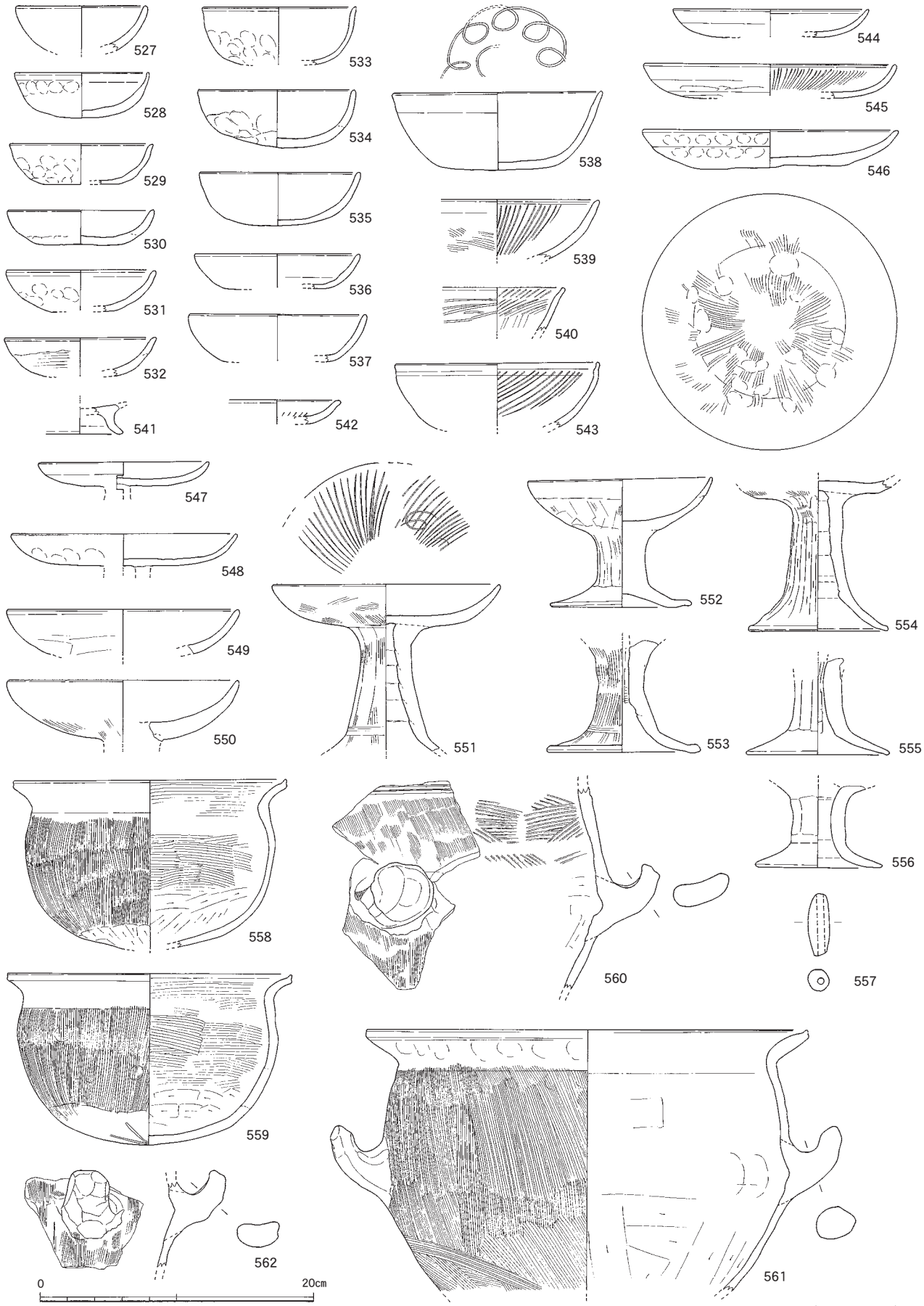
第83図　出土遺物実測図19（１：４）



第84図　出土遺物実測図20（１：４）

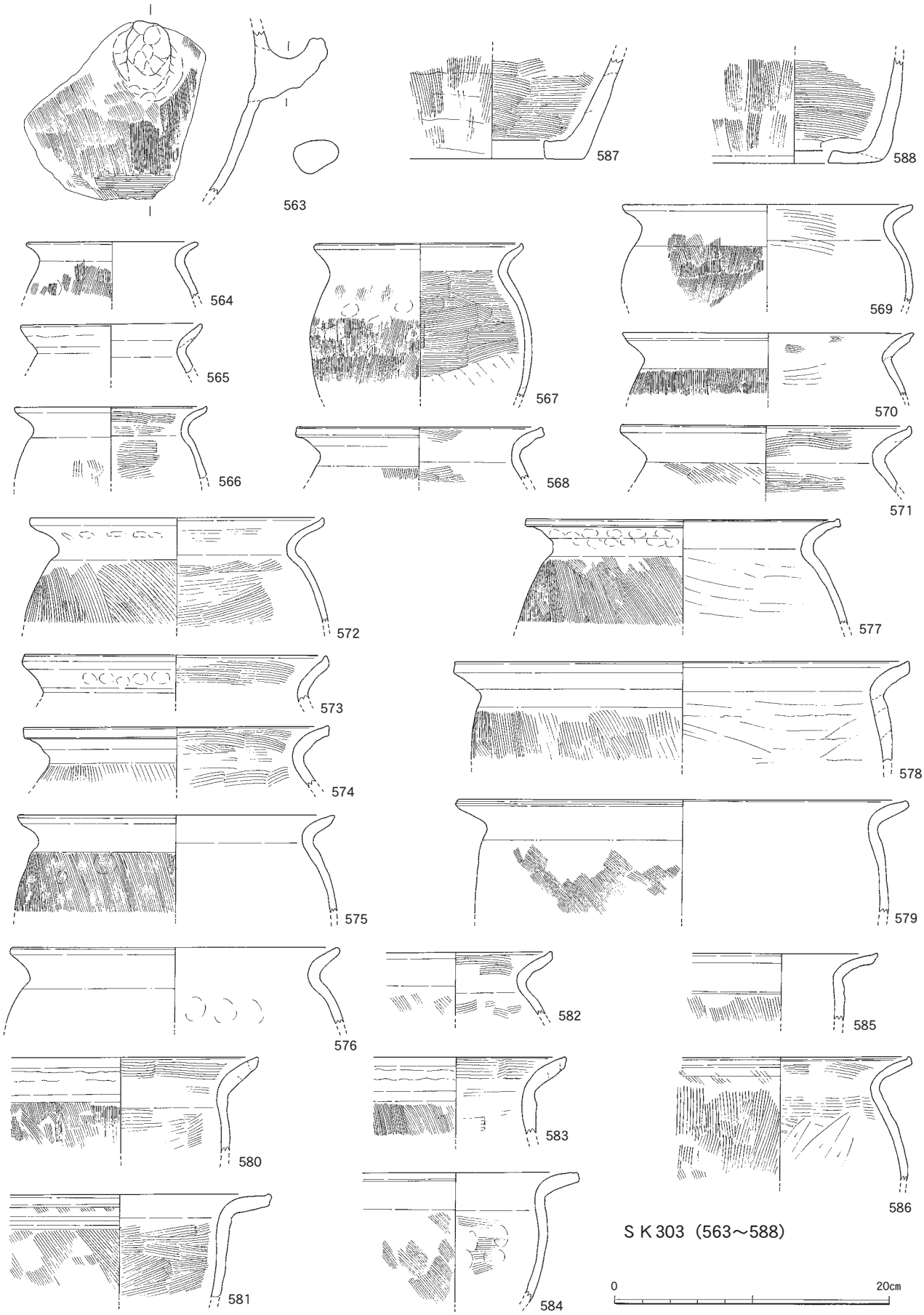


第85図　出土遺物実測図21（1：4）



第86図　出土遺物実測図22（１：４）

ＳＫ303（527～562）



第87図　出土遺物実測図23（１：４）

土坑ＳＫ326出土遺物（496）　土師器杯（496）がある。

土坑ＳＫ327出土遺物（488～491）　須恵器甕、土師器杯・皿・鍋などがある。488は須恵器甕である。やや外方に開く短い口縁部をもち、端部は丸い。489は土師器杯Ｇである。490は土師器皿。491は把手付の土師器甕である。肥厚した口縁部はゆるやかに外反し、その端部は若干上方につまみあげられている。

土坑ＳＫ344出土遺物（495・503）　土師器杯Ｇ（495）・土師器甕（503）がある。503の口縁部は胴部径に対して若干大きい。

土坑ＳＫ347出土遺物（502）　土師器甕（502）がある。肥厚した口縁部は緩く外方に反れる。口縁端部は若干上方につまみあげられている。

４　包含層出土遺物

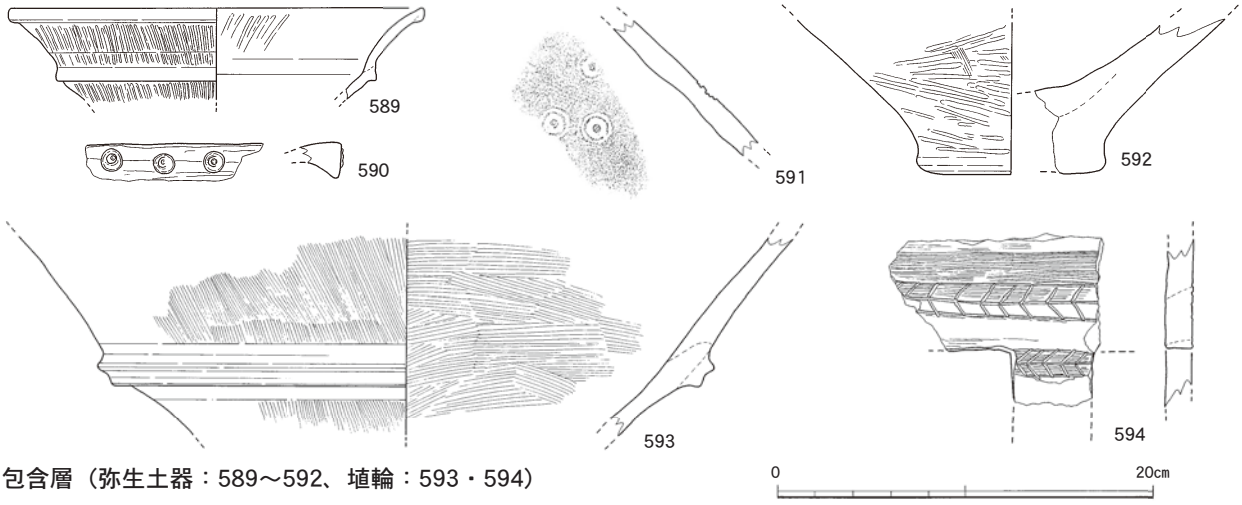
弥生・古墳時代の遺物（589～594）　弥生土器高杯・壺、埴輪などがある。589は弥生土器高杯である。内外面にミガキが施されている。590～592は弥生土器壺である。590の口縁部外面には円形浮文が、591の外面には竹管文が認められる。593は朝顔形埴輪。内外面にハケメが施されている。594は家形埴輪である。須恵質であり、２箇所の窓が認められる。また、外面には線刻による装飾がある。

飛鳥・奈良時代の遺物（595～656）　須恵器杯・椀・鉢・壺・甕、土師器杯がある。

595～623は須恵器である。595は須恵器杯Ｈ蓋で、口縁部径が約10㎝と極めて小型の製品である。595～601は杯Ｇ蓋である。602も残りが悪いが、これと同じものであろう。603・604は杯Ｂ蓋である。605～610は杯Ｇ身である。底部にヘラ削りを施すものと施さないものがある。また、610の底部には「－」字状のヘラ記号が認められる。611～615は杯Ｂ身である。616は鉢で、外面に波状文が施されている。617・618も鉢で、618の底部には工具により刺突された痕跡が認められる。619は長頸壺。620～622は須恵器甕である。621・622の頸部には波状文が認められる。623は横瓶。

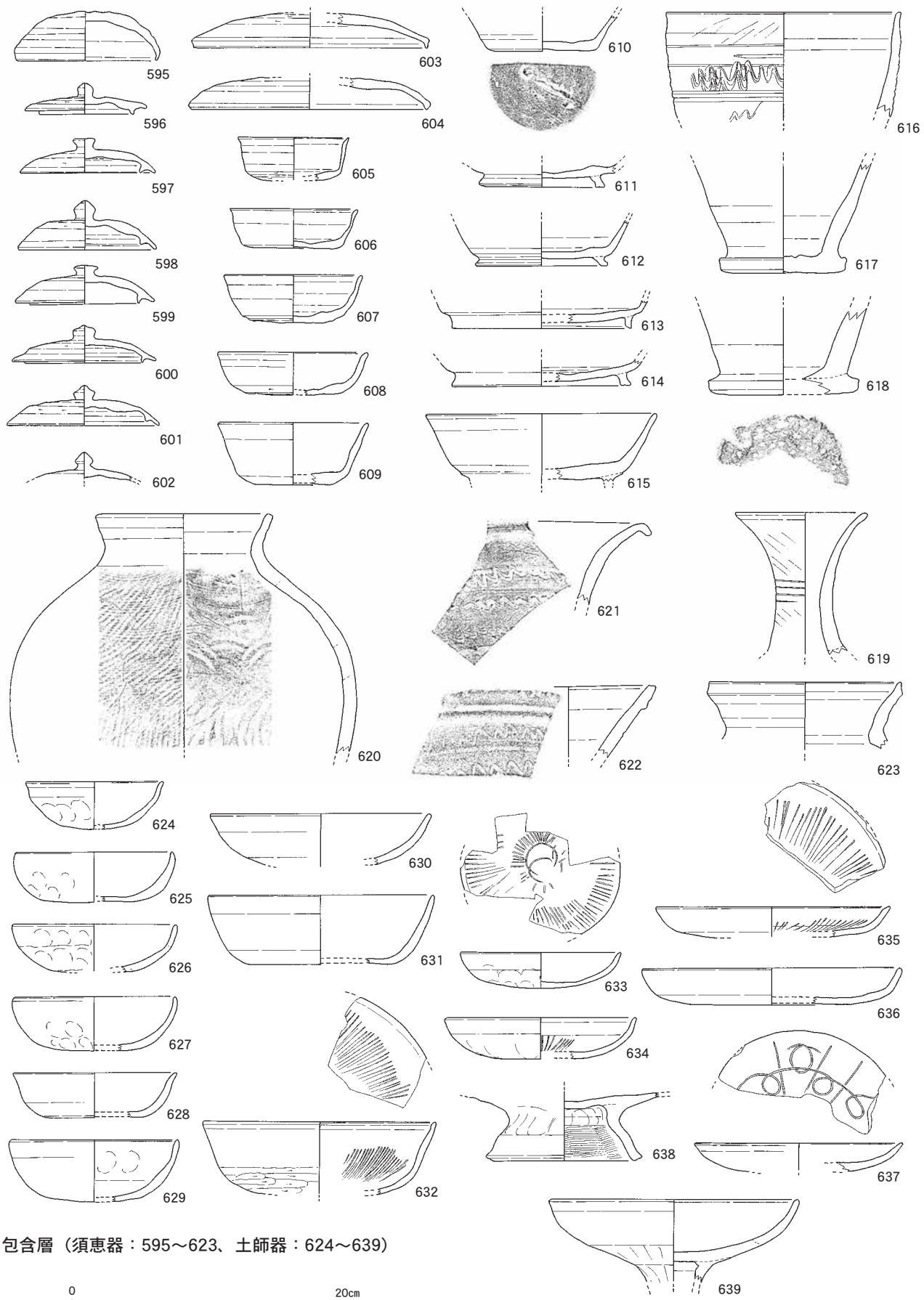
624～656は土師器である。624～631は杯Ｇである。砂粒を含むなど粗雑な製品である。632は杯Ａである。外面底部付近にヘラ削りが施され、内面には一段の放射状暗文が認められる。633・634は杯Ｃである。胎土は橙色に発色し、内面には放射状の暗文が認められる。635～637は皿である。いずれも胎土は橙色に発色し、精良である。このうち、635・637の内面には暗文が施されている。638は脚付皿とした。639は高杯である。640～651は甕である。外面には縦および斜め方向、内面には横方向のハケメが施されているものが多い。また、651は短頸であり、壺の形態に近い。ついで、648～650の口縁部は30㎝を上回るなど径が大きく、鍋の形態に近い把手付き甕である可能性がある。652・653は甑である。654～656は竈である。

16世紀以降の遺物（657・658）　657は五輪塔である。最下段の地輪は欠損しているものの、一石で



包含層（弥生土器：589～592、埴輪：593・594）

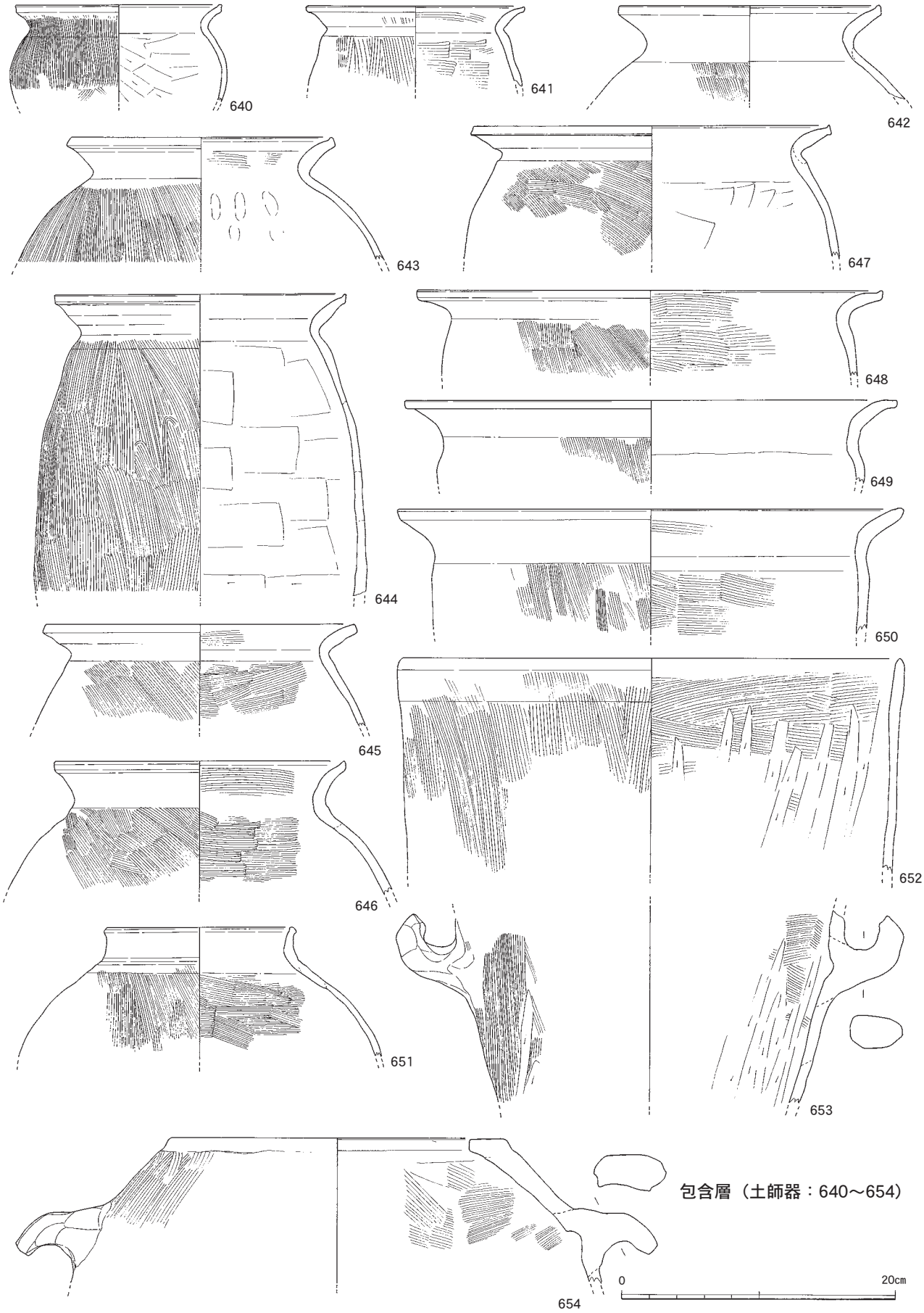
第88図　出土遺物実測図24（１：４）



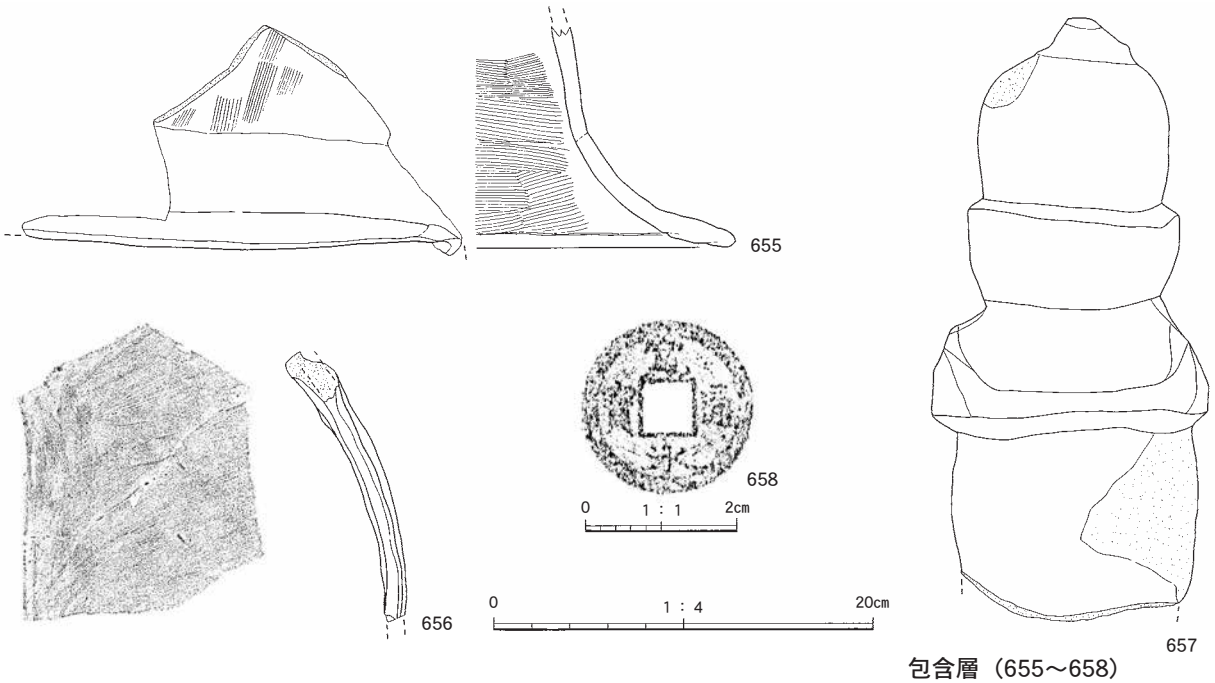
包含層（須恵器：595～623、土師器：624～639）

0　20cm

第89図　出土遺物実測図25（１：４）



第90図　出土遺物実測図26（１：４）



包含層（655～658）

第91図　出土遺物実測図27（１：４、658は１：１）

作られている。658は寛永通寶である。

〔註〕

（１）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅶ（1976年）

（２）剣身は、角度を付けるようにして屈曲しながら、剣身の軸を曲げていないという特徴がみられるとのご教示を伊藤雅文氏からいただいた。

（３）伊藤雅文氏にご教示いただいた。

（４）杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」（『橿原考古学研究所論集』第八、吉川弘文館、1988年）

（５）鈴木一有氏にご教示いただいた。

（６）前掲註（４）文献

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
1	00101	弥生土器	壺	Ｎ２１	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）11.6	外；ヨコナデ→櫛描直線文・扇状文・刺突文・ ミガキ？→ヨコナデ 内；ヨコナデ→工具ナデ→ヨコナデ	粗	外：橙 内：にぶい黄橙	口縁3/12	
2	00202	弥生土器	壺	Ｎ２３	ＳＸ３０２ 南側周溝	（底）5.0	外；ハケメ→ナデ 内；ナデ・ハケメ	やや粗	にぶい黄橙	口縁部を除き ほぼ完存	一部に黒斑あり
3	00301	弥生土器	壺	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）8.5 （高）18.7 （底）4.0	外；ナデ→ミガキ(不明瞭) 内；ハケメ・ナデ	密	明黄褐	完存	摩耗激しい
4	16503	弥生土器	壺	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝		外；ナデ→刺突文 内；ナデ→刺突文	やや密	橙	口縁１/12	
5	00502	弥生土器	壺	Ｎ２３	ＳＸ３０２ 南側周溝		外；円形浮文 内；ナデ→波状文	粗	浅黄橙	口縁1/12	
6	13001	弥生土器	壺	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（体）18.2	外；ミガキ 内；ハケメ・オサエ	粗	橙・にぶい黄橙	体部片	外面に黒斑あり
7	11803	弥生土器	壺	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（底）7.7	外；ナデ 内；ナデ	粗	にぶい黄橙	底部9/12	
8	13704	弥生土器	壺	Ｎ２３	ＳＸ３０２ 南側周溝	（底）5.1	外；ミガキ・ナデ 内；ハケメ	やや粗	橙・明赤褐	底部完存	
9	13605	弥生土器	壺	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（底）9.5	外；ナデ 内；調整不明瞭	やや粗	浅黄橙・にぶい黄橙	底部10/12	磨耗激しい
10	11303	弥生土器	壺	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝		外；櫛描直線文・刺突文 内；ナデ・オサエ	やや密	橙	体部片	
11	11302	弥生土器	壺	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝		外；波状文 内；オサエ・ナデ	やや密	外：黄橙 内：明黄褐	体部片	
12	00201	弥生土器	甕	Ｎ２３	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）16.0	外；ナデ→タタキ→ナデ 内；ヨコナデ→ケズリ（浅い）	やや密	褐灰・橙	口縁９/12	受口状口縁
13	00102	弥生土器	甕	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（体）16.6	外；板ナデ？→ヨコナデ 内；ナデ	やや密	にぶい橙・灰黄褐	頸部10/12	
14	00601	弥生土器	甕	Ｎ２３	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）20.6	外；ハケメ・ケズリ・ヨコナデ 内；ナデ・オサエ・ハケメ	粗	にぶい黄橙	口縁9/12	磨耗激しい 外面に黒斑あり
15	12701	弥生土器	甕	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）17.1	外；ハケメ→ケズリ 内；ナデ・オサエ・ハケメ	やや密	浅黄橙	口縁3/12	外面に煤付着
16	13601	弥生土器	甕	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）18.6	外；ヨコナデ→ハケメ 内；ヨコナデ→ハケメ	やや粗	浅黄橙・にぶい橙	口縁3/12	外面に煤付着
17	12301	弥生土器	甕	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）22.0	外；ヨコナデ→ハケメ→ケズリ 内；ヨコナデ→工具ナデ？・ケズリ	やや粗	浅黄橙・褐灰	口縁6/12	
18	11301	弥生土器	甕	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）25.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ・ナデ	やや密	外：橙 内：にぶい黄橙	口縁6/12	
19	00402	弥生土器	壺	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）10.3	外；ハケメ→ナデ 内；ハケメ→ナデ	やや粗	浅黄橙	口縁1/12	外面に黒斑あり
20	11903	弥生土器	壺	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（底）5.3	外；ミガキ？ 内；ハケメ・ナデ	やや密	外：浅黄橙 内：にぶい黄	底部9/12	
21	13503	弥生土器	甕	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	(脚台)10.0	外；ヨコナデ→ハケメ 内；工具ナデ　台部；ハケメ・ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	脚台4/12	
22	13606	弥生土器	甕	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	(脚台)7.8	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ　台部；ナデ・ヨコナデ	やや粗	浅黄橙・にぶい橙	脚台6/12	
23	11304	弥生土器	甕	Ｎ２１	ＳＸ３０２ 南側周溝	(脚台)6.8	外；ハケメ・ヨコナデ 内；ナデ　台部；ナデ・ヨコナデ	やや粗	橙	脚台1/12	摩耗激しい
24	00501	弥生土器	高杯	Ｎ２３	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）24.5 (脚裾)17.5 （高）22.7	外；杯部：ケズリ→ハケメ→ミガキ→直線文・ 波状文　脚部：ミガキ→櫛描直線文 内；杯部：ナデ→ミガキ　脚部：ナデ	粗	橙・明赤褐	口縁4/12 脚裾6/12	円形透かし（5方向）
25	11601	弥生土器	高杯	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）27.4	外；杯部：ヨコナデ→波状文→ミガキ　脚部: ミガキ→櫛描直線文 内；杯部：ヨコナデ→ミガキ　脚部：シボリ →ハケメ	やや粗	にぶい黄橙	口縁6/12 脚部完存	円形透かし（4方向）
26	00701	弥生土器	高杯	Ｎ２３	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）19.5 (脚裾)11.2 （高）14.7	外；杯部：ヨコナデ→ケズリ・ミガキ　脚部 ：ナデ・オサエ→ハケメ？→ヨコナデ 内；杯部：ナデ・ミガキ　脚部：シボリ→ ナデ・ヨコナデ	やや密	橙・灰（一部）	口縁6/12 脚部完存	
27	00302	弥生土器	高杯	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）12.4 (脚裾)12.9 （高）15.5	外；杯部：ハケメ→ミガキ　脚部：ヨコナデ →ハケメ→ミガキ→櫛描直線文 内；ヨコナデ→ハケメ	密	橙	口縁1/12 脚部8/12	
28	11502	弥生土器	高杯	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（口）14.5	外；ミガキ 内；杯部：ミガキ　脚部：ケズリ	やや粗	にぶい黄橙	口縁6/12	磨耗激しい
29	16405	弥生土器	高杯	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝		外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→ミガキ	やや粗	外：明赤褐 内：橙	口縁１/12	器台の可能性あり
30	13603 13702	弥生土器	高杯	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	(脚裾)18.8	外；ミガキ→櫛描直線文 内；シボリ	やや粗	浅黄橙	脚裾2/12	
31	13705	弥生土器	高杯	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝		外；ミガキ？（不明瞭）→櫛描直線文 内；杯部：ナデ　脚部：シボリ	やや密	淡橙・浅黄橙	脚柱片	円形透かし (1方向残)
32	11402	弥生土器	高杯	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝		外；ミガキ→櫛描直線文 内；ヨコナデ	密	橙	脚柱8/12	円形透かし (1方向残)
33	13701	弥生土器	高杯	Ｎ２３	ＳＸ３０２ 南側周溝		外；ミガキ→櫛描直線文 内；ナデ・ハケメ	やや密	橙	脚柱片	円形透かし (2方向残)
34	13501	弥生土器	高杯	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	(脚裾)16.8	外；ヨコナデ→ハケメ→ミガキ 内；ハケメ→ナデ	やや密	浅黄橙・にぶい黄橙	脚裾4/12	
35	16502	弥生土器	高杯	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	(脚裾)9.3	外；ミガキ→櫛描直線文・刺突 内；杯部：ナデ　脚部：ヨコナデ	密	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	脚裾6/12	円形透かし（4方向）
36	11401	弥生土器	高杯	Ｎ２１	ＳＸ３０２ 南側周溝	(脚裾)10.0	外；ヨコナデ→ミガキ→櫛描直線文 内；ヨコナデ→ハケメ	密	橙	脚部完存	
37	00403	弥生土器	高杯	Ｎ２３	ＳＸ３０２ 南側周溝	(脚裾)10.2	外；ミガキ→櫛描直線文・刺突文 内；ヨコナデ	やや粗	橙	底部11/12	円形透かし（5方向）
38	11704	弥生土器	小形甕	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	（底）2.9	外；ナデ・オサエ 内；ナデ・オサエ	やや粗	にぶい黄橙	底部8/12	
39	00404	弥生土器	小形高杯	Ｎ２２	ＳＸ３０２ 南側周溝	(脚柱)2.2	外；ナデ・オサエ 内；杯部：ナデ　脚部：ナデ	やや粗	浅黄橙・黄灰	脚柱11/12	
40	13002	弥生土器	壺	Ｍ２０	ＳＸ３０２ 東側周溝	（口）7.3 （底）5.3 （高）18.7	外；ヨコナデ→ハケメ・一部ケズリ→ナデ 内；ヨコナデ→ハケメ・オサエ→ナデ	粗	灰黄褐	体部2/12 底部4/12	外面に黒斑あり
41	12005	弥生土器	壺	Ｍ２０	ＳＸ３０２ 東側周溝	（底）6.0	外；調整不明瞭 内；調整不明瞭	粗	外：にぶい黄橙 内：浅黄	底部完存	摩耗著しい

第５表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表（1）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
42	12905	弥生土器	甕	Ｍ２０	ＳＸ３０２ 東側周溝	(口) 12.7 (脚台)5.5 (高) 15.4	外；ヨコナデ→ハケメ→ケズリ　台部；オサエ ・ヨコナデ 内；ハケメ・ナデ　台部；ヨコナデ	粗	橙・灰褐	口縁少し欠 脚台完存	
43	12903	弥生土器	甕	Ｍ２０	ＳＸ３０２ 東側周溝	(脚台)4.7	外；オサエ・ナデ 内；工具ナデ　台部；ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	脚台完存	
44	12901	弥生土器	高杯	Ｍ２０	ＳＸ３０２ 東側周溝	(口) 23.8	外；調整不明瞭 内；調整不明瞭	粗	橙・浅黄橙	口縁1/12	摩耗著しい
45	13703	弥生土器	高杯	Ｍ２０	ＳＸ３０２ 東側周溝		外；ヨコナデ→波状文→ナデ 内；ヨコナデ→ミガキ	やや密	明黄褐	口縁1/12	
46	13604	弥生土器	高杯	Ｍ２０	ＳＸ３０２ 東側周溝	(脚裾)15.2	外；櫛描直線文 内；ナデ	粗	橙・にぶい褐	脚裾3/12	円形透かし (3方向残)
47	13404	弥生土器	高杯	Ｍ２０	ＳＸ３０２ 東側周溝	(脚柱)4.1	外；櫛描直線文 内；シボリ	やや粗	橙	脚柱9/12	円形透かし（4方向） 円盤充填
48	12003	弥生土器	高杯	Ｌ２０	ＳＸ３０２ 東側周溝	(脚柱)3.6	外；ミガキ→櫛描直線文→刺突文 内；シボリ・ナデ	やや粗	にぶい黄橙	脚柱9/12	円形透かし（4方向）
49	16402	弥生土器	器台	Ｍ２０	ＳＸ３０２ 東側周溝	(脚柱)9.4	外；ミガキ 内；ナデ	やや粗	橙	脚柱6/12	円形透かし (1方向残)
50	13801	弥生土器	壺	Ｋ２２	ＳＸ３０２ 北側周溝	(口) 16.6 (底) 8.0 (高) 29.7	外；ヨコナデ→ハケメ・ミガキ→櫛描直線文・ 刺突文 内；ヨコナデ→刺突文	やや粗	にぶい橙	口縁9/12	外面に一部黒斑あり
51	16404	弥生土器	壺	Ｋ２２	ＳＸ３０２ 北側周溝	(口) 17.7	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→ミガキ	やや粗	にぶい黄橙・灰黄褐	口縁3/12	
52	11907	弥生土器	壺	Ｋ２２	ＳＸ３０２ 北側周溝	(口) 9.5	外；ヨコナデ→刺突・櫛描直線文 内；ナデ→ヨコナデ・オサエ	やや粗	にぶい橙	口縁10/12	
53	11901	弥生土器	壺	Ｋ２２	ＳＸ３０２ 北側周溝	(底) 4.4	外；ハケメ→ナデ 内；ケズリ？	やや粗	外：浅黄橙 内：にぶい橙	底部6/12	
54	11701	弥生土器	甕	Ｋ２１	ＳＸ３０２ 北側周溝	(口) 14.4 (底) 6.5	外；ヨコナデ→ハケメ・ナデ→ケズリ 内；ナデ・オサエ　台部；ナデ・工具ナデ	やや粗	外：褐灰・橙 内：浅黄橙	口縁2/12 底部完存	
55	16304	弥生土器	甕	Ｋ２２	ＳＸ３０２ 北側周溝	(口) 20.0	外；ヨコナデ→刺突・横線 内；ナデ・ハケメ	やや粗	外：明黄褐 内：にぶい黄橙	口縁2/12	磨耗激しい
56	20202	弥生土器	甕	Ｋ２３	ＳＸ３０２ 北側周溝(Ｐｉｔ１)		外；ハケメ？→ヨコナデ 内；調整不明瞭	やや密	にぶい黄橙	口縁1/12	外面に煤付着 摩耗著しい
57	11906	弥生土器	甕	Ｋ２２	ＳＸ３０２ 北側周溝	(脚台)7.1	外；ヨコナデ→ハケメ→ナデ 内；ナデ　台部；ヨコナデ	粗	浅黄	脚台7/12	
58	12102	弥生土器	高杯	Ｋ２２	ＳＸ３０２ 北側周溝	(脚柱)4.6	外；ミガキ 内；杯部：ナデ　脚部：シボリ痕	やや密	淡黄	脚柱4/12	円形透かし (2方向残) 円盤充填
59	12101	弥生土器	壺	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(口) 12.0	外；ミガキ→櫛描直線文・刺突文 内；ミガキ	やや粗	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	口縁2/12	
60	12201	弥生土器	壺	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(口) 14.0	外；ヨコナデ→ミガキ→刺突文・ハリツケ後ナデ 内；ナデ・オサエ	やや粗	外：橙 内：暗灰	口縁3/12	
61	12004	弥生土器	壺	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(底) 8.0	外；ケズリ 内；工具ナデ	粗	外：にぶい黄橙 内：黄灰	底部5/12	
62	11703	弥生土器	壺	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(底) 10.0	外；ナデ 内；ナデ	粗	橙・浅黄橙・暗灰	底部4/12	
63	11501	弥生土器	甕	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(口) 15.5	外；ヨコナデ→ハケメ・刺突文？ 内；ヨコナデ→ハケメ	やや粗	外：浅黄橙・黄灰 内：浅黄橙・にぶい黄橙	口縁6/12	
64	12202	弥生土器	甕	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(口) 12.0	外；調整不明瞭 内；ナデ・オサエ	やや粗	にぶい黄橙	口縁4/12	
65	12002	弥生土器	甕	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(口) 22.0	外；ヨコナデ→キザミ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁2/12	
66	11902	弥生土器	壺	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(底) 5.7	外；ミガキ・底部ケズリ 内；ナデ	粗	外：橙 内：灰	底部8/12	内面に炭化物付着
67	11904	弥生土器	甕	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(底) 4.0	外；工具ナデ・ナデ 内；ナデ	やや粗	にぶい橙	底部完存	
68	16303	弥生土器	甕	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(脚台)5.8	外；ヨコナデ→ハケメ→ナデ 内；ミガキ　台部；ナデ	やや密	外：にぶい橙 内：橙	脚台6/12	
69	16305	弥生土器	甕	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(脚台)8.0	外；ヨコナデ・ハケメ 内；ナデ・オサエ　台部；ナデ	粗	外：橙 内：にぶい橙　台部：明赤褐	脚台6/12	
70	16302	弥生土器	甕	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(脚台)5.0	外；ナデ・オサエ 内；ナデ・オサエ	やや粗	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	脚台完存	
71	11702	弥生土器	高杯	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(脚柱)5.2	外；ミガキ 内；ナデ	やや粗	にぶい黄橙	脚柱7/12	外面に赤色顔料
72	12904	弥生土器	高杯	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(脚裾)16.0	外；調整不明瞭 内；シボリ・ヨコナデ	粗	橙	底部10/12	円形透かし（4方向）
73	16401	弥生土器	高杯	Ｍ２３	ＳＸ３０２ 西側周溝	(脚柱)4.0	外；杯部:ミガキ　脚部:ミガキ→櫛描直線文 内；杯部:ナデ　脚部:シボリ・ナデ	やや粗	にぶい黄橙	脚柱10/12	円形透かし（3方向）
74	11201	弥生土器	壺	Ｉ２２	ＳＸ３５１周溝	(底) 5.0	外；ハケメ？・ナデ（調整不明瞭） 内；ナデ・オサエ・ハケメ	やや密	外：浅黄橙 内：灰黄・黄灰	底部完存	外面は磨耗が激しい 体部に赤色顔料
75	03401	弥生土器	壺	Ｌ８	ＳＨ１７	(口) 10.5	外；ヨコナデ→ミガキ？・ケズリ？ 内；ヨコナデ→オサエ・ミガキ	やや密	にぶい黄橙	口縁5/12	
76	03407	弥生土器	壺	Ｋ９	ＳＨ１７		外；ヨコナデ→羽状文 内；ヨコナデ	粗	橙・にぶい黄橙	口縁部小片	
77	03402	弥生土器	壺	Ｋ９	ＳＨ１７	(底) 7.0	外；ナデ→ミガキ 内；ハケメ	やや密	外：にぶい褐 内：黒	口縁8/12	
78	03408	弥生土器	壺蓋	Ｋ１９	ＳＨ１７	(摘) 5.3	外；ナデ・オサエ 内；オサエ・ナデ・ハケメ	やや粗	浅黄橙	摘み完存	壺底部の可能性あり
79	03403	弥生土器	高杯	Ｋ９	ＳＨ１７	(口) 25.6	外；ヨコナデ→ミガキ→櫛描直線文・波状文 内；ヨコナデ→ミガキ？	やや粗	にぶい橙・にぶい黄橙	口縁2/12	
80	03405	弥生土器	高杯	Ｋ９	ＳＨ１７	(脚柱)4.6	外；ミガキ 内；杯部：ナデ　脚部：オサエ・ナデ	やや密	灰黄褐	脚柱5/12	
81	19805	弥生土器	壺	Ｌ２７	ＳＨ４７貯蔵穴	(体) 14.0	外；ハケメ→ミガキ 内；オサエ・ナデ・ハケメ	やや粗	橙・にぶい橙	体部片	
82	06403	弥生土器	甕	Ｌ２７	ＳＨ４７	(口) 18.0	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	密	外：褐灰 内：にぶい黄橙	口縁2/12	受口状口縁
83	06402	弥生土器	甕	Ｌ２７	ＳＨ４７	(脚台)7.8	外；ヨコナデ→ナデ・ハケメ 内；ナデ　台部：ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	脚台完存	

第６表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表（2）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
84	06308	弥生土器	甕	Ｌ２７	ＳＨ４７		外；ハケメ→面取りナデ 内；ナデ・オサエ　台部；ナデ	やや密	外：灰褐 内：にぶい黄橙	脚台片	
85	17101	弥生土器	壺	Ｇ１２	ＳＨ３６	（口）13.0	外；ヨコナデ→ハケメ→ミガキ 内；ヨコナデ→オサエ・ハケメ	やや密	にぶい橙	口縁部完存	
86	20205	弥生土器	高杯	Ｇ１１	ＳＨ３６貯蔵穴		外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ	やや密	灰白	脚裾2/12	円形透かし (1方向残)
87	15604	弥生土器	壺	Ｊ１６	ＳＨ３１４ａ		外；ハケメ→ミガキ→刺突文 内；ハケメ	やや密	にぶい黄橙・浅黄橙	口縁１/12	
88	15801	弥生土器	壺	Ｊ・Ｋ１６	ＳＨ３１４ｂ	（底）5.5	外；ミガキ・底部ケズリ 内；ハケメ	やや粗	外：橙 内：オリーブ	底部完存	
89	15601	弥生土器	壺	Ｊ１６	ＳＨ３１４ａ	（底）7.5	外；ミガキ？・ナデ 内；ハケメ	やや粗	外：にぶい黄橙 内：灰黄	底部5/12	
90	15605	弥生土器	甕	Ｊ１６	ＳＨ３１４ａ	(脚台)6.2	外；ヨコナデ・ハケメ 内；ナデ　台部；ヨコナデ	やや密	浅黄橙・にぶい黄橙	脚台完存	
91	06104	弥生土器	壺	Ｈ７	ＳＨ２０	（口）10.0	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→ハケメ	やや粗	浅黄橙	口縁4/12	
92	06204	弥生土器	壺	Ｉ７	ＳＨ２０		外；ナデ→ハケメ→羽状文・櫛描直線文 内；ナデ	やや密	灰白・浅黄橙	体部片	
93	04201	弥生土器	壺	Ｎ１８	ＳＨ３０１ｃ	（口）17.0	外；ナデ→櫛描直線文・刺突→隆帯・浮文 内；ナデ・オサエ→刺突文	粗	外：橙・にぶい黄褐 内：黒褐	口縁5/12	
94	03601	弥生土器	壺	Ｎ１８	ＳＨ３０１ｂ	（口）17.6	外；ヨコナデ→ハケメ→櫛描直線文・波状文 内；ハケメ・ナデ・オサエ	やや密	外：橙 内：明黄褐	口縁2/12	
95	04303	弥生土器	壺	Ｎ・Ｍ１９	ＳＨ３０１ｃ	（口）9.9	外；調整不明瞭 内；オサエ	粗	にぶい黄橙	口縁１/12	摩耗激しい
96	03704	弥生土器	壺	Ｍ・Ｎ１９	ＳＨ３０１ａ	（底）7.2	外；ハケメ・ナデ 内；ハケメ・ナデ・オサエ	やや粗	浅黄橙	底部完存	
97	04401	弥生土器	壺	Ｍ１８	ＳＨ３０１ａ	（底）7.0	外；ケズリ→ミガキ 内；オサエ・ナデ・ハケメ	やや粗	橙	底部9/12	
98	03501	弥生土器	甕	Ｎ１９ Ｍ１９	ＳＨ３０１ｄ	（口）18.0	外；ハケメ・ナデ→キザミ 内；ハケメ	やや密	外：橙 内：黄橙	口縁9/12	
99	03701	弥生土器	甕	Ｎ・Ｍ１８	ＳＨ３０１	（口）14.8	外；ヨコナデ→ハケメ→ケズリ？ 内；ヨコナデ→ナデ・ハケメ	やや粗	橙・にぶい褐	口縁5/12	
100	03702	弥生土器	甕	Ｎ１８	ＳＨ３０１		外；ヨコナデ→ハケメ 内；ヨコナデ→ハケメ	やや粗	明赤褐	口縁2/12	
101	04301	弥生土器	甕	Ｎ・Ｍ１９	ＳＨ３０１ａ	（体）27.5 （底）6.5	外；ハケメ→ミガキ 内；オサエ→ハケメ	やや粗	外：橙 内：暗灰	底部完存	
102	19304	弥生土器	甕	Ｎ１８	ＳＨ３０１ 貯蔵穴	(脚台)7.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；台部：ナデ	やや密	外：明赤褐 内：橙	脚台完存	
103	03902	弥生土器	甕	Ｎ・Ｍ１９	ＳＨ３０１　ｃ	(脚台)8.4	外；ヨコナデ→ハケメ 内；ナデ	やや粗	にぶい橙・にぶい黄橙	脚台5/12	
104	03802	弥生土器	高杯	Ｍ１９	ＳＨ３０１		外；ヨコナデ→櫛描直線文・波状文 内；ヨコナデ	やや粗	浅黄橙・暗灰	口縁小片	
105	04002	弥生土器	高杯	Ｎ・Ｍ１９	ＳＨ３０１ｃ	（口）25.5	外；ミガキ 内；ミガキ	やや密	にぶい黄橙	口縁3/12	磨耗激しい
106	04101	弥生土器	高杯	Ｎ・Ｍ１９	ＳＨ３０１ｂ	（口）12.0 (脚裾)12.5	外；杯部・脚部：ハケメ→ミガキ 内；杯部：ハケメ→ミガキ　脚部：ナデ→ハケメ	やや密	にぶい黄橙	口縁3/12 脚裾完存	
107	04403	弥生土器	高杯	Ｎ１８	ＳＨ３０１	(脚裾)13.4	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→ケズリ	やや粗	にぶい黄橙	脚裾3/12	
108	04102	弥生土器	高杯	Ｎ・Ｍ１９	ＳＨ３０１ｃ	(脚柱)4.0	外；脚部：ミガキ→櫛描直線文 内；杯部：ナデ	やや粗	浅黄橙	脚柱5/12	
109	03906	弥生土器	高杯	Ｍ１９	ＳＨ３０１ｂ	(脚柱)4.4	外；ミガキ→櫛描直線文 内；シボリ・ナデ	やや粗	浅黄橙・灰	脚柱9/12	円形透かし（4方）
110	03803	弥生土器	高杯	Ｍ１９	ＳＨ３０１ｂ	(脚柱)3.0	外；杯部：ミガキ　脚部：ミガキ 内；杯部：ナデ　脚部：シボリ・ナデ	やや密	橙	脚柱11/12	円形透かし（3方）
111	03903	弥生土器	高杯	Ｎ・Ｍ１９	ＳＨ３０１ｃ	(脚柱)3.4	外；杯部：ミガキ　脚部：ミガキ→櫛描直線文 内；杯部：ナデ　脚部：シボリ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	脚柱11/12	円形透かし（4方）
112	03705	弥生土器	高杯	Ｎ・Ｍ１９	ＳＨ３０１ｃ	(脚裾)12.7	外；ヨコナデ→ミガキ→櫛描直線文 内；杯部：ナデ　脚部：ナデ	やや密	橙	脚裾10/12	円形透かし（3方）
113	03801	石製品	石皿	Ｎ１８	ＳＨ３０１	(全長)16.8 （幅）2.4				ほぼ完存	磨耗している面あり (石質)砂岩
114	10305	弥生土器	壺	Ｄ２５	ＳＨ３３７ｂ	（底）4.5	外；ミガキ？・ナデ 内；ケズリ	やや粗	黄灰	底部完存	
115	20002	弥生土器	甕	Ｄ２４	ＳＨ３３７ 貯蔵穴		外；ハケメ・ナデ 内；ナデ	やや粗	にぶい黄橙・灰	口縁小片	
116	10302	弥生土器	甕	Ｄ２５ Ｄ２４	ＳＨ３３７ａ	(脚台)8.9	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや粗	黄灰・にぶい黄橙	脚台4/12	
117	10303	弥生土器	甕	Ｄ２５ Ｄ２４	ＳＨ３３７ａ	(脚台)9.8	外；ケズリ？・ナデ 内；ナデ	やや密	にぶい橙・にぶい黄橙	脚台4/12	
118	20101	弥生土器	高杯	Ｄ２４	ＳＨ３３７ 貯蔵穴	（口）30.6	外；ヨコナデ→櫛描直線文→波状文 内；ヨコナデ→ミガキ	やや粗	にぶい橙・暗灰	口縁2/12	
119	10301	弥生土器	高杯	Ｄ２４ Ｄ２５	ＳＨ３３７ａ	（口）31.0	外；ヨコナデ→櫛描直線文・波状文 内；ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁2/12	
120	10304	弥生土器	高杯	Ｄ２５	ＳＨ３３７	(脚柱)3.6	外；脚部：櫛描直線文・刺突文 内；杯部：ナデ　脚部：ハケメ	やや粗	浅黄橙	脚柱10/12	円形透かし（3方向）
121	20003	弥生土器	特殊脚付壺	Ｄ２４	ＳＨ３３７ 貯蔵穴	(脚裾)7.5	外；脚部：ヨコナデ→ミガキ 内；脚部：ミガキ	やや密	にぶい黄橙	脚裾4/12	122と接合
122	20001	弥生土器	特殊脚付壺	Ｄ２４	ＳＨ３３７ 貯蔵穴	（口）5.9 (脚裾)7.5	外；体部：ヘラミガキ・ナデ→貼付後ナデ 脚部：ヨコナデ→ミガキ 内；体部：ハケメ・ヨコナデ　脚部：ミガキ	やや密	にぶい黄橙・褐灰	口縁6/12 脚裾4/12	
123	10403	石製品		Ｄ２５	ＳＨ３３７ｂ	(全長)21.4 （幅）3.0					(石質)砂岩 自然石？
124	10203	弥生土器	甕	Ｆ２５	ＳＨ３３８ａ	(脚台)7.3	外；ヨコナデ→ハケメ 内；ナデ	粗	にぶい橙	脚台完存	
125	20004	弥生土器	高杯	Ｆ２４	ＳＨ３３８ 貯蔵穴		外；櫛描直線文→波状文 内；ミガキ	やや粗	橙	口縁小片	

第７表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表（3）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
126	10201	弥生土器	高杯	Ｆ２４	ＳＨ３３８ｂ	(脚柱)3.0	外；ミガキ 内；ナデ	やや密	にぶい黄橙・灰黄褐	脚柱完存	円形透かし（3方向）
127	10202	弥生土器	高杯	Ｆ２４	ＳＨ３３８ｂ	(脚裾)17.2	外；脚部：ヨコナデ→ミガキ→櫛描直線文 内；杯部：ミガキ？脚部：シボリ・オサエ	やや密	橙	脚裾10/12	円形透かし（4方向）
128	10703	弥生土器	甕	Ｉ２５	ＳＨ３５２ 貯蔵穴	（口）18.5	外；ハケメ・ナデ・オサエ 内；工具ナデ・オサエ	粗	外：灰黄褐・にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口縁完存	磨耗激しい 外面に煤付着
129	10602	弥生土器	甕	Ｉ２５	ＳＨ３５２ 貯蔵穴	(脚台)7.5	外；台部；ヨコナデ→ハケメ・ナデ 内；ハケメ　台部；ナデ	やや粗	外：明赤褐 内：にぶい橙	脚台3/12	
130	05804	弥生土器	高杯	Ｉ２５	ＳＨ３５２ｂ		外；ナデ→波状文・櫛描直線文 内；ナデ	やや粗	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	口縁部小片	
131	05802	弥生土器	高杯	Ｉ２５	ＳＨ３５２ｂ	（口）24.5	外；ヨコナデ→波状文 内；ナデ・ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	口縁2/12	磨耗激しい
132	19201	弥生土器	甕	Ｃ１７	ＳＨ３７０	（口）22.0 （高）28.9 (脚台)9.4	外；ナデ→ハケメ→ヨコナデ　脚部：ナデ 内；ナデ→ハケメ→ヨコナデ　脚部：ナデ	やや密	褐灰	口縁完存 脚台10/12	
133	19606	弥生土器	甕	Ｃ１８	ＳＨ３７０	(脚台)6.5	外；調整不明瞭 内；調整不明瞭	やや粗	淡赤橙・浅黄橙	脚台4/12	
134	14401	弥生土器	壺	Ｆ・Ｇ１６	ＳＸ３１６下層	（頸）9.5	外；ミガキ・貼付後ナデ 内；ハケメ・オサエ	やや粗	にぶい黄橙	体部片	外面に黒斑あり
135	14402	弥生土器	壺	Ｆ１７	ＳＸ３１６下層		外；竹管文 内；竹管文	やや粗	にぶい黄橙	口縁部小片	磨耗激しい
136	05902	弥生土器	甕	Ｆ・Ｇ１７	ＳＨ３６８		外；ナデ 内；ナデ	やや粗	外：橙 内：明黄褐	口縁部小片	磨耗激しい
137	05805	弥生土器	高杯	Ｆ・Ｇ１７	ＳＨ３６８		外；ヨコナデ→ミガキ→直線文 内；ナデ	やや粗	外：灰黄褐 内：橙	口縁部小片	
138	14404	弥生土器	高杯	Ｆ１７	ＳＸ３１６下層	(脚柱)5.4	外；脚柱：ミガキ→櫛描直線文・刺突文 内；杯部；オサエ・ナデ	やや粗	外：灰黄褐 内：にぶい褐	脚柱4/12	円形透かし（3方向）
139	05904	弥生土器	高杯	Ｆ・Ｇ１７	ＳＨ３６８	(脚柱)4.8	外；櫛描直線文・刺突文 内；ナデ	やや粗	灰黄褐・褐灰・にぶい橙	脚柱6/12	
140	14405	弥生土器	高杯	Ｆ１８	ＳＸ３１６下層	(脚柱)4.4	外；杯部：ナデ　脚柱：櫛描直線文→刺突文 内；脚柱：シボリ・ナデ	やや密	にぶい黄橙	脚柱完存	円形透かし（3方向）
141	09707	弥生土器	甕	Ｋ８	ＳＫ１５ｂ	(脚台)8.8	外；ヨコナデ→ハケメ 内；ヨコナデ	やや粗	浅黄橙・にぶい黄橙	脚台2/12	
142	09701	弥生土器	甕	Ｋ８	ＳＫ１５ｂ	(脚台)4.4	外；ハケメ→ケズリ 内；ナデ	粗	にぶい黄橙・浅黄橙	脚台完存	
143	07301	弥生土器	壺	Ｊ１７	ＳＫ３０４ｂ	（口）17.8	外；ナデ→キザミ 内；ナデ	やや密	橙	口縁2/12	
144	07305	弥生土器	壺	Ｊ１８	ＳＫ３０８ｂ	（底）4.8	外；ケズリ 内；ナデ	やや密	橙・浅黄橙	底部3/12	
145	07304	弥生土器	甕	Ｊ１８	ＳＫ３０８ｂ	(脚台)6.4	外；ナデ 内；ナデ	やや粗	橙・にぶい黄橙	脚台2/12	
146	07302	弥生土器	高杯	Ｊ１８	ＳＫ３０８ｂ		外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→ミガキ	やや密	にぶい黄橙・黒	口縁小片	外面に黒斑あり
147	10604	弥生土器	壺	Ｄ２１	ＳＫ３３０		外；ナデ 内；ナデ→竹管文	やや粗	にぶい黄橙	口縁小片	
148	10605	土師器	甕	Ｄ２１	ＳＫ３３０	（底）4.3	外；ケズリ・ナデ・オサエ 内；ナデ	やや粗	にぶい黄橙	底部完存	
149	10603	弥生土器	甕	Ｆ２０	ＳＫ３５７	（底）3.7	外；ナデ・オサエ 内；ナデ	粗	外：にぶい黄橙・褐灰 内：灰黄褐	底部完存	
150	09607	弥生土器	壺	Ｆ２３	ＳＤ３３９ａ	（底）6.2	外；ナデ 内；ハケメ・ナデ	粗	浅黄橙	底部4/12	
151	19601	弥生土器	壺	Ｇ１６	Ｐｉｔ２	（口）32.6	外；ヨコナデ→円形浮文 内；ヨコナデ	粗	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	口縁2/12	
152	19901	弥生土器	壺	Ｉ１３	Ｐｉｔ１	（口）15.3	外；ヨコナデ→ミガキ→羽状文 内；オサエ→ハケメ・ヘラミガキ	やや粗	灰白・灰黄褐	口縁3/12	
153	19101	土師器	片口鉢	Ｅ２９	1号墳ｃ周溝	（口）26.2	外；ヨコナデ・ナデ・ハケメ 内；ヨコナデ・工具ナデ	粗	橙	ほぼ完存	内面全体に赤色顔料
154	20601	土師質	円筒埴輪	Ｅ２９	１号墳ｃ周溝 （Ｐｉｔ１）	（口）30.5 （高）37.3	外；貼付後ナデ・面取りナデ→ヨコハケ 内；ナデ・オサエ	やや密	浅黄橙	ほぼ完存	円形透かし（2方向）
155	15901	土師質	円筒埴輪	Ｃ２７	１号墳周溝ｄ	（底）16.4	外；ナデ 内；ナデ・オサエ	粗	橙	底部5/12	
156	16001	土師質	円筒埴輪	Ｃ３１	１号墳墳丘斜面		外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙	口縁部小片	
157	16101	土師質	円筒埴輪	Ｄ２９	１号墳ｃ周溝		外；ナデ・貼付後ナデ 内；ナデ	やや粗	橙	体部片	
158	16003	土師質	朝顔埴輪	Ｄ２９	１号墳ｃ周溝		外；ナデ・貼付後ナデ 内；ナデ	やや粗	橙	体部片	
159	16004	土師質	円筒埴輪	Ｄ２９	１号墳ｃ周溝		外；ナデ・貼付後ナデ 内；ナデ	やや粗	橙	体部片	
160	16002	土師質	円筒埴輪	Ｄ２９	１号墳ｃ周溝		外；ナデ 内；ナデ	やや粗	橙	底部片	
161	16106	土師質	円筒埴輪	Ｅ３１	１号墳ｃ墳丘裾		外；貼付後ナデ 内；ナデ	やや粗	橙	体部片	
162	16105	土師質	円筒埴輪	Ｅ３１	１号墳ｃ墳丘裾		外；貼付後ナデ 内；ナデ	やや粗	浅黄橙	体部片	
163	15903	土師質	円筒埴輪	Ｃ３１	１号墳ｃ墳丘裾		外；ナデ・貼付後ナデ 内；ナデ	やや粗	にぶい黄橙	体部片	
164	16103	土師質	円筒埴輪	Ｅ２９	１号墳ｃ周溝		外；ナデ・貼付後ナデ 内；ナデ	やや粗	橙	体部片	
165	15902	土師質	円筒埴輪	Ｃ２８	１号墳ｄ周溝		外；貼付後ナデ 内；ナデ	やや粗	橙	体部片	円形透かし
166	16102	土師質	円筒埴輪	Ｄ２９	１号墳ｃ周溝		外；ナデ・貼付後ナデ 内；ナデ	やや粗	橙	体部片	
167	16202	須恵器	甕	Ｃ２８	１号墳ｄ周溝		外；ロクロナデ→波状文・沈線 内；ロクロナデ	やや密	外：黒 内：灰白	口縁部片	

第８表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表（4）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
168	16201	須恵器	瓶	Ｃ２７	１号墳ｄ周溝		外；ロクロナデ→ロクロケズリ・沈線 内；ロクロナデ	やや密	外：灰 内：灰白	頸部残存	フラスコ形？
192	07801	土師器	杯	Ｅ６	12号墳周溝 （ＳＸ１１）	（口）12.9 （高）3.65	外；ヨコナデ・オサエ 内；コナデ	やや粗	浅黄橙	口縁3/12	
193	09201	土師器	甕	Ｊ１１	12号墳周溝 （ＳＸ１１）	（口）24.0	外；ヨコナデ→ハケメ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→ハケメ	やや密	橙	口縁2/12	
194	07803	弥生土器	壺	Ｅ６	12号墳周溝 （ＳＸ１１）		外；ケズリ→突帯 内；ナデ	やや粗	浅黄橙・にぶい黄橙	体部片	
195	07804	弥生土器	壺	Ｆ６	12号墳周溝 （ＳＸ１１）		外；ナデ→櫛描直線文・羽状文 内；ナデ	やや密	浅黄橙・灰	体部片	
196	08105	須恵器	杯蓋	Ｈ１１	ＳＸ３０周溝	（口）15.5 （高）3.6	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや粗	外：灰 内：灰黄	口縁6/12	
197	08101	須恵器	杯蓋	Ｊ１０	ＳＸ３０周溝	（口）16.0	外；ロクロナデ 内；ロクロナデ	やや粗	外：灰褐 内：黄灰	口縁2/12	
198	10803	須恵器	杯蓋	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）10.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや粗	灰白	口縁3/12	
199	09005	須恵器	杯蓋	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）10.0 （高）3.5	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	浅黄	口縁6/12	
200	08503	須恵器	杯蓋	Ｌ１０ Ｌ１１	ＳＸ３１周溝	（口）11.0 （高）3.1	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	灰	口縁4/12	
201	10802	須恵器	杯蓋	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（摘）2.7	外；ロクロナデ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや粗	外：浅黄橙 内：灰白	口縁部分欠	外面に自然釉付着
202	08504	須恵器	杯蓋	Ｊ１０ Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）12.6 （高）3.6	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰	口縁5/12	
203	08502	須恵器	杯蓋	Ｌ１０	ＳＸ３１周溝	（口）14.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰	口縁3/12	
204	09004	須恵器	杯蓋	Ｉ１１	ＳＸ３１周溝	（口）14.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰	口縁1/12	
205	09003	須恵器	杯蓋	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）15.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰黄褐	口縁1/12	
206	08501	須恵器	杯蓋	J11	ＳＸ３１周溝		外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや密	外：灰黄褐 内：にぶい黄褐	口縁小片	
207	09006	須恵器	杯蓋	Ｉ１１	ＳＸ３１周溝	（口）11.4	外；ロクロナデ→カキメ 内；ロクロナデ	密	灰	口縁4/12	
208	10901	須恵器	杯身	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）8.4 （高）3.1	外；ロクロナデ→ヘラ切り→ナデ 内；ロクロナデ	やや粗	灰	口縁6/12	
209	09001	須恵器	杯身	Ｉ１１	ＳＸ３１周溝	（底）8.2	外；ロクロナデ→ヘラ切り→ナデ 内；ロクロナデ	密	外：灰黄 内：暗灰黄	底部2/12	
210	09002	須恵器	杯身	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	(高台)9.6	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	外：暗灰 内：灰	高台3/12	
211	10804	須恵器	高杯	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）10.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→ナデ 内；ロクロナデ	密	灰	口縁3/12	
212	10807	須恵器	高杯	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）17.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→ロクロナデ 内；ロクロナデ	やや粗	灰	口縁2/12	
213	10805	須恵器	甕	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝		外；ロクロナデ→沈線・波状文 内；ロクロナデ	密	灰	口縁部小片	
214	10801	土師器	杯	Ｊ３１	ＳＸ３１周溝	（口）10.0 （高）3.5	外；ナデ・オサエ 内；ナデ	やや密	明黄褐	口縁3/12	
215	10903	土師器	杯	Ｉ１１	ＳＸ３１周溝	（口）11.4	外；ナデ・オサエ 内；ナデ	やや密	にぶい黄橙	ほぼ完存	
216	08402	土師器	杯	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）12.0	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ	やや密	外：にぶい黄橙 内：明黄褐	口縁4/12	磨耗激しい
217	08403	土師器	杯	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）12.7 （高）4.4	外；ナデ 内；ナデ	やや密	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	口縁6/12	
218	08401	土師器	杯	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）12.7 （高）3.5	外；ナデ・オサエ 内；ナデ	やや密	橙	口縁1/12	
219	10902	土師器	皿	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）20.0	外；ナデ 内；ナデ	やや密	橙	口縁3/12	摩耗激しい
220	10806	土師器	皿	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）24.0	外；ナデ・オサエ？ 内；ナデ・オサエ？	やや密	にぶい黄橙	口縁3/12	摩耗激しい
221	09008	土師器	皿	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝		外；ヨコナデ→底部ケズリ 内；ナデ	密	橙	口縁小片	
222	09107	土師器	高杯	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	(脚柱)4.2	外；脚柱：面取りナデ→ナデ 内；杯部：ナデ　脚柱：ヨコナデ	密	外：橙 内：にぶい橙・橙	脚柱6/12	
223	08406	土師器	高杯	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	(脚裾)9.6	外；調整不明瞭 内；調整不明瞭	やや密	浅黄橙	脚裾2/12	
224	09101	土師器	甕	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）15.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	外：橙 内：明黄褐	口縁4/12	
225	09202	土師器	甕	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）22.0	外；ヨコナデ→ハケメ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→工具ナデ→ケズリ	やや密	外：橙 内：浅黄橙・橙	口縁4/12	
226	10904	土師器	甕	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（口）22.0	外；ハケメ・オサエ・ヨコナデ 内；工具ナデ・ヨコナデ	やや密	外：橙 内：明黄褐	口縁4/12	摩耗激しい
227	09203	土師器	甑	Ｊ１１	ＳＸ３１周溝	（底）18.0	外；ハケメ→ナデ 内；ナデ	密	外：橙 内：にぶい黄橙	底部3/12	
228	08902	土師器	甕	Ｌ１３	ＳＸ３８周溝	（口）14.0	外；ヨコナデ→ハケメ 内；工具ナデ？・ヨコナデ	やや粗	にぶい橙	口縁2/12	
229	17003	土師器	甕	Ｍ１３	ＳＸ３８周溝		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	外：橙 内：にぶい黄橙	口縁1/12	外面に煤付着
230	09606	須恵器	杯身	Ｊ１３ Ｊ１４	14号墳周溝 （ＳＸ３９）	（受）11.4	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや粗	灰褐	受部3/12	
231	09505	土師器	杯	Ｊ１３ Ｊ１４	14号墳周溝 （ＳＸ３９）		外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ	やや密	浅黄橙	口縁小片	
232	09602	土師器	甕	Ｊ１３ Ｊ１４	14号墳周溝 （ＳＸ３９）	（口）15.4	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ→ハケメ→ナデ	密	浅黄橙	口縁2/12	

第９表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表（5）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
233	08901	土師器	甕	Ｈ１４ Ｉ１４	14号墳周溝 （ＳＸ３９）	(口) 22.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	外：にぶい黄橙 内：橙	口縁2/12	
234	08803	土師器	甑	Ｈ１４ Ｉ１４	14号墳周溝 （ＳＸ３９）	(口) 20.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ケズリ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁3/12	
235	17202	須恵器	杯蓋	Ｉ１３	ＳＫ５１	(口) 8.9 (高) 2.0	外；ロクロナデ→カキメ・刺突文→貼付ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰白・灰	ほぼ完存	
236	17204	須恵器	杯蓋	Ｉ１３	ＳＫ５１	(口) 8.7 (高) 2.3	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→カキメ→刺突 →貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	灰白	ほぼ完存	
237	17103	須恵器	杯身	Ｉ１３	ＳＫ５１	(底) 7.6	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	粗	灰	底部6/12	
238	17104	須恵器	杯身	Ｌ９	ＳＫ５１	(底) 6.5	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや粗	灰白・灰	口縁3/12	
239	17105	土師器	甕	Ｌ９	ＳＫ５１		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ？→ヨコナデ	やや密	浅黄橙・橙	口縁部小片	
240	15404	須恵器	杯身	Ｋ１３	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 10.5 (受) 12.8 (高) 4.9	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	密	灰	口縁2/12	
241	15105	須恵器	杯身	Ｍ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 10.4	外；ロクロナデ→ヘラ切り・オサエ 内；ロクロナデ	密	灰白・灰黄	口縁2/12	
242	15106	須恵器	杯身	Ｊ１５	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 11.6 (底) 7.8 (高) 4.0	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	密	明オリーブ灰	口縁2/12 底部6/12	
243	15103	須恵器	杯身	Ｋ１４ Ｌ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(高台)7.6	外；ロクロナデ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	粗	灰白・黄灰・灰黄	高台完存	
244	15403	須恵器	杯身	Ｋ１３	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(高台)9.6	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	灰	高台6/12	
245	15101	須恵器	杯身	Ｍ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(高台)10.0	外；ロクロナデ→ヘラ切り？→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	灰白・にぶい黄橙	高台6/12	
246	15102	須恵器	杯身	Ｌ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(高台)12.0	外；ロクロナデ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	灰白・にぶい黄橙	高台3/12	
247	15107	須恵器	杯蓋	Ｌ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(摘) 3.4	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	灰	摘み完存	
248	15104	須恵器	椀	Ｍ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 9.4 (高) 2.7	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや密	灰白	口縁3/12	
249	15201	須恵器	甕	Ｍ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 11.0	外；ロクロナデ→ハケメ 内；ロクロナデ	やや粗	灰白	口縁2/12	
250	15203	須恵器	甕	Ｌ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）		外；ロクロナデ→沈線・波状文 内；ロクロナデ	密	外：暗灰 内：黄灰	口縁部小片	
251	15304	土師器	杯	Ｋ１４ Ｌ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 15.7 (底) 9.6	外；ナデ・ケズリ？ 内；ナデ	やや粗	橙	底部5/12	摩耗激しい
252	15303	土師器	皿	Ｌ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）		外；オサエ・ヨコナデ 内；ヨコナデ→放射状暗文	やや密	橙	口縁2/12	
253	14902	土師器	甕	Ｍ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 18.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁3/12	摩耗激しい
254	15405	土師器	甕	Ｋ１３	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 18.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁6/12	
255	15001	土師器	甕	Ｍ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 23.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁4/12	
256	14803	土師器	甕	Ｍ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 22.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁2/12	
257	14801	土師器	甕	Ｍ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 23.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外：橙 内：にぶい黄橙	口縁3/12	
258	14903	土師器	甕	Ｍ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 22.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁4/12	
259	14901	土師器	甕	Ｍ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 23.8	外；ハケメ→ナデ 内；ハケメ	やや粗	外：橙 内：にぶい黄橙	口縁6/12	
260	14802	土師器	甕	Ｍ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 23.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；工具ナデ・ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙	口縁2/12	
261	14904	土師器	片口鉢？	Ｊ１５	13号墳周溝 （ＳＸ３７）		外；ハケメ・ナデ 内；ハケメ・ナデ	やや粗	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	口縁部片	
262	15501	土師器	竈	Ｋ１３ Ｊ１２	13号墳周溝 （ＳＸ３７）		外；ハケメ・ナデ 内；工具ナデ・ナデ	やや密	外：浅黄橙 内：黄橙	庇片	
263	15004	弥生土器	高杯	Ｋ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）		外；ヨコナデ→ミガキ 内；ミガキ	粗	にぶい黄橙	口縁部小片	外面に黒斑あり
264	15003	弥生土器	高杯	Ｊ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(脚裾)9.4	外；ミガキ→櫛描直線文 内；ヨコナデ→ケズリ	やや粗	橙	脚柱完存 脚裾6/12	
265	15002	弥生土器	甕	Ｋ・Ｌ１４	13号墳周溝 （ＳＸ３７）	(口) 17.0	外；ハケメ・板ナデ・刺突文 内；オサエ・ナデ	粗	にぶい黄橙	口縁2/12	
266	14501	須恵器	杯蓋	Ｅ１８	15号墳盛土内 （ＳＸ３１６）	(口) 12.0 (高) 4.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	粗	灰	口縁11/12	
267	14602	須恵器	杯蓋	Ｆ１９	15号墳ａ北斜面 （ＳＸ３１６）	(口) 11.9 (高) 3.8	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや粗	灰	口縁2/12	
268	14504	須恵器	杯身	Ｆ１８	15号墳ａ周溝 （ＳＸ３１６）	(口) 10.7 (受) 12.8 (高) 5.2	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	粗	灰	口縁6/12 受部6/12	
269	14703	須恵器	杯身	Ｆ１９	15号墳ａ北斜面 （ＳＸ３１６）	(口) 10.5 (受) 13.1 (高) 4.6	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや粗	灰	口縁3/12 受部8/12	
270	14705	須恵器	杯身	Ｅ・Ｆ１８	15号墳ｂ （ＳＸ３１６）	(口) 11.6 (受) 13.8 (高) 4.2	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	粗	灰	口縁6/12 受部6/12	
271	14704	須恵器	杯身	Ｆ１９	15号墳ａ北斜面 （ＳＸ３１６）	(口) 12.0 (受) 13.8	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや粗	灰	口縁2/12 受部2/12	
272	00803	須恵器	杯蓋	Ｆ１９	15号墳ａ （ＳＸ３１６）	(口) 8.6 (高) 3.2	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	外：灰白 内：青灰	完存	
273	14601	須恵器	杯蓋	Ｅ１８	15号墳 （ＳＸ３１６）	(口) 10.8 (高) 3.1	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	外：黄灰 内：灰白・灰黄褐	口縁3/12	
274	14502	須恵器	杯蓋	Ｅ１７	15号墳 （ＳＸ３１６）	(口) 11.8	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや粗	灰黄	口縁3/12	

第10表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表 (6)

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
275	14605	須恵器	杯蓋	Ｅ１７	15号墳ａ（ＳＸ３１６）	(口) 15.0 (高) 3.5	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰	口縁3/12	
276	14604	須恵器	杯蓋	Ｆ１８	15号墳ａ表土（ＳＸ３１６）	(摘) 2.4	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや粗	灰黄	摘み完存	
277	14701	須恵器	杯蓋	Ｆ１７	15号墳表土（ＳＸ３１６）	(摘) 5.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	外：灰黄 内：灰白	摘み6/12	
278	14702	須恵器	椀	Ｆ・Ｇ１６	15号墳ｄ（ＳＸ３１６）	(口) 11.3	外；ロクロナデ→カキメ・沈線・ロクロケズリ 内；ロクロナデ	粗	灰	口縁5/12	
279	13901	土師器	杯	Ｄ８	15号墳ｂ周溝（ＳＸ３１６）	(口) 10.0	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	口縁6/12	
280	13903	土師器	杯	Ｆ・Ｇ１６	15号墳ｄ（ＳＸ３１６）	(口) 10.6	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	外：黄橙 内：橙	口縁3/12	
281	13902	土師器	杯	Ｆ１７	15号墳（ＳＸ３１６）	(口) 11.0	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	外：浅黄橙 内：黄橙	口縁3/12	
282	14205	土師器	杯	Ｆ・Ｇ１７	15号墳ｄ（ＳＸ３１６）	(口) 12.0 (高) 4.4	外；ナデ・オサエ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	外：灰白 内：淡黄	口縁8/12	
283	14001	土師器	杯	Ｅ１７	15号墳ｂ表土（ＳＸ３１６）	(口) 13.0	外；ナデ・オサエ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁2/12	
284	13904	土師器	杯	Ｅ１９	15号墳ａ周溝（ＳＸ３１６）	(口) 11.0	外；ナデ・オサエ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	橙	口縁2/12	
285	14204	土師器	高杯	Ｅ１９	15号墳ａ（ＳＸ３１６）	(口) 17.0	外；ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	外：にぶい橙 内：橙	口縁2/12	
286	13905	土師器	高杯	Ｅ・Ｆ１７	15号墳ｄ（ＳＸ３１６）	(脚裾)9.4	外；ヨコナデ→面取りナデ・ハケメ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	外：橙 内：浅黄橙	脚裾6/12	
287	14102	土師器	甕	Ｅ１７	15号墳（ＳＸ３１６）	(口) 12.8 (高) 12.8	外；ヨコナデ→ハケメ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→ケズリ・ハケメ	やや密	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	口縁8/12	外面に煤付着
288	14101	土師器	甕	Ｆ・Ｇ１６	15号墳ｄ（ＳＸ３１６）	(口) 20.4	外；ヨコナデ→ハケメ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→ハケメ・オサエ	やや密	外：橙 内：にぶい黄橙	口縁3/12	内面に煤付着
289	14201	土師器	甕	Ｅ１８	15号墳ｃ表土（ＳＸ３１６）	(口) 14.0	外；ヨコナデ→ハケメ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→ハケメ	やや密	浅黄橙	口縁3/12	
290	14002	土師器	甕	Ｅ１８	15号墳ｂ（ＳＸ３１６）		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ・ナデ	密	外：明黄褐 内：浅黄橙	口縁部片	摩耗激しい
291	14003	土師器	甕	Ｆ１８	15号墳ｄ表土（ＳＸ３１６）	(口) 19.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい黄橙 内：明黄褐	口縁6/12	
292	14202	土師器	甕	Ｅ１７	15号墳ｂ表土（ＳＸ３１６）	(口) 15.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	口縁3/12	
293	14004	土師器	甑	Ｆ１８	15号墳（ＳＸ３１６）	(口) 38.5	外；ハケメ→オサエ 内；ハケメ	密	外：明黄褐 内：にぶい黄橙	口縁3/12	
294	14505	須恵器	杯蓋	Ｆ１８	15号墳埋葬施設（ＳＸ３１６）	(口) 10.3 (高) 2.9	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	外：灰・黄灰 内：黄灰	口縁10/12	「ー」字状ヘラ記号
295	14503	須恵器	杯身	Ｆ１８	15号墳埋葬施設（ＳＸ３１６）	(口) 9.5 (高) 3.6	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや粗	灰	口縁10/12	
296	05204	須恵器	杯蓋	Ｎ１７	ＳＸ３１８ｃ	(口) 11.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	外：にぶい黄 内：黄灰	口縁2/12	
297	04506	須恵器	杯蓋	Ｌ１７	ＳＸ３１８	(口) 11.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや粗	灰白・灰	口縁4/12	
298	04505	須恵器	杯蓋	Ｌ１７	ＳＸ３１８	(口) 11.0 (高) 2.7	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ→一方向ナデ	やや粗	灰・黄	口縁4/12	
299	04507	須恵器	杯蓋	Ｌ１７	ＳＸ３１８ａ	(口) 11.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや密	灰白・灰	口縁4/12	
300	04504	須恵器	杯蓋	Ｌ１７	ＳＸ３１８	(口) 11.5 (高) 2.6	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ→一方向ナデ	やや粗	外：灰黄 内：灰白	口縁8/12	
301	05203	須恵器	杯蓋	Ｎ１７	ＳＸ３１８ｃ	(口) 12.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰	口縁1/12	
302	05703	須恵器	杯蓋	Ｍ～Ｌ１６・１７	ＳＸ３１８ｃ	(摘) 2.6	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	外：にぶい黄橙 内：灰黄褐	摘み5/12	
303	05302	須恵器	杯蓋	Ｍ１７	ＳＸ３１８ｃ	(摘) 2.5	外；ロクロケズリ→ロクロナデ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ→一方向ナデ	やや密	灰	摘み4/12	
304	04503	須恵器	杯蓋	Ｎ１７	ＳＸ３１８ｃ	(口) 15.4 (高) 3.2	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ→一方向ナデ	やや粗	外：灰黄 内：灰	口縁1/12	
305	05202	須恵器	杯蓋	Ｎ１７	ＳＸ３１８ｃ	(口) 16.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰白・灰	口縁2/12	
306	05701	須恵器	杯蓋	Ｍ１６	ＳＸ３１８ｃ	(口) 17.0	外；ロクロナデ 内；ロクロナデ	密	灰黄	口縁3/12	
307	04502	須恵器	杯蓋	Ｎ１７	ＳＸ３１８ｃ	(口) 17.0 (高) 3.1	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰白・黄灰	口縁2/12	
308	04501	須恵器	杯蓋	Ｋ・Ｌ１５・１６	ＳＸ３１８表土	(口) 17.4 (高) 2.7	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ→不定方向ナデ	やや密	灰オリーブ	口縁3/12	
309	05201	須恵器	杯蓋	Ｎ１７	ＳＸ３１８ｃ	(口) 17.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰黄	口縁2/12	
310	05301	須恵器	杯蓋	Ｌ１７	ＳＸ３１８ａ	(摘) 3.7	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや密	灰黄	摘み完存	
311	04604	須恵器	杯身	Ｌ１７	ＳＸ３１８ａ	(口) 9.0 (底) 6.0 (高) 3.7	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや密	灰	底部4/12	
312	04605	須恵器	杯身	Ｌ１７	ＳＸ３１８ａ	(口) 9.4 (高) 3.7	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや粗	灰	口縁2/12	「ー」字状ヘラ記号
313	04603	須恵器	杯身	Ｍ１７	ＳＸ３１８ｃ	(口) 11.6 (高) 4.0	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや密	灰・灰黄褐	口縁1/12	
314	04602	須恵器	杯身	Ｎ１７	ＳＸ３１８ｃ	(口) 13.8 (高) 4.4	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや粗	灰黄・灰オリーブ	口縁1/12	
315	04508	須恵器	杯身	Ｌ１７	ＳＸ３１８	(口) 13.2 (高台)8.5 (高) 5.4	外；ロクロナデ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ→一方向ナデ	やや密	灰	口縁部小片 高台4/12	
316	05106	須恵器	杯身	Ｎ１７	ＳＸ３１８ｃ	(高台)14.0	外；ロクロナデ→ヘラ切り→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	灰	高台2/12	

第11表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表（7）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
317	04601	須恵器	椀	Ｎ１７	ＳＸ３１８ｃ	(口) 14.3 (高) 4.4	外；ロクロナデ→ヘラ切り→ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰・灰白・灰黄	口縁9/12	
318	20401	須恵器	甕	Ｋ１９	ＳＸ３１８	(口) 22.6 (体) 40.6 (高) 44.5	外；ロクロナデ→タタキ 内；ロクロナデ→タタキ	やや粗	灰・灰黄	口縁9/12	
319	05002	土師器	杯	Ｌ１７	ＳＸ３１８	(口) 10.0	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁4/12	
320	05101	土師器	杯	Ｌ１７	ＳＸ３１８	(口) 11.0	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	橙	口縁3/12	
321	04902	土師器	杯	Ｌ１７	ＳＸ３１８ａ	(口) 12.8 (高) 4.1	外；ナデ・オサエ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや粗	橙・浅黄橙	口縁9/12	
322	04704	土師器	杯	Ｍ１６	ＳＸ３１８ｃ	(口) 13.0 (高) 3.6	外；オサエ・ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁2/12	線刻あり
323	05306	土師器	杯	Ｍ１７	ＳＸ３１８ｃ		外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→放射状暗文	粗	橙	口縁部小片	
324	04803	土師器	杯	Ｎ１７	ＳＸ３１８ｃ	(高台)13.0	外；脚部：ヨコナデ 内；杯部：ナデ　高台：ヨコナデ	密	灰褐・橙	高台2/12	
325	04802	土師器	皿	Ｎ１７	ＳＸ３１８ｃ	(口) 15.0	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	橙	口縁2/12	磨耗激しい
326	05102	土師器	皿	Ｎ１７	ＳＸ３１８ｃ	(口) 18.0	外；ナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	橙	口縁2/12	
327	04801	土師器	甕	Ｎ１７	ＳＸ３１８ｃ		外；ハケメ→ヨコナデ 内；工具ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁部小片	
328	04901	土師器	甕	Ｋ１７	ＳＸ３１８ａ 表土	(口) 27.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁3/12	
329	05606	土師器	甕	Ｍ１６	ＳＸ３１８ｃ		外；ハケメ→ヨコナデ 内；工具ナデ・ハケメ・ヨコナデ	やや密	橙	口縁部小片	
330	05001	弥生土器	壺	Ｍ１８	ＳＸ３１８	(底) 7.7	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	粗	浅黄橙・にぶい黄橙	底部完存	
331	04705	弥生土器	高杯	Ｍ１７	ＳＸ３１８ｃ	(脚裾)11.4	外；ミガキ→櫛描直線文 内；シボリ痕・工具ナデ？	やや密	にぶい黄橙	脚裾4/12	円形透かし（4方向） 摩滅激しい
332	05004	弥生土器	高杯	Ｍ１８	ＳＸ３１８	(脚柱)5.0	外；脚柱：ハケメ→ミガキ→櫛描直線文 内；杯部：ナデ　脚柱：ハケメ・ナデ	やや密	にぶい橙	脚柱8/12	円形透かし（3方向）
333	05401	石製品	石皿	Ｌ１６	ＳＸ３１８ｄ 表土	(長) 13.4 (幅) 14.7 (厚) 4.1				ほぼ完存	(重) 1130ｇ (石質) 砂岩
334	05402	石製品	磨石	Ｌ１６	ＳＸ３１８ｄ 表土	(長) 7.9 (幅) 6.4 (厚) 6.6				ほぼ完存	(重) 470ｇ (石質) 花崗岩？
335	09501	須恵器	杯身	Ｍ１６	ＳＸ３１８周溝	(口) 13.8 (高) 3.85	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや粗	灰白・灰	口縁6/12	
336	09603	土師器	杯	Ｍ１６	ＳＸ３１８周溝		外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	橙・浅黄橙	口縁部小片	
337	11105	須恵器	杯	Ｈ７	ＳＨ８ｂ	(口) 9.8 (高) 3.7	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや密	灰・灰白	口縁5/12	
338	11005	土師器	杯	Ｉ７	ＳＨ８ｃ	(口) 11.4 (高) 3.5	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁4/12	
339	19602	土師器	杯	Ｉ７	ＳＨ８貯蔵穴	(口) 11.4 (高) 3.7	外；オサエ・ナデ・ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁9/12	
340	11002	土師器	杯	Ｈ７	ＳＨ８ｂ	(底) 5.2	外；調整不明瞭 内；ヨコナデ	やや密	にぶい橙	底部完存	磨耗激しい
341	11001	土師器	杯	Ｈ７	ＳＨ８ｂ		外；オサエ・ナデ→工具ナデ・ケズリ 内；ナデ・ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁部小片	
342	06002	土師器	甕	Ｉ７	ＳＨ８	(口) 16.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁1/12	
343	11101	土師器	甕	Ｉ７	ＳＨ８	(口) 20.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁2/12	
344	11103	土師器	甑	Ｉ７	ＳＨ８ｃ	(底) 10.0	外；ハケメ→貼付後ナデ 内；ハケメ→ケズリ	やや密	にぶい橙	底部2/12	
345	11003	土師器	甑	Ｈ７	ＳＨ８ａ	(底) 15.5	外；ハケメ・ナデ 内；ケズリ	やや密	浅黄橙	底部3/12	
346	07502	須恵器	杯身	Ｄ５	ＳＫ１２	(底) 7.8	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや密	灰・灰オリーブ	底部4/12	
347	07403	須恵器	杯身	Ｄ５	ＳＫ１２	(高台)7.9	外；ロクロナデ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰	高台2/12	
348	07506	土師器	杯	Ｄ５	ＳＫ１２	(高台)12.4	外；ナデ→ミガキ・貼付後ナデ 内；ナデ・ハケメ	やや密	にぶい橙・浅黄橙（断） 灰黄褐	高台7/12	
349	07605	土師器	皿	Ｄ５	ＳＫ１２ｂ		外；ナデ→ヨコナデ？ 内；ナデ→ヨコナデ？	密	橙	口縁部小片	
350	07601	土師器	甕	Ｄ５	ＳＫ１２ｂ		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙（断）灰	口縁1/12	
351	08004	須恵器	高杯	Ｅ８	ＳＨ１８	(脚裾)6.8	外；ロクロナデ 内；ロクロナデ	密	灰白	脚裾5/12	
352	07903	土師器	杯	Ｅ８	ＳＨ１８	(口) 11.2	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁2/12	
353	07902	土師器	杯	Ｅ８	ＳＨ１８	(口) 13.6	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	外：にぶい橙・黄灰 内：灰黄褐	口縁3/12	
354	07901	土師器	椀	Ｅ８	ＳＨ１８	(口) 8.0 (高) 2.9	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁2/12	
355	07908	土師器	甕	Ｅ８	ＳＨ１８ｄ	(口) 13.0	外；ハケメ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	外：にぶい橙 内：明黄褐	口縁2/12	
356	08001	土師器	甕	Ｅ８	ＳＨ１８	(口) 21.6	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ハケメ	密	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	口縁2/12	
357	09301	須恵器	杯蓋	Ｌ９・１０	ＳＨ２６ａ	(口) 18.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや密	黄灰・灰白	口縁1/12	外面に自然釉
358	09302	須恵器	杯蓋	Ｌ９・１０	ＳＨ２６ａ		外；ロクロナデ 内；ロクロナデ	密	灰	口縁部小片	

第12表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表（8）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
359	09306	須恵器	杯身	Ｌ９・１０	ＳＨ２６ａ	(口) 13.8 (高台)10.0 (高) 4.9	外；ロクロナデ・貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰白・浅黄橙	高台3/12	磨耗激しい
360	09304	土師器	杯	Ｌ９・１０	ＳＨ２６ａ	(口) 10.8	外；調整不明瞭 内；調整不明瞭	やや密	にぶい橙	口縁3/12	磨耗激しい
361	09403	土師器	甕	Ｌ１０	ＳＨ２６ｂ		外；ハケメ・ヨコナデ 内；ハケメ・ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁部小片	
362	09401	土師器	甕	Ｌ９・１０	ＳＨ２６ａ		外；ハケメ・ヨコナデ 内；ハケメ・ヨコナデ	やや密	橙・にぶい橙	口縁部小片	
363	09404	須恵器	高杯	ＣＤ １０・１１	ＳＨ２５ａ		外；ロクロナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰	口縁部小片	
364	06405	土師器	甕	Ｅ９	ＳＨ２３ａ	(口) 20.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙・にぶい黄橙	口縁3/12	
365	06404	土師器	甕	ＥＦ ９・１０	ＳＨ２３ｃ	(口) 22.0	外；ハケメ・ナデ→ヨコナデ 内；ハケメ・ナデ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい黄橙 内：明黄褐	口縁2/12	
366	16703	須恵器	杯蓋	Ｍ１７	ＳＫ３０５		外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや密	灰	口縁小片	
367	16604	土師器	杯	Ｍ１７	ＳＨ３０５	(口) 7.4	外；ナデ 内；ナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁6/12	全体に摩耗激しい
368	16701	土師器	高杯	Ｍ１７	ＳＨ３０５	(口) 19.0	外；ナデ・ハケメ・ケズリ 内；ナデ	やや密	浅黄橙	口縁8/12	杯外底面に接合痕
369	16602	土師器	甕	Ｎ・Ｍ１６	ＳＨ３０５	(口) 15.0	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁4/12	
370	17004	土師器	杯	Ｉ１６	ＳＨ３２１	(口) 11.8 (高) 3.8	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁6/12	外面に煤付着
371	17005	土師器	杯	Ｉ１６	ＳＨ３２１		外；ナデ 内；ナデ	粗	にぶい黄橙	口縁部小片	
372	20102	土師器	高杯	Ｉ１６	ＳＨ３２１ 貯蔵穴	(脚裾)8.8	外；ハケメ→ヨコナデ・ナデ 内；工具ナデ　台部：ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	脚裾2/12	
373	17307	須恵器	杯蓋	Ｍ１８	ＳＨ３０６ｃ	(口) 10.5 (高) 1.6	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	外：灰白 内：浅黄橙	口縁3/12	
374	17301	須恵器	杯蓋	Ｌ１８	ＳＨ３０６ｄ	(口) 12.0 (高) 2.4	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰白	口縁2/12	
375	17310	須恵器	杯蓋	Ｌ・Ｍ１８	ＳＨ３０６ｄ	(口) 12.0 (高) 2.2	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	外：灰 内：褐灰	口縁2/12	
376	17305	須恵器	杯蓋	Ｍ１８	ＳＨ３０６ｃ		外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰	口縁部小片	
377	17302	須恵器	杯身	Ｌ１８	ＳＨ３０６ｄ	(口) 10.0 (高) 3.0	外；ロクロナデ→ヘラ切り→ヘラ記号 内；ロクロナデ	密	灰	完存	「Ｖ」字状ヘラ記号
378	17404	須恵器	杯身	Ｍ１８	ＳＨ３０６ｃ		外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	密	灰	口縁部小片	
379	17304	土師器	杯	Ｌ１８	ＳＨ３０６ａ	(口) 9.6	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	橙	口縁4/12	
380	17303	土師器	杯	Ｍ１８	ＳＨ３０６ｃ	(口) 10.0	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	外：浅黄橙 内：橙	口縁3/12	
381	19305	土師器	杯	Ｍ１８	ＳＨ３０６ 貯蔵穴	(口) 10.8	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	橙	口縁4/12	
382	17306	土師器	皿	Ｌ１７	ＳＨ３０６		外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	橙	口縁部小片	
383	17402	土師器	高杯	Ｌ１８	ＳＨ３０６ｂ	(口) 17.7	外；ナデ・オサエ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	橙	口縁2/12	
384	17401	土師器	甕	Ｌ１８	ＳＨ３０６	(口) 37.4	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	橙	口縁2/12	
385	17001	土師器	甕	Ｌ１８	ＳＨ３０６ａ	(口) 17.3	外；ハケメ→ヨコナデ→ヘラ記号 内；ハケメ→ケズリ	粗	橙	口縁4/12	ヘラ記号
386	09502	土師器	杯	Ｈ１６	ＳＨ３２２ａ	(口) 10.4 (高) 3.25	外；工具ナデ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁4/12	
387	09504	土師器	杯	Ｈ１６	ＳＨ３２２ａ	(口) 10.8	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	橙・にぶい橙	口縁2/12	
388	09503	土師器	杯	Ｈ１６	ＳＨ３２２ｂ	(口) 11.7 (高) 3.45	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	淡橙	口縁2/12	
389	09601	土師器	甕	Ｈ１６	ＳＨ３２２ａ		外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁部小片	
390	06802	土師器	杯	Ｈ１６	ＳＨ３２３	(口) 9.8 (高) 3.7	外；ナデ 内；ナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁1/6	
391	06803	土師器	杯	Ｈ１６	ＳＨ３２３	(口) 10.5 (高) 4.0	外；ナデ・オサエ 内；ナデ	やや密	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙・明黄褐	口縁8/12	
392	06801	土師器	杯	Ｈ１６	ＳＨ３２３	(口) 11.0	外；ナデ 内；ナデ	やや密	にぶい橙	口縁3/12	
393	06808	土師器	杯	Ｈ１６	ＳＨ３２３		外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁部小片	
394	06806	土師器	杯	Ｈ１６	ＳＨ３２３		外；ケズリ・ナデ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→放射状暗文	密	橙	口縁部小片	
395	06901	土師器	甕	Ｈ１６	ＳＨ３２３	(口) 21.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	口縁11/12	
396	06804	土師器	甕	Ｈ１６	ＳＨ３２３	(口) 18.5	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ・オサエ・ナデ	やや粗	橙	口縁6/12	摩耗激しい
397	06902	石製品	砥石	Ｈ１６	ＳＨ３２３	(残長)14.1 (幅) 5.0					(重) 330ｇ
398	10401	土師器	杯	Ｈ２１	ＳＨ３４３ｂ	(口) 9.8 (高) 3.4	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ・工具あたり→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁4/12	
399	10306	土師器	甕	Ｈ２１	ＳＨ３４３ｂ	(口) 15.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙・にぶい橙	口縁3/12	
400	10204	土師器	杯	Ｆ２１	ＳＨ３３２ａ		外；ナデ 内；ナデ	やや粗	にぶい橙	口縁部小片	磨耗激しい

第13表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表 (9)

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
401	10205	土師器	椀	Ｆ２１	ＳＨ３３２ｂ		外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	口縁部小片	磨耗激しい
402	10103	土師器	甕	Ｆ２２	ＳＨ３３３ａ	（口）19.7	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁2/12	
403	10102	土師器	甕	Ｆ２２	ＳＨ３３３ｄ	（口）33.5	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや粗	橙	口縁2/12	
404	09801	土師器	杯	Ｄ２２	ＳＨ３３５ｂ	（口）11.5 （高）4.0	外；ナデ・オサエ 内；ナデ	やや密	にぶい橙	口縁11/12	
405	09802	土師器	甕	Ｄ２２	ＳＨ３３５	（口）18.0	外；ヨコナデ→ハケメ 内；ヨコナデ→ハケメ	密	橙	口縁11/12	
406	20503	土師器	甕	Ｄ２２	ＳＨ３３５	（口）20.4	外；ヨコナデ→ハケメ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→ハケメ	やや密	浅黄橙	口縁4/12	
407	10001	土師器	甕	Ｄ２２	ＳＨ３３５	（口）20.3 （高）39.2	外；ヨコナデ→ハケメ・ナデ・オサエ 内；ヨコナデ→工具ナデ？ケズリ？・ハケメ	やや密	浅黄橙	ほぼ完存	
408	20502	土師器	甕	Ｃ・Ｄ２２	ＳＨ３３５ａ	（口）30.2	外；ヨコナデ→ハケメ・貼付ナデ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→ハケメ・ケズリ・オサエ	やや密	にぶい黄橙	口縁3/12	把手付甕 外面に煤付着
409	09901	土師器	甕	Ｄ２２	ＳＨ３３５煙道	（口）34.0 （高）20.8	外；ヨコナデ→貼付ナデ→ハケメ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→ケズリ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	橙	口縁2/12	把手付甕
410	20501	土師器	甑	Ｄ２２	ＳＨ３３５	（口）27.0	外；ヨコナデ→把手ハリツケ・ハケメ 内；ヨコナデ→ハケメ	密	にぶい黄橙	口縁2/12	
411	17002	土師器	甑	Ｄ２２	ＳＨ３３５	（口）27.0	外；ヨコナデ→把手ハリツケ・ハケメ 内；ヨコナデ→ハケメ	粗	浅黄橙・淡黄	口縁3/12	
412	20203	須恵器	杯蓋	Ｊ８	ＳＢ３ （Ｐｉｔ５）	（口）18.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや粗	灰	口縁3/12	
413	19801	土師器	甕	Ｋ７	ＳＢ３ （Ｐｉｔ４）	（口）16.2	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁2/12	
414	19802	土師器	甕	Ｋ７	ＳＢ３ （Ｐｉｔ４）		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁部小片	
415	19605	土師器	杯	Ｋ１１	ＳＢ４９ （Ｐｉｔ１）	（口）12.7	外；ナデ 内；ナデ	やや粗	にぶい黄橙	口縁2/12	
416	19903	須恵器	杯蓋	Ｌ１４	ＳＢ５２ （Ｐｉｔ１）	（口）10.7	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ→仕上げナデ	やや粗	灰	口縁3/12	
417	19904	土師器	甕	Ｍ１４	ＳＢ５２ （Ｐｉｔ１）		外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	にぶい橙・灰	口縁部小片	
418	19402	須恵器	杯	Ｊ９	ＳＢ５０ （Ｐｉｔ１）	（口）10.4	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰	口縁3/12	
419	19604	須恵器	杯	Ｊ９	ＳＢ５０ （Ｐｉｔ１）	（底）8.0	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや密	にぶい黄橙	底部4/12	
420	19704	土師器	皿	Ｉ１０	ＳＢ５０ （Ｐｉｔ１）		外；ヨコナデ 内；放射状暗文・ヨコナデ	やや密	橙	口縁部小片	
421	19808	土師器	高杯	Ｉ１０	ＳＢ５０ （Ｐｉｔ２）	（口）21.7	外；ケズリ・ナデ・ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁4/12	
422	19701	土師器	甕	Ｋ１１	ＳＢ５０ （Ｐｉｔ２柱痕）	（口）15.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁2/12	
423	17203	土師器	土錘	Ｊ１０	ＳＢ５０ （Ｐｉｔ１）	（長）6.8 （径）0.9～1.1	外；ナデ 内；ナデ	密	浅黄橙	ほぼ完存	（重）5.98ｇ
424	19401	土師器	杯	Ｌ１８	ＳＡ５９ （Ｐｉｔ２）	（口）16.0	外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；ヨコナデ・放射状暗文	密	橙	口縁2/12	
425	19505	土師器	甕	Ｌ１８	ＳＡ５９ （Ｐｉｔ２）		外；ハケメ→貼付後ナデ 内；ハケメ→ケズリ	密	橙	把手片	把手付甕
426	20302	土師器	杯	Ｊ１５	ＳＢ５６ （Ｐｉｔ３）	（口）17.0	外；ナデ 内；ナデ	やや密	橙	口縁3/12	全体に摩耗激しい
427	20005	土師器	甕	Ｈ１６	ＳＢ５６ （Ｐｉｔ１）		外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	橙	口縁部小片	
428	20201	土師器	甕	Ｉ１５	ＳＢ５６ （Ｐｉｔ１）	（口）31.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	灰黄	口縁3/12	
429	19302	須恵器	杯蓋	Ｎ１８	Ｐｉｔ２	（口）10.4	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	灰	口縁3/12	
430	19306	土師器	杯	Ｎ１８	Ｐｉｔ２	（口）10.8 （高）3.1	外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	外：橙 内：にぶい黄橙	口縁2/12	
431	19301	土師器	杯	Ｎ１８	Ｐｉｔ２	（口）11.6	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	外：橙 内：にぶい黄褐	口縁3/12	
432	19307	土師器	皿	Ｎ１８	Ｐｉｔ２	（口）16.0 （高）2.3	外；ミガキ？ 内；調整不明瞭	密	橙	口縁2/12	
433	19403	須恵器	杯蓋	Ｎ１６	Ｐｉｔ１	（口）10.5	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	黄灰	口縁4/12	
434	19603	須恵器	杯身	Ｃ１７	Ｐｉｔ１	（口）11.0 （底）6.5 （高）4.0	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ→一方向ナデ	やや密	灰	口縁4/12	
435	19404	土師器	杯	Ｍ１６	Ｐｉｔ３	（口）12.0	外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	外：橙 内：明黄褐	口縁3/12	
436	19405	土師器	杯	Ｇ２０	Ｐｉｔ１	（口）12.6	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁9/12	
437	20105	土師器	皿	Ｋ１２	Ｐｉｔ２		外；ナデ・ケズリ→ヨコナデ 内；ヨコナデ・放射状暗文	やや密	橙・浅黄橙	口縁部小片	
438	07402	土師器	甕	Ｌ１０ Ｍ１０	ＳＫ２９	（口）22.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁3/12	
439	07501	土師器	甕	Ｈ６	ＳＫ７	（口）18.4	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや粗	淡橙・にぶい橙	口縁3/12	
440	07505	土師器	甕？・甑	Ｉ６	ＳＫ７ｂ		外；ハケメ→貼付後ナデ 内；ハケメ	やや密	浅黄橙・（断）灰	把手片	
441	07503	土師器	甕	Ｉ７	ＳＫ９ａ	（口）13.0	外；ナデ・ヨコナデ 内；ハケメ・ヨコナデ	やや密	淡赤橙・浅黄橙	口縁1/12	
442	07806	土師器	杯	Ｊ９	ＳＫ１６ｂ	（口）10.9 （高）3.1	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	口縁3/12	

第14表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表（10）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
443	07805	土師器	皿	Ｊ９	ＳＫ１６ｂ	(口) 20.6 (高) 2.7	外；ナデ・オサエ・ヨコナデ 内；工具ナデ・ヨコナデ	やや密	橙	口縁1/12	
444	08601	土師器	甕	Ｉ９	ＳＫ１６	(口) 19.4	外；ハケメ→ヨコナデ 内；工具ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙	口縁6/12	
445	07703	土師器	甕	Ｉ９	ＳＫ１６ａ	(口) 17.8	外；ハケメ・ヨコナデ 内；ハケメ・ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁2/12	
446	07701	土師器	甕	Ｉ９	ＳＫ１６ａ	(口) 19.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁11/12	
447	08602	土師器	甕	Ｉ１９	ＳＫ１６	(口) 11.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁2/12	
448	08607	土師器	甕	Ｊ９	ＳＫ１６ｂ	(口) 11.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；工具ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁3/12	
449	08606	土師器	甕	Ｊ９	ＳＫ１６ｂ	(口) 13.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外：橙 内：にぶい橙	口縁3/12	
450	08605	土師器	甕	Ｊ９	ＳＫ１６ｂ	(口) 14.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；工具ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁2/12	
451	07702	土師器	甕	Ｉ９	ＳＫ１６ａ	(口) 19.0	外；ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁2/12	
452	08701	土師器	甕	Ｊ８	ＳＫ１６ｂ		外；ハケメ→貼付後ナデ 内；ハケメ→ケズリ	やや粗	浅黄橙	体部片	把手付甕
453	08603	土師質	土錘	Ｉ９・Ｊ９	ＳＫ１６ａ	(長) 4.05 (幅) 1.65 (重) 8.87	外；ナデ 内；ナデ	密	灰白	ほぼ完存	
454	07401	須恵器	甕	Ｈ８	ＳＫ１９ｂ	(口) 23.0	外；ロクロナデ 内；ロクロナデ	やや粗	灰白・灰	口縁2/12	
455	06501	土師器	甕	Ｊ８	ＳＫ２２	(口) 30.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	外：浅黄橙・黄灰 内：にぶい黄橙	口縁2/12	
456	08107	須恵器	杯蓋	Ｍ１０	ＳＫ２８ａ	(口) 11.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや粗	灰	口縁5/12	
457	08201	土師器	杯	Ｍ１０	ＳＫ２８	(口) 13.6	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁2/12	
458	08203	土師器	杯	Ｍ１０	ＳＫ２８ａ	(口) 10.0 (高) 3.4	外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	外：黄灰・浅黄橙 内：浅黄橙	口縁2/12	
459	08204	土師器	杯	Ｍ１０	ＳＫ２８ａ	(口) 11.2	外；工具ナデ・オサエ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	外：にぶい橙 内：橙	口縁5/12	
460	08301	土師器	鉢	Ｍ１０	ＳＫ２８ｂ	(口) 30.0	外；ハケメ→ミガキ？・ヨコナデ 内；オサエ・ナデ・ヨコナデ	やや密	橙	口縁2/12	
461	08205	土師器	甕	Ｍ１０	ＳＫ２８ａ	(口) 15.0	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁2/12	
462	08206	土師器	甕	Ｍ１０	ＳＫ２８ａ	(口) 14.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；工具ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁2/12	
463	08304	土師器	杯	Ｉ１１	ＳＫ３４	(口) 14.0	外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁3/12	
464	08303	土師器	杯	Ｉ１１	ＳＫ３４	(脚裾)8.3	外；ミガキ→貼付後ナデ 内；ナデ　脚部：貼付後ナデ	やや密	橙	脚裾5/12	
465	06306	須恵器	杯蓋	Ｈ１１	ＳＨ３３ｂ	(口) 10.0 (高) 2.7	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	灰	口縁3/12	
466	06304	須恵器	杯蓋	Ｈ１１	ＳＨ３３ｂ	(口) 10.0 (高) 2.6	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰	口縁4/12	
467	06302	須恵器	杯身	Ｈ１２	ＳＨ３３ａ	(口) 9.6 (底) 6.2 (高) 3.2	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	密	外：浅黄 内：オリーブ黒	口縁4/12 底部6/12	
468	06303	須恵器	杯身	Ｈ１１	ＳＨ３３ｂ	(口) 8.6 (底) 5.2 (高) 3.15	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	密	灰白	口縁1/12 底部6/12	
469	06305	須恵器	杯身	Ｈ１１	ＳＨ３３ｂ	(高台)9.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	外：オリーブ灰 内：灰	高台6/12	
470	06401	土師器	杯	Ｈ１１	ＳＨ３３ｂ	(口) 12.0	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁4/12	
471	06502	土師器	甕	Ｈ１１	ＳＨ３３ｂ	(口) 34.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	橙	口縁4/12	
472	06703	須恵器	杯蓋	Ｊ１５	ＳＫ４２	(口) 10.3	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰白	口縁2/12	胎土極めて緻密
473	06702	須恵器	杯身	Ｊ１５	ＳＫ４２	(底) 8.1	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→ヘラ記号 内；ロクロナデ	密	灰黄	底部3/12	胎土極めて緻密 底部にヘラ記号あり
474	06705	土師器	皿	Ｊ１５	ＳＫ４２		外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	橙	口縁部小片	
475	06704	土師器	皿	Ｊ１５	ＳＫ４２		外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	明赤褐	口縁部小片	
476	06605	土師器	甕	Ｊ１５	ＳＫ４２		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁部小片	
477	06601	土師器	杯	Ｈ１１ Ｈ１２	ＳＫ４３	(口) 20.0	外；調整不明瞭 内；調整不明瞭	やや密	外：にぶい橙 内：橙	口縁5/12	磨耗激しい
478	06603	土師器	皿	Ｈ１２	ＳＫ４３		外；調整不明瞭 内；調整不明瞭	やや密	明赤褐	口縁部小片	磨耗激しい
479	06602	土師器	皿	Ｈ１２	ＳＫ４３	(口) 20.8	外；調整不明瞭 内；調整不明瞭	やや密	橙	口縁1/12	磨耗激しい
480	06604	土師器	甕	Ｈ１１ Ｈ１２	ＳＫ４３		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや粗	明黄褐	口縁部小片	磨耗激しい
481	07004	須恵器	杯蓋	Ｍ１７ Ｈ１８	ＳＫ３０７ａ		外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや密	外：浅黄 内：黄灰	口縁部小片	外面に自然釉
482	07007	須恵器	杯蓋	Ｍ１７ Ｍ１８	ＳＫ３０７ａ	(摘) 2.4	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰白	摘み10/12	
483	07002	須恵器	杯蓋	Ｍ１７ Ｍ１８	ＳＫ３０７ａ		外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	粗	灰	口縁部小片	
484	07106	須恵器	壺	Ｎ１７	ＳＫ３０７	(高台)9.0	外；ロクロナデ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや粗	外：黄灰 内：灰白	高台3/12	

第15表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表（11）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
485	07202	土師器	杯	Ｎ１７	ＳＫ３０７	(口) 12.0 (高) 3.6	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	口縁4/12	
486	07103	土師器	杯	Ｎ１７	ＳＫ３０７ｂ	(高台)13.0	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	橙	高台2/12	
487	07001	土師器	甕	Ｍ１７ Ｍ１８	ＳＫ３０７ａ	(口) 23.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁4/12	外面に煤付着
488	16901	須恵器	壺	Ｄ１５	ＳＫ３２７	(口) 12.6	外；ロクロナデ→タタキ 内；ロクロナデ→タタキ	密	外：灰 内：灰白	口縁4/12	
489	16906	土師器	杯	Ｄ１６	ＳＫ３２７		外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁部小片	
490	16902	土師器	皿	Ｄ１５	ＳＫ３２７		外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁部小片	
491	16903	土師器	甕	Ｄ１６	ＳＫ３２７	(口) 30.6	外；ハケメ→ヨコナデ・貼付後ナデ 内；工具ナデ・ケズリ→ヨコナデ	やや密	橙	口縁6/12	
492	10701	須恵器	杯蓋	Ｊ１４	ＳＫ４５	(口) 9.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	外：黄灰 内：灰黄	口縁3/12	
493	07205	須恵器	杯蓋	Ｊ１５	ＳＫ３２５		外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや密	灰白	口縁部小片	外面に自然釉
494	07204	土師器	杯	Ｊ１５	ＳＫ３２５	(口) 10.0	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	橙	口縁3/12	
495	16904	土師器	杯	Ｉ２０	ＳＫ３４４	(口) 11.0 (高) 4.0	外；オサエ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁5/12	
496	16907	土師器	杯	Ｊ１９	ＳＫ３２６		外；調整不明瞭 内；調整不明瞭	やや密	にぶい黄橙	口縁部小片	磨耗激しい
497	16905	土師器	高杯	Ｍ・Ｌ２４	ＳＫ３１３	(脚柱)5.0	外；ハケメ・工具ナデ・ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	橙	脚柱9/12	
498	16802	土師器	甕	Ｌ１９	ＳＫ３１１	(口) 14.5	外；ハケメ→ヨコナデ 内；工具ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙・にぶい橙	口縁3/12	
499	16804	土師器	甕	Ｌ１９	ＳＫ３１１	(口) 14.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ケズリ・ヨコナデ	密	橙	口縁2/12 体部3/12	
500	10101	土師器	甕	Ｌ１９	ＳＫ３１７	(口) 15.8 (高) 16.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ケズリ・ヨコナデ	やや密	外：浅黄橙 内：にぶい橙	口縁3/12	
501	16801	土師器	甕	Ｌ１９	ＳＫ３１７	(口) 16.7	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ケズリ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁4/12	
502	10601	土師器	甕	Ｆ２１	ＳＫ３４７ａ		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ケズリ・ヨコナデ	やや粗	外：にぶい橙 内：浅黄橙	口縁部小片	
503	16601	土師器	甕	Ｉ２１ Ｉ２０	ＳＫ３４５ｂ	(口) 27.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ケズリ・ヨコナデ	やや密	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	口縁2/12	外面に煤付着
504	00801	須恵器	杯蓋	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 9.2 (高) 2.7	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	外：灰白 内：青灰	完存	
505	00802	須恵器	杯蓋	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 10.6 (高) 3.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰白	口縁10/12	
506	00804	須恵器	杯蓋	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 9.2 (高) 1.7	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや密	灰	口縁4/12	
507	00805	須恵器	杯蓋	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(摘) 3.2	外；ロクロケズリ→ロクロナデ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや粗	灰白	摘み完存	
508	00806	須恵器	杯蓋	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(摘) 3.0	外；ロクロケズリ→ロクロナデ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	灰	摘み完存	
509	00902	須恵器	杯身	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 10.0 (高) 3.4	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや粗	灰白	口縁4/12	
510	00904	須恵器	杯身	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 10.4 (高) 3.7	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや密	灰白	口縁6/12	
511	00903	須恵器	杯身	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 10.8 (高) 3.5	外；ロクロナデ→ヘラケズリ？ヘラ切り？ 内；ロクロナデ	密	灰黄	口縁3/12	
512	00905	須恵器	杯身	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(底) 5.6	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや粗	灰白	底部3/12	
513	00901	須恵器	杯身	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(底) 8.0	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや密	オリーブ灰	底部3/12	
514	00808	須恵器	杯身	Ｌ１９	ＳＫ３０３	(底) 6.3	外；ロクロナデ→ヘラ切り→ヘラ記号 内；ロクロナデ	やや粗	灰白	底部完存	「ー」字状ヘラ記号
515	00807	須恵器	杯身	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(高台)13.0	外；ロクロナデ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	浅黄	高台2/12	
516	00906	須恵器	高杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(脚裾)10.2	外；ロクロナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰	脚裾3/12	
517	00401	須恵器	円面硯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(径) 17.1	外；ロクロナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰白	硯面5/12	長方形透かし (11方向)
518	01301	須恵器	提瓶	Ｎ１９	ＳＫ３０３	(体) 15.4	外；ロクロナデ→ロクロケズリ・カキメ・沈線 内；ロクロナデ	やや粗	灰白・灰	頸部～底部 まで完存	
519	01402	須恵器	平瓶	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(体) 17.5	外；ロクロナデ→タタキ・ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや密	灰・灰白	体部片	
520	01002	須恵器	横瓶	Ｎ１９	ＳＫ３０３		外；ロクロナデ→タタキ→カキメ 内；ロクロナデ→タタキ	やや密	黄灰	体部片	
521	01401	須恵器	横瓶	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ロクロナデ 内；ロクロナデ	やや粗	灰オリーブ・灰白	体部片	外面に土器片融着
522	01302	須恵器	壺	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(脚台)10.2	外；ロクロナデ→ロクロケズリ・沈線・貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰白・灰	脚台11/12	
523	01001	須恵器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ロクロナデ→沈線・波状文 内；ロクロナデ	粗	灰	口縁部小片	
524	01201	須恵器	甕	Ｎ１９	ＳＫ３０３	(口) 22.9	外；ロクロナデ→タタキ→カキメ 内；ロクロナデ→タタキ	やや粗	灰	口縁完存	
525	01101	須恵器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；タタキ 内；タタキ	密	灰白・灰	体部片	
526	01503	石製品	砥石	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(残長)8.4 (幅) 2.3					
527	01907	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 9.5	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや密	橙	口縁2/12	磨耗激しい
528	02001	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 9.8 (高) 3.3	外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	完存	
529	01704	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 10.4 (高) 2.9	外；オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	口縁3/12	
530	01903	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 10.6 (高) 2.6	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙	口縁4/12	磨耗激しい
531	01806	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 10.8	外；オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁5/12	

第16表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表（12）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
532	01802	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 11.0	外；ミガキ？→ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	明赤褐	口縁4/12	
533	01805	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 11.2	外；オサエ→ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	橙	口縁4/12	
534	01801	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 11.3 (高) 4.2	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	橙	口縁4/12	
535	01703	土師器	杯	Ｎ１９	ＳＫ３０３	(口) 11.0 (高) 3.9	外；調整不明瞭 内；調整不明瞭	やや密	にぶい黄橙	口縁１/12	
536	02002	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 12.0	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	橙	口縁2/12	
537	01803	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 12.8	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	橙	口縁4/12	磨耗激しい
538	01705	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 15.3 (高) 5.7	外；ナデ→ヨコナデ 内；螺旋状暗文（不明瞭）・ヨコナデ	やや密	橙	口縁4/12	磨耗激しい
539	01901	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；オサエ・ナデ・ハケメ→ヨコナデ 内；放射状暗文・ヨコナデ	やや密	橙	口縁部少片	
540	02003	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ミガキ（不明瞭）・ヨコナデ 内；ミガキ（不明瞭）・ヨコナデ	密	橙	口縁部少片	
541	02102	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ナデ 内；ナデ	密	橙	高台片	
542	02004	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ナデ→ヨコナデ 内；放射状暗文・ヨコナデ	密	橙	口縁部少片	
543	01706	土師器	杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 14.8	外；ヨコナデ 内；放射状暗文・ヨコナデ	やや密	橙	口縁2/12	磨耗激しい
544	01701	土師器	皿	Ｎ１９	ＳＫ３０３	(口) 14.3	外；ナデ→ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	橙	口縁3/12	
545	01702	土師器	皿	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 18.4	外；ケズリ？→ヨコナデ 内；放射状暗文・ヨコナデ	密	橙	口縁２/12	
546	02201	土師器	皿	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 18.6 (高) 2.8	外；工具ナデ→オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；工具ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁9/12	内面に線刻
547	03302	土師器	高杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 12.3	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁1/12	
548	03303	土師器	高杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 16.4	外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	橙	口縁１/12	
549	03301	土師器	高杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 16.8	外；ケズリ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	橙	口縁6/12	
550	02306	土師器	高杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 16.8	外；ハケメ 内；ナデ	やや密	橙	口縁2/12	
551	02401	土師器	高杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 16.5	外；杯部：ハケメ→ナデ　脚部：面取り風ナデ ・ハケメ→ヨコナデ 内；杯部：放射・螺旋状暗文　脚部：ヨコナデ	やや密	橙	口縁2/12	
552	02304	土師器	高杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 13.3 (脚裾) 10.0 (高) 9.3	外；杯部：ケズリ・ハケメ→ヨコナデ 脚部：面取りナデ・ハケメ→ヨコナデ 内；杯部：ヨコナデ　脚部：ヨコナデ	やや粗	にぶい橙・にぶい黄橙	口縁部少片 底部6/12	
553	02305	土師器	高杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(脚裾) 11.0	外；面取り風ナデ・ハケメ→ヨコナデ 内；シボリ痕・ヨコナデ	やや密	橙・にぶい黄橙	脚裾6/12	
554	02101	土師器	高杯	Ｎ１９	ＳＫ３０３	(脚裾) 10.3	外；杯部：ハケメ　脚部：ケズリ→ヨコナデ 内；杯部：ナデ　脚部：ヨコナデ	密	橙	脚裾3/12	
555	02302	土師器	高杯	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(脚裾) 10.3	外；ハケメ・面取り風ナデ→ヨコナデ 内；シボリ痕→ヨコナデ	やや密	橙	脚裾8/12	
556	02402	土師器	高杯	Ｎ１９	ＳＫ３０３	(脚裾) 9.1	外；面取り風ナデ→ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	にぶい橙・橙	脚裾6/12	
557	01602	土師質	土錘	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(長) 4.5 (幅) 1.6	外；ナデ	やや密	にぶい黄橙・橙	ほぼ完存	(重) 9.7ｇ
558	01504	土師器	甕	Ｎ１９	ＳＫ３０３	(口) 20.0	外；オサエ・ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内；ハケメ→ケズリ→ヨコナデ	やや粗	橙	口縁4/12	
559	01501	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 21.0 (高) 12.5	外；ハケメ→ケズリ？→ヨコナデ 内；ハケメ・ケズリ→ヨコナデ	やや粗	橙	口縁8/12	底部にヘラ記号
560	02103	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ハケメ→貼付後ナデ 内；ハケメ→ケズリ	密	浅黄橙	把手片	把手付甕
561	03201	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 32.2	外；ハケメ・貼付後ナデ・ヨコナデ 内；工具ナデ→ケズリ→ヨコナデ	やや粗	橙・浅黄橙	口縁3/12	把手付甕
562	01906	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ハケメ・貼付後ナデ 内；ハケメ→ケズリ	やや粗	にぶい橙	把手片	把手付甕
563	03105	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ハケメ→貼付後ナデ 内；オサエ・ナデ	密	浅黄橙	把手片	把手付甕
564	01502	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 12.3	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ	密	にぶい黄橙	口縁1/12	
565	02904	土師器	甕	Ｎ１９	ＳＫ３０３	(口) 13.0	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	橙	口縁1/12	
566	02803	土師器	甕	Ｎ１９	ＳＫ３０３	(口) 14.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ・ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁2/12	
567	01601	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 15.0	外；オサエ→ハケメ→ナデ 内；ハケメ→ケズリ→ナデ	やや粗	にぶい橙・明黄褐	口縁5/12	
568	03102	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 17.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	橙・淡赤橙	口縁2/12	
569	02903	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 21.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ・ハケメ	密	浅黄橙	口縁3/12	
570	02702	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 21.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ・工具ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁部少片	
571	02701	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 21.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ・ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁2/12	
572	02802	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 21.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ・ヨコナデ	やや密	外：橙 内：にぶい黄橙	口縁4/12	
573	02006	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 22.0	外；オサエ・ヨコナデ 内；ハケメ・ヨコナデ	密	橙	口縁2/12	
574	02502	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 22.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁3/12	
575	02801	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 23.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ヨコナデ	やや密	橙	口縁2/12	
576	02902	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 23.7	外；ヨコナデ 内；オサエ・ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁2/12	
577	02007	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 22.8	外；ハケメ・オサエ→ヨコナデ 内；工具ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁4/12	

第17表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表（13）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
578	02501	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 33.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；工具ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁2/12	外面に煤付着
579	02901	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３	(口) 32.4	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁3/12	
580	02602	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	明黄褐	口縁部小片	
581	03001	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	橙	口縁部小片	
582	02605	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ・ヨコナデ	密	橙	口縁部小片	
583	02603	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	明黄褐	口縁部小片	
584	03103	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁部小片	
585	03003	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ハケメ→沈線・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや粗	浅黄橙・オリーブ黒	口縁部小片	外面に煤付着
586	02005	土師器	甕	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ケズリ・ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁1/12	
587	02404	土師器	甑	Ｌ１９	ＳＫ３０３		外；ハケメ→ナデ 内；ハケメ・ナデ→ケズリ	やや密	外：にぶい黄橙 内：橙	底部小片	
588	02403	土師器	甑	Ｋ１９	ＳＫ３０３		外；ハケメ→ナデ 内；ハケメ・ナデ→ケズリ	やや密	橙	底部小片	
589	18801	弥生土器	高杯	Ｍ２９	包含層	(口) 21.8	外；ミガキ→ナデ 内；ミガキ・ナデ？	やや粗	明赤褐・にぶい橙	口縁2/12	
590	12303	弥生土器	壺	Ｎ１８	包含層		外；ヨコナデ→円形浮文 内；ヨコナデ	粗	浅黄橙・褐灰	口縁部小片	
591	18503	弥生土器	壺		包含層		外；ナデ→竹管文 内；ナデ・オサエ	粗	外：橙 内：にぶい黄橙	体部片	
592	17602	弥生土器	壺	Ｆ１５	包含層	(底) 7.0	外；ハケメ→ミガキ→ナデ 内；ナデ	やや粗	浅黄橙・（断）灰	底部3/12	
593	17501	土師質	朝顔埴輪	Ｋ２５	包含層		外；ハケメ→貼付後ナデ 内；ハケメ	やや密	浅黄橙	口縁部片	
594	17901	須恵質	家形埴輪	Ｉ１１	包含層		外；ハケメ→ナデ→線刻 内；工具ナデ	やや粗	にぶい橙	壁部片	
595	18803	須恵器	杯蓋	Ｋ１８	包含層	(口) 10.1 (高) 3.6	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや粗	灰白・灰	口縁3/12	
596	12501	須恵器	杯蓋	Ｋ１９	包含層	(口) 8.9 (高) 2.25	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰白	口縁11/12	
597	12504	須恵器	杯蓋	Ｍ１９	包含層	(口) 9.7 (高) 2.5	外；ロクロナデ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	外：灰白 内：灰黄	ほぼ完存	外面に自然釉付着
598	12503	須恵器	杯蓋	Ｌ１９	包含層	(口) 9.9 (高) 3.6	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	粗	灰	ほぼ完存	
599	19006	須恵器	杯蓋	Ｊ６	包含層	(口) 10.0 (高) 2.8	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ・一方向ナデ	密	灰白・黄灰	口縁4/12	外面に自然釉付着
600	12502	須恵器	杯蓋	Ｋ１７	包含層	(口) 10.4 (高) 2.75	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや粗	外：黄灰 内：褐灰	口縁8/12	
601	12505	須恵器	杯蓋	Ｍ１９	包含層	(口) 11.0 (高) 2.9	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰	口縁10/12	
602	18604	須恵器	杯蓋	Ｊ１７	包含層	(摘) 1.4	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ・一方向ナデ	やや密	浅黄・灰黄・灰白	摘み完存	
603	05901	須恵器	杯蓋	Ｃ１９	包含層	(口) 17.3	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	やや粗	外：灰白 内：灰	口縁3/12	
604	18802	須恵器	杯蓋	Ｍ１３	包含層	(口) 17.2	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰	口縁3/12	
605	17802	須恵器	杯身	Ｉ８	包含層	(口) 8.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ 内；ロクロナデ	密	灰白	口縁3/12	
606	12507	須恵器	杯身	Ｍ１９	包含層	(口) 10.2 (高) 2.9	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	粗	外：灰白 内：黄灰	口縁7/12	
607	12601	須恵器	杯身	Ｍ２０	包含層	(口) 10.0 (高) 3.5	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	密	灰	口縁2/12	
608	13205	須恵器	杯身	Ｍ１９	包含層	(口) 10.7 (高) 3.1	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ	やや密	灰白	口縁6/12	
609	18804	須恵器	杯身	Ｎ１７	包含層	(口) 10.8	外；ロクロナデ→ヘラ切り 内；ロクロナデ→一方向ナデ	やや密	灰白・にぶい黄橙	口縁2/12	
610	06301	須恵器	杯身	Ｆ・Ｇ１２	包含層	(底) 7.6	外；ロクロナデ→ヘラ切り→ヘラ記号 内；ロクロナデ	密	灰	底部6/12	底部にヘラ記号
611	13204	須恵器	杯身	Ｍ２０	包含層	(高台)8.7	外；ロクロナデ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰白	高台6/12	
612	18401	須恵器	杯身	Ｉ１１	包含層	(高台)9.5	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰黄褐	高台3/12	
613	12506	須恵器	杯身	Ｎ２０	包含層	(高台)13.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	粗	外：黄灰 内：灰黄	高台3/12	
614	17801	須恵器	杯身	Ｉ７	包含層	(高台)13.0	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	密	灰	高台3/12	
615	13203	須恵器	杯身	Ｍ２０	包含層	(口) 16.6	外；ロクロナデ→貼付後ナデ 内；ロクロナデ	やや密	灰白	口縁1/12	
616	12603	須恵器	鉢	Ｎ１８	包含層	(口) 17.0	外；ロクロナデ→沈線→波状文 内；ロクロナデ	やや粗	灰	口縁2/12	
617	18304	須恵器	鉢	Ｋ１４	包含層	(底) 9.0	外；ロクロナデ 内；ロクロナデ	やや粗	灰白・灰	底部3/12	
618	12604	須恵器	鉢	Ｎ１８	包含層	(底) 11.0	外；ロクロナデ→底部刺突 内；ロクロナデ	粗	灰黄	底部6/12	
619	19003	須恵器	壺	Ｈ５	包含層	(口) 9.4	外；ロクロナデ→沈線 内；ロクロナデ	やや密	灰	口縁4/12	
620	18601	須恵器	甕	Ｋ１３	包含層	(口) 12.0	外；ロクロナデ→タタキ→カキメ 内；ロクロナデ→タタキ	やや密	灰白	口縁6/12	
621	17903	須恵器	甕	Ｋ１０	包含層		外；ロクロナデ→波状文 内；ロクロナデ	やや密	灰	口縁部小片	
622	18405	須恵器	甕	Ｌ９	包含層		外；ロクロナデ→沈線・波状文 内；ロクロナデ	粗	灰	口縁部小片	
623	18002	須恵器	横瓶	Ｃ１２	包含層	(口) 14.0	外；ロクロナデ 内；ロクロナデ	やや粗	灰白	口縁3/12	
624	12804	土師器	杯	Ｍ１６	包含層	(口) 9.9	外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁3/12	

第18表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表（14）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
625	13304	土師器	杯	Ｎ２０	包含層	(口) 11.3 (高) 3.6	外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙・橙	口縁3/12	
626	15602	土師器	杯	Ｊ１６	包含層	(口) 11.7	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	やや密	浅黄橙	口縁4/12	
627	18602	土師器	杯		包含層	(口) 11.8	外；ナデ・オサエ 内；ナデ	やや密	浅黄橙・にぶい橙	口縁6/12	
628	18704	土師器	杯	Ｍ１０	包含層	(口) 11.8	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁1/12	
629	18703	土師器	杯		包含層	(口) 12.2	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙	口縁2/12	
630	18705	土師器	杯	Ｍ１０	包含層	(口) 15.8	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁3/12	
631	17102	土師器	杯	Ｈ１１	包含層	(口) 16.2	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁3/12	
632	12403	土師器	杯	Ｎ１９	包含層	(口) 17.0	外；ヨコナデ→ケズリ 内；ヨコナデ・放射状暗文	密	外：浅黄橙 内：橙	口縁2/12	
633	18203	土師器	杯	Ｋ１４	包含層	(口) 11.5 (高) 2.6	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；放射状暗文・螺旋状暗文・ヨコナデ	やや密	橙	口縁2/12	
634	18402	土師器	杯	Ｋ１４	包含層	(口) 13.7 (高) 2.0	外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；放射状暗文・ヨコナデ	やや密	外：にぶい赤褐 内：橙	口縁2/12	
635	12402	土師器	皿	Ｎ２０	包含層	(口) 17.0	外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；ナデ・放射状暗文	密	橙	口縁2/12	
636	17201	土師器	皿	Ｈ１１	包含層	(口) 18.6	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁1/12	
637	13201	土師器	皿	Ｍ２０	包含層	(口) 15.0	外；ナデ→ヨコナデ 内；放射状暗文・螺旋状暗文・ヨコナデ	やや密	橙	口縁3/12	
638	18302	土師器	皿	Ｋ１２	包含層	(脚裾)10.2	外；ナデ・指オサエ 内；ナデ・ハケメ	粗	にぶい黄橙	脚裾5/12	脚付皿
639	18301	土師器	高杯	Ｋ１４	包含層	(口) 18.0	外；ナデ・ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	やや粗	明赤褐	口縁5/12	
640	17804	土師器	甕	Ｌ１９	包含層	(口) 15.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ケズリ→ヨコナデ	粗	外：にぶい橙 内：にぶい褐	口縁2/12	
641	18702	土師器	甕	Ｎ１７	包含層	(口) 15.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙・明黄褐	口縁/3/12	外面に煤付着
642	05801	土師器	甕	Ｃ１７	包含層	(口) 19.0	外；ハケメ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	外：橙 内：浅黄橙・にぶい橙	口縁5/12	
643	12401	土師器	甕	Ｎ２０	包含層	(口) 19.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ・オサエ→ヨコハケメ→ヨコナデ	粗	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	口縁2/12	
644	06001	土師器	甕	Ｉ７	包含層	(口) 21.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；工具ナデ→ケズリ→ヨコナデ	やや密	橙	口縁4/12	
645	18202	土師器	甕	Ｋ１４	包含層	(口) 22.4	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁3/12	
646	18303	土師器	甕	Ｋ１４	包含層	(口) 21.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁2/12	
647	04001	土師器	甕	Ｎ１８	包含層	(口) 26.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ・工具ナデ→ヨコナデ	密	外：にぶい黄橙 内：灰黄褐	口縁3/12	
648	17601	土師器	甕	Ｆ２４	包含層	(口) 33.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙・（断）暗灰	口縁1/12	
649	19001	土師器	甕	Ｋ１４	包含層	(口) 35.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙	口縁3/12	
650	18101	土師器	甕	Ｋ１８	包含層	(口) 36.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	明黄褐・にぶい黄橙	口縁1/12	
651	17502	土師器	甕	Ｅ１８	包含層	(口) 13.5	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	やや密	橙・浅黄橙	口縁3/12	
652	18102	土師器	甑	Ｋ１４	包含層	(口) 36.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ケズリ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙・にぶい黄橙	口縁3/12	
653	18902	土師器	甑	Ｄ８	包含層		外；ハケメ・オサエ 内；ハケメ→ケズリ	やや密	浅黄橙・橙	把手片	
654	18901	土師器	竈	Ｋ・Ｊ１２	包含層	(口) 24.2	外；ハケメ・オサエ・ナデ 内；ハケメ→ケズリ	やや粗	黄橙・橙	口縁3/12	
655	13101	土師器	竈	Ｌ１９	包含層		外；ナデ→ハケメ 内；ナデ→ハケメ	やや粗	橙	庇片	
656	13301	土師器	竈	Ｎ１９	包含層		外；ハケメ→ナデ 内；ナデ	やや密	橙	体部片	
657	17701	石製品	五輪塔	Ｍ２７	表土	(残高)32.0				地輪欠損	一石五輪
658	18805	古銭	寛永通寶	Ｈ８	包含層	(径) 2.3				完存	

第19表　天王山遺跡・古墳群遺物観察表（15）

No.	遺物名	登録No.	取上No.	全長	刃部			把部		関形状	茎尻	鞘材	把材	備考
					長さ	幅	厚さ	長さ	幅					
169	蛇行剣	1001-01	No.1	82.8	67.4	3.6	0.9	15.4	2.1	やや斜めの角 左右段違い	一文字	木	木	把縁装具の圧痕
170	剣	1005-01 1005-02	—	—	—			—		撫 左右段違い	—	木	—	把部に皮革の物質

〔凡例〕
※刃部・把部寸法は中央について測定。
※「木」＝木質
※全長・刃部・把部の数値は全てcmである。

第20表　天王山１号墳埋葬施設出土鉄剣観察表

No.	登録No.	取上No.	鏃身外形	全長	鏃身長	頸部長	茎長	鏃身関	茎関	矢柄	重量
171	1002-01	No.2	長三角	12.5＋	2.4	8.0	2.1＋	撫	角	ロ＋木	12.2
172	1002-02	No.2	長三角	13.2＋	2.4	8.7	2.1＋	撫	台形	ロ＋木＋螺	12.8
173	1002-03	No.2	長三角	14.3	2.2	8.3	3.8	撫	角	ロ＋木	13.9
174	1002-04	No.2	長三角	12.8＋	2.6	8.2	2.0＋	撫	台形	ロ＋木＋螺	13.7
175	1002-05	No.2	長三角	14.9	2.1	8.4	4.4	撫	角	ロ＋木	14.7
176	1002-06	No.2	長三角	13.1＋	2.4	8.3	2.4＋	撫	角	ロ＋木＋螺	15.0
177	1003-01	No.2	長三角	13.9＋	2.0＋	8.6＋	3.1＋	撫	角	ロ	13.6
178	1003-02	No.2	長三角	14.8	2.4	8.2	4.2	撫	台形	ロ＋木	12.9
179	1003-03	No.2	長三角	13.8＋	2.0	9.3	2.5＋	撫	台形	ロ＋木＋螺	15.1
180	1003-04	No.2	長三角	12.9＋	2.1＋	8.6	2.2＋	撫	台形	ロ＋木	11.3
181	1003-05	No.2	長三角	12.2＋	2.1	8.1	2.0＋	撫	台形	ロ＋木	9.8
182	1003-06	No.2	長三角	13.9＋	1.4＋	8.4	4.1＋	撫	台形	ロ＋木	15.7
183	1004-01	No.3	長三角	15.0＋	1.7＋	9.0	4.3	撫	角	木	10.7
184	1004-02	No.3	長三角	13.6	2.4	7.3	3.9	撫	角	木	8.9
185	1004-03	No.3	長三角	13.3	2.5	6.8	4.0	撫	台形	木＋螺	8.1
186	1004-04	No.3	長三角	13.2	2.2	7.6	3.5	逆刺	台形	螺	8.5
187	1004-05	No.3	長三角	12.9＋	2.0＋	7.0	3.9	撫	角	ロ＋木＋螺	7.8
188	1004-06	No.3	長三角	10.5＋	1.0＋	6.9	2.6＋	撫	台形	ロ＋螺	6.7
189	1004-07	No.3	柳葉形	12.0	3.8	4.3	3.9	撫	台形？斜？	木	8.9
190	1004-08	No.3	長三角	11.7	2.6	5.7	3.4	撫	角	ロ＋木	12.2
191	1004-09	No.3	長三角	14.0	3.0	6.5	4.5	撫	台形	ロ＋木＋螺	11.5

〔凡例〕
※数値横の「＋」は、原形はその数値よりも長いことを示す。
※「ロ」＝樹皮による口巻きが残存。
※「木」＝縦方向繊維の木質が残存。
※「螺」＝茎に螺旋状の樹皮巻が施されている。
※鉄鏃の分類は杉山秀宏氏の分類を参考にしている。
※全長・鏃身長・頸部長・茎長の数値は全てcmである。
※重量の数値はgである。(保存処理後)

第21表　天王山１号墳埋葬施設出土鉄鏃観察表

Ⅴ　調査のまとめ

1　時期別にみた天王山遺跡

今回の調査によって、天王山遺跡・古墳群では、弥生時代後期～飛鳥・奈良時代にわたる遺構の存在が明らかとなった。これを、古い順にⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期というように分類し、それぞれの時期のようすを見ていくことにする。なお、第92図は遺構の変遷を示したものである。

Ⅰ期　弥生時代後期を中心とした時期で、天王山遺跡において、現在のところ、確認されている最も古い集落・墓がつくられる。調査区内における丘陵尾根上に２基の方形周溝墓が築かれる。また、丘陵東側斜面に14棟、西側斜面に４棟の竪穴住居が築かれる。SX351とSH338は重複しているが、現在のところ、方形周溝墓と竪穴住居の間には大きな時期差は認められない。このため、これらはある程度共存していたと考えられる。つまり、丘陵尾根の高所には方形周溝墓、それを取り囲むように丘陵斜面に竪穴住居というような配置が想定される。また、竪穴住居は、２・３棟がグループになっているものと、単独で散在するものとがある。

このようにⅠ期は、弥生時代後期を中心に方形周溝や竪穴住居が築かれる。しかし、これらは後続せず、天王山遺跡は、一旦、空白の時期を迎えることになる。

Ⅱ期　５世紀中葉～７世紀後葉頃にかけての時期で、古墳の築造が中心となる。Ⅱ期は、さらにⅡ－ａ・ｂ・ｃと３時期に分類できる。

［Ⅱ－ａ期］調査区西部、丘陵尾根の先端部に天王山１号墳が築造される。５世紀中葉～後葉頃の時期である。Ⅰ期の方形周溝墓が立地する丘陵尾根上につくられるが、その位置は丘陵先端部へと移る。

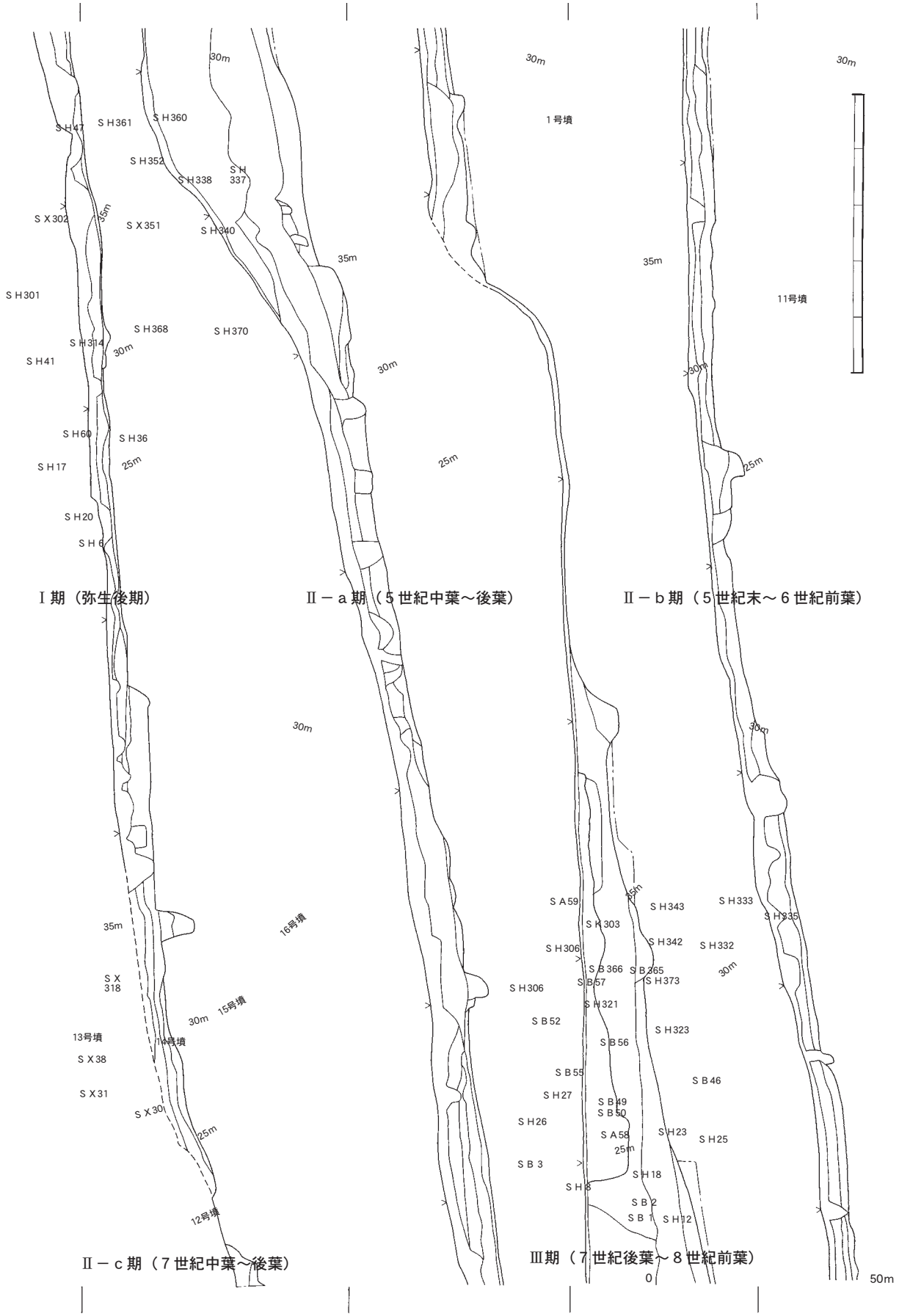
［Ⅱ－ｂ期］天王山１号墳に後続して、天王山11号墳がつくられる。概ね５世紀末～６世紀前葉頃の時期であり、前時期との間には空白の期間がある。前時期まで、丘陵の尾根上につくられていた古墳がこの時期から丘陵東側斜面へと立地を移す。ただし、古墳の墳形は、１号墳と同じ円墳である。

［Ⅱ－ｃ期］Ⅱ期より続く単発的な古墳の築造がこの時期から群を形成するようになる。その位置は、Ⅱ－ｂ期の11号墳と同じ丘陵東側斜面である。そして、11号墳がある標高28.0～31.0mの間には数多くの古墳が帯状に並んでつくられる。概ね７世紀中葉～後葉頃にかけての時期である。Ⅱ－ｂ期との間には空白の期間がある。12号墳・13号墳・14号墳・15号墳・16号墳などがこの時期のものである。また、SX30・SX38・SX318もこの時期の古墳の可能性がある。なお、SX31は後述するⅢ期の集落にともなう溝の可能性がある。現在のところ、13号墳・14号墳が最も古くに築造され、その時期は７世紀中葉頃と推測される。この時期から、墳形は、従来の円墳から方墳へと転換する。そして、後続するⅢ期の集落が形成される頃（７世紀後葉頃）まで15号墳などの古墳が築造されたと考えられる。

Ⅲ期　７世紀後葉を中心とする時期で、８世紀前葉頃までⅢ期の範囲とみる。Ⅰ期以降途絶えていた集落が新たに形成される。丘陵東側斜面において、前時期まで造営されてきた古墳は、多くが竪穴住居や掘立柱建物に切られており、この集落の出現により、そのほとんどが壊されたと推測される。丘陵東側斜面を中心に小さな群を形成するように19棟以上の竪穴住居、12棟の掘立柱建物がつくられる。なお、集落は、丘陵東側斜面に形成され、尾根上や西側斜面においては認められない。

まとめ　天王山遺跡はⅠ期（弥生時代後期）なると、丘陵尾根上に方形周溝墓、その周辺の丘陵斜面に竪穴住居が築かれる。この時期、周辺の平野部では、松阪市村竹コノ遺跡や同市堀町遺跡など環濠をもつ集落があり、丘陵上に展開する天王山遺跡との関連が注目される。ただし、天王山遺跡の今回の調査では環濠は確認できなかった。

Ⅰ期の墓・集落は、この後、後続せず、天王山遺跡に遺構が確認されるのは、Ⅱ－ａ期（５世紀中葉～後葉）の天王山１号墳が築造されるまでまたねばならない。しかし、古墳の築造は継続せず、Ⅱ－ｂ期（５世紀末～６世紀前葉）、Ⅱ－c期（７世紀中葉



第92図　遺構変遷略図（１：1,200）

～後葉）と断続的に築かれる。Ⅱ－c期は、残りは良くないものの、丘陵東側斜面に５基以上の古墳が確認でき、天王山古墳群の盛期として位置付けられるが、７世紀後葉頃には衰退していく。

Ⅲ期（７世紀後葉頃）に入ると、前時期につくられた古墳の大多数は、集落の形成によって壊されると推測される。ただし、遺構の重複関係や出土遺物から大筋では古墳の造営から集落の形成という流れが想定されるが、Ⅱ－ｃ期の古墳出土遺物のなかには、Ⅲ期のものとほとんど時期差が見出せないものがある。そのため、Ⅱ－ｃ期における15号墳などの最終的な古墳の築造と集落の形成が一部併行しておこなわれていた可能性もある。（淺生）

２　弥生時代の天王山遺跡

(1) 出土遺物について

前述のとおり、天王山遺跡は方形周溝墓と竪穴住居が共存する中で営まれるが、そのなかで後期の特徴を示す遺物がＳＸ302をはじめＳＨ301・337等から出土している。

今回取り上げた遺物の内訳は、壺が25点、甕及び高杯がそれぞれ24点で東海地方では山中式期の範疇に属する遺物と考えられる。以下、器種別に製作技法や施文方法からの特徴を見ておきたい。

抽出した壺25点の中で例えば１・50・93・94には櫛描文に扇状文、刺突文あるいは浮文を複合させるといった調整が若干古い様相を示しているものの成形技法の点については、ほとんどの遺物に山中式併行期の特徴をみることができる[(1)(2)]。

１・２・３の直口壺等は他にはみられなかった東海地方特有の器種である。それらは体部は球形に整形されていて、頸部から口縁部にかけての立ち上がりの角度は非常に明瞭である。こういった特徴とは逆にⅣ様式期までの壺は、胴上半部から口縁にかけての立ち上がりは滑らかで、ゆるやかに外半しており、明瞭な屈折は認められない。

50・60・93・94はいわゆる広口壺である。肩部の直線文や波状文等についても全体的に粗雑化していて、器形については頸部が太く、立ち上がりが強まり屈曲が明瞭である。また、この他にわずかであるが受口状の口縁を有する遺物がある。52がこれに当たるが、ほぼ直立した短い頸部が口縁へ屈折して後に受口状となり、端部はやや内側に向かって丸みを帯びる。

甕については24点を列挙した。底部に脚台が付く器種が増えるのがこの時期の特色と言える。調整を観察すると、外面にハケメが施されているものが多く、同範疇に含まれるものと考えられる。これらの台付甕は各住居跡から小片であるが多数出土しているが報告では割愛した。これらのうち形状は頸部から口縁にかけて強く、くの字形に外反するものが多数を占めている。口径は20㎝内外である。

次に高杯であるが、24点を取り上げた。高い脚柱部に口径が25㎝を超える杯部が付くのが特徴と考えられる。24～32についてみてみると、杯部の立ち上がり角度がより広がり、口縁へは外反する度合いが強まるのが特徴である。25には、全面へラミガキが施されている。口縁も杯部からの立ち上がり角度が急である。また一端横方向または外方に開いた杯部はその後に屈曲して外面には稜が強調されるようになる。また、脚部には装飾性が強くなり、縦方向のミガキの後、横方向の櫛描直線文が組み合わされており、透かしも裾部分に穿たれている。口縁がやや内傾する27・28はワイングラス形に類するもので、これも山中式併行期に属するものであろう。

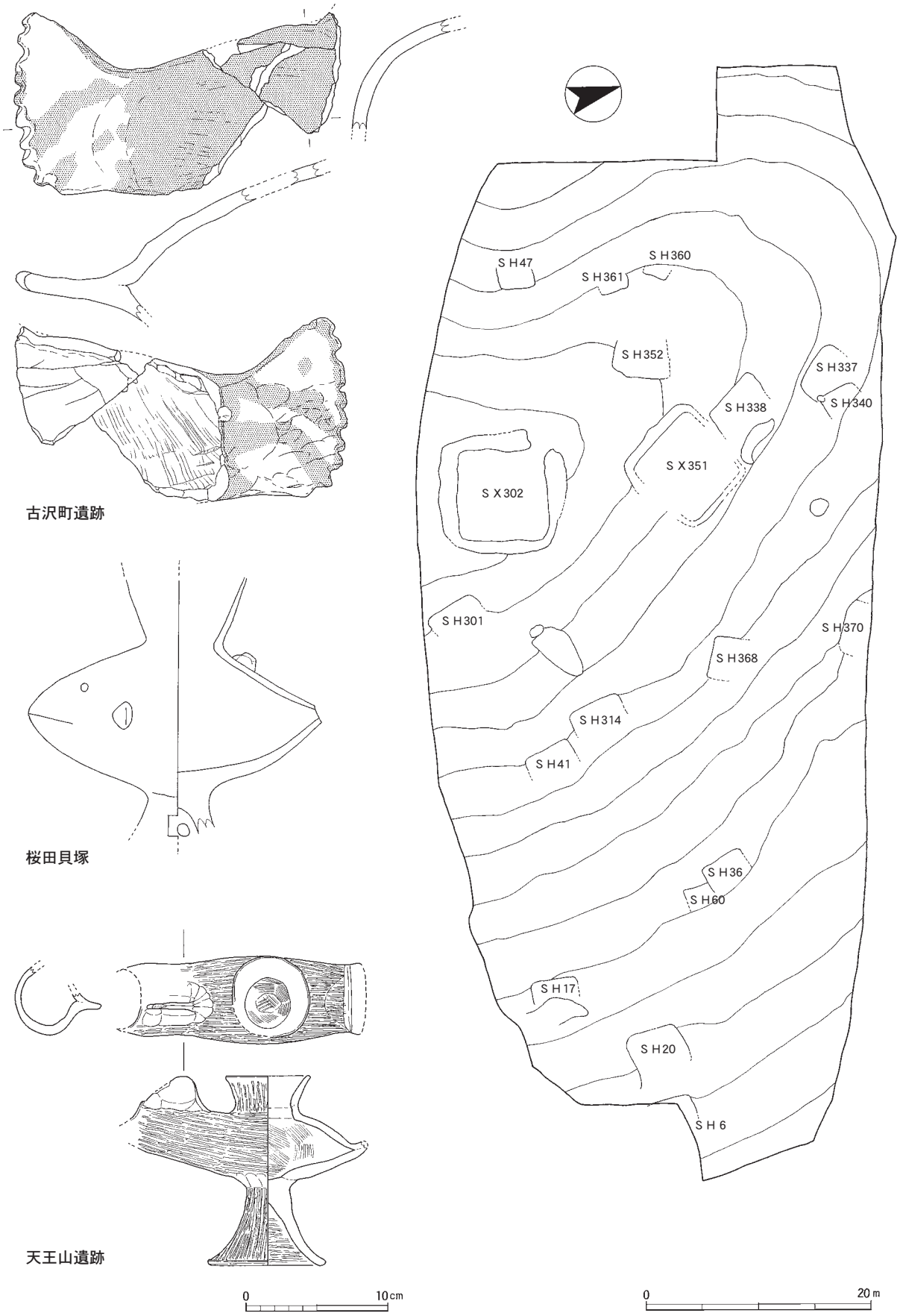
また、脚柱部についても107～109には、柱状でより長脚が多用される傾向もこの時期の特徴として捉えておきたい。

(2) 脚付特殊壺について

ＳＨ337の貯蔵穴から出土した壺は、胴と脚部が２分割された状態で検出された。取上げ後、整理中に両者が接合した遺物である。形状をみると、左端部がやや上向きに開口し、右端部は、小さく鰭状につまみ上げられた部位をもつ壺であり、現段階では、魚形を模した遺物と考えている。

この魚形を呈した胴中央部の天井にラッパ状に開く口縁部を有するのが今回出土の特殊壺である。鰭部については指ナデで仕上げられている。胴体中央部の下方には三方に透かしが穿たれた脚台が接合する。

三重県内の類例では、現在のところ弥生後期の遺物では報告されておらず、天王山遺跡の遺物が初例と考えられる。一方、県外では、共伴する土器を含めて、弥生後期以降の類例は、愛知県古沢町遺跡や

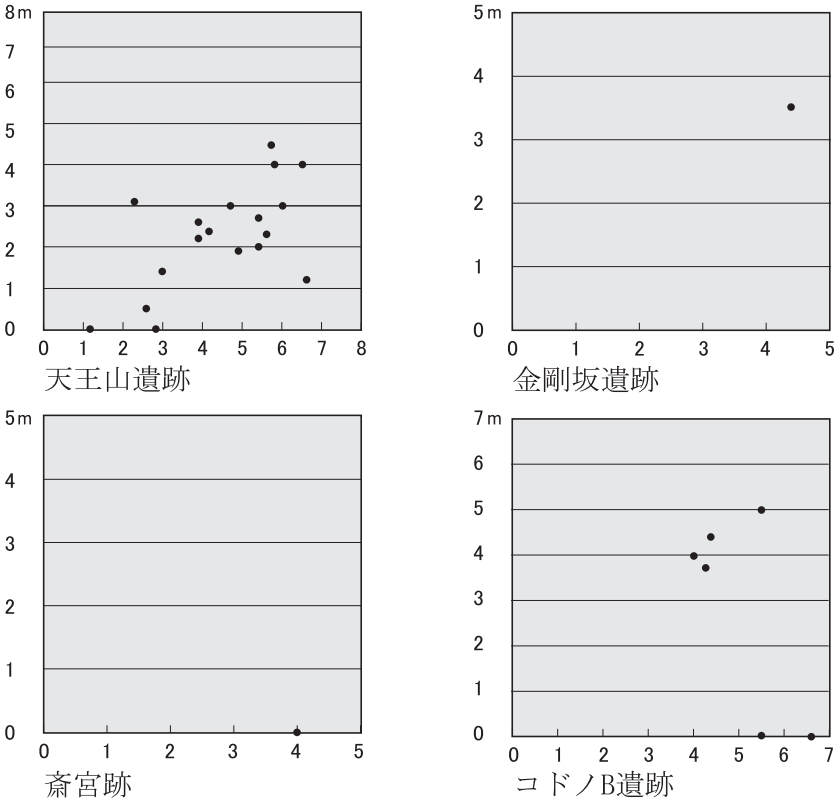


第93図　特殊壺と竪穴住居分布図

天王山遺跡	長辺	短辺
SH6	3.9+	2.2+
17	4.9	1.9+
20	5.5	5.5+
36	4.7	3.0+
41	5.4	2.0+
47	3.9+	2.6+
60	2.9+	0.0+
301	5.8	4.0+
314	5.6	2.3+
337	6.0	3.0+
338	6.5	4.0+
340	3.9+	2.2+
352	2.3+	3.1+
360	2.6+	0.5+
361	3.0+	1.4+
368	5.4	2.7+
370	6.6	1.2+
371	1.1+	0.0+

斎宮跡	長辺	短辺
SH7951	4.0	0.0+

金剛坂遺跡	長辺	短辺
SH1	4.2	3.6



第22表　各遺跡における竪穴住居辺長比較（1）　※数値横の「＋」は、原形がその数値よりも長いことを示す

桜田貝塚、また大分県安国寺遺跡の魚形壺を弥生時代後期の遺物として挙げておきたい[(3)]。

古沢町遺跡出土の壺は、筒状部分と板状部分から成り立っていて、外面はヘラミガキで仕上げられている。欠山期に該当するようである。これを当遺跡出土のものと比較した場合、形状からみて、胴部から引き出されて鰭部が成形されており、縦方向で大きく作り出されているのが特徴である。

また、桜田貝塚出土の壺は、胴部天井に壺の頸が装着されている遺物で、前面（胴半部）に当たる部分に魚の顔面が表現されているのが特徴である。やはり、外面に全体にヘラミガキが施され、その後一部にナデ消された痕跡が窺える遺物である。

こういった特殊な器形の遺物は、竪穴住居に関わる地鎮祭祀に使用されたと考えられる。

（3）住居の規模と屋内施設について

今回、弥生時代の住居跡として確認できたのは、前述のように、18棟である。これらは、ある程度、似かよった等高線上で４グループに分かれ営まれており、長辺は標高値の高い方向の一辺を削り込んで設計されている。これに対応する一辺は、表土を含む堆積土の流出が著しく、残存状況が極めて悪い部分があった。そのため、平面プランの全体が確認できたのはごくわずかであった。

しかしながら、天王山遺跡の竪穴住居の規模を私案ながら考えてみた。これについては、近隣の弥生後期の住居跡を７遺跡から抽出し、比較した結果をまとめた。なお、各住居は、南北辺長をもとに平面形を復元しつつ、面積を割り出した。（第22・23表）

各時代の建物構造や居住空間の変遷について考察した論著はあるが、これによると一般的に弥生時代の竪穴住居は、前期から中期になるにしたがって、大型化する傾向があるとされている。その規模は一辺が７ｍを超える例も西日本ではあると報告されている。がしかし、後期に入ると一端縮小化し、次第に長・短軸の各辺長も徐々に短くなり、長方形が増加する傾向を示しているようである[(4)(5)]。このような傾向は天王山遺跡においても窺えるようである。以下、順に取上げて考えてみたい。竪穴住居のうちＳＨ370は、東西の残存辺長が6.6mであり、規模は最も大きく、床面積は、推定で44㎡となる。次に南北方向の一辺が最長で6.5mを測ったのがＳＨ338であり、床面が完存していれば、最大で43㎡を有することになる。北側に近接するＳＨ337も南北長６ｍを超える建物で、床

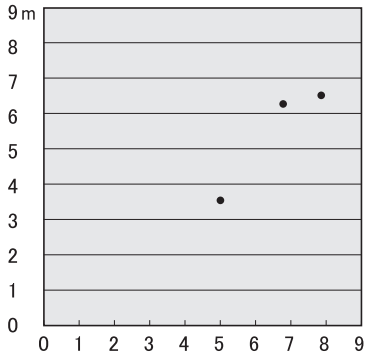
コドノB遺跡	長辺	短辺
SH40	4.2	3.8
56	5.5	5.0
61	4.3	4.3
69	4.0	4.0
72	5.5	0.0+
92	6.6	0.0+

涌早崎遺跡	長辺	短辺
SH2-A	7.9	6.5
8-A	6.8	6.2
11	5.0	3.6

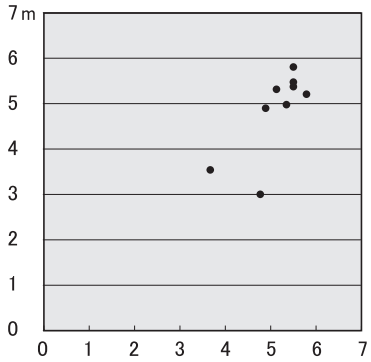
北野遺跡H2	長辺	短辺
SH14	5.3	5.2
21	4.8	3.0
28	4.9	4.8
37	5.8	5.7
53	3.5	3.5
61	5.5	5.0
91	5.5	5.3
99	5.5	5.4
110	5.8	5.2

北野遺跡H5	長辺	短辺
SH6	4.5	4.1
8	3.4	3.2
14	3.7	3.7
23	4.5	4.2
25	3.6	0.0+
30	3.2	3.0
34	4.5	0.0+
35	4.2	4.0
45	4.5	0.0+
56	5.2	5.1
85	4.9	4.4
92	4.7	4.6
104	5.6	5.1
133	5.2	4.9
188a	5.4	5.4
188b	5.4	5.4
195	4.9	4.6
197	5.4	5.3
205	5.0	0.0+
206	4.9	4.8

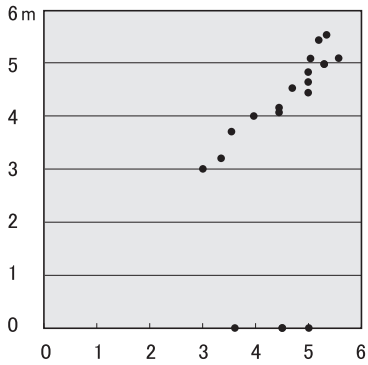
草山遺跡	長辺	短辺
SB1	5.4	0.0+
2	4.8	4.6
7	4.3	3.8
8	5.1	4.7
10	4.6	4.45
12A	4.4	4.05
12B	4.7	0.0+
13	6.7	6.5
14	5.2	5.2
17	5.6	5.2
18	5.7	5.3
19	4.8	4.5
21A	4.0	3.9
21B	4.9	4.0
25	6.5	0.0+
28	6.3	6.3
29	5.7	5.6
33	3.8	0.0+
35A	6.1	0.0+
35B	6.7	0.0+
36	5.2	0.0+
37	5.8	5.4
38	5.2	0.0+
40A	4.8	4.6
40B	4.8	4.8
40C	5.7	0.0+
41	5.0	0.0+
46	6.3	0.0+
47	7.4	6.9
48	5.6	5.1
49	5.3	4.8
53	5.5	0.0+
54A	6.4	0.0+
54B	7.1	0.0+
63	6.3	5.9
64A	5.6	5.3
64B	6.2	5.7
72	4.8	0.0+
79	4.6	4.4
80	5.3	0.0+
81	7.4	7.2
86	5.7	5.2
95	5.3	5.1
96A	4.8	4.8
96B	5.2	4.9
98	4.9	4.6
99	5.8	0.0+
100	3.8	3.8
101A	4.4	4.4
101B	5.0	0.0+
101C	5.4	5.3
104	4.8	4.4
112	4.8	0.0+



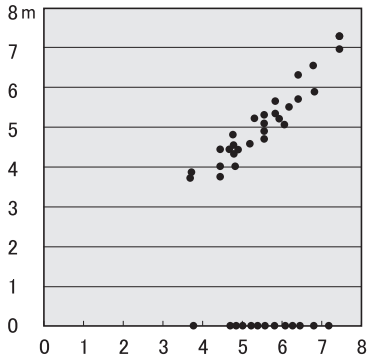
涌早崎遺跡



北野遺跡H2



北野遺跡H5



草山遺跡

第22表　各遺跡における竪穴住居辺長比較 (2)　※数値横の「+」は、原形がその数値よりも長いことを示す

面積は推定で36㎡となる。後者２遺構については、主柱穴や壁周溝の付替えが確認できた。

またＳＨ352は、貯蔵穴を中心軸に推定辺長は６ｍの長さになり、推定で床面積は36㎡である。（第93図）

以上、大小さまざまな規模の住居跡のうち４棟を取上げ考察を加えたが、当該時期の住居址を周辺地域にまで広げ、集落がどの程度成立していたかを考えてみたい。

まず、当遺跡から東方へ２㎞ほどの玉城丘陵には金剛坂遺跡が広がる。辰ノ口地区では、２棟の住居跡が確認されている。隅丸方形プランで南北4.2m、東西3.6mで、炉を有する遺構が検出された[6]。さらに金剛坂遺跡から北東に広がる斎宮跡内の鍛冶山地区で119次調査が実施されている。ここでは１棟が確認されている。これは、東西が４ｍの小規模な建物である。残念ながら屋内施設は確認されていない[7][15]。

また、南東に２㎞地点の丘陵端部には、コドノＢ遺跡が広がっている。ここでは、一辺が5.5mで方形プランの住居跡が見つかっている[8]。

さらに東方へ３㎞の明野原台地には、北野遺跡が広がる。５次調査までにここでは29棟もの竪穴住居が確認されている。おおむね最長一辺が5.5mの規模で、小規模なものでは3.5mプランの住居跡が確認されている。付属施設には、暗渠排水や周溝を有する遺構が含まれ、まとまった集落跡として位置付けられている。また、平成７年度の調査では、東西・南北が４ｍ前後と5.5mのものを３棟確認している[9][10]。

松阪市久保町の草山遺跡では。山中～欠山期ころの住居跡の調査が実施され、独立丘陵内に104棟の竪穴住居跡が確認され、後期の拠点的な集落として位置付けられよう。確認されている住居跡で大規模なものは最長が6.7m、短辺は4.1mであると報告されている。他は４ｍ～５ｍを超えるものが大半を占めるようである[11]。

また同市内大津町の涌早崎遺跡においても後期の住居跡が２棟検出された。長辺は周辺地域では最も大きく、9.1m、短辺は4.1mである[12][13]。

これらから次のような結果が得られたのでまとめてみた。

①縦横の辺長が５ｍを超える建物が半分以上を占める。

②当遺跡の竪穴住居は残りが悪いが、北野・草山遺跡のデータから考えると、正方形に近い、やや長方形プランの傾向である。

③当遺跡は後期の小規模集落という位置付けができ、また、方形周溝墓を集落域に共存させる遺跡であると考えられる[14]。　（中川）

3　天王山古墳群の特色

今回の調査によって、天王山古墳群は、５世紀中葉～後葉頃に築造が開始され、７世紀後葉頃に衰退することが判った。しかし、その間の古墳の築造は断続的である。

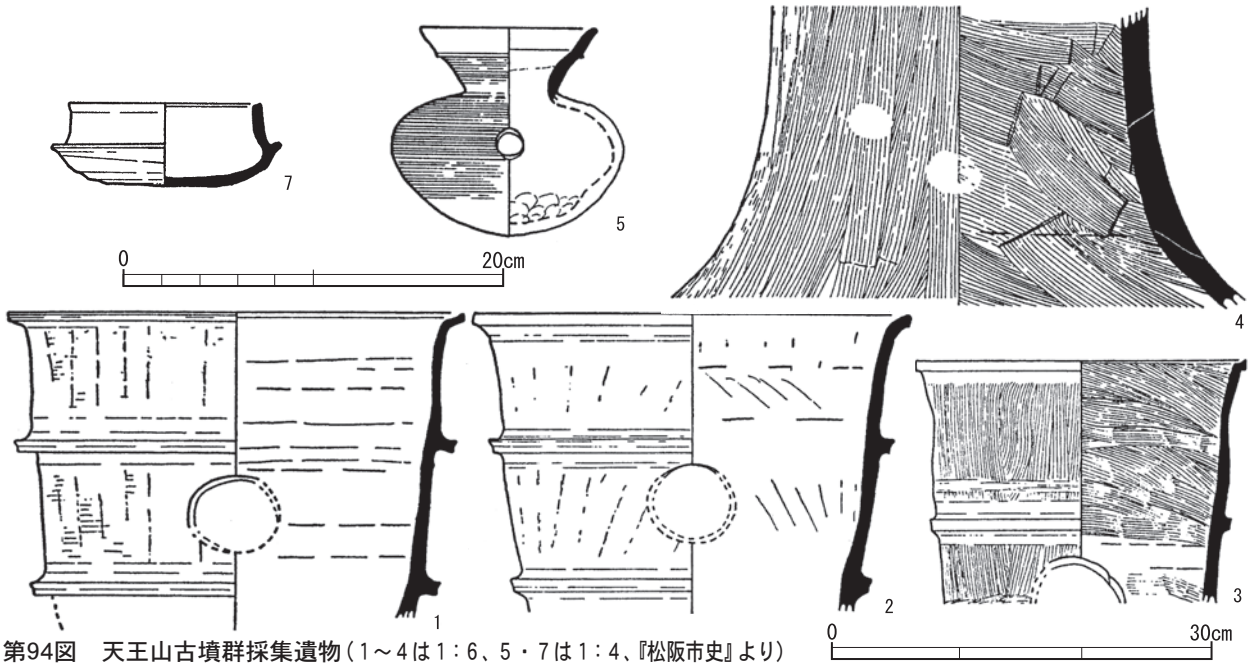
(1) 天王山１号墳の特色

築造時期について　天王山１号墳出土遺物は、周溝を中心に円筒埴輪・土師器片口鉢・須恵器甕などがあり、埋葬施設からは鉄剣１本・鉄鏃21本が一括して出土している。須恵器蓋杯などの時期を決める際に極めて有効なものは出土していないが、これらをもとに時期を推測していくことにする。

周溝東側より須恵器片が散在して出土している。これらの須恵器には明らかに新しい時期のものが含まれており、すべてが天王山１号墳に伴うとは言い難い。出土した須恵器の大半は甕である。甕のなかには、内面のタタキをすり消した古い特色がみられるものがある。また、第71図167の口縁部が示す形状は、概ね５世紀後半頃の特徴である。

周溝南側のPit状の遺構からは、ほぼ完形品の円筒埴輪が１点出土している（第71図154）。この円筒埴輪は、２突帯３段構成であり、口縁部は外反しており古い要素がみられる。また、土師質であり、比較的突出した突帯をもち、Ｂ種ヨコハケと考えられる工具の静止痕が認められる。これらの特色は、５世紀後半頃の埴輪に良くみられ、また当古墳の周辺地域にある多気郡多気町神前山１号墳や松阪市中ノ庄１号墳出土埴輪[16]と形態や調整など共通する部分がある。神前山１号墳からは大阪府南部窯跡群の高蔵寺208号窯跡に併行する時期の須恵器が出土している[17]。このことから、当古墳出土埴輪は５世紀中葉～後葉の時期と捉えることができる。

埋葬施設からは鉄鏃21本が出土した。鉄鏃は時代



第94図　天王山古墳群採集遺物（1～4は1：6、5・7は1：4、『松阪市史』より）

が降りるとともに頸部が伸長化していく。当古墳出土の鉄鏃は長頸鏃が主体である。171～182の鉄鏃群（No.２）の頸部は、７～８㎝程度の長さで占められているが、183～191の鉄鏃群（No.３）は４～８㎝程度と幅があり、多様性が認められる。また、後者の群には長頸鏃と短頸鏃の中間形態とでも呼べるもの（189・190）があり、短頸鏃から長頸鏃への移行を示す事例として注目できる[18]。

このような鉄鏃のあり様は、５世紀中葉頃の特色であり、三重県内では松阪市小谷13号墳埋葬施設１出土鉄鏃にみられる特色に近い[19]。このことから、天王山１号墳出土鉄鏃は小谷13号墳に近接する時期と考えられる。ただし、先述したNo.2の鉄鏃群の頸部は、一定の長さに定着している傾向が窺え、小谷13号墳より新しい様相がみられる。これらのことから当古墳出土鉄鏃は概ね５世紀中葉～後葉頃と考えられ、先述した埴輪の時期と矛盾しない。

以上のことから、天王山１号墳の時期は、５世紀中葉～後葉頃と考えて大きな間違いはあるまい。

なお、『松阪市史』（第二巻史料篇考古）には、天王山１号墳が築造された５世紀後半頃の遺物がいくつか採集されている。これらは、天王山１号墳に伴うものかは不明であるが、この古墳の時期を考える上で参考になると考えられるため紹介しておく。

第94図に示したように、埴輪・須恵器がある。このうち、須恵器杯身・瓿は５世紀後半頃のものであり、『松阪市史』によると、俚称「蝾螺壺」から採取されている。「蝾螺壺」はおそらく天王山古墳群が分布する丘陵でも北側の旧街道寄りと考えられる。そうすると、天王山１号墳に近く、さらに周辺にこの時期の古墳がないことから天王山１号墳に関連する遺物の可能性もある。

また、円筒埴輪は、天王山１号墳出土品と形態などが非常に良く似ており、ほぼ同時期と考えられる。

出土遺物からみた天王山１号墳　天王山１号墳は、小型古墳であるが、蛇行剣など特色ある遺物が出土している。蛇行剣[20]は、東は栃木県、西は鹿児島県にいたる広範囲な地域から出土しており５世紀から６世紀代に至り確認されている。いずれも地下室横穴などを含む古墳出土品に限られており、南九州地方と近畿地方に大きな分布のまとまりがある。

蛇行剣は、性格や副葬品のなかでの位置付けなど不明な点が多いが、一般的には規則的な屈曲をもつ形態から習俗や信仰を意図してつくられたと考えられている。また、蛇行剣の一般的な出土状況は、棺（槨）内の上半身側に置いているが、当古墳では上半身側右の棺外から出土している。このように棺外から出土する例は、現在のところ、長野県諏訪市フネ古墳[21]、島根県安来市五反田３号墳[22]と極めて少なく、蛇行剣の棺外副葬は特異な例と言えよう[23]。

三重県内での蛇行剣の出土例は、伊勢市落合３号墳[24]で確認されるのみで、天王山１号墳を含め、伊

勢南部に分布している。近隣では、奈良県宇陀地域（４例）・静岡県（３例）で分布している[25]。この分布は、大和から伊勢南部に至り、さらに伊勢湾を経て東国へむかうルート沿いである。天王山１号墳の東を流れる櫛田川の河谷をさかのぼれば、高見峠を越え、宇陀地域に通じることができる。宇陀地域は、宇陀市北原古墳・後出３号墳・後出７号墳・後出18号墳にみられるように数多くの蛇行剣が出土しており[26]、近畿圏の中でも蛇行剣が集中して分布する地域である。また、宇陀地域には、目立った首長墓がないものの、武器を副葬する「初期群集墳」が数多くあり[27]、天王山１号墳や落合古墳群の様相に似ている。今後、宇陀地域とのつながりも含めて理解していく必要があろう。

この他、埋葬施設からは鉄鏃21本が出土しており、副葬品は武器で占められている。ただし、蛇行剣と同じで、いずれも棺外遺物である。

県内では鉄製武器を副葬している古墳は多く、天王山１号墳に近接する時期の古墳としては、鈴鹿市経塚古墳[28]・松阪市小谷13号墳埋葬施設１・同市八重田16号墳[29]・伊勢市落合３号墳・津市平田35号墳[30]などがあげられる。

これらの古墳出土品に比べ、天王山１号墳は、基本的な武器組成である剣と鉄鏃のセット関係は認められるものの、このセット関係のみであり、副葬品の内容としては極めて少ないことが窺える。また、先にあげた古墳の多くには鉄製農工具も出土しているが、天王山１号墳からは出土していない。なお、農工具は、前方後円墳である経塚古墳が種類と数ともにその他の古墳を大きく凌いでいる。経塚古墳において農工具が豊富なことは、前方後円墳を築造しえた被葬者が担った共同体内の役割を反映している可能性が指摘されている[31]。

また、天王山１号墳の周辺地域にある小谷13号墳・八重田16号墳・佐久米古墳群[32]は甲冑などの鉄製武具をもち、副葬品の内容に突出したあり方がみえる。落合古墳群でも甲冑は出土していないものの、数多くの鉄製武器をもつことが知られており、天王山１号墳との間に格差が認められる。

伊勢湾西岸地域では、通常、大型古墳に樹立されることの多い埴輪が豊富な副葬品をもつ中小規模の古墳にも多く採用されている傾向にある[33]。伊勢南部では、小谷13号墳・八重田16号墳・神前山１号墳などの古墳が埴輪をもち、これらの古墳からは甲冑や画文帯神獣鏡などの副葬品が認められる。天王山１号墳からは、古墳をめぐるような埴輪列は確認できなかったものの、円筒埴輪や朝顔形埴輪が出土している。このことから先述したように副葬品に格差がみられるいっぽうで、豊富な副葬品をもつ古墳と共通する要素が認められるのである。

なお、当古墳からは古墳祭祀との関連が示唆される遺物も出土している。周溝出土の須恵器甕・土師器片口鉢である。特に片口鉢は、特異な器形であり、容器内には赤色顔料が入れられていた痕跡があり、古墳祭祀との関わりの強さが窺える。片口鉢は松阪市阿形遺跡でも出土しており、ここでは朱が付着した土師器椀と共伴していることを付記しておく。

天王山１号墳と伊勢南部の様相　５世紀代の伊勢南部は、阪内川流域と櫛田川中流域右岸の玉城丘陵にそれぞれ基盤を置く大きな勢力の存在が窺える。

前者には、５世紀初頭の宝塚１号墳、これに後続する宝塚２号墳、高地蔵１号墳などの大型の著名な古墳がある。しかし、５世紀後半頃なると、大型古墳の築造は衰退し、八重田古墳群・弥三郎新畑Ａ古墳[34]・狼谷古墳[35]など中小規模の古墳の築造が展開される。

後者には、５世紀前半の権現山１号墳の築造から始まり、５世紀後半に高塚１号墳・大塚１号墳・神前山１号墳などの大型古墳がある[36]。また、６世紀に入ると、３基の前方後円墳が築造される。

これらの２大勢力に挟まれるように天王山１号墳は存在している。また、天王山古墳群周辺の櫛田川下流域左岸に５世紀後半頃から佐久米古墳群が形成されている。この古墳群は、金銅製の眉庇付冑・短甲が出土していることや、港である的形津が近くに存在したと推測されることから海洋軍事的な性格をもち、海上交通の窓口をおさえた被葬者像が想定されている[37]。

伊勢湾西岸地域最大規模を誇る宝塚１号墳・２号墳の築造後、５世紀後半頃になると、阪内川流域では、中小規模の古墳が増える。そのいっぽうで、玉城丘陵では、大型古墳の築造が認められ勢力の伸張

が窺える。また、櫛田川下流域では佐久米古墳群の形成が始まる。こうしたことから伊勢南部は５世紀を通して統合から分裂へという傾向にあることが指摘されている[38]。

天王山１号墳もこうした変動のなかで現れた小規模な勢力であったと推測される。また、５世紀後半頃に新たに出現した古墳の多くは、単独墳としての性格が強いとされる[39]。天王山１号墳も単独墳であり、連続して古墳が築造されていないことは注意したい。このことから櫛田川中流域左岸に後に続く基盤をつくることができなかった被葬者像が想像されるのである。

(2) Ⅱ－ｂ・ｃ期の天王山古墳群

天王山1号墳の後、５世紀末～６世紀前葉頃(Ⅱ－ｂ期)に築造される天王山11号墳は円墳であるが、埋葬施設はすでに削平されていたため不明である。調査区内に横穴式石室などに用いられた石材は確認できなかったことから、木棺直葬墳であったと推測される。

天王山古墳群周辺では、この時期の古墳はほとんど確認できず、櫛田川中流域右岸に古轡通り３・４号墳、立岡山６号墳が確認できるのみである[40]。

７世紀中葉頃（Ⅱ－ｃ期）になると、天王山古墳群では、天王山12号墳・13号墳・14号墳・15号墳・16号墳などの5基以上の古墳が築造される。

古墳の立地は、前時期の丘陵東側斜面を引き継いでいるが、墳形は円墳から方墳へと転換される。15号墳を除き、埋葬施設は、確認できなかったものの、先述したように横穴式石室に用いられたような石材は確認できなかったためいずれも木棺直葬墳であったと推測される。

７世紀中葉頃は、伊勢南部では、櫛田川中流域右岸にあたる玉城丘陵を中心に大規模な群集墳が形成されている。この時期から天王山古墳群においても数多くの古墳が築かれ、７世紀後葉頃を最後に古墳が築造されないことは、玉城丘陵の古墳の動向と一致している。なお、天王山古墳群のある櫛田川中流域左岸にも、山添２号墳・長谷古墳・やつで古墳[41]などいくつかの古墳の存在は知られているが、その時期は、Ⅱ－ｃ期の天王山古墳群より古い６世紀後半～７世紀前半頃のものである。

４　古代の天王山遺跡

(1) 出土遺物の特色

土師器　出土遺物のなかでも土師器の出土量は須恵器と比べ圧倒的に多い。土師器は、特に煮沸具の甕が大半を占める。甕には、球形に近い体部をもつもの、長い体部をもつもの（長胴甕)、口径が大きく（30㎝程)、体部に把手をもち全体として鍋の形態に近いものなどがあり、大きく３つに分類することができる。

また、甕の体部は、外面に縦方向を基調とするハケメ、内面の下半にヘラ削り、上半に横方向のハケメが施されるものが多い。口縁はゆるやかに外反し、口縁端部は上方に摘み上げられているものが大部分を占めている。

杯類においては、古墳時代の椀の系統をひく杯Ｇが主体であり、なかには、暗文やヘラミガキを施した杯Ａや杯Ｃもある。暗文やヘラミガキが施された杯は、浅黄橙色をなし粗雑なつくりである杯Ｇと比べ、赤みを帯びた橙色をなし、精良な粘土でつくられている。今回の調査において、暗文土師器はSH12・SH323・SB50・SK303・SA59などから出土している。なかでも、SK303からの出土量が目立ち、暗文やヘラミガキなどがないものの、粘土だけ精良なものもある。

また、高杯は、縦方向のハケメが施されたものが目立ち、SH321・SK313・SK303などで出土している。

さて、天王山遺跡出土土師器甕の形態や調整などの特色は、斎宮跡周辺のかつて「有爾郷」を中心とする地域に分布する土師器生産地の製品と類似している。また、高杯などの脚部に縦方向のハケメを施す製品は、有爾郷の土師器生産地の一つである北野遺跡[42]で数多く確認されている。ついで、この土師器生産地は、甕をはじめとする煮沸具や杯Ｇなどの生産が主体であるが、一部の土師器焼成遺構では、先述したような精良な粘土を用い暗文などを施した杯もつくられている。

このようなことから、天王山遺跡出土土師器は、胎土の様子も含め、有爾郷を中心とする伊勢南部の土師器生産地の製品である可能性が極めて高いと考えられる。

これらの土師器は斎宮編年[43]のⅠ期第１段階頃の

ものが中心であり、その時期は７世紀後葉～８世紀初頭頃と考えられる。

須恵器　須恵器は杯類の出土量が多く、なかでも杯Ｇが目立っている。また、SK303は、杯Ｇをはじめ杯Ｂ・提瓶・平瓶・横瓶・壺・甕・円面硯など多くの器種が確認できる。現在のところ、これらの須恵器の生産地を特定することは困難であるが、大部分の製品は形態・胎土などから在地で生産されたものと考えられる。ちなみに、天王山遺跡の近隣、多気郡多気町から度会郡玉城町にまたがる伊勢南部最大規模を誇る外城田窯跡群[44]の製品の可能性は低い。比較的に時期の近い同窯跡群の明気３号窯跡・明気５号窯跡などの製品と比較しても、法量・形態・胎土などに多くの相違が認められるからである。

須恵器は、天王山遺跡の集落の時期を考える上で極めて有効なもののひとつである。先述したように竪穴住居や掘立柱建物出土須恵器には杯Ｇが目立っている。伊勢南部において、杯Ｇが出現するのは、７世紀中葉頃からであり、度会郡小俣町大仏八端１号窯跡などでその生産が確認できる。また、伊勢中部の徳居窯跡群[45]でも概ねこの時期に出現している。ただし、この時期の杯Ｇの生産量は極めて少なく、また、これらの窯跡から確認される杯Ｇ蓋は乳頭状のつまみをもつものであることが多い。ちなみに、天王山遺跡出土杯Ｇは、宝珠形のつまみのものが多く、これらより新しい要素がみられる。

天王山遺跡出土須恵器杯類の共伴関係をみると、SH12・SK303・SK33などでは杯Ｇが杯Ｂと共伴している。杯Ｂの出現は大津京から藤原京に伴う７世紀後半以降のものとされ、天王山遺跡の集落の時期を考える上で重要である。つまり、天王山遺跡出土の杯Ｇは、一見、７世紀中葉頃のものにみられがちであるが、杯Ｂと共伴していることからこれは新しい製品であると考えられる。

このような傾向は、天王山遺跡においてのみではなく、外城田窯跡群でも確認できる。同窯址群の明気３号窯跡・５号窯跡では、杯Ｈの法量（蓋口縁部径・身受け部径）が10㎝前後と最も小型となる７世紀後葉頃に宝珠形のつまみをもつ杯Ｇの生産量が増加する。また、伊勢中部の徳居窯跡群や稲生窯跡群では杯Ｂが出現する頃に最も小型である杯Ｈが生産され、稲生窯跡群ではこの頃に杯Ｇも比較的多く生産している。このようなことから、天王山遺跡の集落は７世紀後葉頃を中心とする時期と考えられる。

まとめ　以上のように、出土遺物から天王山遺跡をみると、土師器の出土例が多く、その大半は有爾郷を中心とする土師器生産地から運ばれていることが判る。また、土師器・須恵器の時期は概ね７世紀後葉～８世紀初頭頃のものであり、天王山遺跡の集落はこの時期に形成されたといえよう。

(2) 竪穴住居の特色

平面プラン　竪穴住居は、斜面に築かれているため残りは良くないが、いずれも方形の平面形態であると考えられる。竪穴住居の南北規模は概ね2.9m～5.4mの幅をもち、3.5m～4.5mのものが最も多い。なお、貼床などは確認できなかった。

カマド・煙道　竪穴住居の多くには、造り付けのカマドおよび煙道が確認されている。SH23・SH25・SH27・SH321・SH342・SH335・SH343などがそれであり、このほかにもカマドは残っていないけれどＳＨ８なども焼土の位置から本来はカマドがあったと推測される。いずれも、斜面を深く切りこんでいる住居西側の壁につくられている。また、カマドは盛土によって構築されており、煙道は残りが良好なものをみると、地山を掘り抜いてつくられている。

これらの住居のなかでも、SH321の造り付けカマドは残りが良く、当時のカマドの構造を知る上で重要であると考える。

三重県内で、造り付けカマドをもつ竪穴住居の事例は、既に数多くのものが報告されている。

松阪市小谷赤坂遺跡[46]では、床を掘り抜いてカマドを構築している例がいくつか確認されている。また、同遺跡からは竪穴住居の隅に斜め向きに造り付けられているものが確認されている。このほか、三重県内では、煙道に土師器甕を用いる例、カマドを石材で補強する例などがある。

なお、津市下之川富田遺跡[47]・松阪市小谷赤坂遺跡などでは、同一建物内でカマドの付け替えがおこなわれているが、当遺跡からは確認できなかった。

カマドの位置は、先述したように住居西側の壁につくられ、それも中央から南寄りの位置にあるものが多い。このような例にSH8・SH27・SH321・

SH342・SH353・SH343などがあり、例外的にSH23のカマドは西壁中央から東寄りの位置にある。また、SH25は、西壁の規模は不明であるものの、その残りから推察するに中央もしくは西寄りに造り付けられていると考えられる。

７・８世紀代の三重県下の竪穴住居におけるカマドの位置を瞥見すると、北および東にあるものが多い。天王山遺跡の竪穴住居の場合、地形を考慮すると、丘陵斜面に築かれているため、斜面側にあたる西壁にカマドをつくることは自然なことと考えられる。だが、西壁の中でも南寄りにあることは、少ない事例であり注目される。また、このようなカマドとセットをなすように、カマドの南隣、住居南西隅に貯蔵穴をもつものが多い。このような例にSH8・SH25・SH27・SH321・SH332・SH333・SH335・SH342・SH343などがある。

今後、貯蔵穴とカマドの位置関係、そして先述したカマドの構造など、地域性も含めて、竪穴住居を検討していく必要があろう。

(3) 天王山遺跡の集落の構成

今回の調査において、７世紀後葉頃を中心とする竪穴住居・掘立柱建物が数多く検出された。竪穴住居が19棟以上、掘立柱建物が12棟ある。これらは、概ね同じ時期のものである。標高ごとにいくつかの群を構成している傾向にあり、実際の生活の場である竪穴住居を中心にみていくと、概ね８つのまとまりが認められる。第95図に示したように、Ａ～Ｈ群の８つのグループ（群）に分け、以下、各群の様相をみていくことにする。

〔Ａ群〕　SH12がある。この群はSH12のみが確認できるが、調査区外と接しているためこのほかにも竪穴住居などが存在すると考えられる。

〔Ｂ群〕　SH８、SB１・２・３があり、SA58、SK９・10・19などもこの群に伴うと考えられる。現在のところ、竪穴住居は１棟、掘立柱建物は３棟確認できるが、調査区外と接しているためこのほかにも竪穴住居などが存在すると考えられる。SA58は後述するＤ群との境を区別するものであろうか。なお、SB３出土須恵器は、やや新しい要素をもつため、この群のなかでも後出である可能性がある。

〔Ｃ群〕　SH18・23・25、SB46があり先述のＢ群とはやや離れている。いずれも重複しておらず、竪穴住居３棟、掘立柱建物１棟で構成されている。

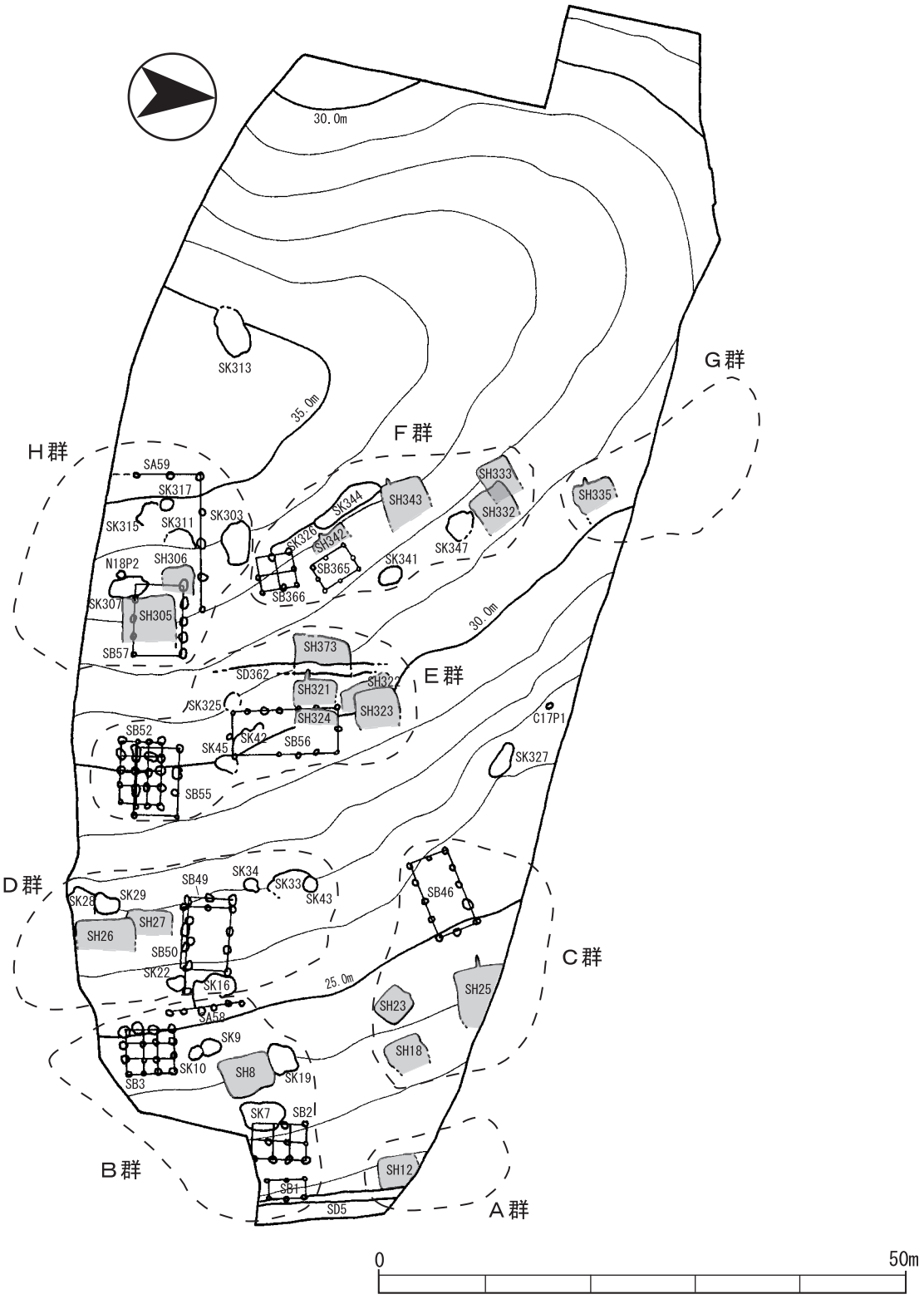
〔Ｄ群〕　SH26・27、SB49・50があり、SK16・28・29・33・34・43などの多くの土坑もこの群に伴うと考えられる。重複関係から竪穴住居はSH27→SH26、掘立柱建物はSB49→SB50というように推移している。このようなことから、Ｄ群は、竪穴住居１棟・掘立柱建物１棟の構成が確認できるが、この群は調査区外と接しているためこの他にも数棟の竪穴住居などが伴っていると考えられる。なお、SX30・31出土遺物は本来SB49・50に伴っていたと考えられる。これらの遺物の中には８世紀前葉頃の特色をもつものがあり、後出のSB50はこの時期頃まで存続した可能性がある。また、SK43からは８世紀前葉頃の土師器が出土している。なお、SX31は古墳の周溝として取り扱ったものの、Ｄ群の背後を取り囲むようにめぐっており、この群に伴う溝であった可能性がある。

〔Ｅ群〕　SH321・322・323・324・373、SB52・55・56がある。また、SK42・45・325などの土坑もこの群に伴うと考えられる。竪穴住居はSH321とSH324、SH322とSH323が重複しており、このうち、SH322→SH323という推移が確認できる。なお、SH373は、後述するSD362より古く、この群が形成される以前のものと考えられる。

このような重複関係から竪穴住居は２棟で構成されていたと考えられる。掘立柱建物はSB52・55が重複している。また、SB56は先述のSH321・324と重複している。SB52・55の新古は遺物や重複関係からは判断できないが、SB55は後述するＨ群のSB57と直線状に並んでおり、この関係から８世紀前葉頃まで存続した可能性があり、SB52→SB55という推移が想定される。また、SB56は、竪穴住居より新しいものであり、SB55と同じ時期まで存続した可能性がある。SD362は、この群の背後にあり、排水も兼ねた区画溝であったと推測される。

Ｅ群は、竪穴住居２棟と掘立柱建物１棟（SB52）で構成されており、8世紀前葉頃に入ると掘立柱建物２棟（SB55・56）の構成へと移行していったと推測される。

〔Ｆ群〕　SH332・333・342・343、SB365・



第95図　Ⅲ期の集落構成（１：600）

366があり、SK326・344・341・347などの土坑もこの群に伴うと考えられる。SH332とSH333が重複（SH332→SH333）している。また、SH342は、SB365と重複しており、SH342→SB365という竪穴住居から掘立柱建物への推移が想定される。SH343・SB366は単独である。このことから竪穴住居３棟、掘立柱建物１棟で構成されていたことが窺える。ただし、竪穴住居のひとつであるSH342は掘立柱建物（SB365）へと移行したと推測される。

〔Ｇ群〕　SH335がある。SH335は、Ｆ群と極めて近いが、やや標高の低い位置にあるため、別群として捉えられる。この群は、調査区外と接するため、この他にも竪穴住居などが伴うと考えられる。

〔Ｈ群〕　SH305・306、SB57、SA59があり、SK303・307・311・317などもこの群に伴うと考えられる。Ｈ群は調査区外と接しているため、この他にも数棟の竪穴住居が伴うと考えられる。竪穴住居は、SH305・306の２棟あるが、重複している。掘立柱建物はSB57の１棟が確認できるが、これも先述の２棟の竪穴住居と重複している。SB57は、竪穴住居より新しいものであり、竪穴住居→掘立柱建物という推移が窺える。SB57からは時期の判る遺物は出土しなかったが、本来、SB57に伴なっていたと考えられるSX318出土遺物には８世紀前葉頃の特色をもつものがある。先の推移から察すると、SB57は８世紀前葉頃の時期である可能性が高い。SA59は、この群を取り囲むようにＬ字状にめぐっている。なお、ＳＫ303は、Ｆ群とＨ群の境にあるが、Ｈ群の居住域に近いためＨ群に伴うと考えられる。SK303からは多量の土器が出土しており、なかには須恵器円面硯や、暗文土師器が含まれている。

〔小結〕　調査区内には少なくとも８つの小さなグループが存在している。また、調査区外の北および南には、まだまだ、集落が展開すると考えられ、天王山遺跡は７世紀後葉～８世紀前葉にかけての比較的規模の大きい集落であることが窺える。

Ｃ群、Ｅ群、Ｆ群などの傾向から集落内の各グループの竪穴住居は、概ね２・３棟で構成されていたと推測される。また、各グループには、１ないしは２つの掘立柱建物が伴っている。

集落の空間は広いにも関わらず、各グループ内で竪穴住居・掘立柱建物は重複している。このことから、集落内において、各グループが主に使用する空間が存在していたと推測される。

こういった集落内のグループ間において、出土品や竪穴住居・掘立柱建物の構造などからは特に格差は見出し難い。ただし、Ｆ群やＨ群は、丘陵斜面の上部にある。さらにＨ群は、円面硯や多くの暗文土師器が出土したSK303を伴い、また、この群を囲むように柱列がめぐる。このことから、Ｆ群やＨ群は集落内でも優位な立場にあった可能性がある。

また、Ｂ・Ｄ・Ｅ・Ｈ群からは、竪穴住居→掘立柱建物という推移が窺え、Ｂ群のSB３、Ｄ群のSB50、Ｅ群のSB55、Ｈ群のSB57は、８世紀前葉頃まで存続した可能性がある。

このうち、SB３（総柱建物）・SB55（側柱建物）・SB57（側柱建物）は概ね方位を同じくして直線上に並んでいる。各グループ間において建てた掘立柱建物が自然地形に左右されながら偶然直線状にならんだのか、規格的に配置されたのかは現段階では判断し難い。掘立柱建物群は、調査区南側に集中しており、今後の調査に期待したい。

ちなみに、SB３は総柱建物であり、そのほかは側柱建物で３つの建物の構造は同じではない。また、側柱建物であるSB55とSB57は軒数・柱間などの規模が異なっている。このことから直線状にならんでいる建物の構造には特に規格性がないことが窺える。

なお、これらの建物は櫛田川下流域左岸にみられる飯野郡の条里とは方向を異にしている。

(4) 天王山遺跡と伊勢南部の様相

天王山遺跡と周辺集落　天王山遺跡出土品の多くは、土師器甕などの日常品が多く、一般的な集落の様相とほとんど変らない。だが、天王山遺跡は、７世紀後葉頃の一般的な集落と比べ、丘陵斜面に展開する点で特異であり、さらに規模が大きい。また、円面硯が出土していることなども天王山遺跡を考える上で重要である。

天王山遺跡の周辺において、７世紀後葉～８世紀前葉頃にかけての集落は、松阪市丸野遺跡・同市上寺遺跡・多気郡明和町北野遺跡・同町発シＡ遺跡・同町発シＢ遺跡・同町垣場遺跡・同町斎宮跡古里地区・同町金剛坂遺跡・同町曽祢崎遺跡（第２次）・

多気郡多気町長迫間Ａ・Ｂ遺跡、伊勢市高向Ａ～Ｃ遺跡などがある[48]。また、度会郡玉城町カリコ遺跡[49]などもこの時期の集落跡の可能性がある。このうち、最も規模の大きいものは、斎宮跡古里地区である。この遺跡は大型の倉庫群が並ぶことや蹄脚硯などの特色ある出土遺物の存在などから一般集落とは見難く[50]、多気郡衙との関連が推測されている。また、北野遺跡・発シＡ遺跡・発シＢ遺跡・垣場遺跡などは土師器生産との関わりが強い集落跡である。この他の集落は一般的な集落と考えられるが、その様相は不明なことが多い。

伊勢道・斎宮との関係　天王山遺跡に集落が築かれる７世紀後葉頃の伊勢南部では、櫛田川中流域右岸の段丘上および明野台地に斎宮が設立される。斎宮は天王山遺跡のすぐ近くにあり、天王山遺跡の集落が立地する丘陵東側斜面からは、容易に斎宮を望むことができるのである。

また、天王山遺跡が分布する丘陵北側裾を東西にはしる旧街道は、大和から斎宮・伊勢神宮へとつながる伊勢道（古代官道）を概ね踏襲していると考えられる[51]。伊勢道は、斎宮跡の調査よって、８世紀前葉頃には既に整備されていたことが判明しているが、それ以前からも伊勢における主要なルートの一つとして存在していたと考えられる。伊勢道は天王山遺跡を通過した後にすぐに平安時代以前の櫛田川の本流とされる祓川に至り、この河川を渡ると、すぐに斎宮に至るのである。このようなことから天王山遺跡は、斎宮の近隣に位置する点、斎宮の周辺集落の様子を考える上で重要であると考えられる。

だが、斎宮は８世紀を通じて規模を拡大していくが、今回の発掘調査で確認された天王山遺跡の集落はその近隣にあるものの、単時期で終わるのである。また、天王山遺跡は、旧飯野郡に属すると考えられ、斎宮が属する多気郡とは地域が異なる。このことから天王山遺跡の集落形成を斎宮との関係に重点を置き過ぎてはなるまい。むしろ、交通の要所であることに注目して、飯野郡との関わりのなかで理解したい。

天王山遺跡と飯野郡　天王山遺跡は飯野郡に属する。飯野郡はもともと多気郡に含まれていたが、７世紀中葉～後葉頃（天智朝）、多気郡と分かれ成立したとされる。天王山遺跡は、飯野郡が成立した後に出現した集落であると考えられる。

南北に長く、東西に狭い飯野郡において、先述した伊勢道が通るのは天王山遺跡周辺のみである。そして、この地は、古代官道が通るのみならず、斎宮に至る手前の地であり、櫛田川の渡しのある交通の要所でもある。さらに、天王山遺跡の北方には広大な沖積平野が広がり、かつその海岸近くには的形津があったと推測されている。飯野郡において、天王山遺跡周辺は、このように地理的環境に恵まれた最も良い場所であったと考えられるのである。

だが、現在の多気郡多気町兄国付近には、「上・下こうり」という郡衙に関わる地名が残り、この地は、古代において飯野郡に属していた。また、「兄国」は、郡の長官も勤めた古代豪族兄国氏の本貫地であったとされる[52]。この地域は、発掘調査が少ないため不明なことが多いが、このようなことから飯野郡の中心地は兄国付近にあったと推測されるのである。

天王山遺跡周辺は、現在のところ、飯野郡の中心地であったとすることは難しい。しかし、７世紀後葉頃、丘陵地に規模の大きい集落が形成されるという特異なあり方は、先述した伊勢道と斎宮の設立に無関係ではなかったと考えられる。また、斎宮で方格地割が整備される８世紀後葉頃、天王山遺跡周辺に大雷寺廃寺・貴田廃寺の存在が推測されていることも伊勢道・斎宮との関係においてこの地の重要性が示唆される。このようなことから、７世紀後葉頃、この地域は、斎宮の設立に伴い、それに通ずる主要なルート沿いであることから飯野郡の中でも重要な位置を占めるに至ったと推測されるのである。

しかし、なぜ、丘陵地に規模の大きい集落が形成されたのか、また、規模の大きな集落が形成されたものの、単時期で終わったのかなど、今後検討しなければならい課題は多い。　（淺生）

〔註〕
（１）上村安生「伊勢湾西岸における編年」（『弥生土器の様式と編年・東海編』木耳社、2002年）
（２）森岡秀人・安達厚三「畿内第Ｖ様式土器・山中式土器」（『日本土器事典』雄山閣、1996年）
（３）館蔵考古資料紹介、魚形壺片について名古屋市博物館だよりＮＯ，56、1987年
（４）石野博信「弥生時代の住居」（『日本原始古代住居の研究』講談社、1999年）
（５）宮本長二郎「竪穴住居」（『日本考古学事典』三省堂、2002年）

（６）萩原義彦ほか「遺構」（『金剛坂遺跡（第４次）辰ノ口古墳群（第2次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1999年）
（７）角正芳浩「弥生時代の遺構」（『史跡斎宮跡－平成９年度発掘調査概報、第119次調査』斎宮歴史博物館、1999年）
（８）西出孝ほか「Ⅲ遺構」（『コドノB遺跡（第２次・第３次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2000年）
（９）田村陽一ほか「北野遺跡」（『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告―第２分冊―』三重県教育委員会、1991年）
(10) 竹田憲治「弥生時代後期の遺構」（『北野遺跡（第５次）発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター、1996年）
(11) 松阪市教育委員会（『草山遺跡発掘調査月報』No,１～４、1982.7～1983.2）
(12) 福田昭「遺構」（『涌早崎遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会、1992年）
(13) 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』（S53年県ぼ、1978年）
(14) 川崎志乃「祓川右岸地域の地形と弥生集落の様相」（『みずほ』第34号　大和弥生文化の会、2000年）
(15) 斎宮跡の弥生時代の住居跡および事例については各調査概要報告や担当者よりご教示を得た。
(16) 下村登良男『神前山１号墳発掘調査報告書』（明和町教育委員会、1973）。谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会、1972年）。
(17) 田辺昭三『須恵器大成』（角川書店、1981年）
(18) 鈴木一有氏にご教示いただいた。
(19) 大川操ほか『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅵ』（三重県埋蔵文化財センター、2005年）。鈴木一有「東海の甲冑出土古墳にみる古墳時代中期の変革過程」（前掲註（19）文献）
(20) 蛇行剣の集成および検討については、楠元哲夫氏・前坂尚志氏・北山峰生氏などの論考が詳しい。楠元哲夫ほか『宇陀北原古墳』（大宇陀町教育委員会、1986年）。前坂尚志「蛇行剣小考」（『考古学と信仰』、同志社大学考古学シリーズ刊行会、1994年）。北山峰生「副葬された蛇行剣－意義と特質に関する予察」（『石ノ形古墳』、袋井市教育委員会、1999年）
(21) 藤森栄一・宮坂光昭「諏訪上社フネ古墳」（『考古學集刊』第３巻第１号、東京考古學会、1965年）
(22) 池淵俊一『五反田古墳群　門生黒谷Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』（島根県教育委員会、1998年）
(23) 蛇行剣の棺外出土例は伊藤雅文氏のご教示によるところが多大である。
(24) 伊藤裕偉『近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書－第７分冊－』（三重県埋蔵文化財センター、1992年）
(25) 前掲註（20）文献。静岡県浅羽町五ヶ山Ｂ－２号墳出土例は蛇行鉾
(26) 楠元哲夫ほか『宇陀北原古墳』（奈良県立橿原考古学研究所・大宇陀町教育委員会、1986年）。西藤清秀ほか『後出古墳群』（奈良県立橿原考古学研究所、2003年）。岡林孝作『後出古墳群-18号墳-』（奈良県立橿原考古学研究所、1993年）
(27) 豊島直博「古墳時代中期の畿内における軍事組織の変革」（『考古学雑誌』第85巻第2号、2000年）。和田晴吾「群集墳と終末期古墳」（『新版・古代の日本』第５巻近畿Ⅰ、角川書店、1992年）
(28) 真田幸成「経塚古墳」（『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』、鈴鹿市教育委員会、1966年）。
(29) 下村登良男『八重田古墳群発掘調査報告書』（松阪市教育委員会、1981年）
(30) 竹内英昭ほか『平田古墳群』（安濃町遺跡調査会、1987年）
(31) 前掲註（19）鈴木氏文献
(32) 下村登良男『松阪市史』第２巻史料篇考古（松阪市、1978年）
(33) 豊田祥三「伊勢の古墳時代中期における小型墳のケーススタディ」（『Mie history』vol.16、三重歴史文化研究会、2005年）
(34) 松阪市教育委員会『中部平成団地埋蔵文化財発掘調査報告書』（松阪市教育委員会、1990年）
(35) 前掲註（34）文献
(36) 下村登良男『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』（多気町教育委員会、1986年）
(37) 穂積裕昌「伊勢湾西岸域における古墳時代港津の成立」（『考古学に学ぶ（Ⅱ）』同志社大学考古学シリーズ刊行会、2003年）
(38) 竹内英昭「南勢地域の古墳時代前半期の首長権－宝塚１号墳をめぐって－」（『Mie history』vol.５、三重歴史文化研究会、1993年）。豊田祥三「高塚１号墳採集埴輪の再検討」（『研究紀要』第14号、三重県埋蔵文化財センター、2005年）
(39) 豊田祥三「中南勢地域における初期群集墳の検討」（『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅵ』、三重県埋蔵文化財センター、2005年）
(40) 奥野実・田上稔ほか『古轡通りＢ遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）。立岡山６号墳出土品は多気町教育委員会のご好意により実見させていただいた。
(41) 福田哲也『山添２号墳発掘調査報告書』（松阪市教育委員会、1998年）。福田昭ほか『羽根遺跡・やつで３号墳発掘調査報告書』（松阪市教育委員会、1998年）
(42) 熊崎司「飛鳥時代の土師器高杯と地域間交流」（『考古学フォーラム』14、考古学フォーラム編集部、2002年）。上村安生・竹田憲治『北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1995年）
(43) 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』（2001年）
(44) 淺生卓司「伊勢南部の須恵器生産」（『Mie history』vol.16、三重歴史文化研究会、2005年）
(45) 淺生卓司「徳居窯址群の須恵器生産」（『Mie history』vol.14、三重歴史文化研究会、2003年）
(46) 伊藤裕偉『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）
(47) 伊藤裕偉『下之川富田』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）
(48) 下村登良男ほか『明和町史』史料編第一巻自然・考古（明和町史編さん委員会、2004年）。森川常厚・川崎志乃『丸野・中谷遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2003年）。山沢義貴ほか『古里遺跡発掘調査報告－C地区－』（三重県教育委員会、1973年）。山澤義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』（明和町教育委員会、1971年）。田村陽一・浅尾悟・宮田勝功「金剛坂遺跡発掘調査報告」（『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、三重県教育委員会、1985年）。西村美幸『曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群』（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。下村登良男『大阪変圧器KK三重工場　埋蔵文化財発掘調査報告』（多気町教育委員会、1974年）。伊藤久嗣ほか『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』（三重県教育委員会、1973年）
(49) 世古且守・山沢義貴『カリコ古墳・カリコ遺跡発掘調査報告』（玉城町郷土会、1972年）
(50) 竹内英昭「飛鳥・奈良時代の集落遺跡の検討」（『研究紀要』第６号、三重県埋蔵文化財センター、1997年）
(51) 足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」（『探訪古代の道』第１巻、法藏館、1988年）
(52) 奥義郎「第三編古代」（『多気町史　通史』、多気町、1992年）

附編　伊賀Ａ遺跡範囲確認調査の成果

1　経緯

伊賀Ａ遺跡は、松阪市伊賀町に所在し、周囲を丘陵に囲まれた谷部に位置している。昭和44年に、三重大学歴史研究会が行った分布調査[1]において、サヌカイト片や弥生土器、須恵器、土師器などが採集されている。遺跡北西側の丘陵上には松阪商業高校が所在している。遺跡の北には、丸野遺跡や中谷遺跡[2]が所在し、平成14年に発掘調査が行われている。

丘陵の南側は、谷状に低くなっており、水田が営まれている。この部分に、経営体育成事業(櫛田上地区)が行われることとなったため、平成15年度に範囲確認調査が実施された。

2　調査の結果

範囲確認調査では、47箇所の調査坑が設定され、調査坑No.42・43から多量の土師器が出土した他、調査坑No.20では溝と土師器椀が確認されている。これらの地点周辺には遺構が存在する可能性が高いため、盛土により現地保存を行っている。

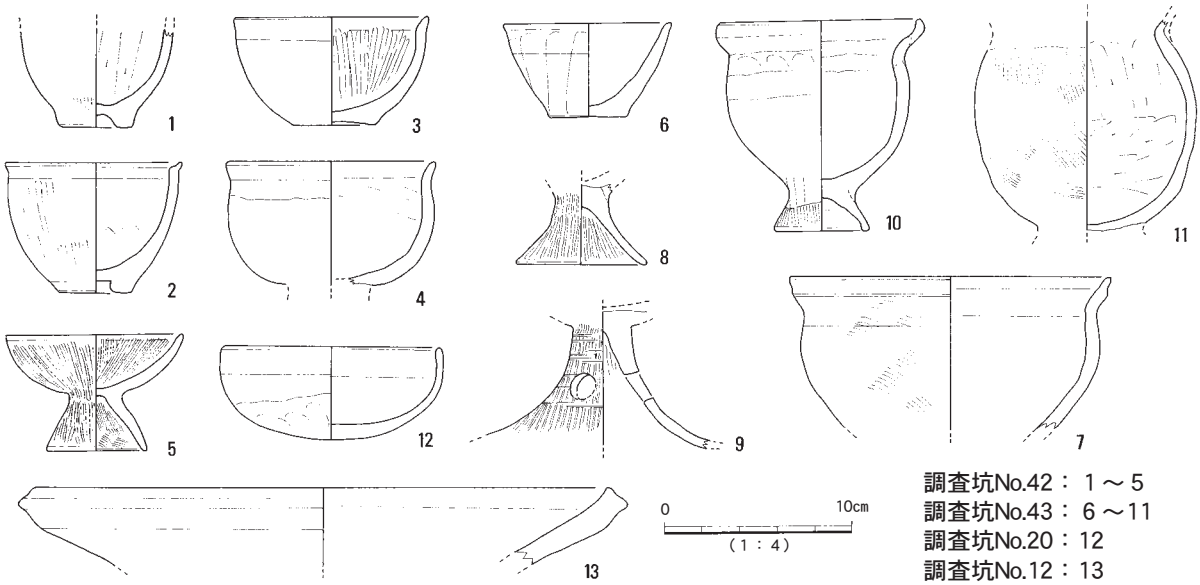
3　遺物

１～５は調査坑No.42の出土遺物。１～３は土師器鉢。１・２は台部が凹み、２は口縁内面に面を持つ。３も口縁内面に面を持つが、底部は平底で僅かに凹む。４は底部に剥離部分が見られ、台付きになるものと考えられる。５はミニチュアの土師器高杯。調整は丁寧で、外面および脚部内面はハケ調整が、杯部内面にはミガキ調整が行われている。

６～11は調査坑No.43の出土遺物。６・７は土師器鉢。６は平底で、口縁部は直線的である。７は口縁部が外反し、外面に面をもつ。８・９は土師器高杯。８はミニチュア土器と考えられる。９はミガキ調整が施されるが、摩滅が激しい。10は小型の台付甕。粘土紐痕が残り、調整は粗い。11は甕状の体部を持ち、口縁部は欠損している。底部には剥離痕があり、台が付くもの考えられる。

12は調査坑No.20から出土した土師器椀。粘土紐

第96図　調査坑配置図（１：4,000）



第97図　遺物実測図（１：４）

番号	登録番号	種別　器形	調査坑No.	計測値(cm) 口径	器高	底径台径	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	1-4	土師器　鉢	No. 42	－	－	4.0	ナデ、ハケ、ケズリ	やや粗	良	にぶい黄橙	底部12/12	
2	1-6	土師器　鉢	No. 42	9.3	6.9	3.9	ナデ、ハケ	やや粗	良	灰黄橙	11/12	
3	1-5	土師器　鉢	No. 42	10.2	5.7	4.2	ナデ、内面ミガキ	やや粗	良	にぶい黄橙	11/12	一部黒斑有り
4	1-3	土師器　台付鉢	No. 42	11.0	－	－	ナデ、工具ナデ	やや密	良	浅黄橙	口縁1/12	
5	1-7	土師器　高杯	No. 42	9.4	6.1	5.3	ハケ→ミガキ、ハケ、ナデ	やや密	良	灰黄	5/12	ミニチュア
6	2-6	土師器　鉢	No. 43	8.9	5.0	4.0	ナデ、工具ナデ	やや密	良	灰白	5/12	ミニチュア
7	2-2	土師器　鉢	No. 43	16.9	－	－	ナデ、ハケ	やや粗	良	にぶい橙	口縁1/12	
8	2-3	土師器　高杯	No. 43	－	－	6.9	ナデ、ミガキ	やや密	良	にぶい黄橙	底部2/12	
9	2-5	土師器　高杯	No. 43	－	－	－	ミガキ、ハケ	やや粗	良	にぶい黄橙	脚部5/12	
10	2-4	土師器　台付甕	No. 43	11.0	11.1	5.0	ナデ、工具ナデ、ハケ	やや密	良	にぶい黄橙	10/12	一部黒斑有り
11	2-1	土師器　台付甕	No. 43	－	－	－	ナデ、ハケ	やや粗	良	にぶい橙	7/12	三方透かし
12	1-2	土師器　椀	No. 20	11.7	4.9	－	ナデ、オサエ	やや密	良	浅黄橙	8/12	
13	1-1	土師器　鉢	No. 12	32.0	－	－	ナデ、オサエ	やや粗	良	にぶい橙	口縁2/12	

第24表　遺物観察表

痕が残り、調整は粗い。古墳時代後期のもの。13は陶器鉢で、調査坑No.12から出土したもの。

4　結語

調査坑No.42・43から出土した遺物は山田猛氏の土器編年[(3)]の欠山様式新段階～元屋敷様式に属するものと考えられる。この地点は、松阪商業高校の所在する丘陵の南東裾で、丘陵から谷に移る境目にあたる。遺物は、ミニチュアの高杯や鉢、台付甕など小型の製品に限られており、谷の堆積土中から出土したことから、水辺での祭祀が行われていた可能性が高い。

また、丘陵北側の丸野遺跡では、古墳時代前期の溝が丘陵を囲むように確認されている。今回の範囲確認調査でも、詳しい時期は分からないが調査坑No.20で幅の狭い溝が確認されており、この溝とつながることも考えられる。

僅かな資料ではあるが、こうした状況から考えて、松阪商業高校のある丘陵上に集落が所在した可能性があり、谷や環濠によって周囲と区画していたことが考えられよう。

〔註〕
（1）三重大学歴史研究会『ふびと』第31号（1970年）
（2）森川常厚・川崎志乃『丸野・中谷遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2003年）
（3）山田猛ほか『山城遺跡・北瀬古遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1994年）

附編　保存処理について

三重県埋蔵文化財センター　大　川　　操
（財）元興寺文化財研究所　山　岡　奈美恵

1　はじめに

金属製品および有機質製品は、長期間土中にあったために錆化し、あるいは常時一定水分が吸湿される環境下に置かれており、非常に脆くなっている。土中から取上げ後、そのまま大気中に放置しておくと錆化による変形・変質をおこし、また乾燥によって形状が崩壊してしまうため、将来に渡り錆化を可能な限り遅延させ、脆弱化した金属・有機質の強化措置が必要である。

天王山古墳群から出土した金属製品は、遺物取上げ後、脱水処理と仮接合までの段階を県埋蔵文化財センターで、また以後の工程を(財)元興寺文化財研究所に委託して保存処理を実施した。

本章では、(財)元興寺文化財研究所とともに、保存処理の工程についての報告を行うこととする。

2　処理工程

(1) 遺物の取り上げ

金属製品を検出後、図面・写真類など必要な記録作業を終えてから、蛇行剣・鏃束ともに取り上げを行った。蛇行剣は可能な限り土を除去した状態で剣身と茎の２分割で搬入された。また鏃は接地面の土ごと取り上げられており、束状になってはいるが各個体の間には土を挟んでいるため鏃間の錆着はなかった。保存処理を行うにあたり、鏃束という出土状況を残す処理では、束内部の製品が脱塩・樹脂含浸不充分となる可能性があることから、調査担当と協議の上、「１本ずつ切り離して取上げを行い、錆着個体および部分錆着箇所のみ無理な切り離しを行わない」方針で、出土状況図を参考に番号を付して取り上げを行った。この他に、剣の断片２片が出土しており、これらについても蛇行剣・鏃束同様、脱水処理以降保存処理に至るまで同じ工程で処理を行った。

(2) 保存処理

①脱水処理・仮接合

鉄製品表面の土や錆着した砂粒、また錆瘤をニッパー、メス、小型グラインダー[1]を使用して除去した。この時点でＸ線透過撮影による形状確認を行っていないため、鏃の逆刺・関部分に形状を損なう危険のある錆瘤がみられる場合、クリーニングを地金手前でやめた。土を取り除いた後はエチルアルコールで２回以上洗浄し、接合できるものについては仮接合を行った。折損破片はシアノアクリレート系接着剤[2]で仮接合を行い、錆瘤等の除去中に剥離折損したものについては、アクリル樹脂[3]（20％キシレン溶液）により接着復原・強化を行い、実測・写真等の記録作業の利便化を図った。

また、脱水処理時に木質・樹皮状有機質の認められた製品については、有機質部分の洗浄を１回に留め、乾燥後にアクリル樹脂[4]（10％キシレン溶液）を塗布し、乾燥による破損のないよう養生を行った。

蛇行剣については、接地面に土が多く付着したまま搬入されており、検出面の洗浄が終わった時点で反転させ、土の除去や錆瘤の除去を行った。接地面には鞘材の木芯と思われる木質が多く残存しており、土の除去時に一部剥離したものもあった。面的に錆着した木質の一部分が錆瘤で隆起した箇所については、洗浄しアクリル樹脂[5]（５％キシレン溶液）で補強した木質を一度切り離した後、錆瘤を除去し、アクリル樹脂[6]（10％キシレン溶液）を２回以上塗布して錆瘤周辺の木質と再接合をした。鞘口の木質が立体的な形状を残して残存していたためこれらも形状保持のため、エチルアルコールで洗浄後、アクリル樹脂[7]（10％キシレン溶液）を２回塗布して強化した。茎の接点はわずかであり、仮接合することにより残存する接点をより損傷する可能性が大きいと判断し、記録作業等についても仮接合を行わなかった。また、切先については、搬入時点では表面上損傷がなかったが、小型グラインダー等の機器による振動で亀裂を生じたためか仮処置中に折損した。

これについてはシアノアクリレート系接着剤[8]で仮接合して記録作業を進めた。

これらの処置の後、保存処理委託のため遺物を搬出したが、この引渡し時に各々の部位について行った上記の養生処理ならびに有機質の遺存状況を確認し、特記事項を「打合書」として委託・受託双方で交わして保存処理を委託した。

以降、②～⑭の処理を(財)元興寺文化財研究所において実施した。（大川）

②保存処理前調査

処理前の状態を写真撮影し、合わせてＸ線写真を以下の条件で撮影して状態の記録と把握を行った。

装置	Ｘ線透過試験装置
	（フィリップス社）MG225
フィルム	Fuji X-ray film Ix100
増感紙	LF0.03
焦点フィルム間距離	100㎝

第25表　Ｘ線透過撮影条件

また、表面の有機質の付着等について観察を行い、その情報を処理台帳に記入した。

③前処置

木質・樹皮状有機質について、処理中の欠損を防ぐため、アクリル樹脂[9]（６％・13%酢酸エチル溶液）を、まず６％の樹脂を数回塗布して内部まで充分浸透させた後、13％の樹脂を数回塗布して表面に保護膜を形成させて強化を行った。

④第１次クリーニング

表面に付着する土や錆などをニッパー、メス、エアブラシ[10]、小型グラインダー[11]等を用いて除去した。

特に脆弱な箇所や有機質の付着している箇所等についてはこの時点で無理にとらず、樹脂含浸を行って強化させた後、再度クリーニングを行うこととした。

⑤保護材の取り付け（養生）

ポリエチレン製のネット[12]とステンレス製の薄板（薄板の使用は蛇行剣169のみ）を取り付けて養生をした。

⑥洗浄

有機溶剤（アルコール・キシレン・酢酸エチルの混合液）に浸漬して表面に付着する不純物や油分を除去した。なお、前処置を行った遺物についてはエチルアルコールに浸漬して洗浄を行った。

⑦脱塩処理

セスキカーボネイト法による脱塩を行った。この方法は、弱アルカリ性であるセスキカーボネイト（炭酸ナトリウムと炭酸水素ナトリウムの混合物）１％水溶液中に遺物を浸漬し、錆の原因となる塩化物イオンを除去する方法である。１週間に１回の割合で溶液中の塩素濃度を測定し、新しい溶液に交換した。処理には約３ヶ月を要した。

⑧樹脂含浸

遺物強化と防錆のために、フッ素系アクリル樹脂[13]（25％ナフサ溶液）による減圧含浸を１回実施した。

⑨第２次クリーニング

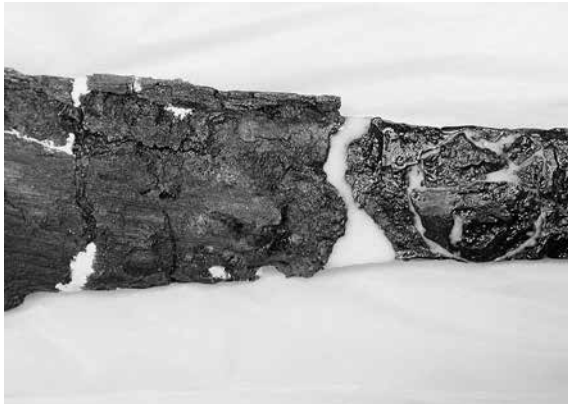
第１次クリーニングで除去出来ていなかった錆等の除去を行った。

⑩樹脂含浸

前述の方法を２回実施した。

⑪接合・復元

シアノアクリレート系接着剤[14]、エポキシ系接着剤[15]を用いて接合した。また、欠損部はエポキシ系接着剤[16]を用いて補填を行い（写真図版46）、細い亀裂や有機質周辺の空隙部には別のエポキシ系樹脂[17]を用いて補填を行った。



写真図版46　蛇行剣169の茎付近（白色部分が補填箇所）

⑫樹脂塗布

外気との接触を少なくして防錆効果を強めるために、含浸時の２倍に薄めた樹脂[18]を２回塗布した。

⑬彩色

復元部には水溶性アクリル絵具[19]を用い、遺物本体と違和感のない程度に補彩を施した。

⑭処理後調査

上記の工程が終了した後、一定期間遺物の経過観察を行い、異常が認められなかったので写真撮影による記録を行った。

保存処理報告書No.103　　24点

3　おわりに

以上のような工程で保存処理を行うことにより、出土時とは比較にならないほど形状が本来の姿に近づき、理解し易くなると同時に保管・展示に耐え得る強度を備え、現状を維持することが可能となった。

しかし、保存処理を行えば銹化や変形、崩壊を完全にくい止められるという訳ではなく、その速度を緩やかにする措置であるのだということを忘れてはならない。処理後の取扱いが悪ければ剥離・銹化等の進行は促進されてしまうため、遺物に悪影響を及ぼす急激な温度の変化や湿度の上昇がないよう、展示・保管環境には充分な注意を払い、定期的に保管環境のチェックと遺物の観察を行う必要がある。

（山岡）

〈保存処理工程〉

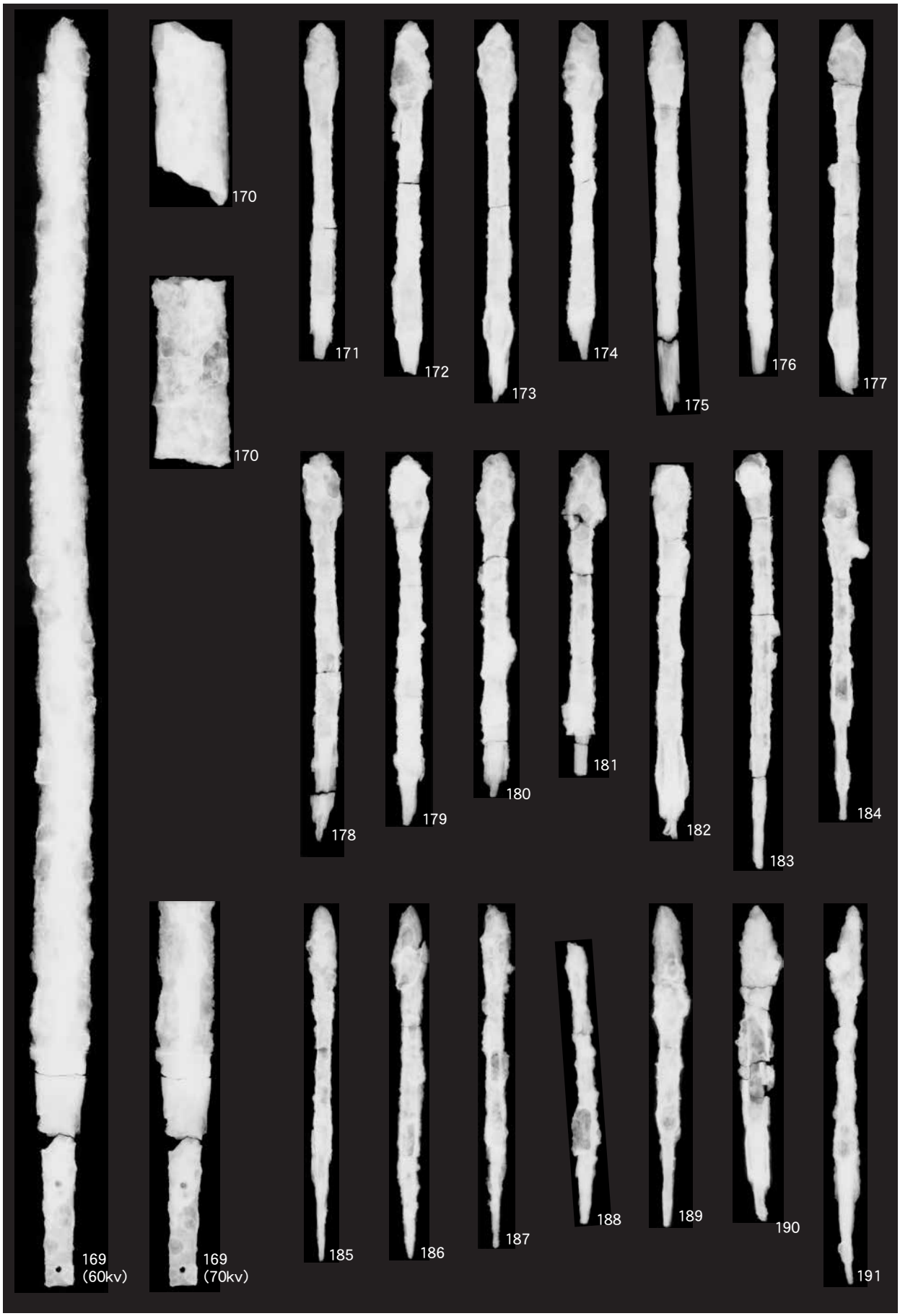
処理前調査
↓
第１次クリーニング
↓
保護材の取り付け（養生）
↓
脱塩
↓
樹脂含浸（１回実施）
↓
第２次クリーニング
↓
樹脂含浸（２回実施）
↓
接合・復元
↓
樹脂塗布（２回）
↓
彩色
↓
処理後調査

《註》

（1）ミニター　ミニター社
（2）アロンアルファ　東亜合成株式会社
（3）パラロイドB-72　Room&Hass社
（4）註(3)に同じ
（5）註(3)に同じ
（6）註(3)に同じ
（7）註(3)に同じ
（8）註(2)に同じ
（9）註(3)に同じ
(10) パワーブラスト50N　岡本歯研
(11) 註(1)に同じ
(12) ダイオネット　ダイオ化成
(13) Ｖフロン１液マイルドクリヤ　㈱大日本塗料
(14) セメダイン3000RS　セメダイン社
(15) セメダインハイスーパー　セメダイン社
(16) 註(15)に同じ
(17) アラルダイトXN-6504　チバ・スペシャルティケミカルズ㈱
(18) 註(13)に同じ
(19) アクリラ　ホルベイン社

《参考文献》

・　増澤文武・石川恵美『団子塚九号墳出土遺物保存処理報告書』（袋井市教育委員会・(財)元興寺文化財研究所、1994年）
・　尾崎誠「岸和田市風吹山古墳出土金属製品の保存処理」『創立30周年記念誌　1967～1997』（(財)元興寺文化財研究所、1997年）
・　馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊『文化財科学の事典』（2003年）
・　山岡奈美恵「Ⅰ　保存処理について」（『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅵ－天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群（第６・７次調査）－』三重県埋蔵文化財センター、2005年）



第98図　天王山１号墳鉄製品Ｘ線透過写真

写　真　図　版

天王山1号墳（保存処理前）

落合3号墳

写真図版 1

櫛田川右岸からみた天王山遺跡・古墳群

調査前風景　天王山１号墳（南東から）

調査前風景　天王山15号墳（南西から）

調査区東部全景（南西から）

写真図版３

ＳＸ302（北から）

ＳＸ302南側周溝遺物出土状況１（西から）

ＳＸ302南側周溝遺物出土状況２（北から）

ＳＸ302埋葬施設（西から）

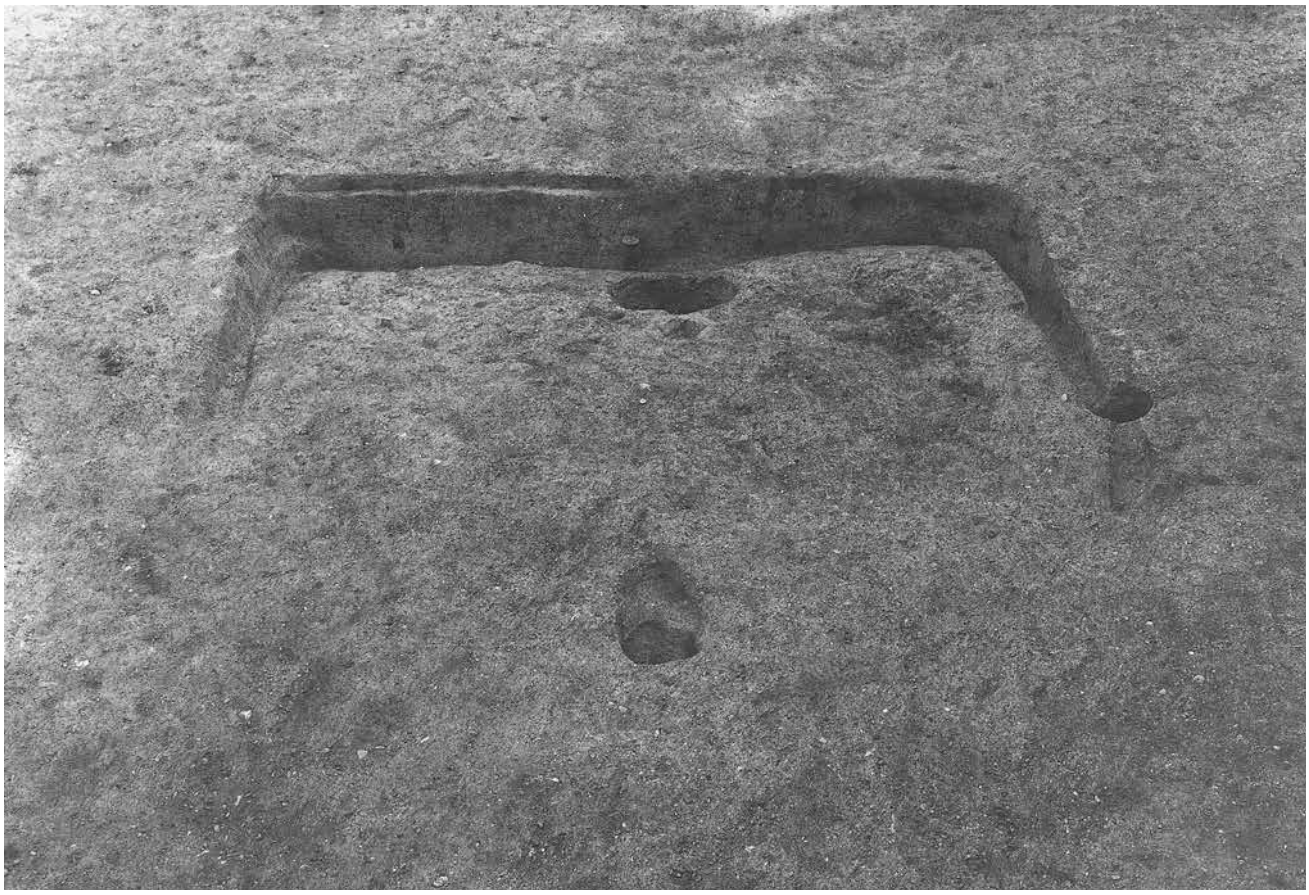
ＳＨ８・20（東から）

ＳＨ６（北から）

ＳＨ17（東から）

ＳＨ36（東から）

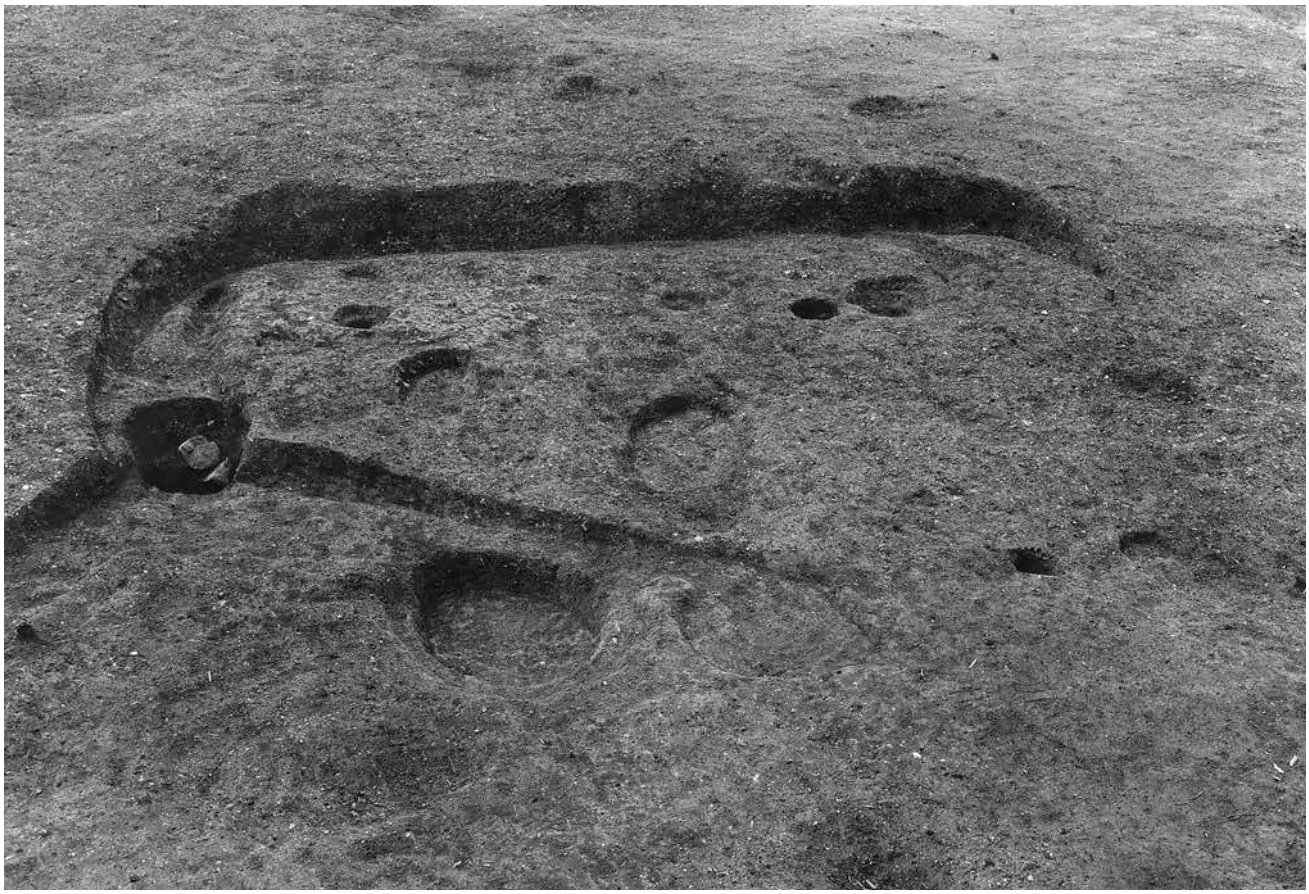
ＳＨ41（東から）



ＳＨ47（西から）

ＳＨ301（東から）

ＳＨ314（東から）



ＳＨ337（北東から）

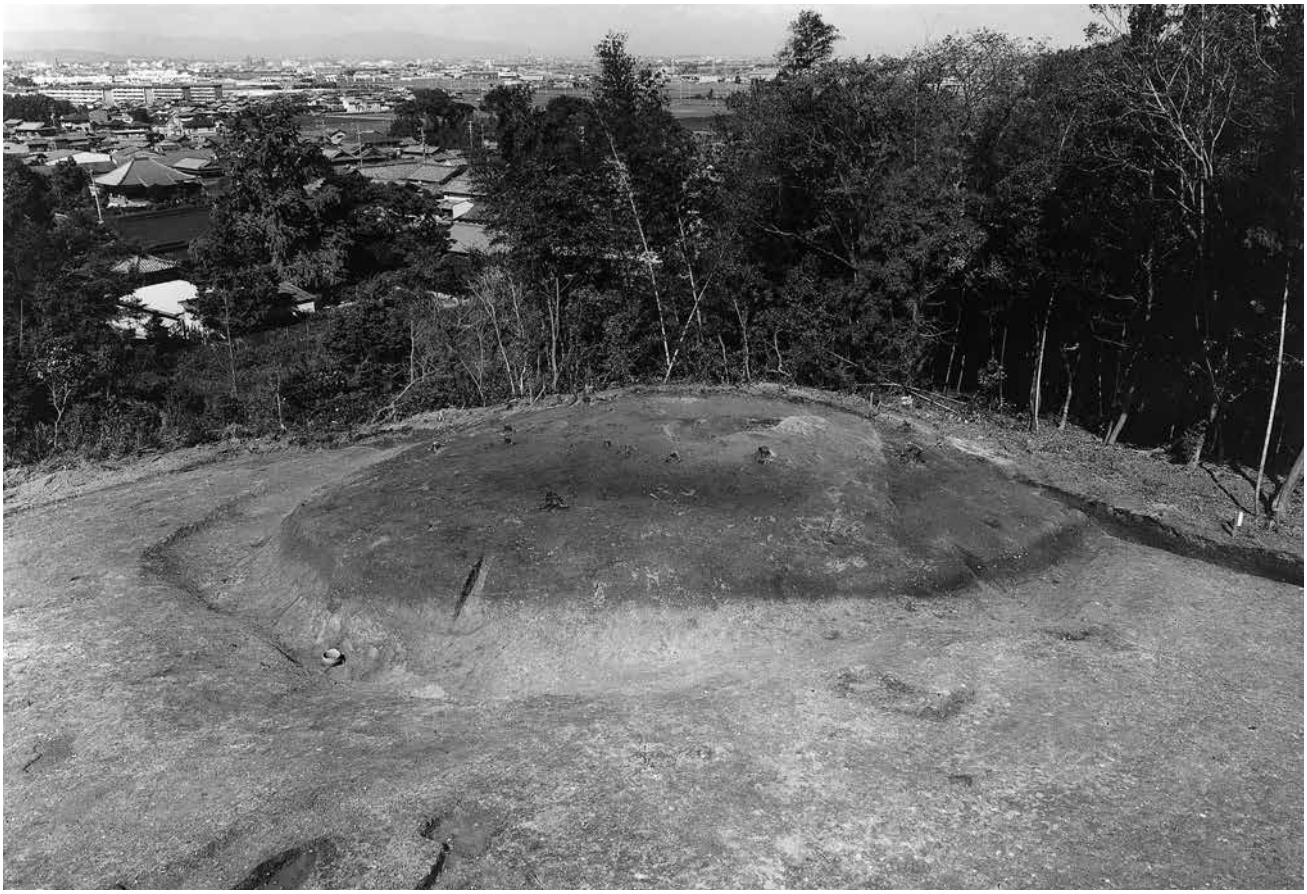
ＳＨ338（北東から）

ＳＨ352（西から）

ＳＨ368（北東から）

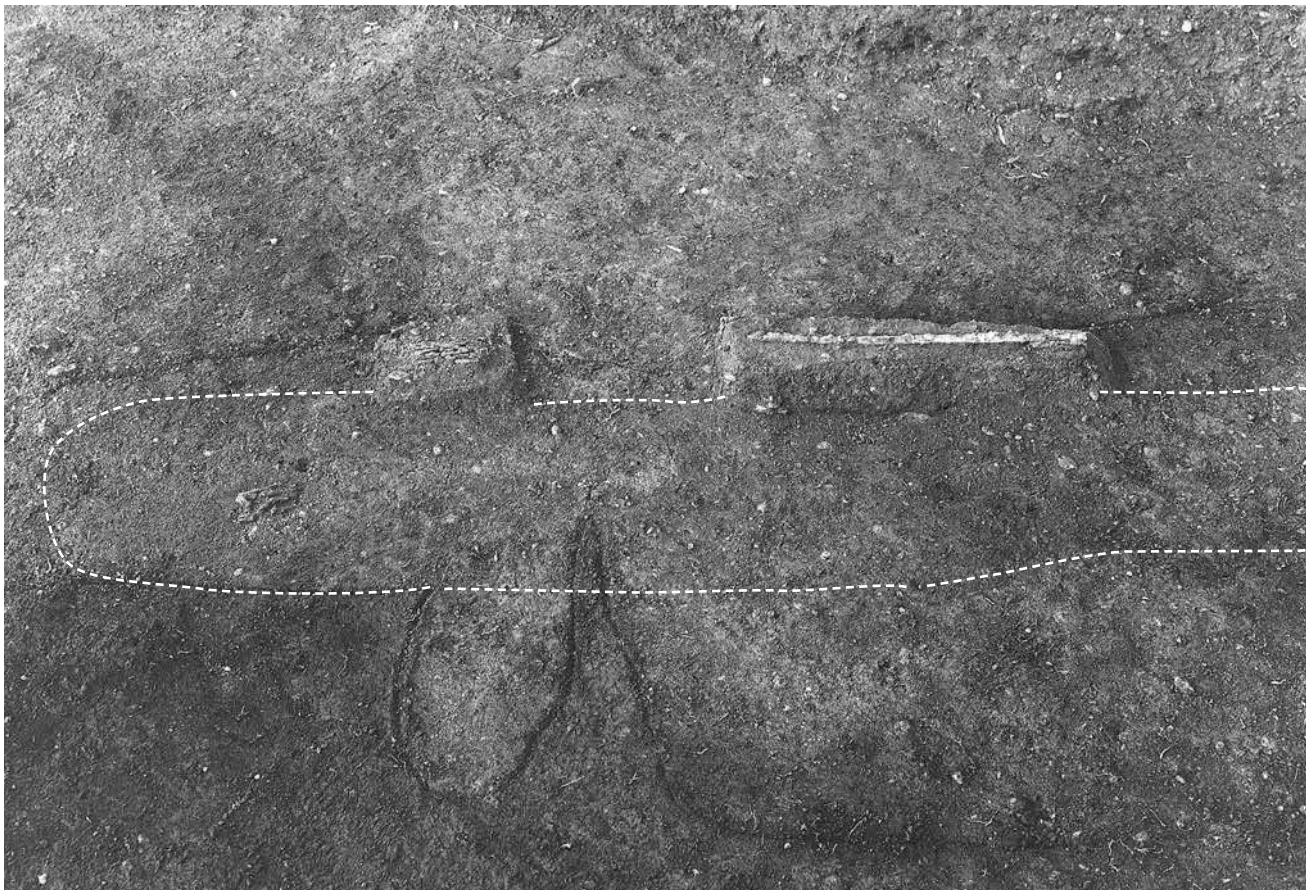
ＳＨ370（北東から）

ＳＫ304（東から）



天王山１号墳（南東から）

天王山１号墳南側周溝遺物出土状況（西から）



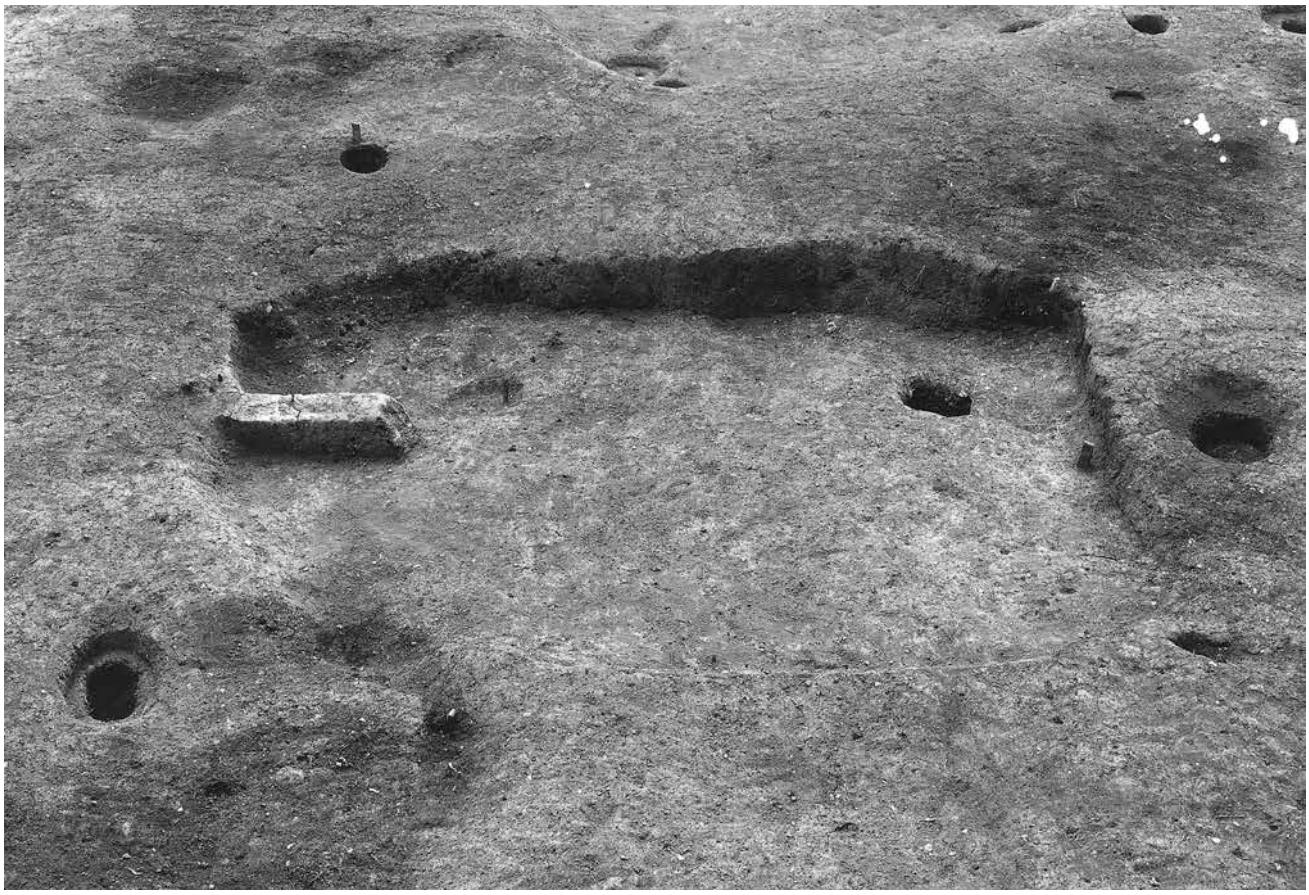
天王山１号墳埋葬施設鉄製品出土状況（南から。白線は棺ラインを示す）

天王山１号墳埋葬施設（東から）

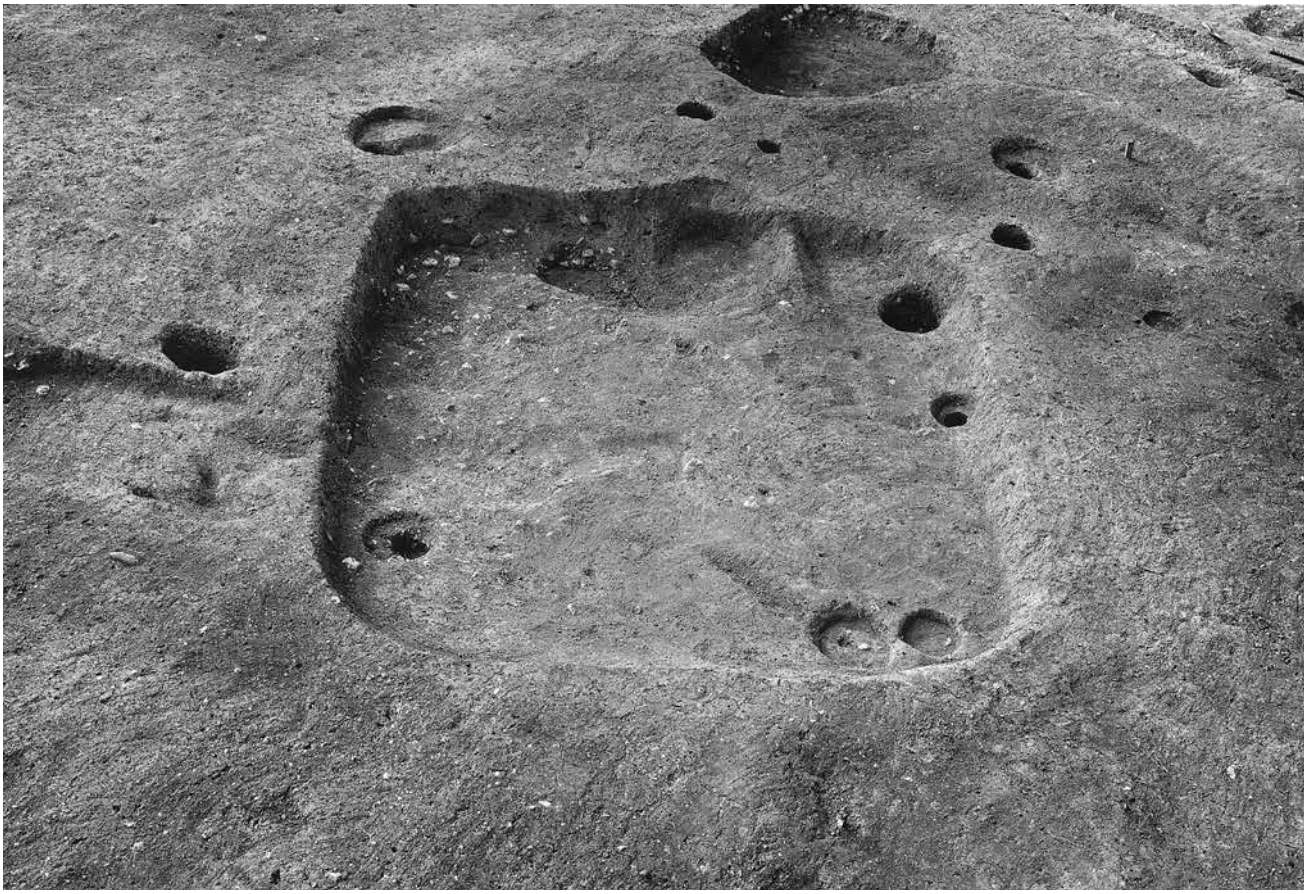
天王山15号墳（南東から）

天王山15号墳埋葬施設検出状況（南から）

天王山14号墳（南東から）



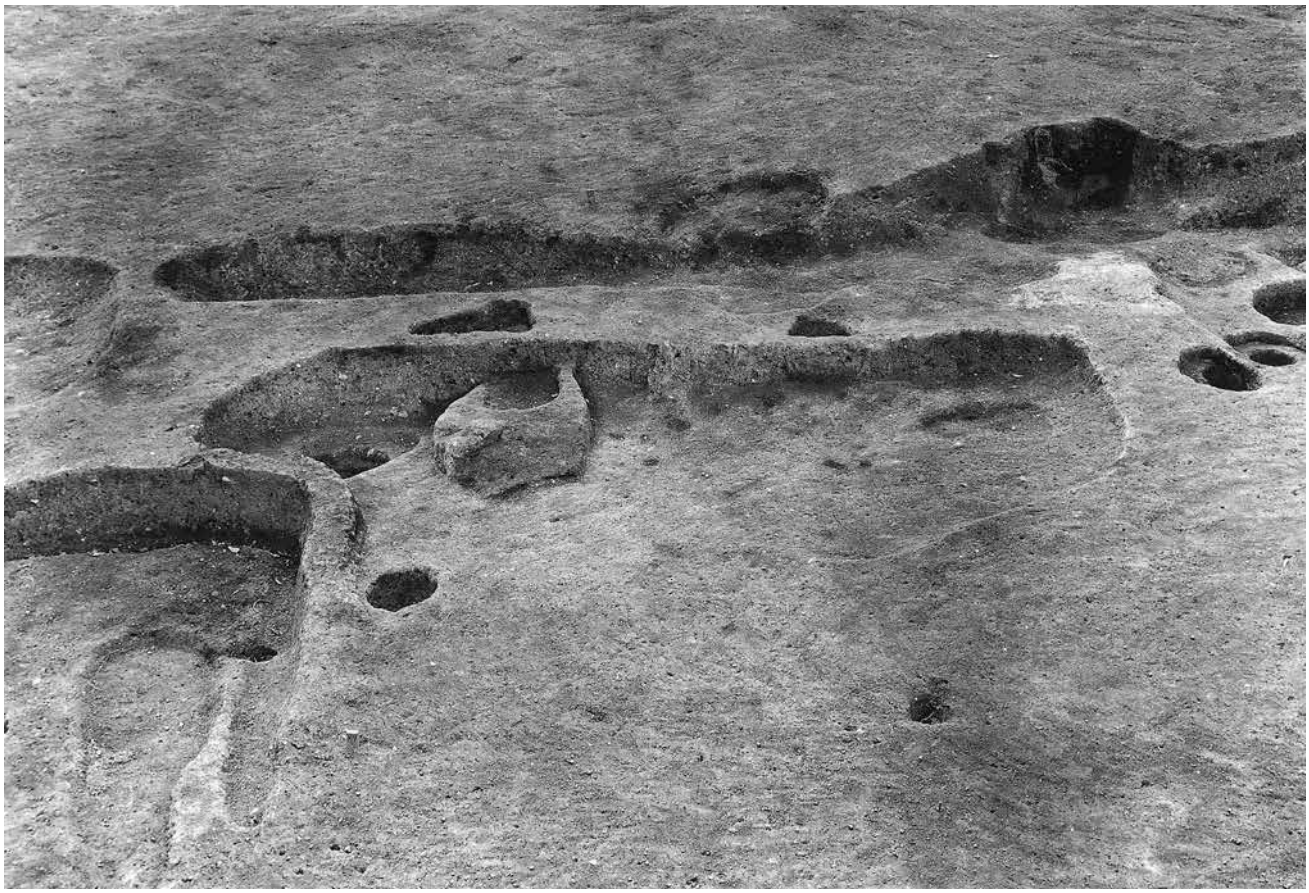
ＳＨ18（北東から）



ＳＨ23（南から）

ＳＨ25（東から）

ＳＨ26（東から）



ＳＨ27（東から）

ＳＨ323（東から）

ＳＨ321（東から）

ＳＨ321カマド（東から）

ＳＨ321カマド（西から）

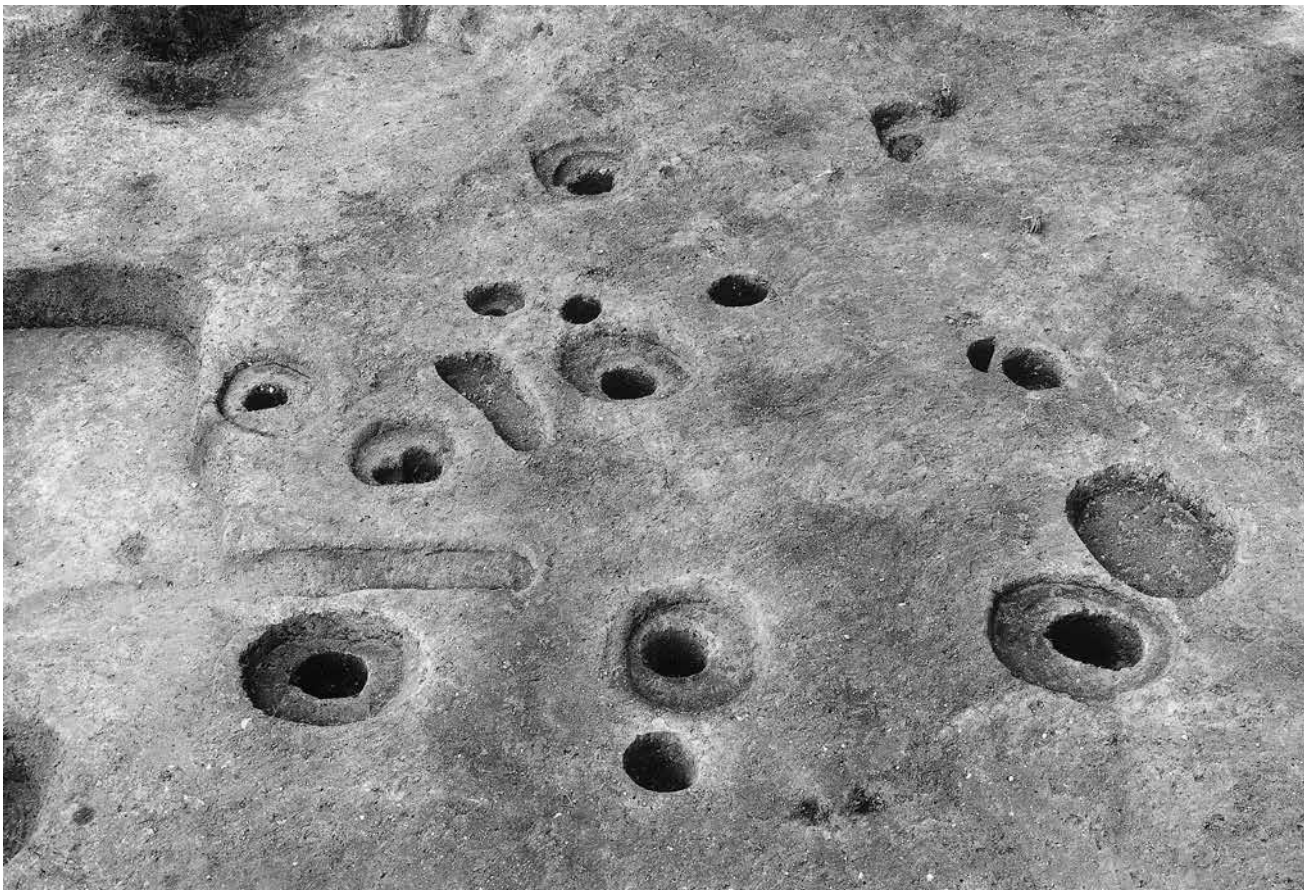
ＳＨ305（東から）

ＳＨ342カマド（東から）

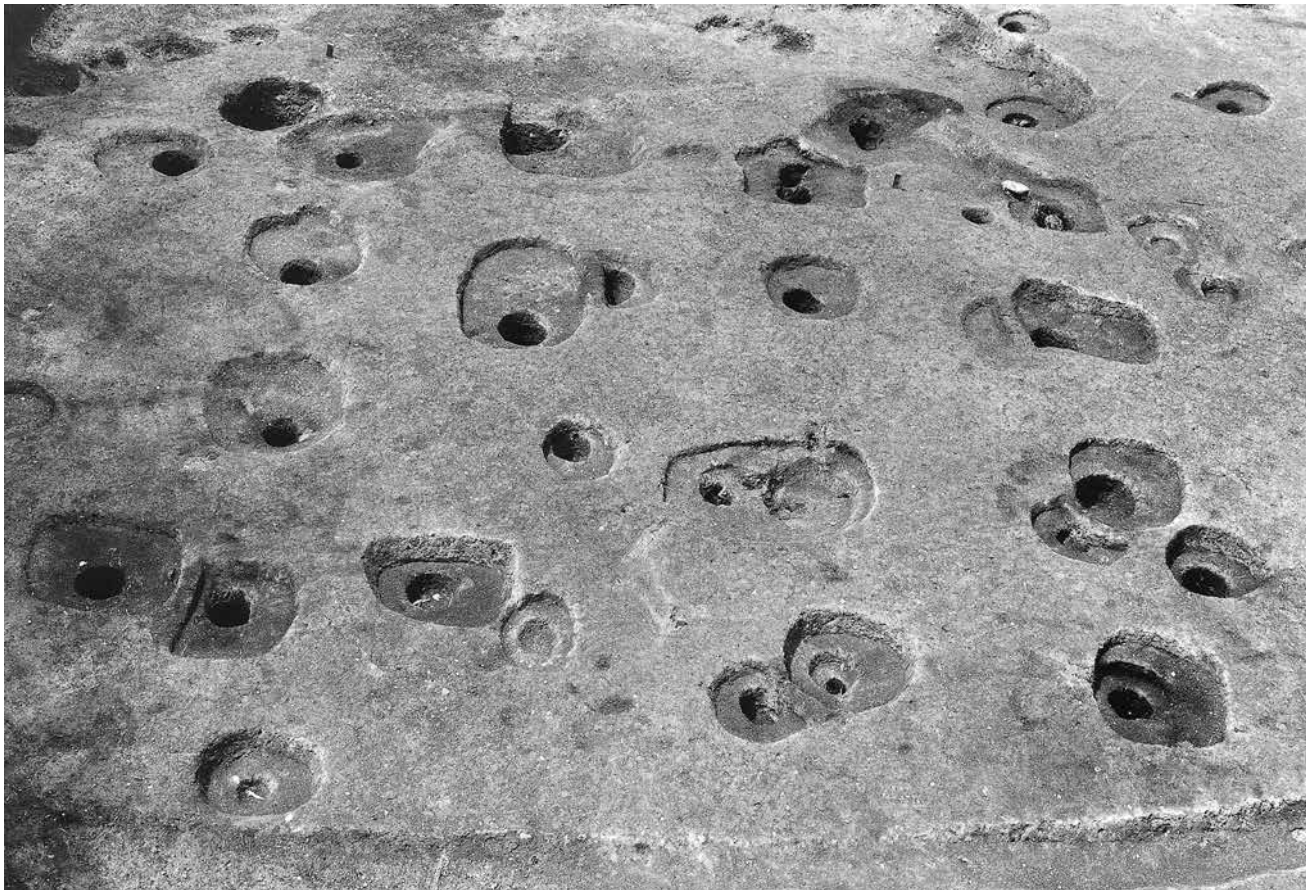
ＳＨ332・333（北から）

ＳＨ335（北東から）

ＳＢ１（西から）



ＳＢ２（東から）



ＳＢ３（東から）

ＳＢ46（北東から）

ＳＢ49・50（東から）

ＳＢ52・55（東から）

ＳＢ365（北東から）

ＳＢ366（東から）

ＳＫ33・43（東から）

ＳＫ303（南から）

1

14

12

19

15

26

18

36 37

27

28

21

24

54

50

38 39

52

60

63

72

85

75

93

78

94

79

98

96

101

99

119

105

113

106

107

112

122

128

147

152

151

127

148

132

154

153

153

155

192

196

169

169

170

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

裏面

185

186

187

188

189

190

191

199

202

208

217

218

219

224

225

226

240

235

236

288

245 244 243 246

251

248

262

257

266

270

268

272

275

278

282

286

287

291

293

294

295

298

300

307

308

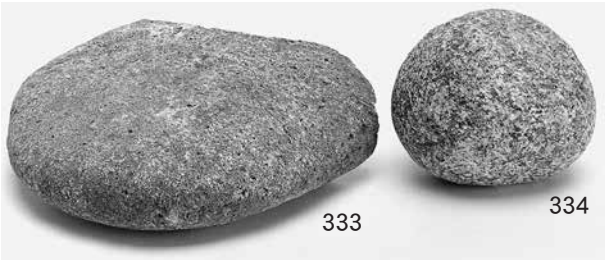
312

317

321

335

337


333 334

339

348

354

377

368

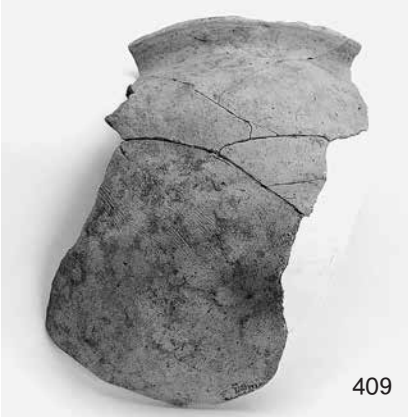
370

379

391

383

385


409

397

404

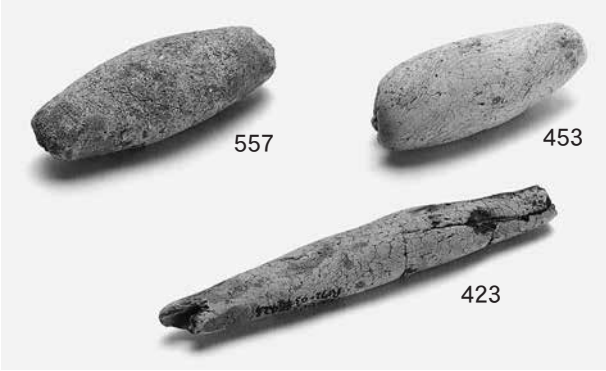
407

408

421

436

434


557
453
423

438

442

446

452

467 465

477

471

479

485

491

504

505

509

517

517

524

500

518

519

521

522

528

546

534

535

538

543

545

547

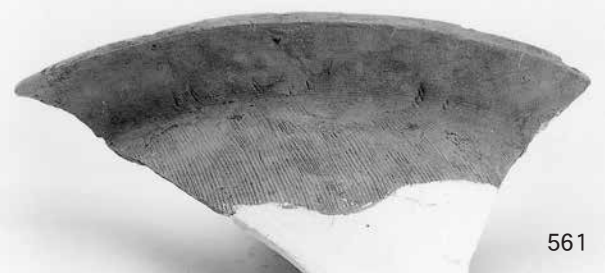
553

549

558

552

559


561

554

567

591

577

579

593 594

600

617

618

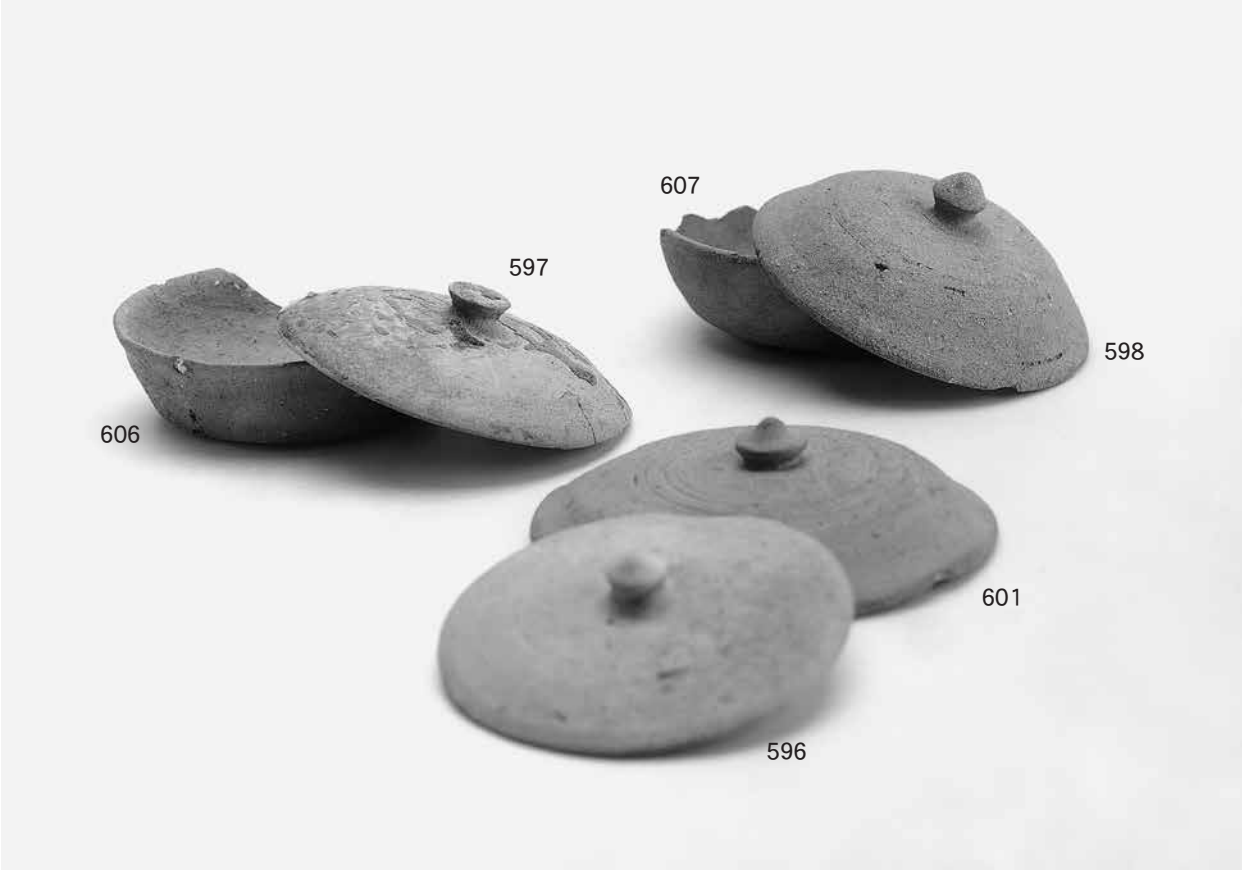
620

623

625

638

写真図版45



報告書抄録

ふりがな	てんのうやまいせき・てんのうやまこふんぐんはっくつちょうさほうこく
書名	天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告
副書名	三重県松阪市豊原町所在
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	270
編著者名	中川　明・新名　強・淺生卓司
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒　515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL　0596(52)1732
発行年月日	２００６年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
てんのうやまいせき 天王山遺跡	まつさかし 松阪市 とよはらちょう 豊原町 あざてんのう 字天王	24204	a 191 (13Ａ-2)	136度 29分 03秒	34度 42分 55秒	20030512～ 20031219	4,520	緊急地方道路整備事業
てんのうやまこふんぐん 天王山古墳群		24204	a 170 (13Ｂ-1)	136度 29分 03秒	34度 42分 55秒	20030512～ 20031219		
いがえいいせき 伊賀Ａ遺跡	まつさかし 松阪市 とよはらちょう 豊原町	24204	a 未登録 (8Ａ-20)	136度 34分 23秒	34度 32分 31秒	20030702～ 20031030	190	経営体育成基盤事業 (櫛田上地区)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
てんのうやまいせき 天王山遺跡	集落跡	弥生時代 奈良時代	竪穴住居・土坑・溝・方形周溝墓・掘立柱建物	弥生土器甕・壷 土師器杯・甕、須恵器甕・蓋杯	丘陵斜面に築かれた多数の竪穴住居。
てんのうやまこふんぐん 天王山古墳群	古墳	古墳時代	古墳主体部	円筒埴輪・蛇行剣 鉄鏃（重量計541.5kg）	県下２例目の蛇行剣。
いがえいいせき 伊賀Ａ遺跡	集落跡		谷・溝	土師器鉢・高杯・台付甕、ミニチュア土器 （重量計3.4kg）	水辺の祭祀跡か。

その他	Ｘ線写真結果と（財）元興寺文化財研究所による考察を掲載。

要約

天王山遺跡・古墳群からは弥生時代の竪穴住居跡18棟を検出。飛鳥～奈良時代の住居跡を多数確認した。土坑からは円面硯や土師器、須恵器など斎宮との関連性を示唆させるような遺物が出土。周知の天王山古墳群１号墳からは蛇行剣と鉄鏃が出土したほか、11号墳を含めて新たに５基の古墳を確認した。

伊賀Ａ遺跡では、範囲確認調査で土師器の鉢や高杯などがまとまって出土。丘陵裾の水辺で祭祀が行われていた可能性が考えられる。

三重県埋蔵文化財調査報告270

天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告
～三重県松阪市豊原町所在～

2006（平成18）年３月
編集発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　㈲　山　文　印　刷